明治三十九年三月五日発行
毎月一回五日発行
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第六巻
第四號





女學世界 第六巻 第四號 目次

花はいづこ

島崎柳塢筆



見よ文界の新曙光　本年三月創刊

文章世界

天地の間、皆文ならざるなし。山の聳ゆる、川の流るゝ、人の其間に棲息せる、皆是れ文なり。文章の用たる、蓋し此の自然と此の人間とを描きてよく餘さゞるにあり。本誌はこの聖代に生れて、微力ながらも、此の文章の用を講じ、文を學ぶものをして、文章の組織、文章の効力、文章の事業等を知了せしめんことを期す。際に現今青年が、徒らに之を舞はし、語を佳麗にしてしかも實質實用に缺くる所あるを、最も遺憾とせるを以て、勉めて此方面に於て、華實兩全の文章を奬勵せんと欲す。其の內容の豐富にして、趣味に富むなみは、他雜誌に見る能はざるなり。

洋裝菊判美本（毎月一回十五日發行）　**第壹號**　三月十五日發行　正價貳拾錢　郵税貳錢

▲**論説**　朝野の文章大家に囑して、凡て文章に關する論議、論文、叙事文、抒情文、紀行文、翻譯文、實用文、女子用文に關する高論卓説を載す。

▲**月旦**　現下第一流の批評家に囑して、時文記者、閨秀文章家、博士の文章家、純文學の文章家、其他あらゆる方面の文章家に就て痛快なる月旦を試む。

▲**文選**　今古東西の諸種文章詩歌中より、最も卓越せるものを擇み、之れに丁寧親切なる註釋と、最新式の評釋とを加ふ。就中重きを實用文に置き、輕浮なる現代の風潮を矯正せんとす。

▲**文法**　修辭法、書翰文作法、我が國文に於ける漢文章、用辭法、假名遣ひ、時文の誤謬等　凡て文章作法に關する法則注意を悉く收む。

▲**資料**　熟語、術語、新熟語、名句名文章、助字解、日用文字辨語等、凡て作文資料となるものを網羅す。

▲**文話**　物故文章家の傳記、古今文章の變遷比較、男女文章の比較、明治初年以來新聞記事の變遷及現今文章家の文章鍛錬上裨益せし書物文章等、趣味と實益とを併せ收めしむ。

▲**逸話**　古今文章家の奇聞逸話、辭物語、苦心譚、失敗談等を掲げ、師表たるべき先輩の一面を紙上に活躍せしむ。

▲**雜録**　東西兩洋に渉りての文章雜錄、現今文章雜誌の比較論評、珍奇なる廣告文、看板の研究、所謂文章家の惡標本等を收む。

▲**口繪**　詩趣横逸する水彩畫、和漢洋文章家の肖像、古今文章家の書翰原稿其他新聞雜誌社內、圖書館內部、文章家の書齋、天下の絕景、泰西の名畫等陸離たる光彩を卷頭に放たむ。

▲**挿畫**　本誌獨特の計畫になるコマ繪あり、スケッチあり、筆蹟あり、書翰あり、風刺畫あり、狂畫あり、趣味津々。

▲**文壇**　本誌が發刊の趣旨に則り、賞を懸けて廣く天下の青年子女に向って投稿を募れるものゝ中より斯道大家が秀逸なるものを選み、忠實なる批評と親切なる修正とを加へて揭載す。

◉**寄稿歡迎**　一行二十四字詰の楷書として、論文抒情敍事文は百五十行以內。書翰文小品文は六十行以內、短篇小說は三百行以內たるべし。其他委細は本誌第一號に發表すべし。

年刊十二冊◉外増刊年四回菊判美本▲本文二百四十頁◉寫眞版
光澤紙刷四頁普通四頁水彩畫二枚挿入◉正價一冊貳拾錢郵税貳錢
四冊金七拾五錢八冊金壹圓四拾五錢十六冊金貳圓八拾錢外要郵税

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

（甲の一）

最も愛すべき香料馥郁

やゞあみ石鹸

高評煉香油

カスガオイル

（水油代用品）

紳士令嬢貴婦人用として最も上流社會に歡迎せらる 有名なる小間物化粧品店藥舗にて販賣す



發賣元 東京橋町 小川潮華園

東宮妃殿下毎號賜上覽



二巻第四號 三月一日發行

懸賞文滿載

口繪無類美

價低廉金拾錢 ▲直接送無料

●第一二號增刷出來取揃應注文

●第三號＝臨時 二月十五日増刊す

東京京橋大鋸町 女子文壇社

●特約賣捌 東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、良明堂

大好評

女子文壇

懸賞文集

洋裝美本

▲再版發賣―無類廉價▼

全一冊上等紙四百廿頁 正價金貳拾五錢 送無料

出版元 東京京橋區大鋸町十一番地 女子文壇社

報知新聞家庭記者 中村千代松君編

實驗問答

日本家庭節用

洋裝美本 壹圓參拾錢 小包拾五錢

非常の高評を博したる本書は發賣間もなく品切の處再版出來す

博文館

（甲の二）

カメリヤは時代の要求により

生れたる最新最良の洗粉なり

カメリヤ洗粉

あらひこ



◉本舗

東京

カメリヤ商會

カメリヤは一家傳來的なる陳腐の原料を用ひて製せるものと全然趣きを異にす
カメリヤは温和なる香氣を有するも一度之を用ゆれば花香芬々として爽快忘る能はず唯に色を白くしつやをよくするのみならず殊に肌を滑かならしむる點に於て全く他品に見る能はざる一大特長を有す社交を重んじ衛生に注意せらるゝ貴紳淑女の化粧料として日常缺くべからざる佳品なり

定價一個瓶入十二錢袋入五錢

◉聯合發賣元

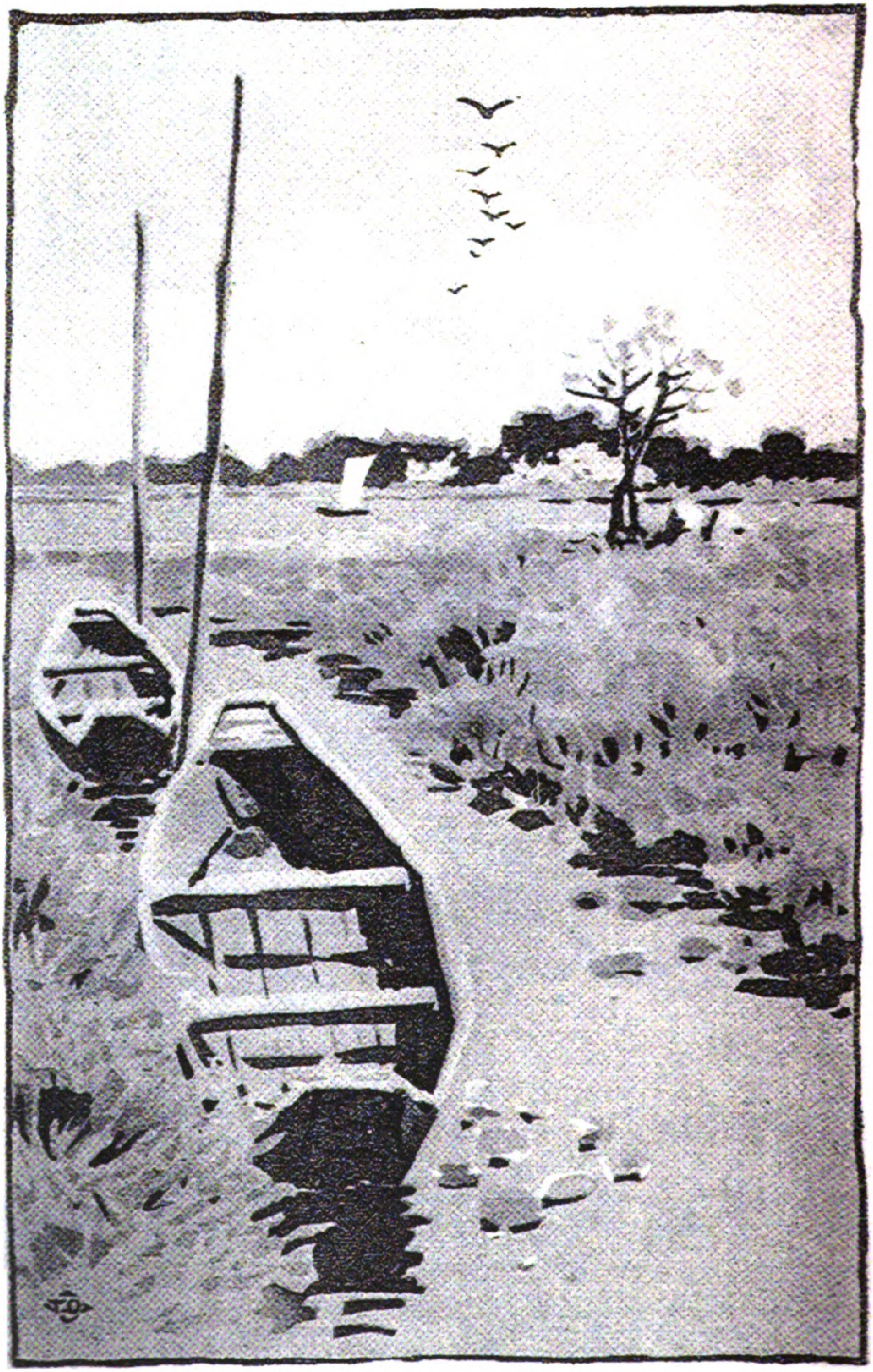
本舗 ライオン歯磨

東京神田柳原川岸

小林富次郎

女（甲の四）

春の野川



雲雀



川崎蘭香筆

花ぐもり



川崎蘭香筆

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも 皇后宮の懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す 會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年） 月謝四拾錢 束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎭子）○敎育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歴史（大森金五郎）○萬國歴史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事衞生（同上）○小兒衞生（三島博士）○家事敎育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）

○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸論介）附錄機關雜誌「なでしこ」

●簡易科（學期二個年） 月謝貳拾錢 束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎭子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歴史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衞生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭敎育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

☞目下五卷迄發行 入會の好時機

東京市麴町區下三番町三七

大日本女學會 電話番町一三三〇

女（乙の一）

女(乙の二)

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗ろ多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

（注意）本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四四六番）

女（乙の三）

（乙の四）

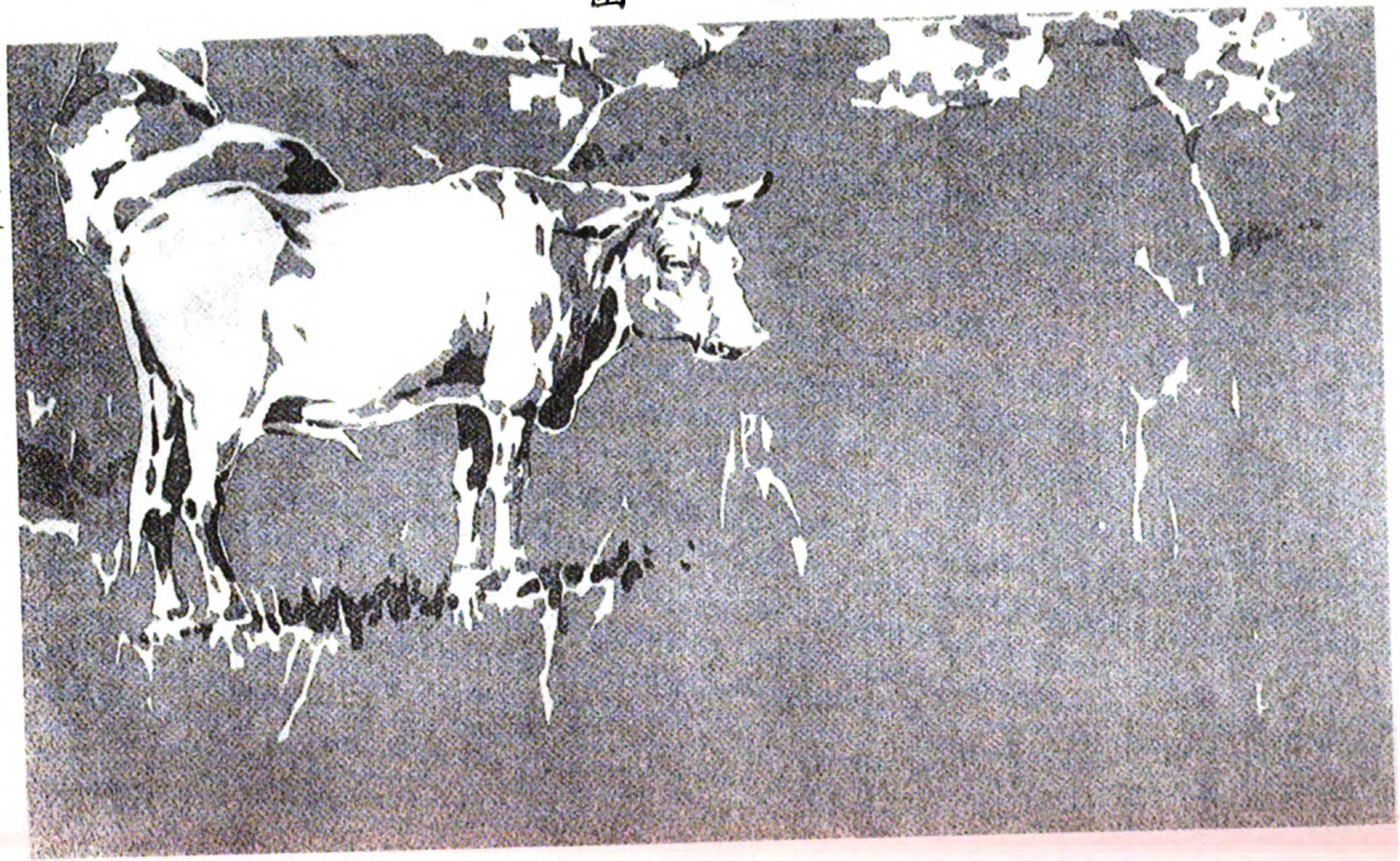
汐干

一條成美筆



桃園

一條成美筆



(丙の一)

●圖書總目錄進呈　博文館小賣係
▲三錢切手封入にて御申入あれば進呈す

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村　川名助次郎

◎生徒募集 **來四月新學年開始!!**

本校は明治四年の創設にして教授親切寄宿舍完備特に英學德育體育に注意す○規則書は郵券添申込次第呈す

橫濱山手町二百十二番

私立 **共立女學校**

新發明

聲の出るくすり

美音錠

東京萬珠堂謹製

	定價
將校軍人	
教師	十錢
僧侶	廿錢
演舌家	五十錢
音曲家	
謠曲家	壹圓

右は從來內藤家の製劑に有之所今回弊店に讓受候間猶引續御用命給り度此段奉希望候定價廿錢以上のものへは引繼御披露のため極めて美麗なる丸藥及楊枝入を封入進呈仕度各地有名藥店に差出し有之候得共若し品切の場合には直接御註文被下度全國は無遞送料にて御郵送申上候

東京日本橋區兩國米澤町二丁目一番地

稀愈丸本舖 萬珠堂藥局

美音錠發賣所 **吉田安五郎**

毛はぐすり バロール

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの好評を博したる有名なる秘密藥を當館主が深奥なる學理と老練なる技術とを以て多年の研究に依り其秘を發き之に最近の發見に係るベンザム博士の生毛劑に關する新說を參酌し最新藥を配合したれば價額は他の生毛劑に比して稍高價なるべきも其効能の卓絶なる世間に有觸たる技術と學理に暗き輩の濫造品の比に非ずマユゲ。ハエギワ。ヒゲの薄きを濃くしヤケド。デキモノにて禿たるを生し陰毛等あるべき所に毛無を生じ禿頭病に奇効あり前數年間の學術の進歩を應用し更に新藥を加味したれば一層有効となれり舊式の生毛劑又は禿青丁幾等にて効無とて落膽する事なく是非本劑を試よ內容增量改正定價七十錢送料五錢郵券代用三錢切手廿七枚送れ

らい病必治藥

はハワイ國に在留して癩病の研究に從事し其効績を以て有名なる醫學博士ハドソン氏の癩病治療藥を基礎とし最新の治療藥を配合したれば効驗峻烈確實なり古來癩病は不治の病と稱し今日にても根治せしむる事は艱けれども本劑を用れば病原菌脫力死滅して漸次輕快し一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救濟せんとする趣旨に基き發賣するものにして無効なる藥品に非常の高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を欺瞞せんとする不正の賣藥に非ず容體書に三錢切手封入申込あれ詳細直報す處方參圓單方貳圓

有効確證 胃病根治劑

慢性胃病は甚き苦痛無を以て等閑に附する人多けれども胃病は萬病の泉にして日々月々に活力を減殺して知らず〳〵の中に生命を短縮するものなれば決して放任すべからず本劑は拙者胃病に苦む事十數年其間名家の診察處方を乞ひ百方治療せしも休藥すれば直に再發し一時は慢性胃病は到底治療の途なきものと斷念せしも熟ら〳〵考ふるに造化用意の微妙なる一方に病を起す物あれば他方には必ず之を治癒せしむる物あるは古來よりの經驗に徵して明なれば慢性胃病にも必ず特効藥のあるべきを確信し千試萬驗の結果本劑を發見し僅に月餘にして洗ふが如く全治したれば茲に拙者の名譽を賭して其實効の確著なる事を保證し發賣するものなり同病者よ長壽を得んと希望せば速に本劑を服用あれ　半月一圓二十錢一月二圓送料各四錢

——郵券代用は途中紛失の恐あり可成小爲替に願升——

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
醫科大學卒業藥劑士
從七位勳六等 **中島龜之丞鑑製**

女(丙の三)

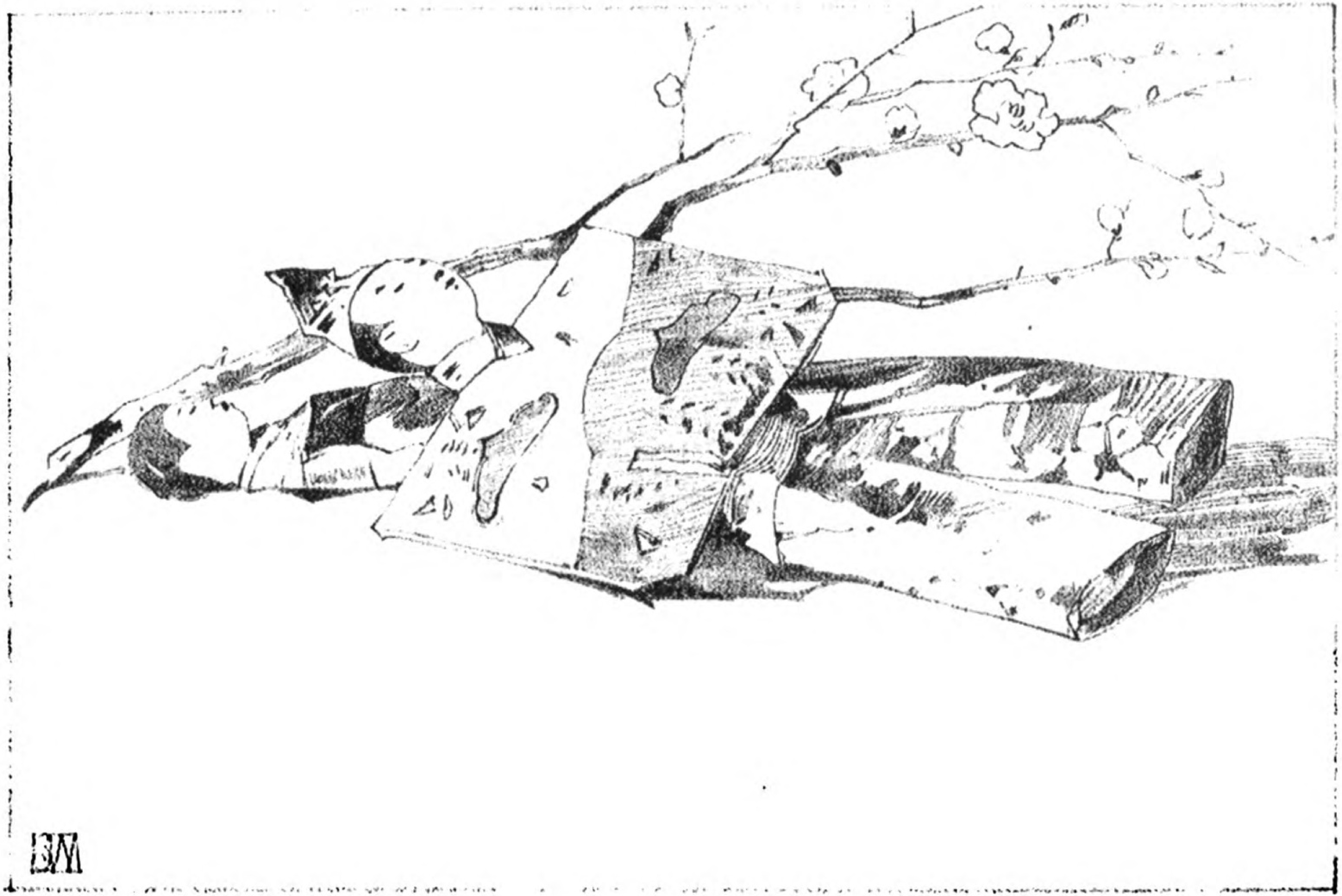
女(丙の四)

彼岸詣で

渡部審也筆



節句



渡部審也筆

(丁の一)

日本婦人正風會々長 中島義弌君著

新撰日用女禮式

全一冊

洋裝菊判美本
紙數約二百頁
正價貳拾五錢
郵税四錢

禮法は國家の美觀にして人倫必備の要儀なり我國古來禮儀の國と稱す其作法の高雅にして優美令淑の標儀たるは決して外邦に遜色なきなり、然るに因襲の久しき自から現時に伴はざるものあり須らく之を改良して日進の世範に伴はざるべからず。著者中島先生は三十有餘年の經驗と在職學校の敎授に採つたる方針に依り尙文部省訓令に適合せしむる程度に由つて極めて簡明なる日用女禮式を著はし之を本館に出版せしめられたり其記する所精しく古今の典儀に鑑み能く內外の善風良書を折衷し補正せられたり之を一讀する者如何に先生が禮法界に貢献せらるゝやを了知せらるべし。

坪谷水哉君編纂（第十六版）

増訂 **日本女禮式大全**

全一冊洋裝大判總クロース五九二頁
上製 正價九拾錢 小包送拾五錢
特製 正價壹圓貳拾錢 小包送拾五錢

禮式は人間處世の大本、人品尊卑の因て分る所、殊に婦人にして禮なきは、最も卑しむべし而して近來女子禮式の書少なからねども古に偏して今の世に實行し難きあり新奇に走りて全く禮法に合はざるあり能く古今を折衷し、詳畧の宜しきを得たるもの稀なり編者之を憂ひ日本女禮式を著はし頗る世上に好評を博しぬ、然かも今より之を見れば不完全なるもの多し故に更に多年此道を研究し各般の事一々之を實驗に徵し或は專門家に質し本書を編し名けて大全と云ふ平易の文章に多くの繪畫を挿み叮嚀周密を極めたり良妻賢母の友、貴女令孃婚姻の際必ず携へ玉ふべき良書なり。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女（丁の二）

日露戰史

四六判二倍（太陽同形）每卷本文二百餘頁寫眞版廿四頁每月二回發行

正價一冊參拾錢●八冊貳圓貳拾錢●十六冊四圓廿錢▲郵稅一冊貳錢五厘

●第四卷　貳月貳拾日發行

本文貳百餘頁
寫眞版口繪二十四頁

▲海軍第一期作戰の成功

博文館従軍記者　平田骨仙君編

第一編　遼東半島の封鎖
第一章　總說
第二章　旅順口の强行偵察
第三章　大連灣の掃海
第四章　陸軍掩護
第五章　通信遮斷
第六章　敵の掃海事業

第二編　旅順艦隊の逸出
第一章　六月廿三日旅順港外の海戰
第二章　封鎖至嚴、敵艦隊の苦悶
第三章　八月十日黃海大海戰
第四章　遁竄露艦の處分

第三編　浦鹽艦隊擊歷
第一章　總說
第二章　封鎖宣言前の姿勢
第三章　玄灘の悲劇
第四章　韓海の陰雲
第五章　太平洋上の敵艦隊
第六章　蔚山沖の大海戰

第四編　敵國東洋艦隊の全滅
第一章　大戰後彼我對抗の姿勢
第二章　陸戰重砲隊の組織
第三章　攻圍軍の總攻擊と陸戰重砲隊の掩護
第四章　陸戰重砲隊の擴張
第五章　陸戰重砲隊の敵艦逐築
第六章　攻圍軍の第一二回總攻擊
第七章　陸海兩軍巨砲の威力
第八章　攻圍軍の第三回總攻擊
第九章　二零三高地の占領と戰局の大發展
第十章　セバストポリ擊沈
第十一章　敵艦隊主力の殲滅
第十二章　殘敵の處分

既刊

第壹卷（日露の危局と戰役初期の海戰）　太陽記者　國府犀東君
第貳卷（第一軍初期の活動）　國民新聞従軍記者　梅田又次郎君
第參卷（第二軍の前進）　博文館従軍記者　田山錄彌君

續刊と其擔任記者

第五卷（第四軍の前進）　東京朝日新聞従軍記者　熊谷直亮君
第六卷（第一軍の前進）　國民新聞従軍記者　梅田又次郎君
第七卷（旅順要塞戰「上編」）　東京朝日新聞従軍記者　牛井桃水君
第八卷（遼陽の總攻擊）　博文館従軍記者　坪谷善四郎君
第九卷（沙河の會戰）　東京日々新聞従軍記者　黑田甲子郎君
第十卷（旅順要塞戰「下編」）　東京朝日新聞従軍記者　牛井桃水君
第十一編（黑溝臺附近の會戰）　東京日々新聞従軍記者　黑田甲子郎君
第十二卷（奉天の大會戰）　東京日々新聞従軍記者　黑田甲子郎君
第十三卷　以下樺太軍の偉動及北韓軍の偉動、日本海の大海戰に有史以來未曾有の大捷を奏し延て米國ポーツマウスの講和談判より對韓對淸の處分に至る迄序を履み編を追ふて發刊せんとす

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女（丁ら五）

主筆 農學士 石阪橘樹君

農業世界

來る四月一日の創刊大雜誌

開國以來農を以て國を立つる我が帝國は、五千萬の同胞、今も其大部分は農を以て生を營み、農作の豐凶は、忽ちに全國民の休戚に關す。農は實に我が瑞穗國の大本なり。而かも其の改良進步の程度甚だ遲く、他の世上百般の事物は、日に科學應用の新智識を利用する中に、農事のみ然る能はざるの感あるは、甚だ嘆ずべきなり。實に戰後經營の最第一なる急務は農事の改良に在り。是に於て本館は此の急務に應ぜんが爲に、本誌を發刊せんとす。記す所は

○耕種○園藝○養蠶○製茶
○釀造○養畜○山林○水產

等の外、一般の農政と各種の副業とに亘り、各專門の學者、實驗家に執筆を囑し、殊に此等の各業に關する讀者の質問には明細なる解說を與へ、着實にして乾燥ならず、趣味と實益とを兼ね備へ、帝國最多數なる農家の良師友と爲り、以て我が農業の改達に資せんとす。其發刊は四月一日を期す詳細は近日廣告すべし

洋裝菊判每號本文二百四十頁口繪光澤寫眞版四頁普通寫眞版

四頁彩色石版畫二頁每月一回發行　定價貳拾錢　郵稅貳錢宛

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女(丁の六)

博文館編輯局主幹　坪谷水哉君著

増訂三版



各巻共府縣廳所在地銅版圖二十餘頁、風景寫眞八十餘圖全國兩半部彩色刷大地圖添附

全二册洋布上製
中判頗美本
本文紙數千三百七十餘頁
定價一册金壹圓
郵税一册拾貳錢宛

上卷＝東海、東山、北陸、北海の各道と樺太
下卷＝近畿、中國、四國、九州、琉球の各道と韓國

案内記なくして旅行するは、燈無くして暗中を行くが如く、また誤れる案内記を携へて旅行するは破損せる磁石を以て大洋を航行するが如し。何れも極めて危險なり。本書著者夙に旅行癖あり、常に筆と寫眞器とを携へて普く各地に漫遊して、凡そ全國の名山、大川、港灣、湖海、神社佛閣、名所舊蹟、具さに自ら之を探りて、其順路と車馬の利用は勿論、旅館、酒樓、休息所の用意まで最も確かなる案内記を編し前年之を公にして大に好評を博して以來、尙ほ世運の進歩と交通機關の改良とに伴ひ、次第に其の狀況を異にするを注意し、斷へず巡遊して實地を檢し、版を改むる毎に訂正を加へ、今や第三版成る。而して**上卷には『樺太』の新版圖＝下卷には『韓國』の保護國**に遊べる最新の案内記を添へ、北海道、奥羽、中央の各鐵道が近來開通したる沿道の案内記も、精密に實践して之を訂正し、附錄の**全國地圖**は、益々精細を加へたり。旅客幸に此書を行李の中に收めば暗夜に燈無く、航海に磁石の損したる危險を免かるべし、旅客ならざるも、一室内に繙讀して、坐がら名所を知るの快あるべし。

發兌元
東京日本橋區本町
博文館

（丁の七）


THE GEM
ゼム
懐中良藥
衛生家必携
偉大の名響
ゼムは氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他郷或は惡臭の塲所に携帯し常に少量を用ひなば時候あたり、水傷、流行惡疫を豫防する良劑なり。
ゼムは勇敢絶倫なる陸海軍將士の愛用を蒙り殊に東郷大將閣下よりは鄭重なる禮狀を賜はり亦々戰勝國紀念として ノーエル大將閣下の賞讃を添ふせる光榮を得たり。
ゼムは二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感ぜしむ又偉大なる効能と愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必らず談話喫煙飲酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり。
定價（優美高尚包）七十五粒入拾錢 百六十粒入貳拾錢
（四百廿粒入）五拾錢 九百粒入壹圓
新意匠 新意匠容器ゼム入貳拾錢
發賣元 東京日本橋區馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
大阪市高麗橋二丁目 支舗 山崎兄弟商會
▲全國到る所の藥店雑貨店にて販賣す▲

(丁の八)

梨本宮妃伊都子殿下



清姿



泰西美態

米國富豪婦人俱樂部の發起人

カルフアード孃



ラツチ孃



アンナペスト孃



（海外婦人新聞記事參照）



白耳義公使ダネタン夫人

少年日露戰史

全部十六册洋裝大判 毎編寫眞口繪入
正價一册拾貳錢 郵稅一册四錢
前金（●六册六拾七錢●十二册金壹圓貳拾八錢●全部金壹圓六拾錢▲外要郵稅）

巖谷小波君編　毎編密畫挿入

凡例

少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。

附錄軍國讀本は、日露戰爭に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、忠君愛國の好模範を、永く少年に示す爲めの本であります。

第五拾編　新刊發賣

樺太の巻

目次

附錄 軍國讀本 目次

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

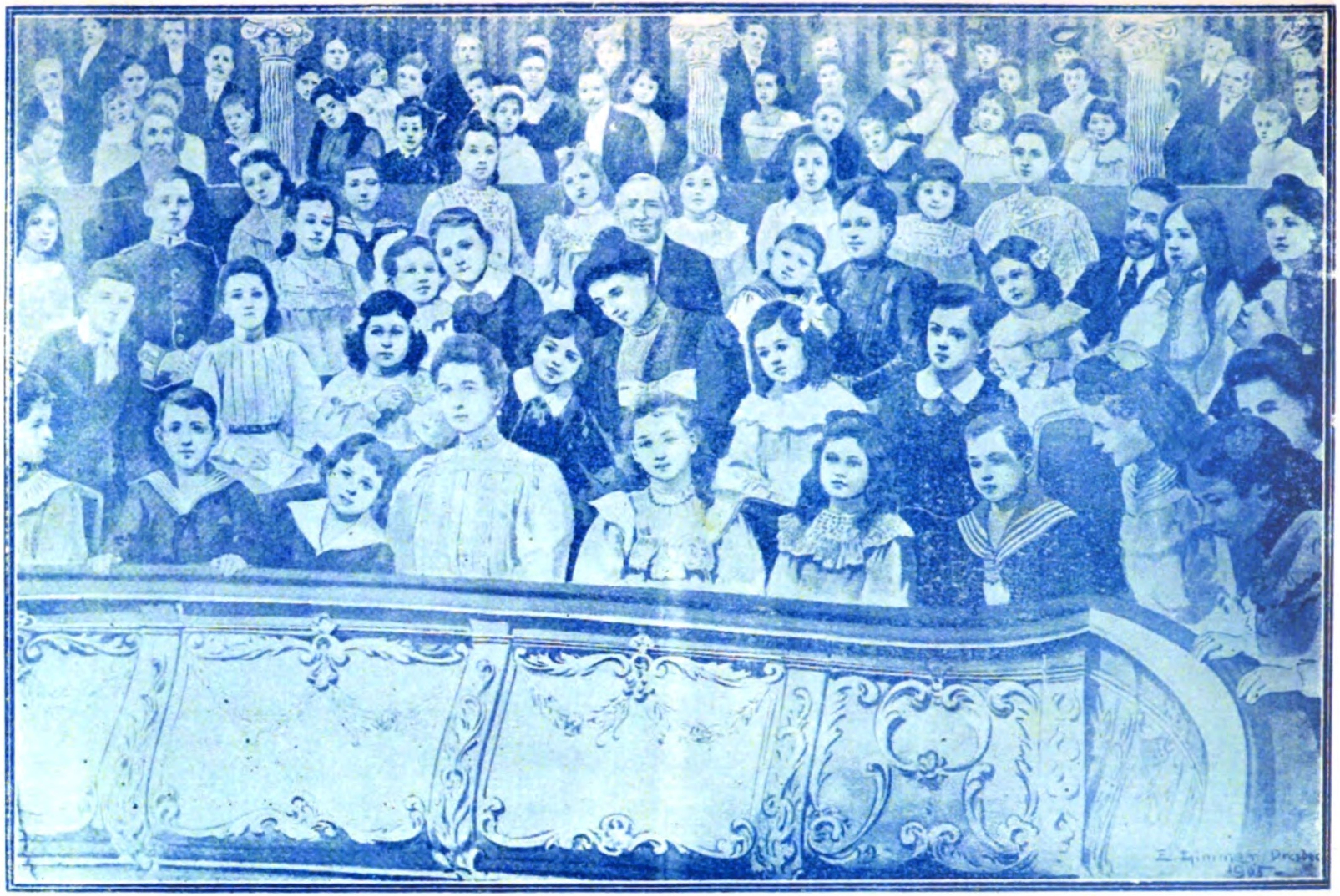
女（戊の二）


於內外博覽會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醬油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮內省御用達
ヒゲタ印醬油
銚子港
田中玄蕃釀造
千葉縣


米國スヰフト會社
精製食脂
ラード
拾斤、五斤、三斤罐入
食用あぶら
本品は和洋食の庖厨に經濟と滋味と衞生とを重ぜらるゝ人の日常缺くべからざる食脂にして其用途は重に天ぷら、フライ、カツレツ等なり
料理自慢の奥様方は御試用あらんことを切望す
全國到處の食料品店にて販賣せり御購求を乞ふ
SWIFT & COMPANY
JEWEL
LARD COMPOUND

女(戊の四)

見物



(獨逸ドレスデン中央劇場に於けるクリスマスお伽芝居の見物)

横濱フェリス女學校東京部同窓會



一月三十日上野不忍池畔無極亭にて開會（雑報參照）

東京府立職工學校長 今景彦先生監修

繪入 五行讀本

全部五冊

菊判美麗畫表紙
本文四號活字平假名附
口繪寫眞銅版挿入

各卷目次

●水の卷……	東京高等工業學校助教授 笠原留七君著	三月發行
●火の卷……	東京高等工業學校助教授 笠原留七君著	三月發行
●木の卷……	東京府立職工學校長 今景彦君著	四月發行
●金の卷……	東京府立職工學校長 今景彦君著	四月發行
●土の卷……	農學士 河村精一君著	四月發行

人生にとりて極めて必要なものでありながら其ものが餘りに近く吾人に接觸しておるがために反て屢々等閑視されておるものがあります。木火土金水の如きは其最も大なるものではあるまいか、本書は即ち此等五つのものに就いて其自然美から利用厚生の途に至るまで或は之を詩的に或は之を科學的に極めて廣義に極めて平易に極めて愉快に極めて流暢に記述したものでツマリ本書の目的とする所は日常吾人の耳目に接觸しておる所の此等五行を捕へて宇宙現象の大要と利用厚生の本義とを幷せ說き以て其常識を世人に與へんとするにあるのです。

博文館　東京市日本橋區本町三丁目　發兌元

女(己の二)

日本中學校教授　攻玉社中學校教授

主筆　竹貫登代多君

洋裝大判（三科共）
定期毎月一回一日發行
臨時增刊　年四冊

數學世界

算術之部
代數之部
幾何之部
各科共定價拾錢郵稅壹錢十六冊前金一圓四拾錢宛

新學期迎ると共に我が數學世界も亦面目を新たにし來る四月一日を以て卅九年度第壹號を出さんとす本年度に於ける內容は如何？各科の講義は順序を追つて初學者と雖も直に了解し得る如く親切に說明し且之に新たなる問題を課するは勿論研究資料欄には日に新たなる學理を捕へ或は奥義を捉へて斯道知名なる學者の意見を叩き寄稿を得て益々光彩を放たしむべく猶每號課題を掲出して諸子の解答を求め質問欄は疑團の氷解所自問自答欄は廣く開放して大方の投書を蒐む殊に各種學校の試驗問題は汎く拾集して之が解法の指針を示さんとす以上云ふ處新面目の一端に過ぎず其精細に至つては乞ふ發刊の曉に待て

高等小學算術

洋裝大判　毎月一回發行

說明は分り易き言文一致加ふるに美麗なる繪畫を挿入してある故に少年諸君直ちに之を見るも趣味津々の中に學業は進歩すべし斯の如き趣味を以て數學世界主筆竹貫登代多先生之に筆執り四月一日其第一號を出さんとす、乞ふ刮目して待たれんことを。

尋常小學算術

洋裝大判　毎月一回發行

國定教科書に準據し毎時に配當して教案體に作りたるものなれば教師には好箇參考書となり父兄は家庭に於て温習用に之を供するも學校と齟齬するの憂なかるべし。

東京本町　博文館

（已の三）

真正無毒

クイーン白粉（おしろい）

クイーン水

皮膚艶美

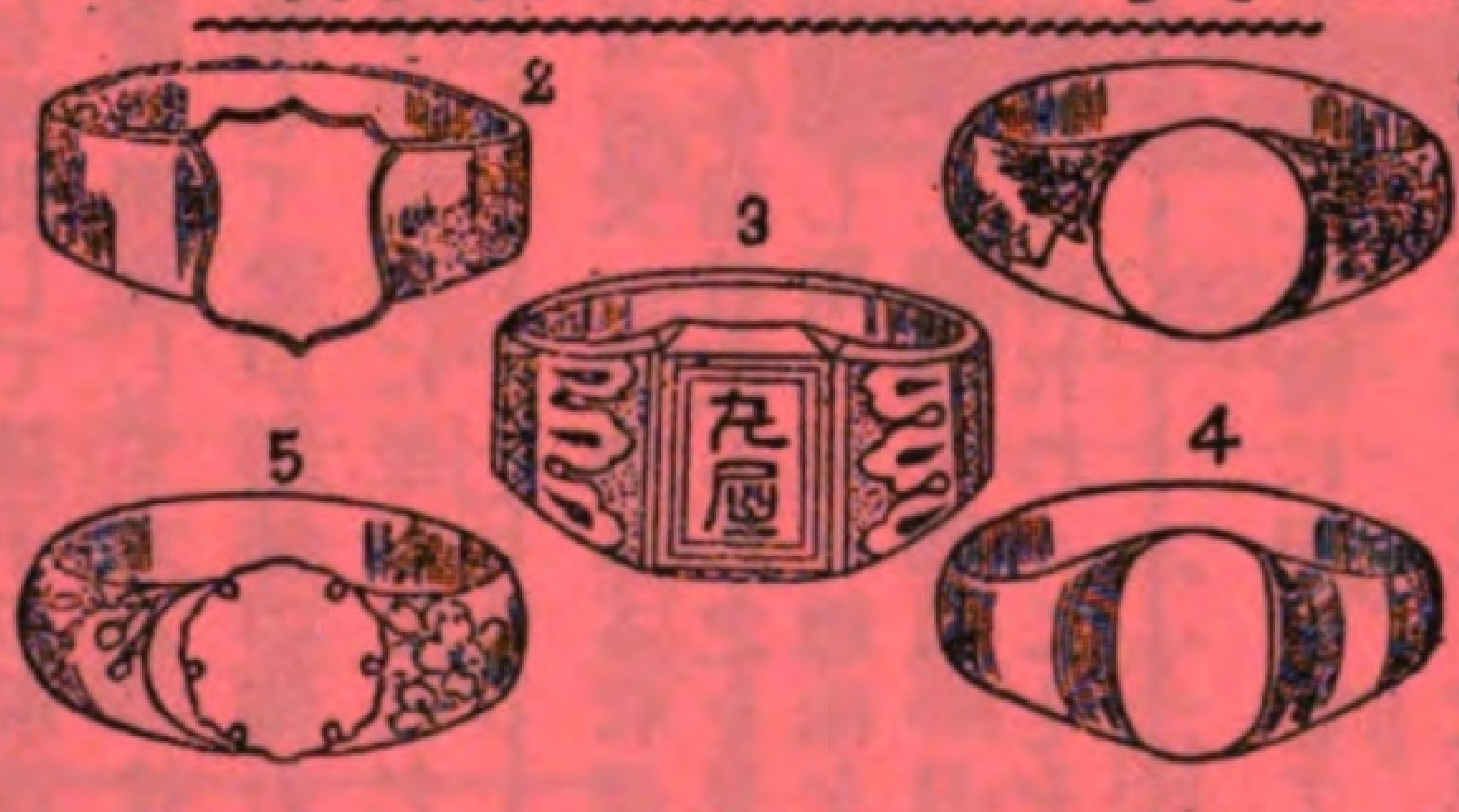


本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり

東京日本橋新和泉町

本舖 三井花陽堂

金製印面附指環



號	十八金	廿金	純金
壹號（參匁附）	拾八圓參拾錢	拾九圓六拾錢	貳拾貳圓四十錢
貳號（參匁附）	拾七圓參拾錢	拾八圓六拾錢	貳拾壹圓四十錢
參號（參匁五分附）	貳拾貳圓	貳拾參圓五十錢	貳拾七圓
四號（貳匁五分附）	拾參圓七拾錢	拾四圓八拾錢	拾七圓拾錢
五號（貳匁五分附）	拾八圓貳拾錢	拾九圓參拾錢	貳拾壹圓六十錢

『注意』御注文の節は厚き紙にて指の太さを御送附被下度候

▲印面文字刻料壹字金壹圓以上
▲送料は内地拾錢臺灣清韓參拾錢申受候

貴金屬細工 袋物商

東京市京橋區南傳馬町三丁目

丸屋商店（電話本局二十番）

女（己の四）

報國婦人會



樺山伯邸内に於ける紀念撮影

東京女學館＝運動場





同＝昇降口

女（裏の一）

帝國百科全書

第百四拾三編

第二高等學校教授 文學士 杉谷泰山君述

處世哲學

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

活動に志す者は讀め、幸福を希ふ者は見よ、此書は大哲の眼識を以て、活動の正邪を辨じ、幸福の眞僞を明にし、人格財産名譽を始めとして、自己に對し、他人に對し、又境遇に對する用意覺悟を敎へ、日常處世の方針を示せり、青年をして奮起せしむるものあり、老年をして眉を開かしむるものあり、實に是れ人生の羅針盤なりとす。

第百四拾四編

內閣書記官 法學士 南弘君述

國家學

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

世間國家を談ずるもの多きも。國家の何物たるを知らざるもの滔々皆是れなり眞の政治は國家觀念の精確なるものに非ずむば之れを了解する能はず、眞の愛國心は亦國家の意義及び其の組織を十分會意するより生ず本書は久しく內閣書記官に在職して實地國政に參與せらるゝ南法學士の編述なり故に國家學の源叢を極め國家の意義及其組織を叙するに穩健の筆、精到の論を以てす其讀者をして了解の便を與ふるや言を俟たざるなり。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女(陝の三)

◉會員大募集＝＝三月三十日迄の申込に限り入會金全免す＝＝目下入會の好機◉

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません、本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を每號附錄としてます。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主とし丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都合一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

新學期開始

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲每日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と倂せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

▲本會規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會



女學世界

第六卷第四號

（三月五日發行）

人生の快樂

金殿玉樓に住ひ、山海の珍味に滿つる食膳を左右にするは人生の愉快には相違なきも家庭に於ける最大の快樂は主婦の心情と其の動作に在ることを知らざるべからず、若し主婦の心情冷かに動作無風流ならんか、縱令其富王公を凌ぐと雖も愉快なる家庭を作ること能はざるべし。又家は命令的にして嚴格ならんよりは須らく寛裕にして自治的ならんこそよけれ、臺榭高閣にのみ日は照ると思ふなかれ、土階三級茅の檐端にも靄々たる日光の波溢るゝものと知るべし。

時論

新家庭の任務

文學博士　元良勇次郎

日露戰爭は、歷史上未曾有の大戰爭で、此の大戰爭に連戰連勝した我邦は、眞に世界の人を驚かし、絕大の名譽を得たもので、今度私が洋行中など、到る處に案外の歡迎を受け、同情を寄せられ、喜悅と感謝との外はなかつたのである。是皆戰勝の餘惠であるが、當時海外に在つた同胞は、皆私と同樣の待遇を受けたことだと思ひます。

此の通り、在外の同胞は、各處で歡待され、國內では、各新聞が筆を揃へて、外國新聞の我が國民に勇武があり、義氣のある事を賞讃したのを傳へ、國民も大に得意であつたに相違ない。戰勝國民の得意であるのは、無理はないことであるが、さてこゝに少しく考へなければ成らないのは、此の外國新聞の賞讃やら、在外同胞の受けた歡待やらが、果して眞實何う云ふ意味のものであッたかと云ふことである。即ち此の賞讃や歡待の裏

面には、何う云ふ事が潜で居るかと云ふことを研究する必要がある。

先づ新聞紙の賞讃記事は、固より僞ではあるまい。けれども其れは決して歐米に於ける日本の評判の全部でなかッたことは、記臆しなければ成らぬ。つまり日本に都合のよい記事だけが紹介されたので、我々に不愉快な記事の紹介されないものも少なくないのである。其故此等の新聞記事で、歐米に於ける日本の信用と勢力とを想像するものがあれば、其は遂に大きな間違が出來まいとも限らない。

次に私共が外國人から歡迎されたことも事實で、中には日本で聞く以上の歡迎を受けた場合も少なくはないのである。然し此の通りの歡迎も國民の全部から受けたのでない事は、また記臆しなければ成らない。假令ばこゝに私共が伊太利で、名譽ある戰勝國民の代表者として、非常に歡迎されたとしても、其歡迎優待して與れた人達は、果して伊太利國民の如何なる部分であッたかを考へる必要がある。政治家に多かッたか、文學者に多かッたか、貴族に多かッたか、下等社會に多かッたか、或は博識な經世家の階級に多かッたかと云ふ事を、調べて見なければ、其歡迎の性質は分らない。

極めて公平な觀察を見ると、歐米各國民中には、また〳〵日本を知らないものが決して少なくないのである。言ふまでもなく、日本の位置や人口位は、小學校の生徒でも知つて居やうが、日本の眞相眞價を知つて居るものは、矢張り極めて少ないのである。即ち統計とか報告とかに依つて、其形式的方面だけは、多少知つて居るに相違ないとしても、其精神的方面に成ると、依然としてまだ知られては居ない。從て或ものは、日本を非常に善い國と思ひ、買ひかぶつて居て、事毎に激賞すると同時に、或るものは、反て文明の中心から遠く離れた未開國劣等國で、其中や〻優等のものである位に思ひ、只兵の戰に勝つただけに過ぎないとして、相變らず黄色人種に對する侮蔑的態度を持つて居るものもある。

然しながら此度の戰爭の結果、從來よりは一層精しく我邦の事が外國へ知れ、又無學者の間へも、我が國の名が一層廣く知れるに至つただけは事實で、現に我が國債が好都合に出來たなども、此の戰爭の爲め、我が信用が、やゝ高まつた證據である。同時に、日本が豫て貧乏國であッたことを善く承知して居る一部の人は、未だ新聞紙の報告する如くに熱心な賞讃を私共に寄贈して呉れなかッたことも、亦爭はれない事實である。現に角多少に拘らず日本の國情を知つて居たものが、今度の一戰に依つて、掌を反す如くに、貧乏國の見くびりから、一足飛びに强大國民の讃辭を呈すべきものでないことは、明かな道理である。

其故我が國民は、此際出來るだけ愼重の態度を取り、各自其職業に努力し、舊來の惡習は、根本から改革し去り、二十世紀の新世界に活躍すべき健全な國民に成なければ成らない。此はたゞ國民の克己心と勤勉との二者に依ることであると同時に、また過半は健全な新家庭を作つて、資格のある大國民を養成するに在るから、首として婦人の盡力に待たなければ成らないのである。言換れば、日本が天から受けた使命を全くするには、今度の戰勝位に已惚な考を起すやうでは行かぬ、何處までも實直に勤勉に家庭を治めて、健全な第二次の國民を養育しなければ成らない、其れには大に婦人の盡力に待たなければ成らないのである。

英國よりも優秀な地形と位置とを占めた我が日本帝國は、今後太平洋を中心として起る平和的商戰に於て、第一の花役者として、十二分に好成績を收め、海の最大な太平洋と陸の最大な亞細亞洲とを、日本の手で、開拓指導しなければ成らない。就ては之に要する幾千百の桃太郎を、今日の新家庭から育成しなければ成らないのであると考へます。

漢字漢體文の廢止

女子學院長　矢島楫子

社會は日進月歩と云ふ有様で、交通の便利が益々開けると共に、數千里の遠い外國も、自由自在に往來することに成り、殊に世界の一等國に仲間入りをした以上は、我國民も是から多くの平和的事業に於て、亦十分の名譽を得なければ成らず、之を得やうと云ふには、婦人も是から世界的婦人に成らなければ成らないのであります。其れに就て、差寄り、世界の通用語に成つて居る我が同盟國の英語は取分け必要に成つて參りました。たとへ英語でなくとも、外國語のどれか一つだけは、是非知らなければ差支へることに成つたのであります。

然るに今日各學校で教育して居る所を觀まするに、學科中英語のないものは少ない様でありますが、同時に英語で成功した學校は是亦殆ど少ない様に見受けます。其れが何故かと云ふ事は、隨分研究の必要があることと思ひます。今日英語科は、男子の學校でも、十分に修業する事が六つかしいやうに成つて居ります。況して女學校では、禮式とか、生花とか、割烹とか、裁縫とか、特種の學科のある上、其餘暇で英語を學ぶのでありますから、實は成功すべき筈はないのであります。キリスト教に關係がある學校だけは、幾分か成功したものもある様で御座いますが、それさへ實地に當つて見ると、甚だ不完全なもので御座います。

つまり之は、今の各學校で教授する學科が多過ぎる所から、英語に用ひる時間が自づと少なく、日本人の薄弱な體力で之を修得することは、到底出來ないからであります。殊に女子は、男子よりも體力が薄弱であります所から、繁雜な學科には一層堪へ難いので御座います。

就ては、各學科の中、成るべく必要の少ない學科は、之を除くことにするのが、むしろ必要であるまいかと思ひます。就中漢字は、最も不便である上、將來は自然廢めに成るべきものでありますから、此に大分の精力を費すと云ふのは、誠に愚かな事かと思ひます。今日の敎育中、漢字を廢め、漢文から出た一種の文章を廢めて、何事も羅馬字で、言文一致に書くことに致しますれば、無用の手數が省かれ、有用の事に、其精力を使用することの出來るやうに成らうかと考へます。

其れから愈今日の文章を廢めて、羅馬字で言文一致に書くと云ふことに成りまするには、まづ言葉を整理しなければ成りません。今日の女學生は、女學生同志で互に話して居る所を聞きますと、其れは實に不調和を極めて、甚だ奇異の感が起ります。角ばッた漢語に次ぐに、優美な大和言葉が出るかと思ふと、又直に下等社會で用ゐる下劣な言葉も出て參りまして、其間に發音の怪しい英語獨逸語などさへ交ざり、實に聞くに堪へ難い有樣で御座います。斯う云ふ言葉を聞きますと、女の女らしい優美な所や、淑雅な所などは、何處にあるかと思はれます。社會が如何に複雜に成つたからと申しましても、又明治の今日は渾沌の時代であるからと申しましても、何故に斯くまで怪しい言葉が話されるかと思ふと、實に奇怪な事で御座います。

女學生の言葉が斯う云ふことに成つたに就ては、今の敎育當局者に罪があると思ひます。さばかり必要もない學科を澤山に敎へて、之を無用の物知りにしたからの事で、斯う云ふ言葉の行はれて居る間は、社會の秩序が保たれ、禮義が整ひ、高尚優美な美德が行はれると云ふ事は、實に六づかしいことで御座います。却て人は一般にこましやくれたものに成り、從て健康をも破り、人のよく申しまする大國民の資格と云ふ事は、到底得られないのであります。

今日電話で話しをするのを聽きまするに、最も分り難いのは無敎育者の談話、次が漢學の談話で、一番分り

易いのが、演説の一番もしさうな人の談話で御座います。これで觀ましても、言葉は、其遣ひ習ひから正しくしなければ成らないもので、之を正しくするには、必要な事を秩序正しく教へ、益のない繁雜を加へて散漫にしないやうに致さなければ成りません。

遠方に居る私の孫に十歳に成るものがあります。此が毎度言文一致で手紙を寄越しますが、能く其意味が分ります。今歳女子學院の豫備科二年級へ入學致しましたが、其入學の願書なども、矢張り言文一致で書きました。さうして言文一致は書き易いと申して居ります。斯う云ふ次第で、發信者の方には書き易く、受信者の方には讀み易く解り易いのが、即ち手紙の本義に協つて居る事で、之が爲め、書く時間も讀む時間も經濟に成ると申すもので御座います。因襲の久しい漢字は捨て難く、漢文體の文章は改め難いやうでありますが、之を捨てゝ、一方に目に見へる、此程の利益を享けないのは、實に愚かなことで御座います。これがもし羅馬字で一切の事を記す樣に成りますると、實にいろ〳〵利益があることゝ思ひます。

兒童と金の處分

鳩山春子

栴檀は二葉より芳ばしいとか申しまして、昔から偉人傑士は、幼少の時から早く人に違つた所があります。そして、其れには其母たる人の教訓化育が、必ず與つて力のあることで。

人の一生が善くなるも惡くなるも、多く幼年時代の家庭と四邊その周圍との如何に關係するものであること

は、孟母の三遷、楠母の訓戒などを見ても、明かな事です。或西洋の教育家は、人は生れて五歳までの教育が最も大切で、此の五ヶ年に與へられた感化は、殆ど第二の天性に成り、人の一生を支配すると曰ふて居ります俗諺の三つ兒の魂百までもと曰ふのも、矢張り同じ事であらうと思ひます。

其れならばと曰つて、幼稚園の教育に力を入れたらば可いだらうと申しますが、必ずしもそうばかりでは御座いません。凡そ幼年時代の教育は、先生よりも母に在り、學校よりも家庭に在るのであります。

私の知つて居る或る英國婦人に、紅茶へ何時も砂糖を入れずに飲む方が御座います。或時何うして、砂糖を御用ゐに成らないのですかと、尋ねて見ました所が、其時の返事に、私は小供の時分大層砂糖が好で、毎日の様に澤山甜めたものであります、すると私の母が心配しまして、其んなに澤山砂糖を甜めては害があると、度度注意してくれましたが、私は一向聞入れません。其處で母の策畧から、私と母との間に一つの條約が出來ました、其は私が砂糖を甜めない代りに、砂糖代として毎日五仙づゝを母から貰ふと云ふ事で、其を溜めて、内何仙は公共事業に寄附する、何仙は自分の玩弄品を買ふ、何仙は貧兒に施與すると云ふ樣な、有益な事に用ひると定め、其れから砂糖の爲め胃を害する事を免れ、又金錢の使ひ方も追々分つて參りました、此が今も紅茶に砂糖を用ひない事にした理由ですと申されました。

誠に面白い考で御座います。此の樣にして子供の時から金錢の使ひ方を敎へて置くは、至て善い事で、小供には金錢の使ひ分けを敎へ込む必要があると思ひます。何錢は慈善事業に寄附するとか、何錢は自分の娛樂費に當てるとか云ふ樣な、秩序のある仕方は、小供の時から癖付けて置かなければ成りません。

湯地(丈雄氏)さんの發起で、護國幼年會保護團と云ふものが出來ましたが、此は私が申す趣旨に協つて居ることゝ思ひます。此の護國幼年會と云ふのは、日本全國の幼年から一ヶ月に一人金一錢づゝを寄附させ、規約

郵便貯金に預けて置き、豫定額に達した時、一艘の水雷艇を買ひ入れ、幼年號と命名して、海軍省へ寄贈すると云ふのが、其目的であります。嘗て米國の小供が二千餘萬弗を醵金して、アメリカンボーイと云ふ大軍艦を買ひ、時の政府へ献上したことが御座います。つまり其に倣つたもので御座いまして、之を補助して遣る爲め保護團と云ふのが出來たので御座います。これには多くの賛成者もあります。其内、貴婦人方の熱心な御賛成もありまして、目下常務委員に大藏松子。相馬陸子、瓜生しげ子、山脇房子、柳谷千代子の方々と、私の六人が成つて居ります。

もと〳〵年の行かないものに、一人前の人の如く、公共事業へ寄附金をさせるのは、餘り善い事とは思はれませんが、一ヶ月僅か一錢位で何の差支もなく、海國たる日本の幼少年に、海軍思想を普及させる助けにも成らうかと思つて、却て奬勵する次第であります。又他方から見ましても、近年は如何なる家の小供も、少なくて五錢十錢、多いのは數十錢の浪費を、毎日の樣にして居ります。此の浪費は、衞生上にも、教育上にも善くないものばかりで御座いますから、斯う云ふ事を奬勵致しますれば、此等の弊害を免れる事にも成り、同時に月一錢でも、集まれば立派な軍艦が出來ると云ふ觀念を、腦裡へ入れて置くたよりにも成り、金錢の使ひ方やら、海軍思想の普及やらに、好影響を來す事であらうと思ひます。のみならず、全國の小學生徒が悉く毎月金一錢を出すことに成れば、一ヶ年に約二十萬圓の水雷艇が三艘も出來る筈ですから、私共は子供の母の一人として、此の事業を賛成した譯で、是非共成功させたいと思つて居ります。

私の家庭では、小供の車代が毎日幾何と定まつてありますから、小供は車に乘らず濟ました時は、其錢を貯蓄して置き、先年は其れで自轉車を買ひました。そんな風に、其錢で物を買ふ時は、自由に買はせますが、一應は私に相談させることにしてあります。何にしろ幼稚園時代から、大學までゞ御座いますから、一日

四十錢の車代でも、中々大きく成るので御座います。學校で時々慈善事業に寄附金の募集がある時も、他の三四倍の金は寄附することが出來ました。又慈善事業ばかりではなく、或時は植木も買ひました。又或時は小鳥も買ひました。四年前には五百圓ばかりのピヤノを一臺買入たことも御座います。何れも乘車賃の節約から出て居る金で買つたので御座います。

從來我が邦の風習として、小供に金錢を少しも持たせないのを上品の事に仕て居りまして、小供は錢の勘定を知らず、換言すれば、經濟思想が皆無でありました。そして其小供が大きく成り、善惡を顧みず、無性に金を費ひ散らしますと、流石は大家の若旦那だけ、錢の切れ放れが好いなど〻賞讃しました。此は甚だ感服の出來ない事で御座います。

小供が無分別に錢を使ふのは害を來すことでありますが、又貯へるばかりが能でも御座いません。小供には親達から相當の金錢を與へて、之を上手に使用する樣心懸けさせることも、亦させなければ成らないのであります。（右は鳩山夫人が[illegible]幼年會に於て述べられたる御話の大要なり）

女子と職業

高等工業學校長　手島精一

女子と職業との關係は、第一に賃銀の問題である。女子が男子より低廉な賃銀で働くことの出來る以上、今後女子の職業が續々增加して來て、殆ど防止することの出來ない勢に成るのは、實に必然のこと〻謂はなけれ

ば成らない。現に事實から見ても、女子の新職業は、近年著しく擴大して居る。
昔は絲繰りとか、機織りとか云ふ如き、家庭の仕事は、女子獨占の有樣で、其上田植、草取り、收穫等の農事に少なからず、手傳ひをすると云ふ位に過ぎなかッたが、今は大工場でする工業らしき工業の各種手工を初め、印刷局の傭員、電話の交換手、停車場の出札係、其他事務員など、皆女子の新らしい職業に成つて來た。
蓋し此は時代要求で、又男子よりも勞銀が安く、其上緻密微細な仕事は、却て女子の方が適當して居るからである。

斯く女子の職業は、近年非常に增加して來たが、尚擴張すべき餘裕はあり、擴張さすべき必要もある。從來女子に職業らしい職業がなかッた爲め、若し不時の災害を蒙り、又避け難い禍にかゝり零落すると、敎育はなし、衣食には困ると云ふ所から、已むを得ず悲むべき醜業を營み、賤業を事とする樣に、多くは成つた。婦人に職業さへあれば、斯う云ふことにならないのである。

また今日の社會の樣に、男子と女子とが、同等の位置を得て居ないのは、一家の快樂にも缺ける所があり、一國一社會の調和にも缺く所がある。日本は東洋の中でこそ、最も女子の智識が發達して居る國であるが、歐米の各國に較べれば、遙に地位も低く、智識も不足である。歐米婦人の如く男子と對等の地位を得させるには女子の智識を今少し高め、今少し常識に富ませなければ成らぬ。常識に富まぬ婦人が、生中職業を有すると、彼の裏店住居の或る人達の樣に、年中家庭に風波が絶へないことに成る。

其れかと曰つて、日本現時の女子に相當の位置を得させ樣と云ふには、是は漸を以てしなければならないので、矢張り時間の問題である。是から盛に女子を敎育した上でなければ何うも行かぬ。又其敎育が、例の空理空論では行かぬ。矢張り着實な實用的敎育を施し、女子の常識を發達させなければいかぬのである。今日女子

に猜疑心とか嫉妬心とか云ふ如きものゝ强いのも、つまりは世の中の事を廣く見聞しない所から、常識に乏しい爲めの致す所で、其結果公平の判斷が出來ないのである。

若し着々實用的の敎育をして歳月を積めば、自づと常識は發達し、諸事男子と同樣にして差支へない樣に成るもので、維新前後から今日まで、我が婦人界が如何に長足の進歩をしたかを觀ても、之を察することが出來るのである。

封建時代には、女子の智育體育は殆どなく、僅に少しばかり禮儀を敎へる位で、女子と小人とは養い難いと捨て置いたものである。從て嫉妬猜疑など云ふ惡德は、當然女子にあるべきものゝやうに思はれて居た。

私が初めて洋行したのは、明治の初年であつたが、其頃我邦には女子の學校らしいものは一つもなかッた。歐米人から此事を尋ねられる毎に、事實を以て答へると、そんな風では、無敎育の女子を相手にする日本の男子は不愉快でないかと、重ねて問はれるのが普通であつた。凡そ女子は、男子のする仕事が何れ程のものであるかと云ふことを、ほゞ知らなければ、終日執務して疲勞して歸る男子を、慰藉する事が出來ず、一家を幸福にする事も出來ないのみならず、無敎育の女子では、一家共通の談柄がなく、女子は女子と話し、男子は男子と話す樣な姿で、男子も女子も十二分の愉快を得ると云ふ事は出來ないのである。歐米の婦人は、此點に就ては、殆ど申分のない域に達して居る。然し我邦では未ださうは行かぬのである。尤も近頃は追々善く成つて來たから、遠からず、好果を得る樣に成るであらうと思ふ。

女子の體育も、從來は棄て顧みなかッたが、近來若い婦人は身體の發育が甚だよく、母より娘の丈が高いものを到る處に見受ける。此は學校で近年體育に重きを置くからである。私が昨年渡米の時、米國に於ても同樣の結果を見た。其は屋外運動を盛に奬勵したからで、之が爲め今日は、電車の中で女子に男子が席を讓らうと

しても、肯じないものが多く成つた。終日勞働して家路に向ふ所の疲勞した男子に席を讓らせる程、女子の體質は弱くないと云ふ所からで、甚だ結構な現象と思ふ。從て近來は、無闇に女子を尊敬する風も米國では少なく成つた。從前は、米國でも、英國でも、女子の前では、其承諾を受けねば喫煙はしなかつたのであるが、今日は其れもなく成つて來た。言ふまでもなく、體質の弱くないものは、徒らに優遇を受くべきでないと、女子の方から謝絕したのである。現今米國には、女子の大學が澤山あつて、女子の學者も澤山あり、女子の教育が盛大である所から、漸次に斯う云ふ事に成つて來たものに外ならない。

我邦でも、明治十九年頃、舞踏が盛に行はれ、男女交際の道も大に開けるかと思つた事であるが、まだ時が早かッた爲め、遂に失敗した。當時は、女子の教育が不十分で、常識も足らなかつた所から右の通り失敗したのである。若し今の米國婦人程教育があッたならば、勿論間違はなかッたことゝ思ふ。

要するに今日は、女子に是非共一つ職業を持たせるのが必要であると同時に、必ず相當の常識を伴はせなければ成らぬ。さもないと、折角の職業も、爲に一家社會の調和、和樂を破る種子に成ることもあるのである。

女子の羽織

當今の女子は、皆な羽織を着、被布を着て居りますが、昔は怎んな風儀はありませんでした、不斷には着て居ても、儀式の席へは着て參りません、女子が儀式の席へ羽織を着て出るのは非禮としてありました、夫れが何うでせう、唯今では學校の卒業證書授與の式場へも着て出るやうになりました、僅か明治五年であつたと思ひます、天皇陛下が某所へ行幸なされるに就いて、歡迎の女生徒に羽織を着てはならぬと云ふことを、其の教育監督の任にある人から達したことがありましたが、矢張斯ういふ儀式の席へは昔の樣に羽織被布を着て出ないやうにするのが宜しいと思ひます、男子には男子の服裝あり、女子には女子の服裝があるのでありますから、女子が男子同樣に儀式の場所へ出るに羽織を着ると云ふのは、根本に於て間違つた風俗と云はればなりません。(元良博士母堂談)

當今の問題

女子と海外旅行

新らしく歸朝されたる　小崎千代子

米國に參つたと申すものゝ、僅か半年足らずで、其上處々を飛び廻つたのですから、詳しい觀察や細かい調査などは無論出來ませんでした、が、同胞の多く居る太平洋沿岸を旅行し、多くの人々に接したので、思の外に種々な感じや、經驗も得たので御座います……女學生と海外旅行に就てと仰しやるのですか、これは私も大分注意した問題でありますし、今後も此事業に就て企てゝ居るヿもありますから、其中纏つたヿを御話しする事が出來樣と思ひます、併し今一通を申上れば……近頃は年若き女が保護者もなく單獨に渡航すると云ふヿは殆ど全く出來ぬ樣になつて居ります、假んば出來るとしても私は賛成致しませぬ。一體なぜ斯樣に嚴重だかと申せば、一は醜業婦を防ぐ爲めと云ふヿが重な理由である樣です、ですから如何に立派な敎育ある女子でも、信用のある紳士の保證、或は引受がなければ、例令渡航しましても、上陸せしめませんどうも困るではありませんか、船中でも醜業婦を賣買する者があつて、始終烏の目鷹の目で誘拐しやうとして居る人鬼が居るのですもの、現に高等女學校卒業程の學力ある女子が四名ポートランドの一商賈に雇はれて往きました、其保護も取扱ひも中々嚴重であつたに拘はらず、其中の一名は彼の人鬼に瞰まれ、危く誘拐され樣としたのを、ある牧師が認めて救ふたと云ふヿであります。此一例より推して見ても、他は知らるゝではありませんか。斯樣な次第でありますから、海外に赴かうとする女子は大に警戒する所なくてはなりません。又米國へ行つて婚禮するのだとしても、本國の樣な工合に思ふて居つては大間違ひです、是非人を擇み、且つ深く調査しての後でなければなりません、結婚は名のみであつて、實は醜業を營まして不義の利を

得樣として居る者共が多いのですから。

と申すものゝ私は敎育ある女子の續々渡航することを寧ろ勸むる者で、又た彼地でも大に其必要がありますから、是非完全で安心な方法に據て渡航し得る樣にしたいものであると思ふて居ります。充分の學費を支出されて勉强するのは特別ですが、何か仕事をなし獨立して勉强し樣とするならば、澤山あります、其一つはハウスウオルク(小間使或は働人)です、是等は男學生が多くして居りますが、女子で赴く者が少ない爲めであつて、若し女子が之をするならば、報酬も男子より割よく大抵二十弗から廿五弗で、若し料理の心得があれば三十弗から四十弗迄は得られ樣と思ひます、それから裁縫が出來れば最もよく、外に何も知らない者でも最初から一日一弗以上一弗半はとれ、熟して來れば四五弗はとれる。洗濯でも手傳丈で一弗半熟するに隨ふて二弗三弗は慥にとれます。斯樣に働いて、夜になつて學校に通ふ、夜學校の設備もよく整ふて居ますから、左程六ケしいことはありません。而しハウスウオルクをするに就ては、よく其家庭を撰ぶことが必要です、家によりて働きの難易、勉强の場所如何に關係もありますから。斯樣の働きの外に入學した學校や俱樂部の掃除などをして勉强することが出來るのもあるけれどもハウスウオルクより困難です、御存じの通り米國では勞働すると云ふことを我邦の樣に賤める樣な風は無論なく、寧ろ敬重する風がありますし、かくして勉强するものを愛します。

勞働しつゝ勉强することの大要は左樣の次第で御座いますが、愈々出向ふにはどうするか、又た何處がよいかと云ふに汽船賃は普通三等が六十三圓見せ金百圓、二等百八十圓、一等四百圓ですが、出來得るならば二等で行く方が安全です、併し其何れにしても單獨に航して行くのは、危險が伴ふのみならず、上陸も困難ですから、是非慥な人物と一處に行く樣にしなくてはなりません、若し單獨で行くとか船中丈の同道者を得て行く場合は、上陸地の埠頭に學校長なり牧師なり或はまた紳士か淑女が迎へに來、其人に保證してもらふ樣

になさねばなりません、在留の日本人でも地位ある人或は日本人の牧師、領事などに豫め依頼して如上の方法にしてもらうならばよからうと思ひます。場處は何處と指定するヿは困難ですが、斯様な學生の多い處はシャトルでサンフランシスコも隨分ありますが、私共の見た處で、比較的安全なのはバンクンバーの様に思ひます、ニューヨルクは無論よろしいでせう。兎に角女子の働き人を希望して居るし、仕事は充分にありますから、行きたい望みのある人は是非行くがよいと思ひます。

併し是非共に注意しなければならないヿがあります一言すれば意思の强固と云ふヿであります。此心掛けは何につけてもなくてはなりませんが、殊に勞働しつつ勉强する者に於て然うであります、實見する所によりますと、一の職業を得て月二十弗を貰つて居る者があるとして、若し他に二十五弗を與へ、働きが比較的樂そうに見ゆる所があると、直ぐ其方に轉ずる様な人が隨分ある様です、あそこに四日こゝに六日と云ふ風に轉々場處を變へますので、何年立つても元の杢阿彌となつて居る者があります、ですから若し一旦一の家庭に入つた以上、甚だしい不都合のない外は忍耐して其處に居ねばなりません、此決心がない以上は成功は期し難く、またお世話もなし兼ねます。それからすべて時間的にきちん〳〵と立働き、爲すべき義務はなまけないですると云ふヿです――是等は何處の國でも同じ事ですが――私共が參りまして斯様にして勉强して居る人に澤山會ひました、其中の一人が「私はあの家に往つてからまだ一週間餘しかなりませんから、主人の心はまだわかりませんし、主人も私を知りますまい然るに過日其妻君が自分の室をを掃除して置て吳と云ふた儘外出したから、早速其部屋に往つて見ると、大切な品物でも、金目のものでも室内に放置してあるのです、來てからまた五六日しかならぬ私に斯る信用を置てくれるのですから、自然忠實になり、妙な心を起す様なヿは出來ません」云々と申しました、皆すべて斯様にとは申されますまいが、一般にかゝる状態で

すから、往く人も其心して行くことが大切と思ひます。
其他申さば種々ありますが、まづ是位にして置きませう、私共は實地見聞して男女學生の渡航に就て多少考ふる所がありますから、今後出來得る丈此爲に力になつて上げたいと思つて居ます、殊に前にも申た様に高等女學校卒業生とか、其程度の學力ある娘で、彼の國に行き勞働して勉强をしやうと思ふ人の爲に、少し企てゝ居ることもありますから、其中發表しやうと思つて居ります、要するに私は女子や婦人方がお望みならば續々渡航されることを希望するもので御座います、併しこれと同時に有識者に對し醜業婦の輸出或は此種の惡事業をして居る者の取締を嚴にせられんことを切に望みます。

女子の教育と父兄の注意

文學士　三輪田元道

理由なくして女子を上京せしむるはよくないことです

然るに近來斯様な風が段々多くなつて來たのは困つたものです、地方で相當な教育機關がなければ格別、今日一般に之が備はつて居る以上は、態々年少の娘を上京せしむるには及ばぬ、風俗、習慣、人情、衣食住等相等しき地方で勉强することは、本人にとッてどれ程利益だかわからぬ、然るに外見の立派なと、名の美なるとに眩惑し、或は以前上京せるものを羨んで、何の考へなしに漫然と出て來ると云ふのは、決してよいことではありません、政事も中央集權がよろしくないと同様に、教育の中央集權も大に弊害があります。女子が一旦都へ出ると、直に都の生活に慣れ、萬事都會風になつて來ますから、自然面白からぬ事も出來、卒業して後も地方に適しない様になつて終ひます、夫れでどうしても女子の普通教育は其地方で受くるのが一番よろしいのですから、父兄は深く注意せねばなりません。
併し師範學校とか、職業學校、乃至女子大學の様な專門的の學問で、地方で出來ないものは止むを得ないが、それにしても、裁縫とか刺繡其他の手藝を覺へて

敎師にでもならうと思ふ者は格別、さもなければ地方の高等女學校等で學んだ丈で充分とする方がよろしい然るに職業的の敎育を受け樣とする者の中には高等女學校は勿論、高等小學さへろくに濟さないで來る者さへある、私は常に是等の事を見て、甚しく當時の弊風と思ひ、屢々世の父兄に注意して居る、嘗て埼玉地方土着の富豪某が娘を入學させたいと申て來ましたから私は、前に云ふた樣なことを語りますと、其人は翻然として悟り、それでは娘を連れて歸ると云ふて歸鄕しましたが、今は浦和の高等女學校に居るそうです（女子高等師範で本科生七十五名を募集したのに凡そ三千名の志願者があッたといふ事を見て、如何に遊學熱が盛であるかを知る事が出來ませう）。

學校と家庭、或は保證人との關係ですが、私の處（三輪田女學校）では極めて圓滿になつて居ります、これは入學する生徒は父兄をよく知つて居る人の子か、または知人、或は卒業生の紹介する女子であるからです、所が世間で最も六ケしいのは官公立學校の生徒で試驗をして入學せしむるのですから家庭と聯絡すると云ふことは困難です、私が保證人の格で或は官立學校の父兄懇談會に出席したことがある、所が此集會は意外にも段々殺氣を帶びて來て、終には人身攻擊的になつて來たのです、例へば割烹のことに就て或父兄は「私共は常に芋や大根で生活して居るもので、西洋料理などは必要がない、然るに學校では實際家庭で必要な料理法を敎へないで不必要な西洋料理などを敎へくれるのは困る」と申ますと一方ではそれと正反對で「芋や大根の料理抔はよく知つて居るから敎はるに及ばぬ、其よりも西洋料理こそ學校で是非敎へて貰はねばならん」と斯樣な風でありました。思ふに是等は父兄が學校の主義、氣風を調べず漫然入學せしめた結果であります、若し學校の特色或は其敎育法などを充分に知つての上ならば、斯樣な不都合はなかつたらうに。

また更に他の父兄懇談會に出席したが、學識がある人とか、又は社會上に相當に地位を得て居る人は出て來ません、强ち不熱心な爲めではあるまい、仕事が多

忙でもあらう、或は校長の知つて居る位なことはよく承知して居るといふ譯からかも知れない、そこで集つた連中はどうかと見れば、校長の話がよくわからぬ連中が多い、中には子守や執事などの代理もある樣でした以上の樣な風では父兄懇談會も何の效果がない、又た或る學校では運動會や紀念會などを開いて父兄を引きつけ樣として居るが、之も父兄をして學校の實際を知らしむることは出來ぬ。斯る方法は寧ろ非學校的の催しで、又た非教育的であつて、唯だ父兄の耳目を喜ばす丈で、眞の教育の上には何の效果もない。私の處では未だ父兄懇談會樣のものは一切開いたこともないが、父兄や保證人との關係は親密であつてまたよく知り合ふて居る、生徒を入れるにも前申た樣な風に知人の娘或は知つて居る人の紹介によるのであるから、その家族は幾人、財産は如何などの點迄大抵知つて居る、それに先から來るのを待たずして此方から出向いて交際する樣にして居るのであるから、自然先からも訪問して來る樣になる、斯樣にして父兄と學校と親しくし、

又一方から活教育の方法を學び得るのである、譬へば或る男の妻に對する希望は常に莞爾して居てほしい、即ちチーヤフルである樣にとの事であつた、そこで親切、柔和などの性質を養成する必要があると云ふことを事實に慥め得らるゝのである「和氣あるものは艶容あり」と即ちこれであらう(斯くて氏は女子の監督に就ての經驗や方法を語られ且つ曰く)一般に日本人に缺けて居るものはエキスプレツシヨンである、元來人の美と云ふものは衣服や裝飾にもよるが、唯だ外形上では到底駄目である、どうしても心より改良しなければならぬ、そこでアツピヤランスの至らぬ處はエキスプレツシヨンでやる樣にするを要する、されば一切綿服を用ゐ髮飾などをしなくてもこの内部の改良によりて品格を養成し得る方法を講じて居る。

また私の處の生徒で辨當を他の者に屆けて來るものもあつたが、私は其度に造物主が手を與へたではないか、須らく之を働かして自ら携帶すべきであると云ふて止めさしてやる樣にして居る。

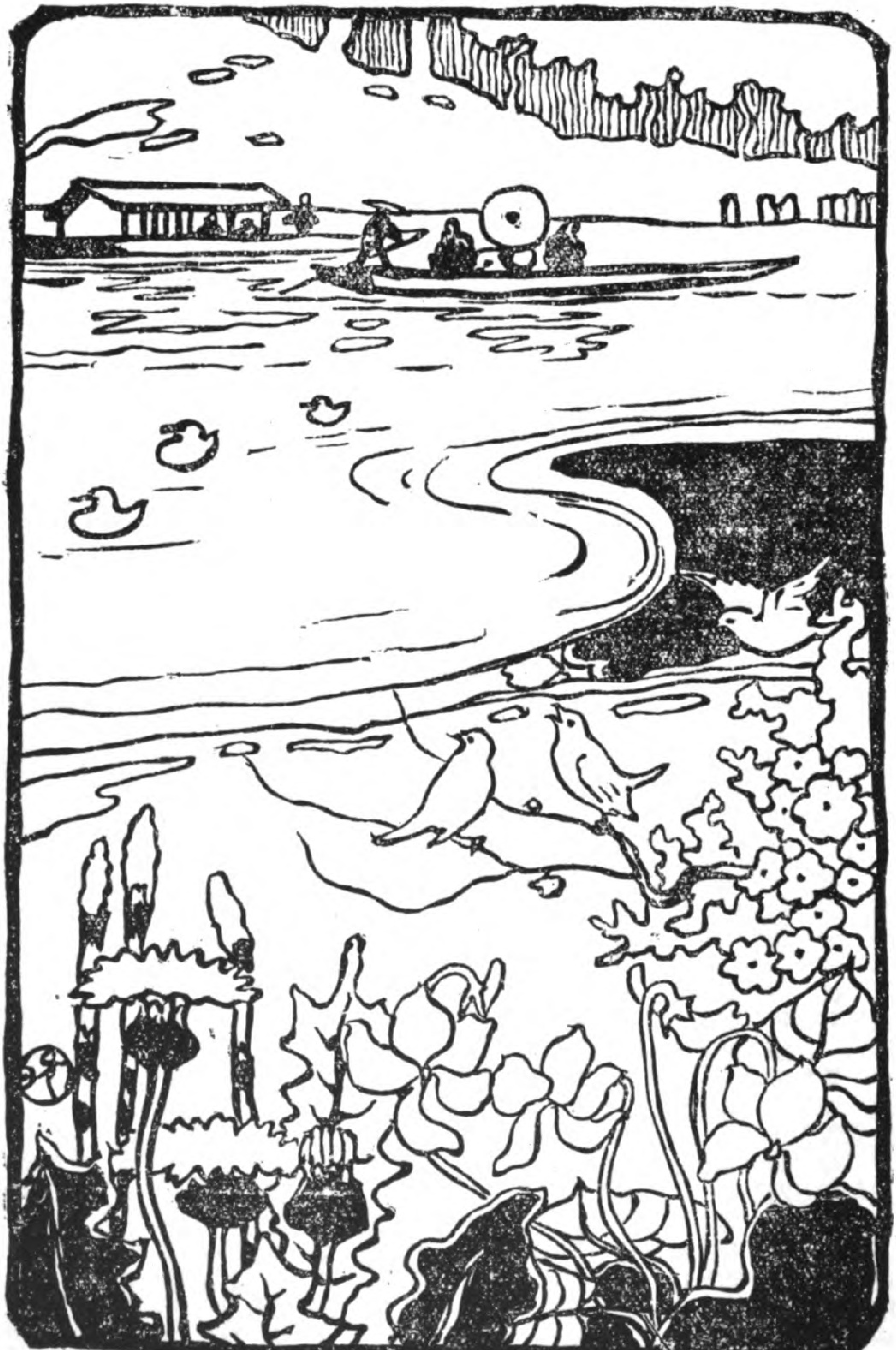
以上は直接にまた間接に女子の遊學と云ふことに就て父兄の注意を促した譯ですが、若し此心を體して娘を教育せしめらるゝならば幸と思ひます（氏は更に自宅に預られし十三名の女子のことに關して述べられました今左に其大要を申しませう）。

宅に居る十三人の生徒は各種の家庭から來て居るが一切綿服に定め、絹物は用ひさせぬ、所がある父兄は「自分の家には綿服がないから、そう申さるゝと別に新調せねばならぬ」と申しました、そこで私は絹物がそんなに出來るならば綿服を仕立ることは何でもないではないかと申たこともありました、其他すべて斯樣に内美を主として外美に重きを置きません云々。

模範家庭

前大學總長山川博士は學者として又德望家として今日の教育界に第一人物として許さるゝ人であるが、博士は維新の際日本武士道の粹を發揮した會津藩士で其の平常は極めて嚴格で公私の訪問客に對しては必らず羽織、袴を着けて應接さるゝそうである、隨つて其の家庭の嚴格なるは申までもなく、質實樸朴で、衣服は綿服を用ひられ、食事とても朝は味噌汁に煮豆香の物位に過ぎないとの事である、我々思ふに兎角日本人は身分に釣り合せ財産に釣り合せ、所得に釣り合せて華美贅澤をする人柄である、故に堅い所がなく、大丈夫な所がなく、表面ばかりよくしたがる癖があるので眞逆な時に自分の立場を失つて迷誤つくのが多い、斯樣な國民は一時はびこつても忽ちにして枯て仕舞ふ、大に警戒すべき事と思ふ。

春



人生觀

戀愛の兩面觀

登坂北嶺

(一)

近時學者の間に喧々として稱道せらるゝは男女交際の問題なり、男女の交際は即ち戀愛を意味するもの、而して戀愛が人生に對して幾干の價値を有するやは今更論議するの必要なく、寧ろ價値の範圍を脫して必須缺くべからざるの性質を有せりと做さゞるべからず。何となれば人生に於ける當然の責務として子孫繁殖の道を圖るは先づこの戀愛といふものに竢たざるを得ざればなり。之を婚前婚後に區別するまでもなく戀愛の其相互間に成立せざる限りは圓滿に子孫繁殖の道を圖る能はず、而して戀愛なるものが非常に愉快なるが爲め往々其常道を逸して意外の失敗を招くもの少からず恰も紅紫繚亂たる花園に踏み迷ひて毒花に觸るゝが如し、人生の最も愉快なる時代は青春に在りとすれば、戀愛の勢力たるや殆んど人生の全部を占領するといふも誇張にあらざらむ。加之近時稱道せらるゝ自由結婚論が漸次勢力を加へ來るに當りてはこれが觀察を精細にし前途多望なる青年士女を誤らしめざらんと欲するは應に經世家の忽諸に附すべからざる所なるべし。

(二)

熟ら戀愛の内容を分析するに凡て二種に大別するを得べし、肉體的戀愛精神的戀愛これなり、而して世間普通の戀愛は十中の八九は前者に歸するが如し、之をかの小說子に聽くに殆んど全部を擧げて美人好男子を標榜とせざるはなし、小說は人生の縮圖にして最も人類の普通的希望を代表するものと斷定する時は、先づ人類が肉體的美に向つて猛進するものなるを證すべし途上青年の男女相逢ふ、行過ぎてまた顧み、落花流水の媚態を示すものいづれも、差々人を動かす底の美人好男子ならざるはなし。西諺に美貌を以て人間唯一の

幸福となすを信ずるもの多き今日に於て此の如きは寔に止むを得ざるの狀態といはざるべからず。然れども肉體的美醜を以て直ちに戀愛の成否を定むるは實に大早計の極にして、回すべからざるの失敗は多く此間より生ず。彼の蝶が羽翅を飾りて配偶を求むるに倣ふて得々たる男女は自ら地位を衒に並ぶるものと言はざるべからず、慨すべき哉。玆に佛者の言を引くまでもなく無常の風は忽ち盛裝せる櫻花を散らして、昨の紅顏漸く白頭と變ずる時、あらゆる美人の運命や果して如何。肉體を以て合せるものは、其肉體の既に合せる時の價値を失ふ時は即ち冷然として相離る、戀愛の眞意義にして此の如きに過ぎずとすれば、子孫繁殖の道もまた甚だ危しといふべきなり。而かも美人は其美を誇るの念を斷つ能はず。之を以て其驕慢より生ずる結果として終に沈淪を免るゝ能はず、或は其美を實質以上に自惚れ過ぎて却つて自家の損失を來すことあり。故に吾人は美貌が累を及ぼすの大なるを見て轉た美貌自滅論を主張せざる能はず。思へ、戀愛は永久的の性を帶びて始めて意義あり、おまへ百までわしや九十九まで、或は共白髮といふもの、これ明かに此傾向を證せるものにして、一時的の肉體を以て去就を決するの誤れるは愈明かなり。讀者冀くは三思せよ。

（三）

吾人は日々の新聞廣告を閲して先づ驚かるゝは彼の化粧、裝飾等に係る藥品の多きことなり。曰く、二八水、曰くばらの露、曰く音羽菊、曰く人造麝香、曰く色の白くなる藥、曰くにきびのなをる藥、曰く毛の生る藥、彼の宮守の黑燒に至りては既に化粧用を超えて魔藥の域に入れるもの、而してあらゆる新聞雜誌に頗る高き廣告料を拂ひつゝ尙ほ終始渝らざるは如何に世間の男女が美しくならんとあせりつゝあるかを想見するに足らん。吾人は良家の令孃、或は學校の生徒等にして白粉を施し臙脂を塗り香水を蓄へ流行を趁ふて唯後れざらんことを欲するが如きを見ては竊かに其面に唾せんことを念ふ。彼の藝娼妓、或は淫賣婦等が裝飾を盡くすは營業上缺くべからざるものにして、猶ほ與

服店が陳列場を装飾するが如きのみ、以て客の目をひき利潤を得んと欲するは寔に當然の事にして毫も訝むに足らず、唯彼の素人、少くとも色を賣るの志なきものにして滿艦飾然として歡ぶは吾人其眞意の那邊に在るかを知るに苦む、諸孃愚なりと雖も、豈戀愛を營業とするにはあらざらむ。只管肉體的美、否化物的美を以て戀愛を求めんとす、誤らざらんと欲するも得んや。世間また説を爲すものあり、女は氏なくして玉の輿に乘ると、また曰くよき娘を持つた母親は左團扇なりと。白樂天も曰く、男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむと。皆美貌が意外の榮達を僥倖し得るを説けるもの、また一面の理なきにあらざるが如し。遮莫、彼の妾奉公を爲したるもの、老後を見よ、而して其後悔談を聽け、蓋し思ひ半に過ぐるものあらむ。東都場末の貧家は、よき娘を持てるを以て一かどの財産を有せるが如く思惟し、それをあてにして寢酒の分量を増すものさへ尠からずときく。あゝ、美貌は禍なる哉、美貌なりしが爲めに終生家庭の眞味を嘗むる能はず、美衣は纏へ、美食は喰へ、日夜快々として樂まず、薄暗き半窓の下、秋風鬢を吹いて小皺の額に夕日淋しく映る時、往時の美貌は、何するものぞ。殘生落寞として夢の枯野を彷ふに似たり。而かも以て美貌は人生の最大幸福と做す乎。

（四）

吾人は既に肉體的方面より觀たる戀愛を説けり、乞ふ次に精神的方面のそれを説かむ。それ人間は肉體を宿とせる精神の存在なり。肉體は假に精神の入物として供給せられしに過ぎず、之を以て精神の喪失は即ち人間の喪失にして肉體の如きは敢て與らざるなり。之を六ケしき科學上の議論より推斷せずとも一見明白なる事實にして他の容喙を許さず。諺に曰く、虫の好かぬと。其肉體的に就ては必しも異議なきも何となう虫の好かぬが爲めに離縁するといふ事實は往々耳にする所なり。この虫といふは即ち精神を指すものにして精神が肉體以上に權威を有するは明かなる事實ならずや而して精神は無形なるが故に隨つて老衰といふ勢力に

追求せらるゝの厄を免る、老人の常に口にする所は、十七の意氣尙ほ昔の如しといふにあらずや。是を以て精神的に結合せる夫婦は、如何に靑春時代の容色を損ずるも依然として交情密の如く、嬉々として樂み雍々として歡ぶ、或は兒の成長を待ち、後には孫の手を引いて春風裡に落花を履む、之を畫にして及ばず、詩にして盡さず、眞個人生の意義は遺憾なく茲に現はされ戀愛の果實は累々として其成熟を誇示するの觀あり、これ實に永久的なる精神戀愛の賚にして、彼の蝶的戀愛論者の夢想だも及ばざる所なり。而かも世間の士女は先づ其容貌の如何を訊くを以て第一となす、媒介者もまた最初に其容色の勝れたるを謂ふ、其氣質の如何を問ふは最後の事に屬す、故に其容色の點に於て採用せざる時は決して精神の如何を訊くことなし。彼の見合といふ一種の虛禮は實に此蝶的擧動の發現せる滑稽作用に過ぎざるをや。

（五）

本誌の讀者は概ねこれ靑春の娘娘、其所謂戀愛といふ問題に就いて焦慮せらるゝや蓋し一日の故にあらざらむ。戀愛は必ず一たびは逢遭すべき難關たると共に無限の希望を伴ふものなり。殊に一生の苦樂他人に由るの身にしては戀愛の成功を以て殆んど一生の全部を掩ひ盡くすといふも過言にあらざらむ。俚謠子曰く、松の操に錦を着せて、離れまいぞい蔦かづらと、あゝ味ある哉。蒼松千古の齡を保つに纏ふは何ぞ、錦繡目を奪ふの紅葉にあらずや。これ實に精神的戀愛を說明せるものにして、永久に離れまじと其眞情をこめたるは僅かに諸孃が頂門の一針となすに足るの秀句ならむ美人が驕慢なると均しく好男子はより多く驕慢なるものなれば決して眉目秀麗などいふ小說的誘惑に陷らず唯其意志の勁くして長松雲を凌ぐが如きを認めて、其錦を投げかけて可なり。二八水や、ばらの露や、其名の如く果敢なくも脆きものなるを知らば、速かに其滿艦飾を撤して偏へに精神の如何を撰擇し、以て永久に人生の眞味を嘗むることを念とすべきなり、敢て望む。

○品行は勢力なり、　スマイルス

○善德の勢力は、身體の勢力に十倍す　ナポレオン

○薔薇は其の香の散らぬ内に摘め　英國俚諺

○遲く起る人は終日走らざる可からず　フランクリン

○何事も人並になれ、物に退屈する勿れ　豐臣秀吉

○懶惰の頭腦は惡魔の工場なり　西洋俚諺

○懶惰の人は光陰を殺し、規則ある人は光陰を活かす　コレクツナ

○遠く旅せんと欲する者は其の乘馬を節用す　ラシーヌ

○秩序は心の健康にして又身の健康なり　ソーセーシ

○人事には潮の滿干あり、其の滿潮に乘ずれば好運に達す　セーキスピヤ

○機會を捉へ、偶然の事を實益に轉ずるは成功の秘訣なり　ナポレオン

○小事を精密に觀察するは功績を奏する秘訣なり　ナポレオン

○天下にありとあらゆる黃金は到底一人を安んせしむるに足らず　ダンテ

○世に富めるより得たる不幸程不幸なるものはあらじ　羅馬古諺

○吾は土に穴掘りて埋むる如き吝嗇家となるを好まず又た箕を以て溢す如き散財家となるを欲せず　ホーレス

○心愉快なれば終日步み、憂悶すれば僅か一里にして倦む　セーキスピヤ

○神明に對して信心を失ふものは、人に對して信用を失ふ　羅馬古諺

○蒲團の上に坐し、夜具の下に臥しては名聲の地に達する事能はず　ダンテ

○生くるとは呼吸するの謂にあらず、爲す有るの謂なり　ルーソー

○成功の秘訣は、自己の業務を怠らざると、企業の成功を見ざるまでは、決して濫に他言せざるとにあり　バンダービルト

○小羊と共に臥し、雲雀と共に起きよ　英國俚諺

○成功の秘訣は目的の一定不變に在り　ビーコンスヒルド



井上海軍大將夫人

中村鈴子

久しく横須賀鎭守府司令長官として、名望一世に高き海軍大將男爵井上良馨氏は、此頃軍事參議官に昇任せられましたが、夫人を光子と申上げ、鹿兒島藩士伊集院金左衛門氏の長女で齡正に五十六歲、老て益壯んな御方であります。夫人は舊薩藩の剛健な御家庭に人となられたので、苟も國家に益あるの婦人集會に缺席さるゝ事はないので御座います。彼の有名な水夫家族の共勵會なぞは一に夫人の盡力に依り今日の隆盛を致したのであります。夫人は新に軍事參議官に榮轉せられた良人良馨氏と共に横須賀より歸京されたので、記者が廣尾の御本邸に夫人を訪問致したのは、門松の漸く除かれた一月九日の霜深い朝でありました。疎な生垣を巡らした廣い御邸内に見ゆるのは數十株の棕櫚で、栗色塗の西洋門を入つて洋館の御玄關に刺を通じ應接室へ導かれましたが、應接室には暖爐を盛んに焚かれてありました。硝子窓越しに御庭を拜見致すと、彼處此處に點在する古雅な梅樹を、解け初むる霜の蒸發氣が薄絹のやうに包んで淸い旭を受けた風趣面白く、廣い芝生の一隅に春待顏の薺の萠へ出るもあり澁谷停車場の汽笛は細く長く引いて一層幽雅の感を深からしめました。夫人は米澤絣の小袖に鐵色縮緬の被

布を召され、御髪は小さな束髪、丈は高い肉付のよい立派な御體格で、烱々とした眼眸は才氣と愛嬌に滿ち熱誠溢るゝ如き御話調は御性格の一斑を表白されて居らまれした。扨て御話しは――

▲夫人の壯健

私は元來壯健で、是れまで病氣のために御交際を缺いた事は御座いませず、御客樣に御面會を御斷り申上げた事など更に御座いません。主人が大佐の頃までは子供や老人の世話も御座いますし、餘り社交の方へ顔出しは致しませんでしたが、少將になりましてから、出來るだけは働きたいと存じて何にも辨へぬ不肖の身をも顧みず、種々な會へ加はりましたところ、皆樣の御引立を蒙り誠に有がたい事で御座います、横須賀に滯在中は隨分御交際向が忙しう御座いまして、特に戰時になりましてからは御見送りとか、葬儀とかに就て始終出京も致し、殆んど飛び歩るいてばかり居りました。老人の癖に餘り亂暴に身體を使ひました爲めか昨年九月に大患ひを致しましたが、發病の際も平生の壯健に任せて格別氣にも掛けませず、總身の顫へるのを耐へて知人の御見送りを濟し、歸宅後又々他出致さうと存じた所、目が眩む程な心地でしたから、體溫器を挾んで見ますと四十度以上の熱で、招いた醫師にも大層叱られたやうな次第で……。其大患後も未だ醫師に交際社會へ出ることを嚴禁されて居り、今度轉任いたしましても、私だけは當分葉山の別莊へ參つて居るやうにと醫師が申しますので、明日あたり彼地へ參る積りで御座います。

▲手狹は便利

葉山と廣尾とは大層な氣候のちがひで、こんな霜柱なぞ彼地で見たことは御座いません。東京の中でも此邊は特に凍でやうが強いやうで御座いますネ。ハイ彼地はもう至つて手狹で、少し大勢の御客樣でもあると如何致さうかと存ずる位で御座いますが又手狹の宜い事には人少で用が辨じ、却つて都合が好う御座います一體私は昔から召使を多く置くのを好みませぬ方ですから、手狹の家を便利に存ずるので御座います。

▲御家庭

倅共は外國に參つて居りますし、娘達は皆遠方に片付いて居りますから唯今は良壻と私と二人だけの家族で御座います。昔者で子供の教育も出來ませず、御耻しい次第で夫れに如何致しても昔の郷國風が沁み込んで居りますから、子供達を偏屈に仕込んで了ひました。娘は華族女學校に遣しましたが御仲間で芝居の御話が出るのに私には薩張り御相手が出來ませんから、連れて行て戴きたいと度々迫りましたけれども、學校へ通ふ間は



成る可く見ぬ方が宜いと申して置きましたので御座います。ハイ良壻は別に何も道樂と申す事はない人で、唯小鳥や犬を愛して此世話を致すのを樂しみに致す位で御座いますが、近來は大層肥滿いたした爲に歩行も難儀がりますし、動物の世話なぞも自然臆劫がるやうになりました。

▲舊鹿島藩士の家庭

私の育ちます頃は男女、主從の別が嚴重で實に窮屈なもので御座いました。男子の身に着けますものは、悉く女子のと混同致さぬので、衣紋竹から物乾竿、洗濯盥ま

で區別がチヤンと立つて居りました。誤つて腰の物でも足にさわりました時は、直ちに跪いて之れを捧げ罪を謝すと、云ふ事は、幼い内から仕込れて居ります。召使が雜巾がけの際なぞ決して物品に手を觸れぬ事に致してあるので、據ろない場合には『恐れ入りますが其處の何々を御のけ下さい』と主人にのけて貰つて拭き、雜巾がけが終れば全然手を洗ひ淸めてから他の用に掛るのであります。總ての物品も上と下との區別が嚴重でありました。私も此舊式が沁み込んでは居りますが、世が變れば習もかはる、今日では昔の十分の一も實行しては居りません。

▲昔の男兒

寒中男の兒の朝稽古は隨分勁いもので御座いました唯今のやうな有難い毛織の物を纏ふではなし、木綿の襦袢に膝限りの布子で、早朝薄暗い内に雪霜を踏んで稽古場へ元服した若人に連れられて參るので、一としきり武藝の稽古が終て歸宅の上朝飯を戴くのです。鄕國では男の兒に決して足袋を穿かせませんでしたから寒さうな姿でありましたが、其割に風も引かず壯健に育ちました。何樣も唯今の子供衆のやうに病氣をせなかつたやうだと、毎度姉とも咄すので御座います。

▲女兒

唯今と違つて女子に學問を仕込む事はありませず、唯だ裁縫、家事の練習のみさせたのですが、平生の敎訓は戰爭の用意と云ふのが基礎で『それでは戰爭に勝たれぬ、其樣なことで戰爭の時如何する』と云ふのが親の敎へですから、男兒は勿論、女兒や下婢に至るまで、此訓は深く腦に沁み込んで居つたもので、自然鄕國の婦人は頑固なのでありませう、學問を致さぬ代り手藝は隨分奬勵いたしたもので、儀式着の裁縫は勿論袖裾の刺繍まで他へ賴みませんでした。それから何處の家でも元結を作つたものです。男子結髮の頃は元結の必要が多かつたので可なり澤山に製造するのです。鄕國の元結は東京のと違つて麻を心に入れ紙をつないで撚り、長い元結を拵へ輪に致して置くのです。此仕事は暦を見て天日、天上と云ふ良き日を撰んで家內中

纏がゝりで致します、唯今から考へると可笑しいやうな仕事でありますが、一家の掟のやうになつて居りました。

▲食物

食物は割合に開けて居りまして、女でも肉類をよく戴きました。東京へ往つて歸られた方が「江戸の婦人は女らしい物を食べて居るから顔色まで優しいが鹿島の婦人はきつい物を食べるから色も赭黒く荒々しいと申されましたので、若い内は耻かしい心地が致しました。



▲横須賀共勵會の成り立ち

共勵會が成り立ちましてから丁度三年になりますが、皆様の御盡力で非常に盛んになり有難い事で御座います。最初は氣のすゝまぬ水夫の家族達を勸むやうにして入會させ、仕事を致させた位でありましたが、追々自分達が會のために幸福に暮せることが分つて希望者も續々殖へました。一と頃戰爭で家内達が各自の郷里へ呼ばれたり致して大層人數が減り、仕事は世話しくなりますし、心配いたしたのです、講和後は又々元通りに殖へて三百人程も御座いませう。

▲會の仕事と賃銀

御聞き及びでも御座いませうが、此會の趣意は良人の留守に徒手して遊び暮す水夫の家內達に、軍艦に關する仕事を働かせて相當の賃銀を得させ、傍ら風儀を矯正させる目的でありますので、其仕事の種類は、軍服の徽章を縫ひ付けたり、信號旗を縫ふたり、或は火藥の手入れ、無線電信の原料製造なぞで御座います。此無線電信の原料は、丁度厚い硝子紙樣の塊まつた物を薄く剝がして板に並べ、之を叮嚀につなぎ合せるので、私なぞ一寸見ても却々分らぬ位面倒な仕事であります。總べて此種類の仕事は男工より女工の方が緻密で宜しい相で御座います。子供のある者は連て參つて業を執つて居ります。賃銀は仕事の數で勘定致すので極初めての者でも一ケ月六七圓を稼ぎ、ミシンでも出來るやうになれば貳拾五六錢の收入が御座いまして良人の給料より遙かに超過致すのです。一體水兵なぞは薄給である上に家內はぶら〳〵と暮したものですから御正月が來ても子供に紙鳶一枚、羽子板一枚買つて與られぬ家が多う御座いまして、諸商人への拂ひも難かしい家が澤山でありました。全體横須賀では商人が應揚で、大抵一年拂の定めですから、尚更油斷を生じて何時まで立つても勘定を奇麗にすます家がなかつたのです。然るに共勵會が初まつてから勘定も奇麗に濟すので、諸商人の喜びはどの位だか知れません。心掛のよい婦人は、一ケ月の賃銀を全部銀行へ預ける者も御座いまして、良人が軍港へ着きますと直ぐに五拾圓位の送金をいたすと云ふ風で、却々感心なことで御座います。

▲風儀の改善

水夫の家內は各地方から渡つて來た樣々な素性の者が御座いまして、良人がありたけの金を遣ふのを見て家內達も留守に無駄づかひを何んとも思はず、中には惡い遊びをする者さへあり、品行の修まらぬ者が多いので御座いましたが、共勵會で働らき初めてから勤儉貯蓄の考へも起り、服裝なぞも半個月ばかりの間に全然變つて、粗末な帶でも御大鼓にチャンと結び、垢の附いた前掛も締めぬやうになり、坐作進退も高尙に

なりました事不思議な位で御座います。連れて參る子供は乳呑兒は御座いません。大概五六歳位のが多う御座いますが、母親の行儀を見習ふ爲めか極行儀が宜しう御座いまして、見やう見眞似に仕事の手傳なぞ致して居ります。私共が今度彼地を引拂ひます際には、女工や子供が見送り致して呉れましたが、女工は勿論、子供の行儀正しさ加減は立派なもので、僅かの間に斯くも善良な感化を受けるものかと感心いたしました。ハイ水夫の家内の中に素性の賤しい者も御座いますが是等は何樣も職業に堪へられず。永續が出來兼ねますので除會致しました。徒手徒食して貧に暮した時より働いて餘裕が出來ましてから一家の親睦も宜しい相で水夫達も留守勝の家に後顧の患ひなく職務に服する事が出來て非常に喜んで居ります。

▲會の資本金

會の成り立つた初めての月は、女工の賃銀其他の諸拂を濟せて、殘金僅か拾五錢でありました。幹事の方が之れを銀行へ預けに持つて參るのに、自分の金では迚ても持て往かれぬが、會の資本金と思へば耻しからぬ次第と仰つた位でありました。僅々拾五錢の資本金が皆樣の御贊助と御働きで、三箇年の今日は千位の大金となりましたのは誠に以て忝い次第と存じます。工場も只今までは彼方此方三箇處に借りて、手狹い處で仕業致させましたが、御蔭樣で資金も出來ましたから工場の普請に着手致しました。イエ私なぞ昔者で何の御役にも立ちませんので唯皆樣の御助をして上げた位で御座います。ハイ東京へ轉任は致しましても横須賀の會へは參る心得であります。何卒御暇の節葉山の別莊へ御越し下さい。横須賀へ御供致して工場を御覽願つても宜しう御座いますから……。

吉田子爵夫人

婦人記者

夫人貞子は舊幕臣志田知常氏の長女として安政三年八月に江戸に生れ、十五歳の時、故子爵吉田清成氏に

嫁せられ、故子爵が駐米國公使となられたので、十六歳の時から二十三歳の時まで足掛八年間を米國の交際社會に送られたのです。斯くて夫人は歸朝後、有栖川宮妃殿下の御用係を拜命せられ、目下山階宮妃殿下の御許に伺候して專ら交際の御顧問を勤めて居られるさうです。記者は秋雨しめやかな日、三田志田町の御邸に夫人を訪問致したのですが、瀟洒な冠木門を入り、正面に枝を張つた赤松と咲き亂れた大きい百日紅の植込を見て、右手の切組硝子戸の廣い御玄關に刺を通じ、和洋折衷の應接室へ導かれましたところ、此處には無地、鈍赤色毛氈を敷き詰め、朱塗の小卓子四五脚、和蘭模樣の椅子七八脚、適宜に散置され、書棚には七寶の花瓶、京燒人形などを載せ、掛額は　兩陛下の御眞影を始めとして、各宮殿下の御肖像、熾仁親王殿下の御揮毫、山水や人物の油繪などで、光琳の菊や土佐繪などの金屏は室隅に立てられて、莊重優雅な御裝置、御庭は高輪御殿の壁崖、前面に控へ、深々たる一條の淸水は木の間を縫ふて、小波寄する御池に瀉り落つる風趣面白く、金釵のやうな河骨の花、卷葉、浮葉の間に雜る茶褐色の蓮の實など、俗塵を離れし眺めで御座いました。夫人は十餘年前に御良人を見送られ、二令息の撫育に心を勞されつゝあるけれども、華盛頓府の交際場裡に花と呼ばれ給ひし御面影は、尙ほ其名殘を留めて、眉目淸秀、腰香人を醉はしめ給ふので御座います。

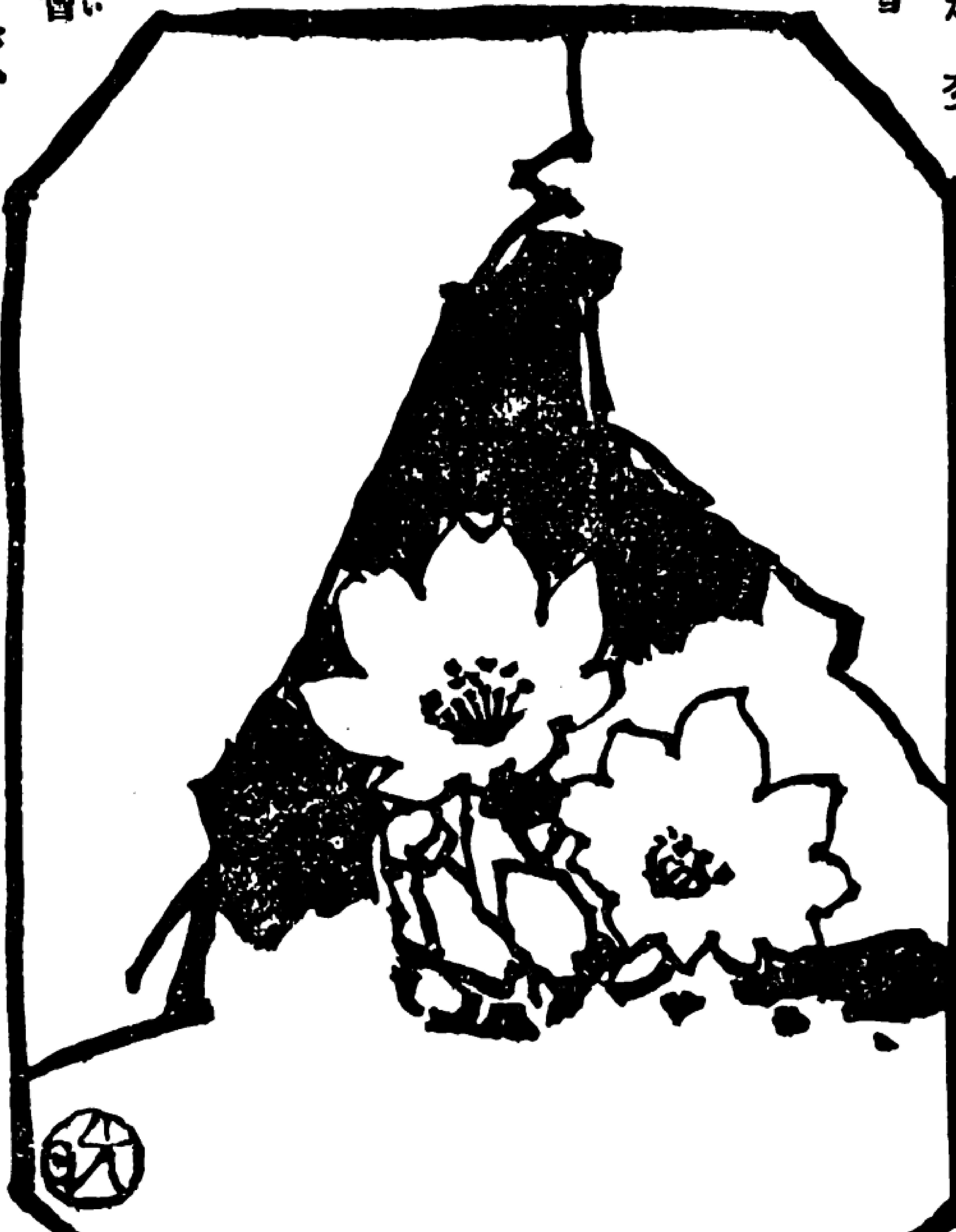
▲御渡米の當時

私共が米國へ參つて居つた頃は、グランドさんの時代でして、最早舊い事で御座います。其頃は未だ日本の風俗が珍らしかつたものですから、私が島田に振袖で夜會に出ました所、グランドさんなぞ大層珍らしがられ、着物をいぢつたりして御覽でしたが、後で餘り失禮な事をしましたと御詫びなさいました。何に致せ年がゆきませんでしたから、出立の際は父がひどく心配致しましたけれども、參つて見れば案じた程の事はなく、却て年若の爲めに、知らぬ事を問ひますにも都合よく參り、皆樣も善く引き立つて下すつたので、早

く慣れて仕舞ひ、言葉なぞも最初非常に困りましたので、却て早く習ひ得ました。學問も是非致さなければ不自由で困るのですが、交際が忙しくつて、チヨツト暇が出來難う御座ました。

▲名刺配りの繁忙

御承知の通り米國交際の期節は、九月から翌年の三月頃までが盛りで御座います。これは議會開期中に當りますので、各地方から名士が都會へ集つて參るからですが、夏分は大抵旅行致しまして、華盛頓府には黒奴ばかり多くなります。ハイ交際期節の幅利は大臣や議員さん方が主ですが、地方の豪商なぞも此仲間に入るのを望みまして、其夫人や令嬢方は、立派に着飾つて出て參ります。此期節の忙しい事は非常でして、時として一晩に四五個所ぐらゐ招かれることがあり、又其返禮に一々廻らねばならず、殆ど是れに掛り切りの姿で御座います。私共では此事に慣れた女中を一人抱へまして名刺の始末を致させましたが、女中は澤山の名刺を撰り別けて、何家と何家が今日應接日であるとか、何家へは今日返禮に廻らねばならぬとか、毎日調べて居りまし



た。慣れない間は、如何して覺え切れるものぢやア御座いませんが、若し誤つて廻るべき所へ顏出しを致さないと、直きに行屆かない人だと評されますから、却却油斷は出來ないのです。

▲舞　踏

私の歸りたてに、我國では丁度舞踏が盛んでして、伊藤さんは私に向つて『貴女が踊らなければ仕方が無い』と仰しやつてでしたけれども、米國では公使の夫人が餘り踊らないので、私なぞ毎時唯だ皆さんの踊りを拜見するばかりでした。地方なぞへ參りますと、歡迎が盛んで、多勢で遊船を仕立て招待して呉れますが、此方では又其返禮を致さねばなりません。先方は多勢組んで催すので骨も折れませんが、此方では一々各人に返禮致すのです。公使と申す者は、派手な役でありますから、皆から人望を得やうと致すには隨分骨が折れます。

▲御　馳　走

日本公使館でも、夜會は一期に四五回ぐらゐ是非致しますが、饗應の主なる品は三鞭酒と龜の料理で御座います。三鞭酒は先づ一晩に百本ぐらゐ要りますので、此罎數を少し儉約致すと、翌日の新聞で直ぐに吝嗇のやうに書き立てられますから、吝嗇なことは出來ません。龜は身を切つて酒で煮付けて出しますが、餘程好味なもので、之を第一に賞味致しますが、これは却々高價なもので御座います。

▲酒　と　煙　草

私共の居りました頃、英國と米國の婦人は煙草を喫みませんで、伊太利、佛蘭西、露西亞の婦人が煙草を喫みました。併し唯今は大分變つたかも知れません。婦人は細い卷煙草をポッケットへ入れて持ち歩くのが多いやうでした。米國婦人は御酒を善く飲む方で、夜會なぞでも可なり飲みますが、却々強くつて醉ひ潰ぶれる事なぞ決して御座いません。尤も平生も麥酒をよく飲んで居るそうで御座います。

▲衣服の着こなし

洋服も着つけますと、身體が自然眞直になつて格好

がよくなるものですが、日本へ歸つて日本服ばかり着る様になりましたところ、身體が自墮落になつた様な心地がして可けません。外國の交際社會へ始終出て居りますと、自然彼地に化せられて了ふものと見えまして、顔の色艶なぞも、最初は西洋婦人と交はつて氣恥かしいやうに黒く見えますが、追々と奇麗になるものです。畢竟洗ふ水や食物の故かと存じます。

▲産婆と保姆

米國の産婆は忠實で行屆いたもので、私は二人の子供を彼地で擧げましたが、我國で産を致すよりも安心で樂で御座いました。それで歸つて參つてから、こちらの産婆に種々敎へて遣つた位です。ハイ子供の保姆も醫者から撰んで寄越しますので、衞生上なぞに就ては、私が留守に致しても、少しも心配御座いません。子供が少し判る様になると、玩具を自分で片付けさせ、持てる物は持運ばせ、寢る時分になれば獨りで寢臺へ入つて寢るやうに、何事によらず自分の事は自分で致すことを敎へますが、實に取扱ひが上手なもので、子供は保姆の言ひ付け通りに爲り、却て私が言つたとよりも善く守る位で御座います。總て子供の事は心配が無いので、夜も晝も安心して交際社會へ出られます。



▲貴族の平民的生活

英國にも暫く居りましたが、皇族方の御出歩行は實に手輕なもので、御親戚同志の往來も繁々なされ、極親密に交際なされます。衆人の中へ出られても彼方此方へ話し掛けられ、如才なく平民的で御出ですから、うつかり致して居ると、普通人と間違へる位で御座いますよ。

▲御用係

宮樣へは時々上りますので、四方拜や天長節の式日に御息所が大禮服を召す御世話を申し上げたり、御馬車に御陪乘して參內致したり、又各國公使との御交際に就て、御世話申し上げる位の御用で御座います。私は先年薨御になりました前御息所(九條公爵の姫君)の御時から折々上りましたが、東宮妃殿下の御姉君でゐらせられましたので、其頃は妃殿下も度々御出でになりました。九條家では姫君樣方を平民的に御教育なさいまして、妃殿下の御通學時代なぞ大抵の雨天でも御徒歩遊ばされました位、唯今妃殿下の御健勝であらせられますのも、全く御運動の宜しかつた御爲と存じ上げます。妃殿下には唯今の御身分に御成り遊ばすとは、御夢想も遊ばさなかつたので、何事にも御手を下し給ひ、御姉君達の御單衣を御縫ひ遊ばしたり、解き物まで遊ばしたので御座いました。御息所御病氣中にも始終御越しで御心配遊ばし、薨御の砌は非常な御力落しであらせられました。

▲御息所の御平生

近頃では君樣が宮樣の御出入の御世話を遊ばしますので、却々御用が御有りで御座います。それから語學の御稽古をなされたり、ピアノやヴアイオリンの教師が參つたりして御日を御暮しになります。御髮も偶に丸髷に上げて御覽になるとも御座いますが、折角御上げになつても直ぐ御出ましの御用が御出來遊ばして、御こわし遊ばし御すゝぎ遊ばさなければならぬ事が御座いますので、滅多に御上げにはなりません。

▲女官

御側附の女官は悉皆御洋服ですが、御側へ出ない方

は、袖の短い總模様の着物に幅の狹い平絎の帶を締めて御出で御座います。唯今の女官長は六十歳餘の御年寄ですが、御腰なぞチョットも御曲りにならず、御髪は染めて束髪にして御出ですから、實に御若く見えますよ。昔の官女の姿をよく芝居で致し、妹脊山などでは下げ髪に緋の袴で出て參りますが、以前の御所の女官の風とは全然異ひますネ。何様いふ所から彼の風を取つたもので御座いませうか。

▲未亡人の彼我

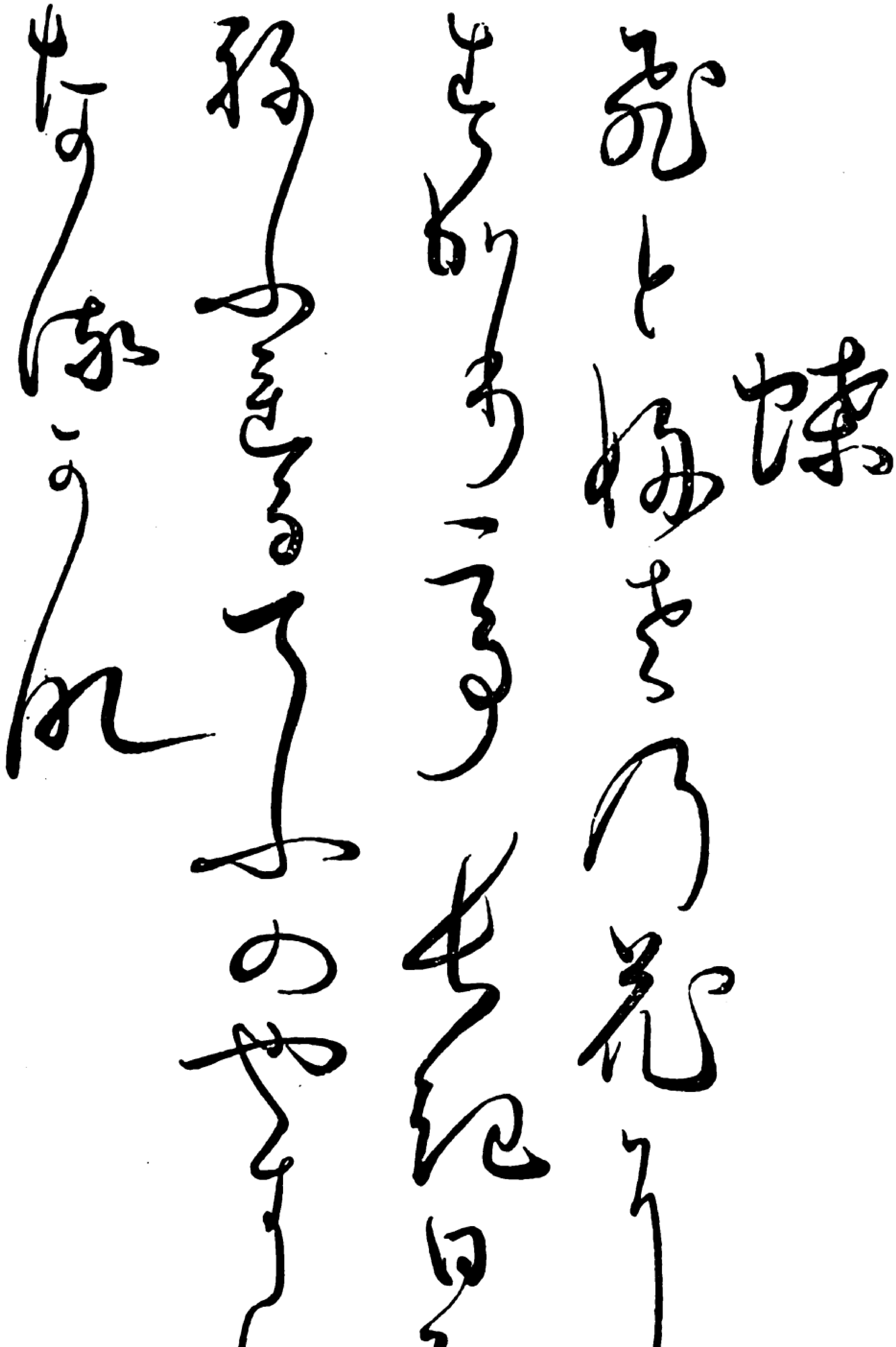
未亡人は西洋でも大きい夜會なぞへ出ませんが、他の交際向は夫人方と變りは御座いません。我國では未亡人となると、ホンの親類とか舊い知己朋友ばかりと御交際致すばかりで、新らしい御客様は滅多に入らつしやいません。

▲御女中

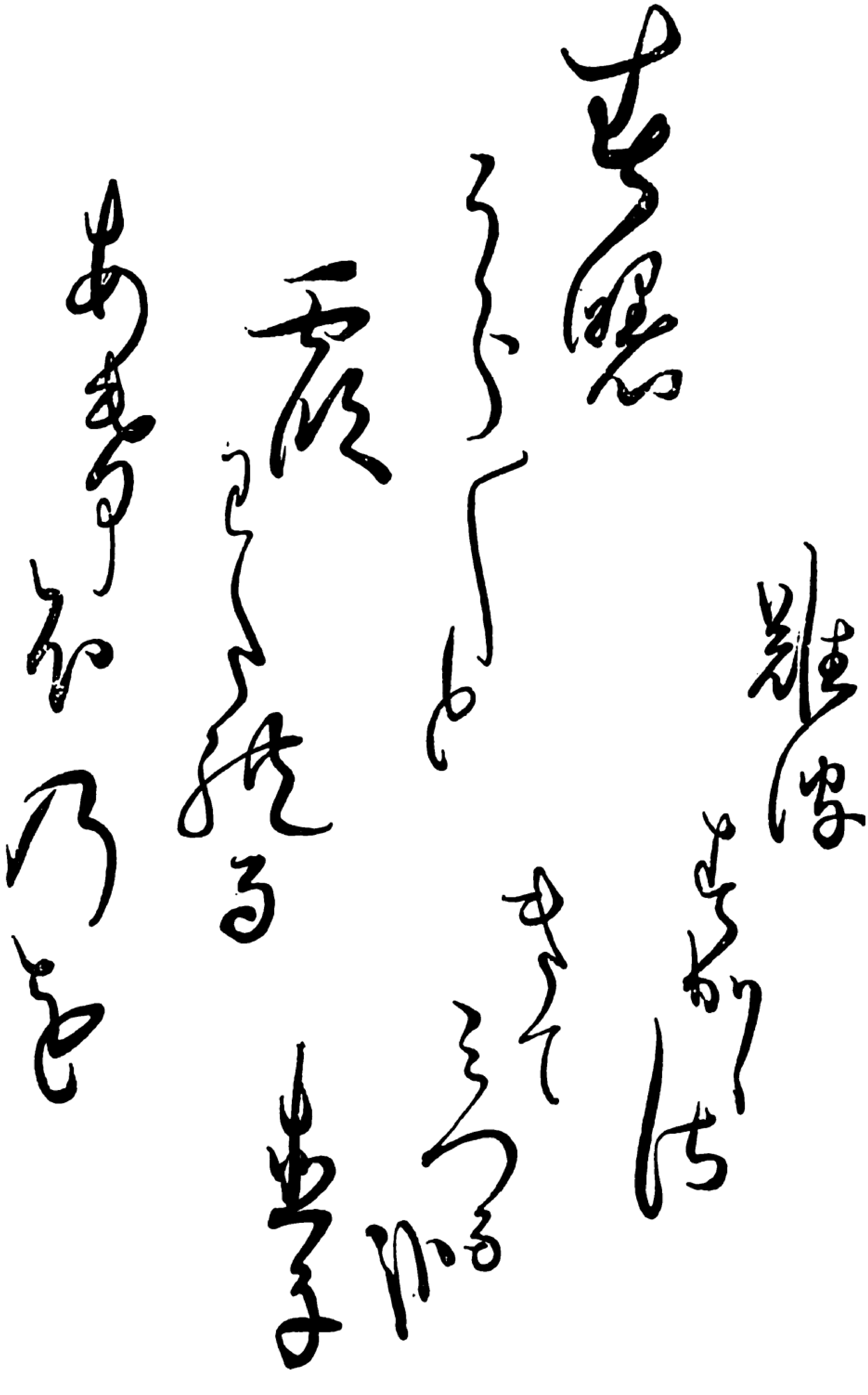
住ひ荒して代なしでは御座いますが、いやに駄々廣いので、掃除なぞ喧ましく申すと手が掛りますから、大抵の所は放任つて置きます。外國で下女に休日を與へました癖が付きまして、唯今でも召使は月に二度づつ代り番に休みを與りますが、大層張合になると申して、平生の用事を致すに骨惜み致しません。

婦人と收入

これは女先生の收入と題して婦女通信の取調べたる所元より詳細のものにはあるまじけれど槪略を窺ふに足るべしまづ筆頭第一は下田女史なり、華族女學校の學監にて年俸二千四百圓、周宮、常宮兩殿下の御養育及び御歌所參候にて二千圓、都合四千四百圓はキチンとして收入、外に著作物の原稿料年六百圓と見積り優に年收五千圓はあるべし。次は女流音樂家として有名なる幸田延子女史なり年俸千八百圓は相違のない所他の收入尙多く同く妹なる幸子女史が七百圓橘糸重女史も同樣と云ふ評判次は高師の體育家井の口あぐくり女史は五百圓の年俸なれど內職頗る多く七八百圓はあるべし又武田錦子女史は六百圓其他女子高等師範學監、喜多見佐喜（五百圓）同敎授佐方鎭（六百圓）同敎諭後閑菊野（五百圓）第二高女敎諭高木みつ（五百八十圓）華族女學校保姆野口ゆか（三百六十圓）若し夫れ單に婦人にして收入多きものはと云は女醫學校の鷲山女史、博愛看護婦會の秋間女史等なる可と。



小川直子刀自筆



蒙古生活談

河原女史

蒙古喀喇沁王府より女子留學生三名を伴ひ去月十日歸朝したる河原操子女史は鳩山春子女史と郷を同じくして明治八年六月を以て信州松本に生る女史八才の折松本開智小學に入學次で長野小學校に轉じ十六歲の春同地師範學校女子部に入學二十七年三月同校卒業二年間同校の附屬小學校に教鞭を執り二十九年四月出京してお茶水の女子高等師範學校に入學せしも病氣の爲め在學二年にて退學一時長野高等女學校の助教諭となりしも病癒ゆるを待ちて再び上京し下田歌子女史の薦めによりて橫濱なる大同學校に教鞭を執るに至り此に始めて支那人教育の經驗を得更に上海なる務本女學堂の聘に應ずることとなれり然るに蒙古三十六王の一たる喀喇沁王は他の諸王と異り大いに心を日本の文明に寄せ頗る日本好きの稱あり福島少將へ交涉して遂に同女史を招聘する事となり女史は意を決して單身喀喇沁府に入る事となりしは去る三十七年一月の事なりき喀喇沁王は當年三十四才、王妃は三十六才にして三才と四才との幼兒あり共に日本語を操つり且つ能く日本の書籍を讀む力ありて河原女史招聘後其家庭に教室を設けて日夜生徒を督勵しをりしが初めは侍女其他二十四人に過ぎざりしも昨今は王の一族を始め官吏の子女等併せて五十四名の多きに及べりと左は即ち女史の談話にして以て蒙古教育事情の一斑を知るに足るべし

▲喀喇沁王府　私の參つて居たカラチンと申す處は先づ蒙古の東南でせう御承知の通り滿洲と支那の間には萬里の長城と申す物が御座いまして夫れに入口が四つ御座います第一が喜峯口、第二が古北口、第三が獨石口、第四が張家口と申します、喀喇沁は其第二の入口なる古北口から這入るのであります、古北口まで參りますに北京から三日路で之れから熱河と申す所まで二日で達しまして喀喇沁までには又四日かゝります、東部蒙古では熱河と赤峯と申す所が一番繁華な所で喀喇沁は丁度其間にあつて至極淋い所で御座います。

そしてこのカラチン部の廣さは東西四百餘淸里南北三百餘淸里ぐらゐ有りまして人口はざッと五十萬と申し其の內五分の一强は漢人で御座います如何にも田舍でございまして其の內の少し賑かな處といふのは此の旗の西の方王府といふ處の更に東北四十四淸里を距つた公衙府でございますが是れとても日本で申せば田舍の町位ゐなもので其の附近などは極淋しうございますそれで土地の區域は定まつて居りましても如何にも境界が分らず漠然として三里や四里は何らの土地に屬するのか知れぬ樣になつて居ります。

▲土地の風俗　大抵滿洲の風俗と同じで髮容から着物の樣子まで似て居りますが婦人の足丈は支那婦人の樣に小さくはありません矢張り自然の發達に任せてあります、着物の模樣、色なども大したはでな物を好みまして色は若い婦人は眞紅又は桃色を好み少し年を取れば紫の樣な色、老人は黑です併し之れは其人々の好き好きですから決して一槪に斯うだとは定められませぬ地合は大槪緞子の樣なものが多い樣です、食物は肉食で豚や羊や鷄、家鴨などで牛肉は少ない樣でした料理法は他は如何で御座いますか王樣の處などは先づ普通りは支那風にやつて居ります其の他冠婚葬祭ともに北京の風俗と異つた事はありませんでした、然し生活の程度は極く低いもので人民は農業牧畜を業とするが多く公衙府には商家ばかり有りますが孰れも山東人が營んで居るので此のカラチンの人ではありません、產物と申しては先づ農作物で米を除くの外は豆でも黍でも粟でも何でも出來ますするし野菜では白菜、葱、瓜類その他北海道で出來るやうなものは大抵出來ます其の外果物では葡萄、桃、林檎の類ゐ樹木は柳、楡の木が多うございます、而して河の流れや郊外の有樣を見ますると善く日本の景色に似て居ります。

▲氣候　寒い時が長く冬といふのが年の十月から翌年の三月迄位續きまして寒い時は四月の半になつても氷のある時がございます五月から八月までが春で九月一ぱいが秋といふ順序でございますが此の春と秋は短かいもので暑いといふ時も七月の末旬から八月の初旬くらゐですが夏と云ふ程の暑さではございません。

▲交通　は至つて不便で上流の人は重に輿に乘りますが普通の人は支那馬車に乘り又馬ある者は馬に乘る事もあります、馬に乘つて北京まで參りますれば四日かかります。

▲宗敎　喇嘛敎が盛んで到る處に廟が建つて居りましてカラチン旗の內で三十もございます廟の大きいのは王府の傍に一つ有りますが之れを大廟と申して居ります而して僧侶が三百人程もございませう住民の信仰の厚い事は大したもので種々の品物を此の僧侶の處へ持

つて參つては遣ひ物に致しますから從つて僧侶等も有福で安樂に暮らして居ります。

▲敎育　これは先づ日本で申す寺子屋風で其の敎師といふのは王府の官吏の內で少し讀めるものが其の任に當つて居りました、私が明治三十六年其の土地へ參つてから初めて女學校が出來ました、其の以前から在つたのは支那の南淸あたりの人で一寸と日本にも居り日本の學校の風などを見た事のある人が崇正小學校といふので四十人ばかりの生徒を敎へて居りましたで、私の居りました學校は毓正女學校と申しまして當時は生徒が二十四人王族の娘や官吏の娘などが入學つて居りまして歲は上の方が二十歲から幼さいのは九歲ぐらゐ不揃ひでございました、只今では全體の生徒の數は五十人ありまして最も手藝を喜こび、又た語學などは頭腦の單純な故か、非常に進步が著るしうございます、校舍は初めは古いものを應用して間に合はせに出來たのですから如何にも狹くて澤山の生徒になりますと迚も收容しきれませんでしたが、私の歸ります頃は新築の校舍が出來ましたから當今では二三百人は入學れるだらうと思ひます、兎に角王樣が敎育に熱心ですから將來益々盛んになる事だらうと思ひます。

▲蒙古語と日本語　とを比較して見ますと其の音と云ひ又は言葉の組織までが善く似て居りますから學校で日本語を敎授するにも進步の早い事が分ります。

▲學科　は最初は日本語、唱歌、編物の三科で兎に角目に見えるものから敎へた方が覺えが良いと存じまして最初から編物をやらせて見ましたが却々善く覺えますそれで學校を始めた翌年の三月生徒を募りまして之を第三級とし以前の生徒を二つに分けまして一級二級を拵へ漸く日本風になりました學科も日本文と日本語を始めとして數學、唱歌、體操、編物、漢文と蒙古文を混せまして悉く私の手で敎へて居りましたが此の度伴れて戾つた三名も此の學校で私が二年間も敎へた生徒でございます。

因にいふ女史に伴はれて來朝せる蒙古の少女は何慧貞、于保貞、金淑貞と稱しいづれも十五歲なるが何れ

も矢筈銘仙の綿入に海老茶の袴を穿ち髪は前髪を垂れ束髪に結ひ一見日本の鄙の少女かと見られたり又女史は紋羽二重の對襲に海老茶紋繻子の袴を穿ち黑の羽織を纏ひいと温雅なる態度なりしは一しほ床しき心地せられたり。

歐洲女新聞

世界の公園より

在巴里通信員

馬島の廢女王ラナヴアロ殿下

△馬島

馬島はアフリカの東部、印度洋中にある一大島なり。ロジエストヴエンスキ提督が、バルチツク艦隊を引つれて、けなげにも東洋に向ひし時、暫く此島にやすらひて、石炭飲料水等の供給を仰ぎしより、特に我國民の耳に、名高くなりたる、佛國の一殖民地なり。今より凡そ九年前即ち一八九六年に此島國は全く佛國の領地となり、佛政府はガリエニ將軍を總督として此地に駐在して此を統治せしめつ。當時の馬島の主權者は、即ち標題のラナヴアロ、マンジヤカ三世殿下にぞおはしゝ。

△女王の在位

ラナヴアロ、マンジヤカ三世女皇殿下は、今より凡そ四十四年前に、即ち一八六二年に、馬島の首府なるタナナリヴーオに生れ給ひき。初めラトリモ親王に嫁ぎ給ひしが、間もなく親王は逝りぬ。ラトリモ親王逝りて後一年、即ち一八八三年に、殿下は叔母の君の御あとを續ぎて、女王の位に登り給ひ、同じ年の十一月二十二日に、即位の大禮を擧行せられき。御歳この時二十二歳。其後總理大臣なるレーニレーリボニー氏を擧げて夫君となし給ひしが、夫君は、一八九五年に佛政府の爲めに斥けられ、アル、ジエリヤ國に幽閉され、其翌年同所に憤死し給ひぬ。此歳、ついで女王殿下も佛政府のはげしき交渉に堪へず、終に馬島統治の全權を、ガリエニ將軍の手に渡し、閑散の身となるべく餘儀なくせられたまひにしなり。

△巴里來遊

ことし九月の二十八日、馬島の廢女王ラナヴアロ殿下は、巴里市リオン停車場に到着し給ふ。

殿下のパリ來遊は二度目にぞおはする。四年前一九〇一年の五月に來遊し給ひし當時は、萬事つゝましくして、花々しき歡迎など一切受けたまはぬよしを、豫れて申しおき給ひしかど、群衆は其來着を祝ひ、一官吏は美麗なる花束を、捧げてまゐらせたりきと聞きつるに、此度は如何にも物寂しき有樣なりき。出迎ふる人とては、物ずきなる我等のみ。花束は停車場を飾りつるかと見れば、これは前日のあらぬ人のためなりき。

二十八日午前九時半なりき女王は其打扮まことに質素なりき。普通の袴に、無地の襟をかけ、飾もなき帽子をば無造作にかぶり、靜かにプラット、フオームを下り給ひぬ。同行の叔母君なるラマシンドラサナと云ふ方は、手荷物などかれこれ世話し給ふ間に、幼き姪君マリー、ルイズと聞ゆるは、嬉しげにこゝかしこにかけまはり給ふぞ、無邪氣に見え給ひし。

それより殿下は、叔母君、姪君、及び執事の役をつとむるマダム、アルボーと共に一輛の馬車を雇ひて、サン、ラザール停車場に趣き給ふ。これ同停車場より更に汽車にて巴里の市街より少し離れたる、サン、ジエルマンの田舍なる、かれて宿所と定めたる地に向ひ給ふなりけり。

馬島の廢女王



△宿所に入る

十一時近く廢女王はサン、ジエルマンに着き、宿所なるフランクリン街の第三番地に入り給ひぬ。

フランクリン街の第三番地。これは勿論王侯の宮城にあらず、又大官の官邸にあらず。又富豪の別墅にあらず。たゞの下宿屋のみ。巴里市内は費用多ければとて、離れたる田舍の下宿屋に廢女王は宿を定め給ひしなり。

△記者の訪問

エコードパリ新聞社のカレー氏が親しく廢女王殿下を訪問して齎らし來れる報道によれば其下宿屋の二階の一室に殿下は坐を占め給ひ、他の一室に叔姪の方々はおはす。又他の一室、表通りに向ひたる小奇麗なるを、來客に對しての應接の間とし給ふ。應接の間には、絨氈を敷きつめ、赤ビロードのソフアーを置き、花瓶に花を飾り立て

つれど、他の二つの居室は寂しげに質素にしつらひたり。

カレー氏が應接の間に待ち居る間もなく、殿下は橙色の綾羅紗の袴に白の帽子を戴きて、出て來りて挨拶し給ふ。パリ婦人の談話の如くさえざえしからず。たみたる田舎ことばなるは、止むを得ぬことと許さるべし。

△女王の憤慨

女王「航海中、海が荒れまして、私ども皆々醉ひました。私も。私の叔母も。汽車は又大そう揺れましたので、倫ほ疲勞を増しました。漸く到着しまして安心しましたのです。」

女王はパリシヤンヌ(巴里婦人)の如く、身ぶりを作つて話し給ふことなし。たゞ兩手を少し動かし、頭を少し傾け給ふ。而して談話中しばしば云ひ直ほして、文法上の誤りを云ひ改めたまふもをかし。

普通の挨拶終るや、女王はやゝ調を改め兩手を置きなほして說き出し給ふは、佛政府の待遇上に就き感じ給へる不平なりけり。

女王「私は女子であります。併し女王でありました。」兩眼はいとさえまさりたまふ。

女王「私はパリを殘らず見物したいと思ひます。大きな店を殘らず見たいと思ひます。奇麗な袴をも買ひ、又芝居にも行きたいと思ひます。併しこれは多分の費用のかゝる事です。私は一年僅に三萬フラン(日本金壹萬二千圓)しか貰ひませぬ。そして私の旅行費は皆此中から拂ひますもの。」

カレー氏「何時頃まで滯在ですか」

女王「私は知りませぬ。私は佛國全體を見たいのです。しかしこれも皆金の問題であります。」

女王はいろいろ買物などし給はんと願ひ給へど、叔母君は財布を預りて、其紐を引きしめ給ふなりけり。

カレー氏は別を告げて下り、食室を過ぎる時に、殿下の叔母君瑞君今しも最初の食事をなし給ふ所なりけり。其卓上に供へたるを見れば、うで卵、鳥肉、馬鈴薯の油揚等なり。給仕の下女の云ふやう「女王殿下はおとなしい方です。立派な方です。そして常にふさいで御出になるかと見えます。牛乳だけ召し上りまして、葡萄酒は御用ゐになりませぬ。」

△其後

女王來着以來、日々に附近より巴里市街まで、遊覽に時を費し給ふ。マタン新聞社は殿下歡迎のためとて一夕音樂の會を開き殿下を招き奉る。殿下は御けしき美しく遊びたまひ自らピヤノに向ひてマダガスカルのマーチを奏し、又アフリカ踊ををどり給ひき。

婦人と杖

△獨逸皇太子妃殿下

△巴里婦人界に流行の兆

近頃獨逸ベルリンより、巴里の或社會に齎し來りし報道によれば、クロン、プリンツエス(皇太子妃)殿下は、御身自ら、時の流行を制し給ふ位置におはしまして、近頃は市街に下り立ち給ふに、常に長き杖の御襟元まで達するを振り廻はさせ給ひて、都下の若き令孃たちを羨ませ給へりしに、上の好む所下これよりとかや、杖持たずに道行く女の、なからんとする有樣なりとかや。

巴里は元來流行製造の本家本元なり、然るに近來佛國の權威のあまり振はぬにつれて、巴里婦人も、何につけ他におくれをとるやに見ゆるぞ、是非なき次第なり。ベルリン婦人社會に、杖もて道歩くならはしの始まりぬるを、先づ第一に倣ひしは巴里女優社會に名ある、某々たちなり。或る敎育家は之を憂へて、杖を持つ風習、これより巴里市中の婦人社會にひろまるならんと云へり。但し之を歴史に見るに佛國にてはルイ十四世、十五世、十六世の頃には、宮中の女官は競うて杖を持ちたりき。されどこれは佛國歴史中に最も驕奢を極め、最も奇嬌を極めし時勢なりしを忘るべからず。

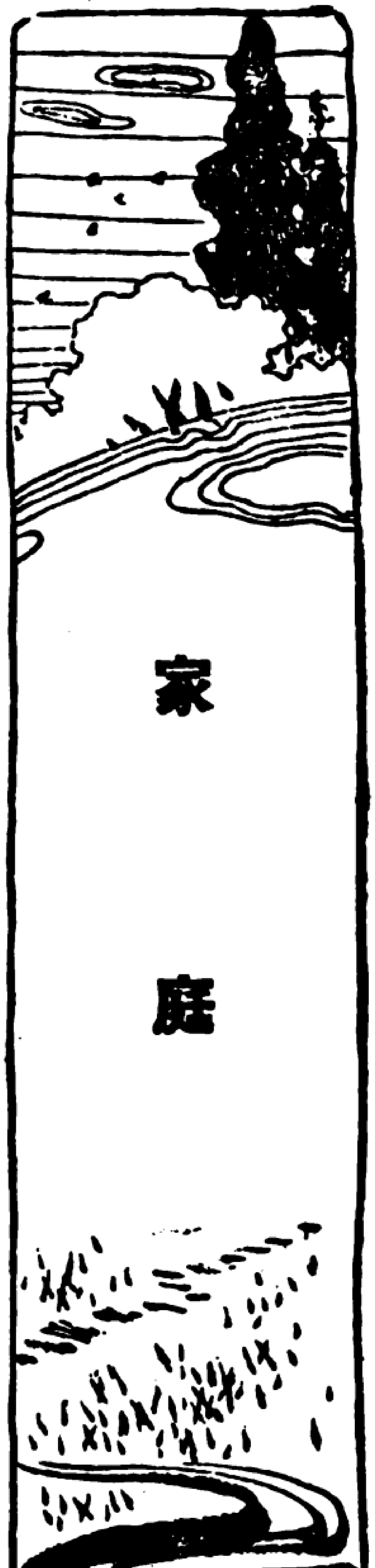
女優マルト、レニエール孃



「マダム、エ、ムシウ」記者之を冷評して曰く「これからの女は鼻眼鏡をかけませう。フロック、コートを着ませう。ハイカラを着つけませう(通信員曰く、ハイカラは、米國婦人は、今は之を着けて、怪むものなし。)そして後にヅボンを穿きませう、それをわるいと云ふのは、反物屋、小間物屋の店先きの品物を男子だけ一手に買ひ占めやうと云ふのと同じ理屈ですよ。

△鶴嘴

愛爾蘭人が生れて始めて海岸に出て大きい錨の置いてあるのを見付けた、頻りに見て居たが明日も明後日も、丁度三日間錨の廻りを廻はつて考へて居た、巡査が怪むで尋ねたら、いや實は此樣大きい鶴嘴を如何な人が使ふか一目見たいと思ひまして、



日本婚姻の迷信

清水芳子

(一) 迷信と儀式

迷信と云ふことを最も手短に解釋致しますと、其時代の智識と矛盾した信仰と云ふことであります。婚姻に伴ふ迷信とは如上の立場から見て更に意味の廣い、然も心靈の慰安を求めると云ふ純粹の宗敎的支配からは稍々離れて、却て平生の行の規則となるべき道德的の範圍に屬するのであります。語を換て詳しく云ひますれば、神とか佛とか云ふ人間より以上の或者を信頼して身心の安全を圖り、之が當然の附隨として起る有難い勿體ないの迷信ではなく、生活の必要から生れた迷信が長い年月を經過します間に、何時かそれが權威ある習慣と變じ、其習慣が道德律と合して爲ねば社交を缺き爲なければ心が濟ぬと云ふ儀式とはなつたのであります。婚姻は人間の大典であると同時に式禮の根本であります、此大典を擧げるに就きまして、迷信から生れた權威ある儀式の伴ふのは必然のことで、然もそれが人智の發達につれ社會の進步に從ひ、追々と複雜となり煩瑣となり且つ益々迷信的に傾くのは、決して怪しむべき現象ではありませぬ。殊に之を婚姻進化の上から見ますると、儀式は婚姻を完全に成立せしめ

るに無くてかなわぬ要件となつて居りまして、或は宗教的に神助を仰ぎ犧牲を供へ、或は社會的に饗宴を開き披露をするなど、其國により其時により方法にこそ相違あれ、國の内外と時の古今とに別なく未だ全く儀式に依らないで婚姻を取結ぶことはありませぬ。基督教を奉ずる西洋各國では婚禮は僧侶の立會を以て寺院で行ひ、儒教を守る支那では華燭の式は祖先を祀つた室内で擧げます。嚢に我國では此式を法律で認め、舊民法人事篇に「婚姻は保證人二人以上の立會を以て、土地の習慣に從ひ相當の儀式を行ふべし」と規定したことがあります。英國のウエステルマルク氏は野蠻人と開明人との婚姻の區別は、正當なる儀式の有無を標準とすると云ふて居ります。婚姻に於ける儀式は恰も所有物に對する登記手續きの如きもので、之を擧行せねば社會から確實の保證を與へられぬのであります。然して此權威ある儀式、則ち婚姻に伴ふ習慣的の迷信は我國の婚禮にあつて如何ほどの種類を存し及び如何ほどの勢力を有して居るか、順次これが大略を解說致します。

（二）儀式の目的

婚姻に伴ふ迷信は概して儀式となつて實行されて居りますが、偖この儀式の起原はと云ひますと、婚姻の方法手段が變化する度ごとに、古の方法は其實を失ひまして單に儀式としてのみ存在するやうになり、之が幾回となく繰り返されて今日のやうになつたのです。例へば花嫁を馬へ乘せて行くこと、婚禮後の三日目を露顯と名づけて世間へ披露の饗應をすること、及び水祝ひ石祝ひとて新婚の夫婿に水をかけ石を打つ儀式などは、共に掠奪婚とて花聟は腕力を振つて花嫁を否應なしに奪つて行つた時代の風俗でありますが、是が後には一種の儀式として殘り。結納は賣買婚とて花嫁を金錢または物品と交換賣買した時代の習慣でありますが、その賣買婚が衰へた後は之も儀式として存するやうになつたのです。然して斯くの如き儀式は何の必要があつて時代の推移するにも拘らず、長く人心を支

配して來たかと云へば、是には二個の目的があるからです、一は婚姻の末までも渝らざるやうにとの迷信的保證と、一は妻は夫に從ふべしとの社會的表彰とであります。勿論前者の後者に比較して其種類も多く其勢力も大なるのは、婚姻の破壞、即ち離婚と云ふことが人生最大の苦痛であるのに基くのであります。されば婚姻の迷信とは人意を以て豫め此離婚を防止するために工夫された方便ではないかと思はれるほどです、迷信の夥多しき、



儀式の煩雜なるより推すも離婚を罪惡として恐れたことは明かな事實であります。所で此數多き迷信の中には、或地方を限つて行れるものと之に反して洽く全國に行れるものと、古代に用ゐられて現今では棄てられたものとの區別がありますか、此處には地方のもの古代のものゝ兩者を措き、專ら全國のものと現代のものとを擧げるやうに致しました猶ほ中添へて置くことは一個の迷信で言語とか年時とかの双方に關係してゐるのがあります、是等も嚴格なる意義から云へば其關

係の所縁を質して類別を明かにせねばならぬのですが、今は其面倒を略して隨時便宜のところに挿入した一事であります、其心して御覽を願ひます。

(三)　宗教に關する迷信

縁は異なもの味なものと云ふ俚諺を生むだ時代の人心には、婚姻てふことは人と人との約束ばかりではなく、更に人間以上の神なり佛なりが導き助けてくれるのであると云ふ宗教的の觀念が含まれて居たのです。何となれば霞と共に都を立出て秋風の吹く頃に漸く白河へ達するが如き交通不便の頃に、不知火の筑紫の男が鬼の住む東の國の女と婚を結び、曾ては夢にも見ず噂だにも聽いたことのない男女がゆくりなくも媒妁人の橋渡しで偕老を契ると云ふことは、如何にするも人間の業とは思はれず、神佛の不可思議を外にしては解釋が出來ぬのであります。況して此俚諺を生むだ時代よりも更に遠い〱太古の時代にあつては、婚姻を神代の啓示と思ひ夫婦の縁は神が結ぶものと考へるのは尤もの事であります。古事記に『茲に伊邪那岐命、然らば吾と汝と此天の御柱を行廻り逢て美斗能麻具波比せんと詔り給ひき、斯く云ひ期りて乃ち汝は右より廻り逢ひ我は左より廻り逢はんと詔り給ひ約竟て廻ります時に、伊邪那美命、先づ阿那邇耶志愛男と宜り給ひ、後に伊邪那岐命、阿那邇耶志愛女と詔り給ひき(中略)水蛭子を生み給ひき此子は葦船に入れて流し捨てつ、次に淡嶋を生み給ひき是も子の例には入らず、是に於て二柱の神議り給ひつらく、今吾が生めりし子良はず、猶は天津神の御許に白すべしとて即ち共に參り上りて天津神の命を請ひ給ひき、天津神布斗麻邇に卜相て、女を言先だちしによりて良はず、亦還り降りて改め言へと覺り給ひき』とあります。之を直ちに婚姻の例に引くことは如何にも恐れ多い事ではありますが、兎に角に太古の時代から婚姻に式禮を用ゐ且つ靈妙の冥助があると思惟したのは明かであります。常陸國誌に『速神の御社へ、未だ嫁かざる娘とも一生をまかするは神の引合ひを賴むとの心に、數々の男の名を一筋

一筋の帶に書き記して神前に備へ丹誠するに、末の目出度き緣あるを告げさせ給ふは其帶の數々の中に一筋必ず裏かへるあり、それを印しに結びより夫婦と成るとや、古へより今に變らず常陸帶の契りと云ふ』とあります。此外大原の雜魚寢、鵜坂の神事など皆婚姻を以て人間より高き神々が取結ぶ事と信じたのであります。然して之等の傳說が基となつて年々十月には國中の產土の神が出雲の大社に集ひ給ひて、男女の緣を結ぶと云ふ神話的



の傳說が起り遂には出雲の神を『結ぶの神』と云ふやうになつたのであります。

以上のものと趣きを違いた迷信には、神代の折に大山祇命の姉娘磐長姫が天孫瓊々杵命に嫌はれ給ひ、妹の木花開耶姫が皇妃となりしを恨みさせしとあるより推して、婚禮の乘物は男女に限らず磐長姫を祭つた小御嶽神社の前を通らぬ事となつて居ります。又辨才天と云ふ神は獨身の神ゆゑに人間の婚姻するを妬みて必ず中を割くと云ふので、是また婚禮の乘物は前を通ることを避け、且つ夫婦揃ふ

ては參詣せぬものとの迷信があります。

又婚禮に、死人は再び歸らず、女は婚姻して再び親の家に戻るまじとて葬送の禮に倣ふ儀式があります。此こと取るにも足らぬ迷信ではありますが古來から行はれたことで、今を去る約九百年の昔なる追考榮華物語御堂關白（藤原道長）の女を小一條院に聟とりし給ふ條に「餅は箱の蓋に入れ御帳の内に去氣なく入れておはしまつるほども、いみじう憐れに見えさせ給ふ」とあり。後成恩寺殿の源語秘決三ッか一（婚禮には四と云ふ語を避て三ッか一と云ふ此こと後に詳しく云）の餅の條にも「嫁娶の三日の餅を夫婦の枕上に供ふることは死人の枕案を學ぶなり、女は男に嫁して二たび親の家へ歸るまじきなれば、死人の眞似をするものぞかし」とあります。猶ほ婚姻の日には女の輿を倒に舁ぎ出すのも、死人の禮に倣ふたものであります。

（四）衣服に關する迷信

或は衣なりとか申しまして儀式には必ず相當の衣服の定めがあります、殊に人間一生の大典たる婚禮に就きましては娶る男にも嫁く女にも、其席に列る親族故舊の人々にも皆それ〴〵の服制があります。此服制のうちで婚禮の時には腰がわり、腰あきの衣服は、輿がわり輿あきに通ふのを忌み皆無地を用ゐるのを法としてゐます、尤も聟に限り子持筋とて太き筋と細き筋を衣服に染めますのは差支へありません。這は昔猪熊大納言と云ふ公卿が裝束に彼の筋を好み用ゐられしを、其頃世上に猪熊筋と云ひなし、此人子孫多かりしより後には子持筋または子持縞と云ひ、之よりして婚禮の衣服に用ゐる樣になつたと云ふことです。又婚禮の折には嫁の衣裳の上着には幸ひ菱を織り出した白き綾を着るものと婚入記にあります。亦た聟引出として嫁から聟へ贈る衣服には家の紋を染めずに、舞鶴の紋をつけるを法とすると婚迎記にあります。

猶ほ衣服の色彩に就きましては、婚禮に白き小袖を用ゐることは葬式の禮に倣ふたものとの說がありますが、之は甚しい誤りださうです、用害記に「葬禮に白

色を用ゐるは悲みの時なれば、彩色を求めず飾らざるを本意とす。婚禮に白色を用ゐるは婚姻は人倫の大本、白色は五色の大本なり、故に之を用ゐるなり、色は同じき白なれども用ゐる意は異なれり』とあります。



是に反して褐色とて黒色を婚禮に用ゐることがあります、此色は古來外國から褐布と云ふものが渡りました、然るに此布の色が黒かりしゆゑ黒い色を『かつ色』とも云ひ、又褐の字をかちんとも訓みますので『かちん色』とも云ひました、此『かつ』『かち』を勝負の事によせて昔は軍服に專ら此色を用ゐましたが、古歌に『我戀は飾磨の褐にあらねども、あひそめてこそ濃さは知られ』とあるのを本として、遂には婚禮の祝儀にも用ゐるやうになつたのださうです。又婚禮に紫の色を嫌ひますのは、紫の朱を奪ふと云ふ支那の故事と、紫は褪めやすいと云ふ我國の俗說との二ツの理由から出たのであります。

(五) 飲食に關する迷信

饗宴は婚禮の儀式の中でも最も重大なる部分を占めて居ります、聟と嫁との取結びの盃は云ふに及はず、客への献立なども古來から故實が儼重に定めてあります。先づ取結びの盃に就ては貞丈雜記に『婚禮の時夫婦盃を取り交すに、男先づ呑で女にさすこと古法なり、男は陽、女は陰、陽は貴く陰は賤し、陽の陰に先だつは天地自然の道理なり。然るに或説に昔は男、女の家に往きて其夜は泊り後に我家へ迎へ來る、されば其時女はその家の亭主にして男は客人なる故に、女まづ呑で男にさしけるゆゑ婚禮の盃は女より呑で男にさすものなり、女の先きに呑むは酒を試みする心なりと云へど、此說誤りなり用ゆべからず。前にも云ふ如く陽の陰に先だつことは順にして之に違ふは逆なり。神代に伊邪那岐命伊邪那美命天の浮橋の上にて夫婦の交りを始め給ひしときに、女神伊邪那美命先づ詞かけ給ひしを女の男に先だつは宜しからぬ事なりと伊邪那岐命の仰せありしこと國史にあり、男は女に先だちて盃を呑で女にさすこと古代よりの禮なり。婚禮の時も初め式三獻以下夫婦いまだ盃とり交さゞる以前までは、女を客人の心にて盃も女より呑み初めるなり、夫婦の盃とり交す時に至つては男より呑で女にさすなり、それより以後は最早女を我が妻としたる心にて幾獻參るとも皆男より呑み、且つ何事も男を先きとするを法とするなり』とあります。又同書に『婚禮に盃を男より始むべき別說に、古へは聟をば先づ舅の家に招き入れて婚禮を調ふ、源氏物語にも光源氏の君を左大臣聟にして、光の君を右大臣の家に入れ葵の上にあはせ婚禮を調へられし由見へたり。されば女の家なるゆゑ女より盃を始め酒の試みをして聟にさすこと古禮なりと云へり、これ故實に似て故實にあらず、源氏の事は天皇の御子なるを左大臣の聟にせよと仰せを受け給りて、直ちにつれ參らせて左大臣の家に入れ參られしなり、常の例にあらず。又昔は女の許へ男忍びて通往き、後に其親聞きつけて事現れ直ちに其男をその家の聟にとりたる

こと古き物語に間々あれど、是等は正しき禮にあらず從つて常の例となすべからず』とあります。說の當否は姑らく措くとするも、兎に角夫婦取り結びの盃が儀式の中で最も重要でありしだけそれだけ古來から問題になつて居たやうです、此男を先きにするか女を後にするかの故實は、常識の上から判斷すれば何れでも宜いと思はれますが、然し儀式の目的の上から見ると中々の大問題で、此献酬の先後によつて女は男に從ふもの、妻は夫に服するものと云ふ宣誓的の宣告を、婚禮と云ふ神聖の席上で言渡されるのであります、權威ある儀式と名は立派ですが詮ずるところは男の都合の宜いやうに拵へたものとしか思はれませぬ。又婚禮の夜に床盃と云ふて夫婦閨に入て酒を飲むに法式あるかのやうに云ひますが、是は近き頃から始まつたことで古代には定まつた法はありませぬ、且つ寢ながら酒を飲むことは下々の風俗で上つ方にはない事ださうです。



婚禮の三ッ目の日にみなこ餅（皆子持の意なり）として男聟ともに餅を搗かせ、其餅を五百八十七の數に丸め、藁の蓆にて叺を造りそれに餅を入れて伎に持せやり、途中にて出あひ互に餅を受取り渡して祝ふことがあります。此こと源氏物語葵の卷などにもありますゆゑ古くから行はれた式と思ひますが、然し餅の數には定まつた法もなく、唯土器四杯に盛つて陰陽の二神に供へるばかりです。用害記にも『天地陰陽の神に供へる餅は男二杯女二杯』とあります、五百八十七の數は遙か後に之等に假托た迷信と思はれます、猶は數に就いては之に關する迷信のところで悉しく申上げます。

婚禮に小豆を用ゐぬことは小豆は煮れは腹を切るので、之を忌み嫌つて一切の料理につかひませぬ。殊に古代から女が小豆を食する時は月經が閉止すると云ふ傳說がありまして、若し折惡しく婚姻の當時に潮來の期に逢うやうな事があれば、一日一粒の割合で生の小豆を鵜呑にすれば其數だけは停止すると云ふ俗說がありますので、小豆は用ゐぬのを法として居ります。お高盛りとて飯を高く椀に盛り嫁に進めることは、大高に食召せとの意。海老を用ゐるのは、海老の語笑みに通ひ且つ海老の如く腰の屈するまで健全に添ひ遂げんと祝ふての心。鯣を用ゐるのは壽留女の祝ひ。是に反して豆腐を用ゐぬのは白バックれるとのことを忌み。茶を用ゐぬのは茶にされるとの俗說より出て、砂糖をつかはぬのは甘く見られるを避けるためださうです。

昆布を祝儀のものとするのは昔はこれを『ひろめ』と云ふたゆゑで、ひろとは巾の廣きこと、めとは總ての海草を云ふ語、例へばあらめわかめ、と云ふに同じく、廣めと云ふ名を物の廣まる儀に取なして祝ひに用ゐるのです。又一說によると『よろこぶ』と云ふに通はせて昆布を用ゐるともあります。鯛を料理につかふことは鯛の名が目出たいに通ずるからであります、然し之は古代にはない禮で其以前は鯉を婚禮の魚としたのです、尤も鯉の腹の方の第五の鱗は俗にことゞめの鱗と云ひますので、子止めを避けて此部分だけは用ゐぬのが料理法の故實ださうです。又は吸物に必ず蛤を用ゐますのは、蛤は他の貝は覆はぬとのことから出た迷信であります、猶ほ悉しいことは次の貝覆ひのところで申述べます。白髮熨斗、鮑熨斗を用ゐるのも共に之と同じやうな傳說から出たのであります。（未完）

續村居雜記

齋藤弔花

一　鳥買ひ

久し振りに京に出づ。

この日は、大寒後二日といへども、空のどかに、日麗らかにして春に似たり。四條通りを東へ東へ、鴨川を渡れば、人の往來繁からぬ大路に影を數へ行く人の姿勢、自づから長閑なる、流石は京都の風俗を失はず。けたゝましき車の聲なく、人は、コッポリを靜かに音させて、旭かゞやく彩よき衣きる少女の打連れて、約ましやかに語ひ行くあり、花見小路あたりの家々にうたせたる幔幕徐かに動きて、南風少し吹きそはりたりと覺し、外套の襟を立つる程にもあらず。

正面は八坂の赤門嚴かに、廣き石階の數讀まるまゝ近づけば、赤毛布の智恩院はいづれぞ、など問くに逢ひぬ。

われはこの邊り徜徉ひぬれど、彼の人々と目的いさゝか異れり。

つと身を交して、社前を折れて南に出りぬ。こゝにわが足ひたと膠つけられたらんやうに止まりつ。

角の一軒家。こゝは小鳥商ふ店なり。

われ小鳥を愛づること人に越たり。京都に住へるころは自から林野に遠ければ、諧しき彼等の姿も歌も、見得ず聽き難きに、唯一の樂しみは、小鳥ひさぐ軒近く覗ひより、文鳥、かなりや。日雀、目白などをおしこめたる籠牢の中にのぞきて樂めり。

小鳥を眺むることに、われは、彼等がいかに自由を戀ふらん。心野山に馳すること、鄙に生れて、都に流涌されしわが身の上に假らずや。さらば、この心中、悶々として、人に明すべからず、文に托すさへ慵うき折は、馳け出でゝ、この友許尋ねゆきては、同じき愛を頒つをせめてもの思やりとするなりき。籠なれて、外面憧るゝ荒鳥など見んは、われにはほと〳〵堪難き謎に合たる心地せり。不自由の境に馴れて、悲しげも

なく、歌ふを見れば、運命に服從して、過去の疵痕強ゐて蔽ひつくさんとせるわれ等に似たるなど〻一入哀に感じたりしが。その折よ。われ一羽、二羽と、さまざまなるを買ひ集めて、湯島が家の軒端に飼ひ、水を與へ、餌を投げなどしけるが一日、雨風暴らき夜に、愛鳥の哀れにも、果敢なくなりしより、礑平と此道樂を止めたり。

都の塵を拂ひて、この故里に歸りしより、われはなつかしき、野鳥山鳥の友となりぬ。こゝにありては、小さき籠などに押込めん要もあらじ。花咲く野に立てば、雲井はるかなる雲雀の囀り、小山靜なる曙頃、木の實をもとむる小雀の群など、優しき彼等の生活を見て、一度袖別ちし友に邂逅ひし樣思ひて、或時は、燕の爲めに梁のかげに巣を挂けぬ。或時は、雀の塒に藁を敷きぬ。今は中々に、籠に閉籠めんなどの心起らざりしが、わが友の久しくこの地に住みたるが、市に移り住まんとす。三たび市に越せし籠の繡眼兒のよく馴れて、扉を開けど、外面に去らず、あまりの可憫さに、心迷ひて、放ちやらんとして、敢てせざりき。羽弱ければ、高くは飛ばじ、百舌などに狙はれて、一撃うけなば、脆き玉の緒あらんや。など、愛着に牽かれて今日に迨びぬ、哀れわが爲めに、この小さき養ひ子を君が擂餌に育まれんは、獨りわれのみの幸にはあらじなど、言葉巧みに說かれて、われは第二の主人となりぬ。まことによく馴れたり。日あたりよき椽の邊に、柱の釘に掛けたれば、彼は、浴みしつ、餌啄みつ、打興じては、夢みるらんやうに、歌ひ囀りぬ。こゝに彼の女の爲めに、わが憂胸をいたむべきことこそ生じたれ、暫は、彼が前の主人戀しとてにもあらざるべけれど、いつか病みて、羽を膨らし、嘴屈めて、球より丸く、歌はずなりぬ。婢に聞けば鹽氣ある肴を餌に加へたりしと事もなげに云ふなり。われは驚ろき、稚きに、多量のモルヒネ盛りたる醫者の狼狽といふ格にて、水よ、藥よと騷げど甲斐なく、二日目の朝、撞木に宿るも心細けなる樣にぞ陷りたる。

一度ならず、小鳥飼ひては、われの心を惱むる事か

な。深く懲めて、その後は籠打摧きて、再び小鳥を養はざりしも、なほ鳥を見んは、わが樂しきものゝ一なることは、否み能はざりし。

わが里に降り立つ鳥もとより數多けれど、いとうれしきは、芭垣の「ひたゝき」「みそさざい」、杉の葉裏など急しげに、巣立間もなき藪鶯、枯柳の枝掠めて行く「かはせみ」など、鄙めきて風情ある鳥なれ。

この宇宙の大籠にわれもかゝる族と共に住みて、誰か物にもあらず、自然に育くまるゝみどり見たらんは、いかに幸深き望なるべきなど友に云ひ送りし水莖の乾かぬに、わが鳥好なる、いつしか足に都大路いくつか縫ひて、馴染の鳥商人の店先に憧れ寄りたるも可笑し。



こゝの鳥郷には、類珍らしきが多しとて聞えたり。まづ、人叱すらんやうに頭上に一喝浴せかくるものあるに、何者ぞ、と目を上ぐれば、鳥に似てやゝ小さく、嘴黄色に光りたるがあり、目の緣赤く彩られたるが、小さき籠の中に押こめ

られながら、少しも悲しげなる樣なく、無躾に飛び廻るたびに、ゆら〱と近所の同族皆眼を圓うしぬ。是朝鮮鴉の一族にて、人怯もせず奇妙なる聲にて啼き立つるなり。趣に乏しゆれど、その樂天的なるところ、捕虜せられたるコサックの兵にも譬ふべきか。惜氣もなき體格にて、外國に耻を曝らし乍ら、少しも憂たげなるところなし。同族の誼、親子の情深きは、鴉の仲間とこそ聞きしが、國を離れたる鳥としては、却々に元氣よし。聞く野心は雉子、鶉、山鳥などに如くはなく、里に籠飼ひすれば、餌不足なく與ふるも、いつしか山野戀ひ憧れて、羽毛泥のやうに、淺ましくも瘠せて見るかげもなくなるとぞ。この鴉見たさに、大膽なる殖民族の頭など光らして、他もなげなる樣して、浦鹽あたりに遠征する紅裙隊を思ひしのびて、わが同胞、この鳥のごとくに賤しめられんは忍ぶべからずなど、われは思ひ煩ひぬ。

「お早う。お早う……。」

と訛りたる言葉にて、われを迎ふるもの、問はでも鸚鵡なるを知るべし。

急がしげに他鳥、焦ち、悶え、囀り合へる甲乙、白衣のわが姫、いと悠々と、圓き籠の太き撞木確かと踏まへ、羽膨らして、往來を眺め、囁くやうに「お早う。」と又もや怒鳴れり。愛嬌といふ者微塵もなく、彼の御挨拶も、唯口先のみなるぞ物足らぬ心地すなれ。たま〱稚き子供、嫗が肩より、青菜一莖、これを召せとばかりに懼る〱さし出せば、鸚鵡殿、ぢり〱とつめより、その爪長き手さし出して、片手に之を踏まへ、右手に一端引ちぎりて、口先にあてがへば、圓き舌とろりと嘴の先より見はれて、さらばこれより賞翫といふ風にて、首傾けて味ふさまのおかしや。其勿體ぶり。中々に、擬ふべくもあらず。いかな、火事、雷、地震も親爺にも、われは、怯乎ともせず。とやうなる態度して、落着拂つて、聞召す也。

羨むにもあらず、羨まぬにもあらず。姉なる同族の饗宴のさま、頸さしのべて、覗きよりし鸚鵡の二羽雌雄。人の見るも耻しと思はで、頻りに、爪もて舌掻き

そめしも興あれ。やがて、諦めたらん風にて、徐々と籠裏を這ひめぐり、直上なる蝙蝠の金網嚙きて「ぎ」「ぎ」と啼きぬ。

午に近う、翳なく、向ひの花屋には、墓詣でらしき媼の室咲の菜の花に、緋桃を加へたるを撰びぬ。美しき娘ありき、往來を眺めながら、何やらん呟けり。車三輛、西大谷のあたりより急ぎて八阪の樓門前に轅を下しつ。鸚鵡は、やつと、一莖を味ひ終りて、羽打振ひし滿腹！早や世に望なしとやうに、眼を閉ぢたり。人生の事、われ何をか關せんと斗り。氣樂なること限なし。



われは、瞬もせず、この鳥の橫着なる態度を見入りぬ。覗ひ入りぬ。寧ろ、こゝに別れの何となく惜まるるまゝに、さながら、賣女などに魂打察したる遊客の心ともなりつ。この戀人牽て、わが閑居の窓に移して人に一指さゝせず、往來に耻をさらさせず。思ふまゝに、愛しみ、翫び樂ますか。などこの分時に思案定めて、つと内に入り、言葉づかひを心して主人に向ひ、かの鳥、われに讓らずや。といへば主人はもとより快よく諾ひぬ。

見受けの約束頓に定まりて、われは、籠中の女王を獲たり。

二　新來の客

鸚鵡の尊ときは、その聰からざるところ、その掟からざるところ、たとへば、千年の雪。雲外に清うして、世樣の塵埃。その皎翼の一毛をも汚さゞるところにあらずや。都より移されて、わが靜なる西の圓窓に置きぬ。こゝには、彼の耳を騷がせし車轍の響もなければ、目ざはりの人の影もなく、市の氣なければ、彼の喜びは推はかられぬ。

されど一日二日は、居心あしきにや。この姫君。おむづかりの樣子にて、食ふさへ、舐るさへ、心易からぬ風にて、鳥屋の主人の痘痕面なつかしうも思ひけん。こゝの髯が、いかめしさに、毒など盛りやせむかと疑はしげに、われを見上げ見下しす。

その態の滑稽にして、腹立たず。わが家内は、珍らかなる到來物など、まづ一掬をこの新來の客に獻せでは、主人の膳にも上さず、たとへば、やんごとなき方を請じまつりて、主人夫婦これにかしづき、一にその奉仕の足らざらんを虞るがごとく、處世混鬪の敵陣の中に入りても心臆せざりし勇者も、この不得要領の新客の前にはじめて、戰々兢々といふ語の意を味へり。

「鸚鵡見せてよ。」と近きあたりの子供はまづわが窓の前に立ちて騷ぎ合ひぬ。名は孫より聞きたれど、姿は垣間見もせず。いかなる珍客にお在せると。高名の詩人をも石礫と侮り罵りし老人連も、この鳥の噂聞き傳へて、わが家は、時ならぬ人の市を成せり。

鸚鵡は人眞似する鳥ぞ。さあれ。わが云ふまゝ答へて見よ。と地獄といふものありや否やなど、問へば答ふるものと合點せるか、躍起となりて質問の矢をしかくるもあれど、領分違ひぞ。お寺へ行け！。とばかり。いと鷹揚に、人見ば云へと敎はりし舊主人の言葉掟堅く守りて、時も辨へず。晝過ぎたるに「お早う、お早う！。」と二聲鳴きぬ。老いも若きも、鳥をめぐれるは、

手を拍つて笑へり。五月蠅しとや、わが女王殿下。くるりと背をむけて、しづかに、羽蝕を漁りぬ。

鵞鳥はこの邊の山には住まずや。と一人が云へば、賢らなるは、こは、熱帯ならでは育たず。と答ふ。飛ぶ鳥にや、歩く鳥にや。禽と見えぬ奇しき動物なりなど衆評嘏のごとくに、わが客人に投じかけたり。靜寂を好むこの鳥の前に人の亂だけなる。無禮なりとよりは、耻しからずや、と村の先生といふは、まことしやかに、衆を鎭めぬ。

「物眞似すと笑ひたまふな。賢げなる物識り、誰かは高慢な面白して、人の云ひ古せし文反古の受賣ならざる。」と語をつぎて、先生は、つと群を離れぬ、



わが爲めの辯護士に目禮もせず、女王は、人の鎭まりたるに、何如にしけむ。どばかり頸を廻して、目をしばたゝき、例の愛嬌なき皺枯聲にて、つゞけさまに「お早う、お早う……。」

われ不圖この時、村にて識りし女宣教師のことを思ひ出でぬ。彼もわれによりて、覺束なき日本語を會得し晝過ぎても人に逢へば、わがこの客に似て、舌鈍く「お早う〱」と劈頭は必ずこの語を加ふる例なりしよ。

三　回顧

女宣教師、名はアレキサンダー孃。紐育の近き村

に生れたる人なるが、幼きより詩歌に親しみて、長じては東洋傳道を思ひ立ち、花の盛りを空しく波に揺られて、わが國に來り、緣ありてわが村に逗り、近きあたりの青年など集めては、英語を敎へき。

燕は歸りて、年ごとに、舊巣をたづね來れど、わが青年は、口輕く、英國の物語解するやうになれば、再び、舊師の館を訪れずなりぬ。みだりがましき人の往來に、心して植たる花園は、踏み荒され、それも今は雜草に埋めつくされて、白日、閑なき日和に、追へども鼬、主を侮りて、隱れざりき。

彼女は、悲しまずして憂へたり。われ傳道の器にあらで、神召さすべき人々をも、やがては、再び鬼の手に攫ひゆかれしにや。と、燈のかげ、花の下、夜、朝となく祈り捧ぐる彼女の姿をわれは幾度も見たり。

ある日、われ訪れたるに、春日麗らかに、庭の一本櫻、塔よりも輝やけり。風そよともなければ、世は夢を辿れるさまなり。

山近ければ、明け放したる窓に翠嵐搖ぎて、折々は、山路の旅人、笠傾けて、足の疲れも忘るべし、鶯の囀音彼方此方より聞えつ、

椅子を窓際に移して、われは、女敎師と相對し、さまざまの世語りに耽りぬ。

美しきとよりは、氣高き姿なるよ。世の塵に染まぬ彼女の面輪に今し一點の翳かゝりて眉の間を往來せしが。

「かの鳥を聞くにも偲ばれ侍るは人の運命といふものなり。」

とて、はじめて、遠き故國の春に別れし、四年前の一日に語り及びき。

村には姉なる人住みて、心易き農夫の妻となれり、廣き牧場を有てり、牧場は、わが爲めの樂園なりき。その若草の茵に座して、わが姉は、この暖き日も、美しき空も、柔き草も、優しき羊も、さては、これを美しと見、暖しと感じ、優しといつくしむわが心も、いづれか皆大御神の愛の賜ならざる。など幼きよりわが金髪を撫でゝ語り給ひき。

少くして二人は、父母に別れ、唯一人の伯母なる人に養はれ、姉君は、こゝの世嗣の子に配せらるべく、この牧場とは終生の友たるべき身なれど、われは、いつかは來るべき運命の背に托さるべきよなど、幼な心にも、悲しう胸の迫りしこともありしが、この牧場の樂しかりしこと、やがて都に出ては、夢に入り幻にかよひぬ。

わが日本に來るべき日近づきたるまゝ、別れを惜まんとて、行いてこの牧場のほとりなる、姉の家に留まり、童等と草笛吹きて、羊の群に遊びぬ。或時は、花野に伏して祈り、或時は、木かげに坐して歌ひつゝ。



小さき班の山羊の一群を牧ふ童ありき、十歳を二つ三つ出でたり。孤兒院より送られたるなりといふ。聰しけれど鋭からず、われに馴染みて、姉樣々々と縋りて、物云ひかくれば、懷しさに堪えじとのやう、直に涙ぐむが例なり。

はじめは羞かしげに、小屋の陰にかくれぬ、やがて、わが爲すまゝに、手を繋ぎては、歌へば和しぬ。羊はこの小主人を繞りて戲れぬ。

少年とわれとの愛は日に深くなりて、われは一時もこの子忘れ得ず、少年もまた、わが窓に慕ひよりて、口笛を吹きてわれを呼びぬ。

ある日、われ牧場に下りて少年を索めしにあらず、

いかにしけむと、彼方此方探りつゝ、やがて、彼を牧場流るゝ汀のほとりに見出でつるに、忍び足して、近づき何するやと見れば、可憐なる童は、流に跼みて、小鳥に水を飲ますなりけり。小鳥傷きたるにや、力なく童の掌に身を托して、嘴開くべき力なきに、少年は甲斐々々しく、水を口に含みては、この負傷者、勞はるさま、幼きナインチンゲールが、小猫の醫者たりし折のことなど偲び出で、われ思はず、少年の肩越しに頰に接吻せり。

　われ市に出でゝ、小さき籠を買ひて、小鳥を飼ひ、童が納屋の裏戸にかけて、二人して迭みに彼女の傷を見たりしが、この鳥、美しき音にて囀るまでに健になりしころ、われ、小鳥にも、童にも、姉にも、牧場にも別れて、村を去るべく決しぬ。

　小鳥の籠提げて、村のはづれに童は、姉に隣りて立ちて、われを送りて去らざるなりき。

　その後の文のたよりに、小鳥は健かになりぬ。われは小鳥を慈めども、このいとしき紀念を見るごとに、癒たる別の哀傷思ひ出でゝ堪かたしとて、朝日よき日、籠の扉を開きやりぬ。

　と文詞たしかに、この文書くこと、わが教へやりしを、彼の童のいそしみて、わが志空うせざらんと力めし甲斐あらはれて、筆つかひも大人々々しき、その面影見えて、懷かしくも床しきや。

　と聲やゝ打顫へたり。

　この床しき回憶譚に、われもこの女教師の心を酌みて、しばしは慰むべき術知らざりしが、この日は既に逝きぬ、この人もいまはいかにしけむ。

　わが新來の姫は「お早う」に彼女よりは巧みに囀れど、かゝる物語に、われを泣かすべき胸持てりや。

　など、わが筆とれる窓近く、例の聲にて、「お早うお早う!!。」と人もなげなる。ふりかへれば、家妹の餌皿を捧げて、わが背後に立てるなりき。

實地經驗

出産問答

作葉女史

▲産婆は何時頃から頼んで宜しう御在ませうか。

△産婆に來て貰ふには、出産より六週間前位に成つてからで宜しう御在ます、尤も産婆にも上手下手がありますから、よく〳〵伎倆に熟練した老功の者を選ぶやうになさい、けれど産婆を招んだからとて、何も彼も之に任して了つては、不可ません、産婆には産婆の仕事だけさして、其他の體の障害などは、早速醫者を招んで、診て貰ふやうになさいませ。



▲お産の日を正確に知るには、最終の月經の閉止つた日に、九ケ月と七日を加へれば、解ると云ふことですが、屹度其の日に産れるのでせうか。

△左うです、妊娠の日數は、受胎てから四十週、即ち二百八十日即ち陰暦で十月と申すのが、通例ですが、其の日を精密に算定致しますには、仰有る通り月經の

閉止つた日に、九ヶ月と七日を加せるので御在ます、併し斯うは申すものゝ、乾度其日たお產があると極つたものではありませぬ、身體の工合や、胎兒の工合や、其他病氣だとか何だとかで、日の狂ふことが度々あります。デスが大抵はマア前の法で勘定すれば間違はないので御在ます、所で貴妹は一體何時から月經を御覽ぢやらないのですか。

▲ハイ、其は去年の八月二十二日からで御在ますよ、

△おや、左樣で入らつしやいますか、シテ見ると八月二十二日に九ヶ月七日を加へて、一寸御待遊ばせ繰つて見ますから、……おや、ま、丁度其の日が五月二十九日、地久節に當りますよ、本統にお芽出度う御在ますこと。

▲產室を選びますには、何う云ふ所が宜しう御在ませう？

△產室は一家の內で一番空氣の流通の善い、日陽の善い、庭園の眺望も面白く、而して車馬喧囂の境に隔たつた、靜閑な所をお選びなさるが宜しう御在ます、決して空氣の流通の惡い場所や、日の當らぬ陰氣な坐敷や、がや／＼喧囂ましい所などを產屋になすつては不可ませぬ、若し御家內に適當の場所がない時分には、いつそ病院に御入院遊ばして、そこで悠りとお產遊ばした方がよろしう御在ます、それから產室は成らう事なら二間續いて居ると、大層便利が宜う御在ます、何故なら褥を敷更へたり、掃除をしたり、空氣を交換たりする場合に、何方か一方に遷つて居る事が出來ますから、餘程都合が宜しいので御在ます、それから最う一つ御注意までに申して置きますが、お產のあつた後は、餘り太陽の光が差明く射込まぬやうにし、暖爐をお用ひになれば、煙らぬやうに氣を付けさせるので御在ます。

▲看護婦を雇ふ必要が御在ませうか。

△產婆ばかりでは間に合ひませぬから、無論看護婦をお雇ひなされたが宜しう御在ます、專門の看護婦でなくとも御懇意の友達とか、御親類の中でお產の手傳ひや、產婦の看護をした經驗のある婦人に來て貰へば、

尙更好都合であります、生家の阿母樣か姉樣なら一番氣易くて宜しう御在ます、產室に禁物は、氣の置ける者、殊に舅、姑、狆、猫、老婆などの氣象の入る手合が這入つて來られるのが一番いけませんから、斯う云ふお方には可成く遠慮して貰つた方が宜いのです。

▲產室に備へて置くべき物は何何でせうか、要る丈の物を敎へて下さいまし。

△產室に入用の物品器具を擧げますと、まづ、柔軟で



淸潔な蒲團と枕、枕は括り枕にして、餘り高くもなく低くもないのが宜う御在ます、次に赤子を洗ふ爲めの盥、便器、脫脂綿花、及び脫脂棉紗、白紙、柔かな白の晒木綿但し糊を洗ひ落したもの一反を、二尺三尺位宛に切つて用意して置くのであります。それから油紙若くはゴム布二枚、之はお產の時腰の下へ、汚液の外へ浸み出すを防ぐ爲めにて、腰部を洗ふ時、矢張り下へ敷いて蒲團のぬれぬ爲にも用ひます。次は產婦の襦袢、

それから赤子の衣服、此れは糊氣のない柔かい晒木綿又は「フランチル」が一番です、次には襁褓、是れは二枚や三枚では足りませんから、十枚以上拵へてお置きなさい、此の襁褓に使ひます布帛は、新しい白木綿が一番宜い相です、けれど若し古い布を用ひます時分には、よく洗濯して、よく干し乾してから、お使ひなさいまし、左うでないと大層害になると申します、縦令、新しい白木綿だからとて、買つて來た許で直ぐ用ひては不可ません、一度、熱湯で洗つて、糊を取り、さてよく日に晒して後でなければ、使用してはなりません、それから世間で産襤褸と稱へます樣なアンナ不潔な物は、決して産室に置いてはなりませぬ、その爲めにどんな害を惹起すか知れませんもの、襤褸と申す物の内にはイロ／＼の病毒が浸みて居つて、隨分危險な物ですのに、其をば最も疾病に犯され易い産婦の室に置くとは、トンデモない事、又其の上に大事の小兒を生み落すなどゝ云ふては、險呑千萬の話ではありますまいか。産後産蓐熱が出たり、日立が惡かつたりするのは、皆んな不潔から來るので、産襤褸の爲に生命を奪られた例さへあるのですから、此の邊の御注意は最も肝要であります。

▲懷妊致してからは、皆が大事にして呉まして何もさせませんので退屈で仕方が御座ませんが、裁縫位は致しても宜しう御在ませうか？

△餘り詰てなすつては不可ませんが、氣の向いた時は、少しづゝ針をお持ち遊ばすのは、却てお體の爲にも宜しいのであります、ソレに生るゝ子供の産衣を縫ひながら、其の子の將來を思ひ浮べなど致すのは、母親に取つて何よりの樂しみでありますから、私は裁縫をお勧め致します、但し分娩期に近づいたら、最う裁縫などお止め遊ばして、何もなさらぬが宜う御在ます。

▲分娩の時の支度の爲方を伺ひます。

△扨て愈々産の氣が付き、産を待つやうになりましたら、種々支度を致さねばなりませぬが、其には先づ着物も平常の寢衣を緩やかに着、髪を結ふてあるなら、其を解いて、ザツと結んで置き、咽喉が渇くやうでし

たら冷水を飲むのであります、決して催生薬などを用ゐてはなりませぬ、食物は消化易き鶏卵の半熟、粥、牛乳、肉汁などを召上り、大小の便通をよく致し、また便通がないやうでしたら灌腸をして貰ふのです、而して身體を安靜にしてゐるので御在ます、それから蓐の上には油紙若くはゴム布を敷きまして、其の上を洗ひ立の上敷で覆ひ、其の上に靜かに臥むのであります、其と同時に一方では澤山湯を沸し、盥を用意し、石鹸、手拭、金盥等を取り添へて置くのであります。

▲分娩の時は隨分苦しいでせうね、私は其時の事が今から思ひ遣られますのよ。

△ナーニ、貴妹、心配なさる程の事はありません、「案じるより産むが易い」と申す通り、存外容易に産れて了ふもので御座ます、一寸お産の時の光景を申上ると、産まれる四週間前ぐらゐよりして、腹の膨脹がグット下腹へ參り、出産の近づくに從ひ、相貌からして變つて了ふ相です、左樣なると時々陣痛が下腹から腰の邊にさして參ります、併し是はホンの前兆で、本統に産の氣が付いて來ますと、此の陣痛が益々劇しくなります、此の時分には無論産室に入つて蓐の上に臥んで居て、早速産婆を招喚にやらねばなりません、陣痛は休み休み六時間から十二時間位までも續くものですが、最後に子宮の口が、強い陣痛の勢ひで裂けるやうになると、先づ少しの破水が溢れ出し、同時に赤子の頭が降て來ます、此の時分の陣痛と申したら、其は貴妹お話に成りは致しませんのですよ、斯う腰の邊より上肢の邊にかけて、ギリ／＼痛が響くのですから、たまりません、其より陣痛は二分三分毎に間を切つて赤子を子宮より壓し出しますが、遂に頭部だけ出るやうになれば、陣痛もいくらか減じます、そこで産婦は全身の筋力を入れて、努責むのですが、此の時分には呼吸は劇しくなり、顏はほてつて參り、身體中汗ビッショリになり、陣痛も段々間が近く劇しく成て參ります、さて漸との事で産れさうになると、復た一惱、一惱、陣痛がありまして、さうかうする內、産婆の介抱と幇助で、忽ちオギヤアと云ふ産聲、此の世に門出の祝を聞

くので御座ます、サア斯う申上るとお產は大變なもの、苦しいものと思召ませうが、併し此の苦痛迚も定つた時刻の間の事で、疾病の爲めに痛むのとは譯が違ひ、赤子が產れさへすれば、忘れたやうに癒るのですから、少しの間の辛抱なので御座ますよ、ですから產れて了ふと、ガッカリ致してトント夢の樣な心持が致します。

家庭の栽培

まき子

田園生活をさるゝ方には申分なけれど、都會にても少し場末に在りて庭つゞきの日當りよき所に三坪ばかりの餘地だにあらば年中總菜の料には事缺くまじと思はるゝ家庭的の栽培を二三種申しあぐべし。元より本式の栽培にはあらねど朝夕の汁の實、浸し物の材料を得るには左程困難にはあらじとおもはる、殊に夏季抔八百屋の棚ざらしを買ふと、我家の作り物にて便ずるとは食味上に、經濟上に大なる相違あること申すまでもなし。

▲菾菜

これは極めて重寶なる野菜にして栽培に手のかゝらぬものなり、用法は菠薐草に同じく其根は發育せざるものなり。

菾菜は其生育期中に溫熱を要すること大なるものにて、且つ其生育の半ば過ぎにて多量の降雨ある時は其成長に最も有効なる者なり、其適地は輕鬆なる砂質の壤土を宜しとす、されど有機質に富める土地は根部大に過ぐるの傾きありて根身に穴洞を生じ品質を劣惡にするが故に斯の如き土質は宜しからず。

菾菜を植んとする圃地は膨軟なるを要するが故に其前作物の如きも耕耘手入を要せるものを良とす、且つ秋季に於て土地を深耕し置き春期播種の前に更に淺耕すべし、細苗は纎弱なるものなるが故に土地は精碎なるを要するなり。

肥料として尤も効力あるものは農場肥料、燐酸石灰鰊粕、油糟、人糞等にて之を施すには地表に近く置く

を良とす、之れ菾菜は蕪菁と同じく其養分を淺層より攝取するを以てなり食鹽其他を肥料に加へて施すときは大に効あり。

播種期は四月中旬より五月上旬の間をよしとす、霜害に罹るの恐れあるを以て早播に過ぐるの危險あり又晩播に過ぐるときは蟲害を蒙むり易きものなれば其時期を見計ふこと肝要なり。

種子は其外皮堅厚にして發生難きものなれば播種する前水に浸して下種するを宜しとす、大抵二晝夜位なり、其量は一坪の土地に五勺位の割合とし、一寸ほどの厚さに覆土し其上を填壓置くべし、種子は六七年より十年間位



迄も其發芽力を有するものなり。

土地の乾濕によりて平畦に栽培するものと高畦に栽培するものとあり、又之を點播すると連播するとの兩法あり、品種によりて其大小に非常の相異あるが故に畦と畦との距離も一定ならず、されど食用に供するものは其畦一尺乃至一尺二寸とす。

菾菜は耕耘、除草を要すること多き植物にて又其發芽にも長時日を要するものなれば其の間に一回の除草をなし、其の發生して嫩葉を出せる時第二回の耕耘をなし密生に過ぐる所は間引をなすべし第三回目の耕耘は又其五六葉を出したる時に行ひ、此際又間引をなし其發

生せざる場所若くは礫に過ぐる所に移植すべし。

食用に供するものは夏期より秋期にかけて採收するに適するものにて、家畜用は其成熟の期節遲くして降霜の後に於て採收す。

恭菜を食用するには先づ能く洗ひて砂を落し、葉莖を去り（根を取るときは往々根塊に傷つけ赤色を損じ味を惡しくすることあり）鍋に入れ水を充して煮ること凡二時間にして取出し、尾と莖を去り、指にて皮を薄く切り、深き皿に入れ、之に酢、醬油、味醂及び砂糖などをかけ食すべし、柔かにして味のよきものなり。

▲菠薐草

菠薐草は春秋兩期に栽培するものにて春期に播種したるものは春より夏にかけて採收秋期に播種たるものは冬期より翌年の春に採收るものなり、秋播の期節は八月中旬より十月中旬の間にて、初期に播種したるものは九月下旬に至れば採收らるゝものあり、春蒔は霜害の去る時期を見計らひて播種し土地は豊沃なるを撰ぶべし、冬間は濕潤に過ぐる土地は宜しからず、是往往根の腐敗を來すことあればなり。

播種法に畦播撒播の二法あり、畦播によるときは先づ一尺二寸より、五寸の距離に畦溝を切り之に下種するなり、撒播法は三尺の幅に畦を作り畦と畦との間に一尺五六寸の通路を造り、其畦上に一面に種子を下すなり、種子は厚蒔とし成長するに從つて間引くべし、然らざれば花梗を生じ易し、其生育極めて短かきものなれば他の作物の畦間に耕作することを得べし。

食用法は一旦瀹きて後汁の實、三杯酢、浸し物、茹へ物等として賞甚だ柔らかにして甘味あるものなり。

▲春菊

茼蒿は春と秋との兩期に播種るものなり、春期に蒔くものは早春に二尺の畦を切り、能く腐熟たる堆肥を鋤入れ種子を下せば凡そ一ヶ月半位にして採收するものなり、春期に播下せるものは花梗を出すこと速かなるを以て永く其儘に置く能はず、又秋に播下するには九月の初旬より中旬の頃に始め降雪少なきところにては冬期霜除をなす、翌年一月より二月に至る迄は採收

に適す。
種子を收むるには暖地にありては秋蒔せるものゝ形狀、性質の良好なるものを撰び翌春に開花せしめて其種子を成熟せしむ寒地にありては春蒔にせるものを其儘生長せしめ開花結實を俟て種子を收むるなり。食用法は茹でゝ浸し物、あえ物汁の實等によろし。

▲紫蘇

紫蘇に青紫蘇と赤紫蘇との二種あり、共に其葉面の卷縮ものを縮緬紫蘇ととなへて珍重せらる紅色種は醃藏にして梅、生姜、甘露子等の着色に使用す。
栽培法は春四五月の頃二三尺の畦を作り堆肥類を鋤込みて之に種子を下す、種子發生して一二寸に成長せば之を間引て二三寸の距離を保たしむ、或ひは畦上に撒播するもよし、採收の時期は其需要の目的により一様ならず、醃藏用は穗の僅かに生じたるとき刈取る、又其種を目的とするものは八九分通りに花の落たる時を俟て刈取るなり。



▲茗荷

栽培法は陰地の有機質に富る所を最も良とす、其播殖を行ふには種子を以てすること稀にして、多くは分植法による、此法は塊根六七寸の長さに截切り毎片必らず一個の芽を附す、之を植うるは四月の交にして三尺を隔てゝ三尺の高畦を作り、之れに二尺を隔てゝ栽植す、斯の如くすれば根は蔓延りて畦と畦との間に來るが故に此部にも肥料を施すべし、

栽植してより五六年を經過すれば高畦の部にあるものは其勢力衰ふるものなれば之を掘り、肥料を施すときは低部より根は再び蔓延りて生長を始むべし。

味よきスープの作り方

さよ子

スープは洋食の三番叟で、如何なる珍味を食するにもかならず、始めにまづスープを吸ふて腹の虫を落付かせねばならぬ、又スープは汽車旅行に於ける最初の停車場のやうなもので、前途幾皿、幾碗の珍食を味ふ首途のやうなものである、そこでスープの旨いと不味とは其時に食ふ料理全體に影響するものであるから餘程作り方を巧みにやらねばならぬ、それ故西洋料理を習ふ手ほどきとしてスープを第一に置いてある。

スープは肉類から作るのが普通であるが、魚類、介類、又野菜、豆類からも作られる、通例は牛、鳥の骨附、牡蠣、蛤蜊、蝦、トマト、豌豆、大豆等から作られる、こゝにその普通なるもの數種に就て説明を試みませう。

其一　牛の髓肉スープ

まづ大きな牛の骨髓の肉を二片に切り碎き、大きな鍋に入れ、水を骨のかくれる位入て二時間ほど鈍火にて煮、夫から鹽を小匙に二杯入れて猶二時間位煮出して膳に上す前胡椒一振ふりかけて出す、尤も之を煮る時は絶えず上に浮く泡をすくひ取らねばならぬ。

其二　臟物のスープ

まづ鷄の心臟や、肝臟、又は胃腑等を凡一斤ばかりも用意し之を洗ひて細かく刻み、深鍋に入れて水を五合、鹽を小匙に一杯入れて煮、沸騰つた時上に浮く泡をすくひとり乍ら一時間ほど煮るべし、もし之に野菜を入れんとするときは細かく刻みて大匙に二杯位鍋を卸す少し前に入れて煮るがよし、次に牛乳五勺ほどの中に麥粉を大匙に一杯溶して鍋に入攪きまはしながら三分間煮、胡椒二振をかけ熱き内出すべし。

其三　馬鈴薯スープ

中位の大きさの馬鈴薯を四個ほど皮をむいて山葵おろしにておろし置き、別に二合の水と同量の牛乳とを

深鍋に入れ、又鹽を小匙に半分入れて、沸騰つた時前におろした馬鈴薯を入れて絶えずかきまはしながら五分間煮、火よりおろしてバタを大匙に一杯と、胡椒を二振入て二三度かきまはし、熱き内食すべし。又一法はよくいぶした薯一合を深鍋に入れ、別に二合の牛乳と、水一合と鹽を小匙に半分と胡椒を二振とバタを小匙に一杯入れて沸騰たせ、熱き内食す是は精進スープなり。

其四　野菜スープ

胡蘿蔔一本葱一本、蕪菁一個、馬鈴薯一個、オランダ三ツ葉の根一個とを細かく賽の目に切りて深鍋に入れ、牛肉を煮たる汁凡そ一升ばかりを注ぎて文火にかけて一時間程煮、鹽と胡椒を入れて味をつけ、熱きうち食すべし野菜スープは其の季節により大豆、豌豆、牛蒡、赤茄子、玉蜀黍等を用ゐてよし。

其五　トマトスープ

二ツの赤茄子の皮をむきて深鍋に入れ十五六分間軟らかくなるまで煮て裏漉にかけ、又別の鍋にて裏漉にしたる赤茄子と同量の牛乳をにえたゝせ、若し牛乳と赤茄子とが三合宛ありとすれば麥粉とバタを各大匙一杯宛一緒によく溶して煮え立ち居る牛乳の中に入れて絶えずかきまはしながら濃くどろ〳〵になるまで煮、トマトの方の鍋に鹽を小匙に半分と、砂糖を小匙に一杯と曹達を小匙の先に少量をすくひ入れて煮、赤茄子も牛乳も沸騰ちてから火より卸して牛乳の方を赤茄子の方に注ぎ直ぐに出すべし、牛乳を注ぎて後は火にかくべからず。

其六　セロリースープ

オランダ三ツ葉を細かく刻みたるもの二合ほど深鍋に入れてこれに四合程の水を注ぎ、軟らかくなるまで煮、三ツ葉を取り出して裏漉にかけ、(三ツ葉を煮たる湯は捨ず)再び元の湯に入れて沸騰ちたる時熱き牛乳を二合に麥粉大匙一杯を溶かして絶えずかきまはしながら入れ、次に鹽を小匙に半分と胡椒を二振入れて一二分間煮えたゝせ熱き内食すべし。

其七　蛤のスープ

むき身蛤三合ほどを深鍋に入れてこれに五合ほどの水をつぎ、三十分間煮て鹽と胡椒少しとバタを大匙一杯ほど入れ熱き内に食すべし。但し蛤の身は別にして汁のみを出すべし。

其八　牡蠣のスープ

凡そ三合ほどの蠣を二合ばかりの水に入れて深鍋にて五分間煮、其中へ熱き牛乳を二合入れ、次に鹽を小匙に半分と、バタを大匙一杯、胡椒二杯とを入れて沸騰ちたる時鍋を卸して直ちに出すべし。

其九　牛乳入鷄スープ

大匙に山盛二杯ほどの麥粉を牛乳二合に溶き混せ之を鷄を煮たる汁八合に加へ、鹽胡椒を入れて調味すべし。

スープ作り方の心得

スープを作るには必らず深鍋を用ふべし。

スープを作るには強き火にかくべからず、必ずとろ火にてすべし。

スープは常に熱き内に食すべし。

スープを膳に上すには必らず其の器皿を溫むべし。

スープを食するには乾きたる燒パン又は甘氣のなきビスケツトと共に食すべし。

胡椒は必らずしも用ふるに及ばじ。

三月料理

○甘鯛の鹽燒

甘鯛の鱗をふき腸を出しよく洗ひて水氣を切り鹽をふりて一二時間置き、腹を左り竪に串にさし布巾にてふき飾鹽をふり尾の焦げぬやうに注意して火にかけ燒くなり、但し鹽をふる時腹の中又は外向ともにつよく撒りかくべし又串を取る時は板の上にてまはしながら拔き取るべし、身のくづれぬための注意なり。

○鰈の葛煮

鰈を三枚におろし兩身を小角に切り、酒と醬油とを程よく和して之を煮、一と沸して肉を取出し、其汁に溶かしたる葛を入れて一寸煮ればトロ〱になりたる餡

となる、之を前の肉にかけ青海苔を火どつて粉にしたるものを懸けて出すべし。

○茶碗むし

まづ鰹節にてだしを拵らへその沸立たる中へあく抜砂糖と醤油を加へて冷し、之に生玉子をよく攪廻して交せ（玉子は茶碗三つに鶏卵二つの割合なり）之を種物の上より掛け茶碗の八分目まで入れ茶碗には蓋をせず蒸すなり、但し蒸道具は茶碗の數少けれぱ釜の中にザルをしき、その上に茶碗を載せ、若し數多ければ蒸籠を用ゐて蒸すなり、種ものは生にてよき物は生のままにて、又味付べきもの、茹でるべきもの、湯がくべきもの、浸すべきもの、燒くべきものいろ〳〵あれば皆下拵をなして茶碗の中に入るべし、その例は（一）鰻の蒲燒、松茸、燒栗、三ッ葉（二）鴫のたゝき、めじろ、蘿菌、茗荷、（三）伊勢蝦、平ゑび、松茸、つまみ菜、栗等にて松茸と蘿菌類は煎汁に鹽を薄く加へザットト煮、鴫はたゝきて錢の形ほどに丸め一碗に三粒程づつ入れ、めじろは照燒にして入る、魚類は鹽燒、素燒にてもよし香料は柚子を用ゆべし。

○鮪の獨活ぬた

鮪の肉を刺身よりはやゝ厚く短かく切り骰き、別に獨活の皮を剝き薄く短冊形に切りて若布と一緒に水に浸し、若布が柔かになりし時味噌濃にうつして能く水を切り、更にわけぎを短かく切り、沸へ湯を掛け、味噌を摺り立てたる芥子を摺りませ酢にて薄め、砂糖少許を加へて右のくさぐさを入れ攪きませるなり、之は鮪に限らず鰯、鯔、鮒、貝のむき身にても可なり尤も貝を用ゆる時は茹でるべし。

○慈姑の玉子燒

生玉子を割り皿の上にて黄身を分け、白身だけ泡立たせ、黄身は丼の中へ入れ、生慈姑の皮をむきおろし黄身をよく混せ白砂糖、燒鹽にて味をつけ、さて白味の泡を黄身の中へ入れよくまぜ玉子燒鍋に油を引き紙にてザッと拭取り鍋の燒たる時、慈姑玉子を七分程入蓋をなし其上に火を置き上下より燒くべし、口取にも付合にも用ゆ。

○巻鯛

鯛の皮を剝いて身を二枚にすきおろして鹽を裏表によくふり、さて板にておし、小石を置き、取出して水にて洗ひ、布巾にてよく拭き、少し日に當てゝ身に玉子の白身をぬり、葛にメリケン粉を半分々々にまぜ右の鯛に引きくる〳〵と巻きつめて筍の皮に巻き、藁にてくゝり蒸すなり、たゞし裏引のものなれば鯛を少し厚くしてまく、又鄭重もの取肴は薄く身をとりて巻くなり。

○鯛の巻珍蒸

まづ五六寸位の小鯛の鱗を去り腹を開きて腸を拔きよく洗ひて水氣を去り凡二時間薄醤油に浸し置、別に木耳又は椎茸を見計らひの分量にて、骰の目に刻み之に豆腐を混せ味よき煎豆腐をつくり右の鯛の腹につめて筍の皮にて縛り蒸し上て皿に盛り薄醤油かけて膳に上すべし。

○薯蕷のとろゝ

いもは自然薯を最上とすまづ皮をむき摺りおろし、之に鷄卵の白味をよきほどに交せ摺り鉢にてよくすり其まゝ煮だし汁にて適宜に薄く摺り交せ、ふかき小丼に入れ、焼麩をあまく薄味付たるものを一つ此とろゝの中にかくし入れ、青海苔をかけて出すべし、麩を入たるは中々に妙なり。

○松風慈姑

慈姑を生にて皮をむき大根おろしにておろし鹽砂糖うどん粉を交せ板へ二三分位の厚さにし熨し玉子焼鍋を火にかけ此へ板共に入れ焼きて色のつきたる頃はがし他の一方をやくなり口取丼物に用ひてよし割合は慈姑二十五個につき鹽五匁砂糖三十目、饂飩粉一つかみにてまぜあわすなり。

○筍と烏賊魚の木芽あへ

筍を茹でゝ亂切にして烏賊魚も茹でゝよきほどに切り、之を味噌にあえるなり、味噌のつくり方は白味噌中味噌二分の割合とす、この味噌の中へ砂糖少し入れ木の芽を摺り込むなり、又獨活にても款冬にても用ふれば猶更よし、獨活は太細に拘らず斜切にし、款冬は太きは割り細きはそのまゝ八分位に切るべし。

西人の見たる日本の臺所

一記者

西洋人が日本の臺所を觀察したる記事こそおもしろき物なれ。

彼等はまづ日本の米の飯を我々の日常用ふる麵包なりと稱し、それを命の親なりといへり。彼等は日本の臺所にストーブのなき事を不思議の一つとして怪しみ、彼の飯焚釜を見ては我々が洗濯に用ふる（衣服を煮る時に使ふ）銅器なりといへり、而してその長火鉢を見て尤も不思議の道具となし、煮物、炙り物、揚物など其他種々なる割烹の用に使はるるものなりとなし、殊に庖廚内にミルクもなく、バタもなく、麵包もなくして朝夕の食物を作るを不思議の隨一となせり。



併し乍ら彼等は日本人が米を炊ぐに米のスープを釜より棄すして自然に水の引く樣に炊ぐを以て極めて賢こき料理法なりと賞讃し、其の水加減の精密なるに深く感服するもの〻如し。蓋し彼等が飯を炊ぐの法は米が軟かに煮へたる時、それを漉囊にうつし、ソース鍋にて水分を殘らず濾去るを以て普通の炊ぎ方なりと心得居るもの〻如し。

彼等は又澤庵漬を以て世界第一の不消化物なりと爲し、若し毎食の終りに此の物を食へとすゝめられるならば寧ろ潔よく斷食すべしとまでいへり。而かも日本人はこの澤庵を以て我々

の乾酪と同様の嗜好物となし居れりといふ。
彼等は又日本人は干魚の一種を鉋屑の如くに削りてスープを作りこれに豆液より製したるソースを混じて食ふといひ、殊に竹の根を握りてこれを馬蹄形に切り煮付となし食ふに至つては驚愕せざるを得ずと稱し居れり。
彼等は又日本人が普通牛肉を食ふを以て極めて野蠻なる料理法なりといへり、即ち日本人は牛肉を小さき片に切り、葱を混じてフライ鍋に入れ、これをフライにして、鍋から直接に食へるは、尤も蠻的なりと言へり。
彼等又言へり、ビールは日本人の財布に取つて餘り高價の飲料なりと。又曰く、日本の紳士は飯に茶をかけて呑み込む事あり、我々をして若し茶のかゝりし飯を出されしならば直ちに他の器に棄て去るならん、蓋し我々は胃を愛する事深ければなり、されど日本人は飯を棄つる事を以て不道徳となせばなりと。
彼等は又箸を以て二本の鉛筆なりといへり。日本人は食事の際、匙もなく、肉叉もなく、又肉刀もなく、只此の二本の鉛筆を宛も我が指を遣ふ如く自由自在に使用して飲食せり、我々をして若し斯の如くならしめんと欲せば少くも十五年の修練を積まざるべからざらん、然るに日本にては五六才の小兒がよくこの鉛筆を自由に使用して遺憾なし、習慣の致す所は侮り難きものにぞある、云々。といへり。面白き觀察といふべし

通俗 新約物語

これは小説家の中村春雨氏が基督教の聖書を物語體に書きくづしたるものなり、一體聖書は宗教家の經典なれば一讀して直ちに意味を了解するといふ譯には行かざるものなり、然るに此書の如く物語體に書きて行かば何人にも了解されて基督教の由來する所を明かにし、且つ新約全書中に顯はれたる大眼目即ち一大奇蹟とするの事柄をも了得して成程基督とは斯るものかと讀者をしてそゞろに渇仰の念を起さしむるはこの書の大なる成功ともいふべし春雨氏が若き男女の情事に筆をつくるの暇この老婆心ありしは評者の深く謝とす所なり。(定價壹圓金尾文淵堂版)

前田侯爵家の婚儀

昔は北越三州の大守として百二十萬石を領させ給ひし前田侯爵の婚儀は愈々去る十九日正午より本郷元富士町なる同邸に於て小笠原流の古式により德川公(家達)の媒妁にて日本女子大學作法教師松岡とわ子式場擔當者となり大日本割烹學會主任石井泰次郎氏献立の役を勤め最も古風に又最も莊重に儀式を擧げられたり、今其概略を聞くがまゝに記せば

▲式場の飾付　儀式の大廣間は七十疊の客房なり、此所に伊弉諾伊弉册の兩尊を祭りて神饌を供し長三間の大床の中央には奈良蓬萊を設らひたりこの奈良蓬萊といふは龜甲形の眞に老松、鶴の巣籠、紅梅、白梅、桃、長春、橘、岩に竹、下草、大龜の甲に泉のつぼを置く、斯くして其の左右に鯉と雉子とを盃形の平たき臺に裝飾したる外、蝶花形を附したる瓶子一對を置き、下臺の三方は總て白柄梅鉢の定紋を置きたるものにて床の前には盃の三方と長柄の銚子、加への提子とを置けり而して床には一面に白絹を敷詰めたり

▲御料人當時の扮裝　さて御料人たる嫁御寮漾子姫には當日の媒妁役たる德川公夫人泰子の方の案内にて靜々と式場に臨まる其扮裝は垂れ髮に袿紅の袴を着け、檜扇を手にし、德川夫人も姫と略ぼ同じ扮裝なりき。

▲婿殿の扮裝　斯くて婿殿たる利爲侯には冠を着け給ひ袍、衣並びに單の外奴袴を召して、同じく檜扇を手にし烏帽子直垂を着けたる家従に、野劔を持たせ、婿君と同じやうなる扮裝の媒妁人德川家達公の案内にて件の大廣間に入來あり。

▲紀念の御守　此に到りて最初より御料人の胸に掛けある愛嬌の御守を取りて床の間の釘に掛くるは德川令夫人の役なり此の御守は御料人より婿殿に贈る可きものにて、中には御守の神影と玉椿製の臼杵に米八十八粒とを包み入れある白綾の幸ひ菱に、裏地は白の練絹、紐は白絹の四ツ打、叶結び上卷に結びつけたるものにて始め御料人の袿にかけて出るものなり。

▲婿殿御料人御對面　此に到りて兩人打揃ひて神拝の禮あり介添が長熨斗の三方を用ひて双方の中央に置き、下座になると婿殿御料人こゝに始めて初對面の挨拶をなす、やがて御料人より婿殿への贈物の披露あり亞ぎて給仕人は式三獻の膳部を薦む。

▲一獻毎に變る膳部　膳は總て白木三方白柄御定紋つきにて上に盛れる膳部は一獻毎に異る可し△一番の盃の時は海月盛、梅干盛、熨斗盛、手鹽、橘皮△二番は鰡子盛、多利盛、鯉の打身△三番は田作盛、數の子盛、鯉の腸煎と云ふ順なり以上に亞ぎて結盃の儀式あり。

▲媒妁人の御祝言　斯くて媒妁人たる德川公爵夫婦は兩人に對ッて幾久しく千代萬代と契りの永からんことを籠めたる祝言を述べ、亞ぎに婿殿御料人は媒妁に對つて丁寧なる禮をなす、次に此度は婿殿よりの贈物の披露あり、右にて合盃の式を終る。

▲祖先へ拜禮　婿殿は此に更めて先供（家扶）劍持（家從）を召し伴れて祖先の靈舍に婚儀擧行の報告の爲め參拜あり、御料人又老女侍女を從へて與に參拜し、婿殿は此舍にて莊嚴なる報告文を朗讀し一般の家扶家從等も均しく參拜して、更めて賀辭を申上げ、式は全く終りを告ぐ。

▲最後の祝宴　儀式後婿殿は紋附羽織袴、御料人は白襟紋つきに高島田髷となり媒妁も右同樣、衣服を更めて席に着き、茲に始めて家族其他一同最後の祝宴に移るなり。

▲當日の献立　献立は三汁八菜にて定紋つき白木三方を用ゐ、利爲侯及び漾子姫の兩人に限りて次きの本膳に向ふ

長熨斗　　敷紙白木三方

本膳

- 鱠（鯛の作り身、紅くらげ、白髪大こん、つみ岩たけ、栗せうか、金かん）
- 汁（三葉つみ入れ、しめぢ茸、しき紙わか菜、めうど）
- 煮物（うづらしんぢよ、松露、みつば）　御飯
- 小角　香物（奈良づけうり、味噌もりぐち、粕すけ茄子、鹽山椒）

▲二の膳

- 杉箱（松かさ鯛、二色玉子、いくうふう茸、椽花くも井、雛ひふき）
- 御汁（鯛、竹紙昆布）
- 大猪口（ななこいか、したしよめ菜、したしつくし）

▲三の膳

- 杉地紙改敷
- 差味（鯉子づき、はなかき鯛、莫太開、雪輪れんこん、おろしわさび）
- 南天熊笹
- 小猪口（煎り酒）
- 汁（新若め）
- 茶碗（小花海老、黄味そう麵、なましいたけ、五分芹ふきのとう）

向ふ詰は小鯛色付にて飯鉢通ひ▲吸物は鯛ひれにて高砂臺に盃を置く可く長柄の銚子取肴の富貴の臺に置く▲菓子は白木三方縁高なるに梅松椿の絹の造花にて裝飾したるに有平、饅頭、やうかん、煎餅、枝がき、くるみかやを盛り濃茶は天目臺にて侑む可し尙ほ當日酒宴の膳部にては△吸物（鯉の鳴戸まき若大根、房山椒）△硯蓋は若松に鶴の銘々島臺にて（相生かまぼこ、わらび、巣籠り、玉子、湯葉、まき白魚、烏羽玉長芋、松花かん、甘露蕗）△美味は梅に福壽草の裝飾あり（長作り鯛霜ふり平目、二色小川、海そうめん、黑くわゐ、わさび）△小丼甘鯛、若菜こし）△鉢肴（鯛てり燒、鯛黄身蒸、はかた昆布、うま煮れんこん、もやしせうが）△甘煮（雁丸め、開き竹の子、ぬのめ章魚、しのうど、さやゑんどう）△茶碗（かきしんちよ、みの松茸、花菜、木の芽）△酢物（よせ赤貝、さい形たひ、壽のり、酢取り防風、鹿子のせうが）△中皿（羽盛うづら、けんちん）△水菓子（りんご、串柿、紀州みかん、ありの實、ぶどう）△吸物はすましにて（吉野魚、さゞれ梅）

因にいふ婿君利爲侯は侯爵家一族たる一萬石の本家より入婿せられたる方にて當年二十二歲昨年士官學校を卒業して現に近衛の少尉たり又今回の式は其昔德川將軍家の婚儀に用ひられたる小笠原式を大略襲用せられたるものなりといふ。

素人藥物學

糸左近

〔龍膽〕＝一名健質亞那根と言ふ、本邦では昔より漢藥として、其効能を多大に言ひ來つたもので、龍膽と名づくる草の根である、歐洲ではGentianaと稱する草の乾燥根で、その成分は東西殆んど同一の物である。偖これが醫療的功用を述ぶるに當り、一般の苦味劑に就いて概論し、然る後これに及ぶが順序である、夫れ苦味藥を口中に容るれば、其の刺戟の爲、反射的に唾液の分泌を增すと雖ども、胃中に入れば却て胃液の分泌を減少し、胃中より苦味藥の去るに從ひ、漸次に又胃液の增すものである、故に之を與ふるには食前少くも三十分時間乃至一時間を隔てねばならぬ、又その大量を服する時は大いに食慾を減じ消化を妨ぐるのみならす、惡心、嘔吐、或は下痢をも起すものである、されは、之を適當に用ゐれば、消化機の衰弱せる者屢々回似せられ、胃中の異常的醱酵を制限し、間接に食慾を促すは爭ふ可からざるの事實である、兎に角苦味劑は健胃藥として用ゐられ、精神過勞或は酒色過度などから來る衰弱に伴ふ所の消化不良等には頗る効を呈はすものである、然るに素人の方は往々苦味丁幾を無暗に顔蹙めながら、毎日々々服んでゐる人がある、斯くの如きは寧ろ有害と謂はねばならぬ、然れば何人も唯單に健胃劑といふ名に迷ふてはなりませぬ。以上論じた通りであるから、苦味藥たる龍膽即ち健質亞那根も同じく衰弱的消化不良に、一日數回、一回〇、三乃至一、〇の割合を以て、浸劑或は散劑として賞用せらる。

龍膽　三、〇を温湯一〇〇、〇にて五分時間煎じ、これに橙皮舍利別　一〇、〇を加へ、一日三回に分服すべし。

龍膽より製したる龍膽丁幾、龍膽越幾斯は其効同一で、丁幾は一回量大凡一瓦半、越幾斯は〇、一乃至〇、五である。

〔括矢亞丁幾〕之は南米或は印度諸嶋に產する Q[illegible]

と稱する木の木質より製したる藥であるが、多くは丁幾として用ゐらるゝものである、効用は一般の苦味藥劑と同じくて、用量は一日數回、一回大凡一、〇を與ふ。

〔蒲公英〕＝これは我國及び歐亞各地に產する草で、春其花を開くに先だち、根を併せて全草を採り、之を乾かし製するものである。誰植ゑたと無き春の野に、自ら開く蒲公英の花も、斯く各國の人命を助くるとは嗚呼人にして雜草に如かざる可けんやである。之を其儘五、〇乃至一五、〇を一〇〇、〇乃至二〇〇、〇の温湯に煎じても用ゐれど、多くは蒲公英越幾斯を賞用するものである、即ち該越幾斯を一日數回、一回大凡一、〇宛を服する時は、一般の苦味劑の健胃作用あるのみならず、便通を促すの効あるを以て、消化不良に常習便祕を兼ぬる症には頗る妙である。

蒲公英越幾斯　三、〇　甘草末適宜
右十五丸と爲し、一日三回　食前五丸宛。

〔古倫僕根〕＝これは東亞弗利加の海岸地方及び東印度に產する Colombo といふ灌木の根である、これを單純の苦味健胃劑として用ゐること甚だ少く、多くは蒲公英と反對に、消化不良を兼ぬる慢性下痢に、止瀉の目的を以て與ふ。其の用量は大凡二瓦を温湯一〇〇、〇に煎出して、一日三回に分服せしむるか、或は一日量〇、五程を散劑又は丸藥として用ゐるが通例である。

古倫僕末　二、〇　次硝酸蒼鉛　一、五
乳糖　適宜　右分三包一日三回一包宛。

古倫僕浸(二、〇)一〇〇、〇　橙皮舍利別一〇、〇
右一日三回分服

右の外苦味劑尙數多あれども、以下又次號にドシ〳〵述べませう。

△衛生顧問▽

糸左近

(問)肺加太兒、肺尖加太兒、肺炎、肺結核、肺勞の區別を極めて簡單に且つ通俗的に敎へ下され度甚だ我儘ながら御示敎を乞ふ。(信州の山中女)

肺加太兒と肺炎とは同病、肺結核と肺勞とも同物、肺尖加太兒とは

肺の上方に熱をもつといふやうな義、すべて加太兒といふ文字はこれを推して考へられたら分りませう、結核とは一つの黴菌の名でありまず、そこで他の二者も重い病であるが、肺結核は殊に治り難いのである。

(問)妾事常に咳嗽喀痰甚しく候て、甲醫は氣管支加太兒、乙醫は咽喉加太兒、丙醫は氣管支炎、丁醫は喘息、その他風邪のこぢれ、胸膜炎など色々様々の診立でありますが、何で御座いませう、且つその治療法を是非々々敎へ下さいまし。(京都の二十三歳婦)

(答)實地に診察したる多くの醫者の診斷病名だけを聞いて、百何十里の遠方に居る者に判斷せよといふ事は、餘り御無理ではありませぬか、併し兎に角呼吸器病に相違ありますまいから、頸には濕布繃帶を施し、鹽剝或は重曹の如き藥で蒸氣吸入をなし、感冒に罹らぬやう注意し、祛痰鎭咳の藥を服用せらるゝこと肝要なり。

(問)ワメシ、ホカニ、ナントモアリマセンガ、大ベンガツマチ、コマリマスサカイデ、ドーカヨイクスリチ、オシエテクダハリマセ(キヨトノ七才女)

(答)紅葉の様なる手で書かれたと思へば、この問が何となくうれしくてなりませぬ。さて其の藥は幾つもありますれど、左の二の中を一つ服んで御覽なさい。

(1)　大黄舍利別　二、〇　一回の量

右少しの水と交ぜて朝夕二回用ふべし。

(2)　小兒散　〇、六　一回の量

右の藥に砂糖を交ぜて一日に二三回服んで御覽なさい。

(問)飴は胃の害になりますか、且つ眞鍮瓶で茶をわかし久しく經てば害ありますか。(周南愛讀女)

(答)前者は然らず後者は然り。

(問)乳汁の出る方法を敎へ玉はりたし。(東京不乳女佐世保心配女)

(答)何か病氣があるならば、早速之を治療し、哺乳器を以て乳房を刺戟し、或は芥子を貼けて分泌を促し、强壯の食餌例へば魚の刺身、牛肉、鷄肉、卵、牛乳、豆類、大麥汁、珈琲、魚の味噌汁、自然生薯のトロヽ汁などを食し、左の處方を用ゐて見玉へ。

炭酸苦土　二、〇　茴香末　一、〇　白糖　適宜

右三包に分け一日三回に服むべし。

(問)長男十一歳の脊柱は餘程前屈してゐますが、之を矯正する方法の御示敎を乞ふ。(越前の其母)

(答)滋養强壯の食物を多量に取らしめ、體操を嚴重に行はしめ、輕き重量の物、例へば本の如きを頭に頂かせ之を落さぬやうに步行せしむる稽古などは大いに矯正術となるものである。

(問)實扶的里亞病を誤診して血清を注射せられても害無きものに候や。(北豊島の病兒母)

(答)然り害無し一體ヂフテリアの初期の診斷は仲々に六かしくて大抵の醫者は誤診し易いものであるから、少しでも疑はしい場合には早

逐乞うて血清を注射することが、何よりも安全策である。

(問)糸先生の宅診往診せらるゝ時間と堂名及び電話番號とを誌上に御示を乞ふ。(京橋の齋藤きく子)

(答)私は開業してゐませぬから、左様な時間も設ければ從つて堂名などもありませぬ、又電話などいふ重寶物を敷設してあるやうな富んだる醫者では勿論ありませぬ、但し日曜の日は診察だけの求めに應ぜぬことはありませぬが、唯御出になつて、斯んな小さな家に居る醫者かと失望なさらぬやう、前以て御斷り申上おき候。

餘寒の攝生

栗本醫學博士

一體冬は呼吸器の病に罹るものが多い、併しこの病に犯され易い時季は、嚴冬よりも寧ろ餘寒に多い、何故ならば寒氣の少し緩むと共に皆が注意を怠るからである。

呼吸器病の重なるものは氣管支カタル、肋膜炎、肺結核などで是等はいづれも餘寒の頃に罹るが殊に氣管支は小供に多い、その小供は平素腺病質(ルイレキ)の虚弱者に多い、大人でも體質の不良な者は犯され易いのである。

一體日本の氣候は變り易いのみならず空氣がしめつてゐるから寒中は人體に影響が多い、メトエ嚴寒でも大陸諸國では空氣が乾燥してゐるから健康にはよろしいのである、滿洲軍の軍醫の話に攝氏の二十度位で隨分酷い寒さではあるが内地よりも辛くはないといふ畢竟これは空氣乾燥の結果である、故に我々日本人は不斷注意して皮膚の抵抗力を強くして置かればならぬ。

肋膜炎、肺結核、氣管支カタルいづれも身體の抵抗力の弱い者に罹り易いが、只氣管支は一度冒されても攝生さへよければ回復はするが、肋膜の方はそう行かない、又肋膜には外傷性(感冒)と結核性あつて外傷性は一定の時期さへ來れば養生次第で癒るけれど結核性は兎角慢性に成り易く遂に肺結核に變ずるものであるから大に注意を要するのである。

さてそれ等を豫防するのは何が一番よいかといふに冷水摩擦をして皮膚の抵抗力を強めるにある。冷水摩擦は私の實驗によると寒に入つてからよりも秋の初に行ふのがよいこれは毎朝顔を洗ふ時、頸、胸、腹、背、四肢といふ順序で、目の荒い手拭で摩擦し皮膚に赤味のつく位にしてそれから少し運動するがよい、さてこの運動法は左右の胸部を輕く打つ事、この數は百回より二百回、次に左右の肩と腋の下とを輕く五十回位うつて、最後に兩手を擧げて深呼吸をするのである。

勿論冬季突然これを行へば反て風を引く事があるから室内の空氣を暖めて置き臥床の上で胸から手、背中と順次行ふのがよい。

又誰も冷水摩擦さへして居れば必要はない、寒い風ほど却てむ

塲の爽快なものである、襟巻を用ひつけると頸の周の皮膚を軟弱にして風を引き易いものである。

それと同時に營養療法が必要である、營養が悪いと血液のめぐりが不十分であるから身體が疲勞していろ〳〵の疾病が襲ふのである。

又身體の弱い人は毎日牛乳三合、鷄卵六個、鳥牛肉凡三十匁位づゝを用ふるがよい。米飯は日本人古來の習慣であるが米は身體を肥らせる力があるから歐米諸國でも弱い者には米を食はせるやうになつた、結核病人には米食がよい。

餘寒であるが急性肺炎は毎年餘寒に一番多い此の病に罹ると忽ちにして四十度位の高熱に昇り胸が痛で咯痰が出る、その痰の中に錆色の血を交へるものもある、インフルエンザも、此頃にはやるものだがこれから肺を冒されるのもある、小供は熱が高まつて肺炎になる事が多い、それから牛乳は食後茶の代に用ふるがよい食前では兎角飯が不味い。又體量は時々量つて見るがよい減量は衰弱の徴である、又小供には微温湯の手拭で身體を拭てやるのがよい、婦人も勿論冷水摩擦がよい一般婦人は化粧の時に肌脱をする事が多いのみならず入浴も男子より多いから自然に皮膚が強いのである、

要するに呼吸器には濕氣が悪い東京では本所、深川の如き濕氣多い所に呼吸器病者が多い歐米では下水が完全であるから朝顔を洗ふた手拭は日の當らぬ所に置ても直ぐに乾くのである。

子供に風邪を引かさぬ用心

▲寒い時であらうが暑い日であらうが小兒を保育するのに一向無頓着な母親があります、此無頓着と云ふ事も或る程度迄は差支へないことで餘りホイ〳〵違つて庇護い過ぎる弊害よりも宜いのですが寒さ暑さにつけ餘り無頓着な仕方は感心しません、世間には小兒の大小便をやる時に嚴しい寒氣の中にも係はらず椽側へ連れ出し臀部を寒氣に曝して兩便を放出させる者が澤山あります、尤も小兒も歩行の出來る頃にでもなれば兎も角も、未だ生後半ケ年間位は斯ういふ無頓着な保育法は實に賛成が出來ません、先づ寒中などは室内の餘り寒くない處へ虎子を置き、夫へ放出させる樣に致し度ものであります。

▲寒い晩小兒が眼を覺ました時虎子へ放尿させる際、小兒は寢衣の儘で、母親が寢床から連れ出します、虎子へ懸つて直に小兒が放尿すればよいが塲合によると放尿しさうで居て容易に尿を洩さない、爾うすると母親も中止する事が出來ず「モー放尿か〳〵」と待つて居て其間には小兒を冷して仕舞ひ、感冒を惹起すに至らしむる事がある、だから寒中の夜分小兒を寢床から連れ出す時には豫め綿入れ羽織など準備し置き、手早く夫れを着せて出すやうになさい、其の羽織も火桶へ埋火をして置き夫れへ掛けて暖かになつて居る程の注意をすれば誠に至れり盡せりであります。

(家庭唱歌)

春の野遊

作歌　柴垣社中
作曲　山田源一郎

一

花はほゝ笑み
鳥うたふ
ひかげ長閑き
春の野に
遊ぶ今日こそ
楽しけれ
親族兄妹
うちつれて
あそぶ今日こそ
たのしけれ

二
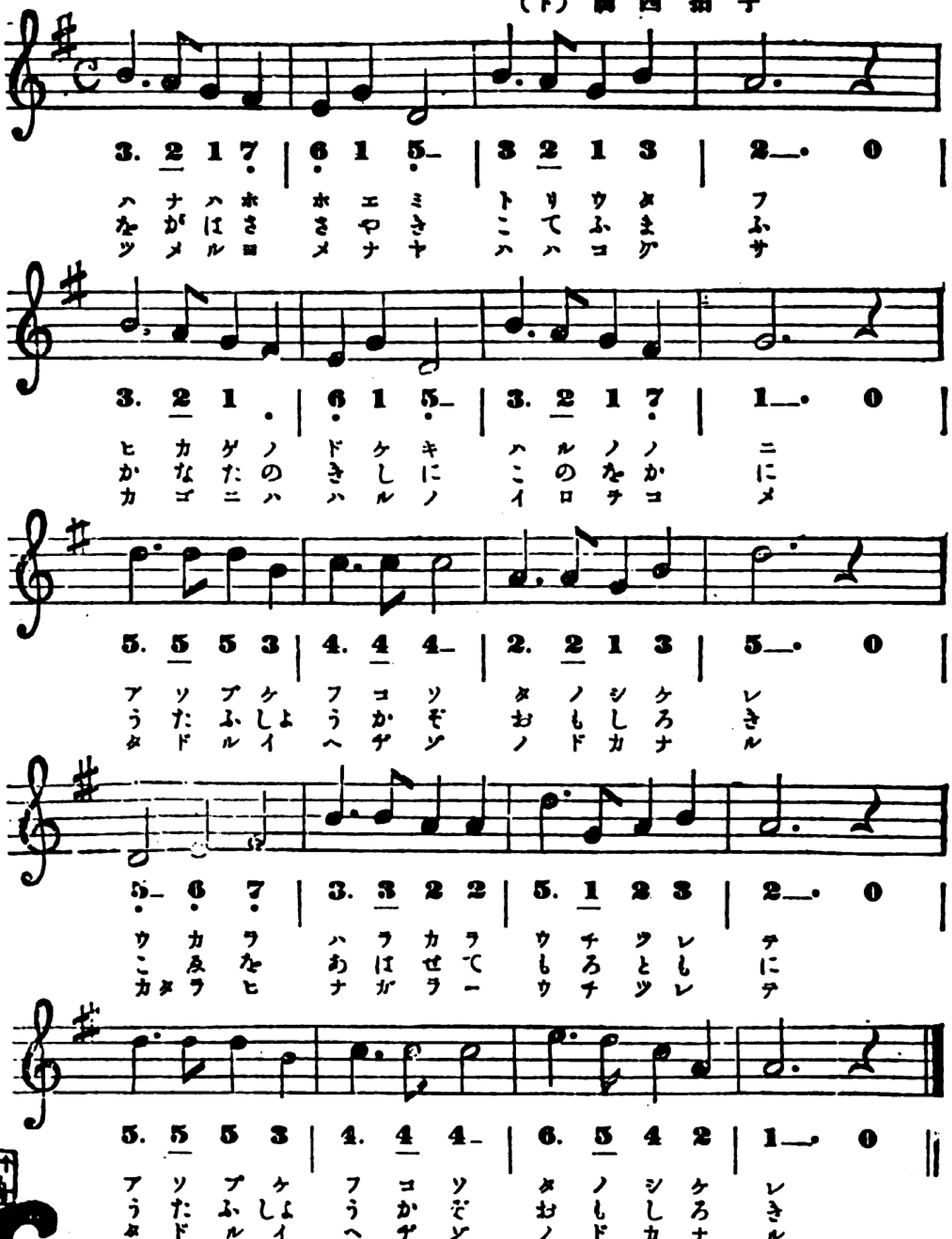
小川さゝやき
胡蝶舞ふ
かなたの岸に
此の岡に
うたふ唱歌ぞ
おも白き
こゑをあはせて
諸共に
歌ふ唱歌ぞ
おもしろき。

三

摘ろよめ菜や
はゝこ草
かごには春の
色をこめ
たどる家路ぞ
長閑なる
語らひながら
うちつれて
辿ろいへ路ぞ
のどかなる。

春の野遊

(ト)調四拍子



人情哲學

市の人

▲銀の匙

猶太人が二人宴會に呼ばれて往きました、一人の名はイサアク、一人はグリンボウムと云ふ、二人は悪戯半分銀の匙を盗んで來樣と約束しました、すると御馳走が始まるや否や、イサアクは早くも匙をちょろまかして自分の長靴にかくして仕舞ひました、グリンボウムはちらりと是を見て「私は今日御來會の諸君の爲めに松旭齋天一直傳の手品を御目に懸けます、ようく御目を止めて御覽じろ玆に一本の匙が御座います是を私が内隠中へ蔵ひチヤンと鈕を掛けますと匙は何處ともなく消えてなくなります、若も皆樣方の内何所かの靴の間から出ましたら御慰みと、是でイサアクの靴から匙を取り出され、グリンボウムは一本參りました。

▲客の遣り取り

伯林の一商人、料理店に往くに何時も同じ給仕と定め行届いた心付をして居た、或日往つた所が、見馴れぬ給仕が居て註文を聞く、

客「籐公は如何したれ、

給仕「へい居ります、

客「何故來ないンだれ、

給仕「實は旦那昨夕歌留多をやりました所が彼奴は有金を皆負けて仕舞ひまして、仕舞には御得意の旦那方迄賭けて仕舞つたンで、貴君は私のになッちやッたンです、

▲靴墨

馬鹿な愛爾蘭人が料理屋へ往つて、献立表を讀で居る客の前へ腰を掛けた、自分には献立が讀めないから、前の人の通りに註文しようと天晴名策と得意氣に控へて居る。

前の客「ソップを持つて來て呉れ、

愛爾蘭人「俺にも夫を、

客「蠣のフライを、

愛「俺にも夫を、

前の客は註文した色々を喰べて仕舞ひ、愛爾蘭人も同樣に喰べた、

客「夫から、靴墨を一寸、

愛「俺にも夫を、

給仕人「一つをお二人で何卒、

愛「いや、俺は半分では喰べ足らん、

▲小切手帳

細君「好う御座いますよ、貴君は妾を信じて下さらないンですから、

夫「だつて、お前小切手帳を見りやあ、廿圓渡したのは四五日前だよ

細君「好う御座いますよ、小切手帳は如何せ妾よりも信用があるンでしようから。

▲五歳の令孃

僕は今年五歳になる令孃と結婚しようかと思ふ。今では僕が三十五だから七倍も違ふが五年經つと、此令孃は十になり僕が四十になつて四倍となる譯だ、最う廿年經てば令孃は三十、僕は六十で僅に倍の違となるが、偖跡何年經つたら同じになるだらうか。

▲田舍者

田舍から出たばかりの男、郵便を出しに局へ往き、局員の他見して居る隙にそつと投り込んで、まんまと切手代を儉約したつもり。

▲料理屋

是も田舍者料理屋へ往き獻立表を出されて、突き退け、料理を食つてから拜見しよう。

▲エレヴエター

田舍客旅館へ來て明いてる室があるかと尋ねた、番頭は承知してボーイに三階の部屋へ案内しろと命じ、ボーイは直ぐ客を導いてエレヴエートル(昇降器)のある室へ案内した、處がお客は不承顏、私は泊めて貰ふンだから最う少し廣い、寢臺のあるのが好いンです。

▲名策

汽車で何か事變のある時は不思議に何時も一番後の車に災がある、最後の車が屹度打壞れたり、燒けたりするに極まつてる、處で鐵道會社の重役が集會つて相談をして今後最後の一車は取外して置くと一決した。

▲ビヤホール

甲「僕はいつもビヤホールへ往くと二杯宛注文をするが金を拂つた事はないよ、
乙「其樣事が出來るかれ、
甲「出來るとも給仕人が二杯持つて來たら早速一杯をグーッと飮み干すそして最う一杯を飮む男に勘定をさせる、

▲やぶにらみ

藪睨みの先生は外の人より倍の生徒を引受けても充分に監督が出來る筈だ、何故と云つてヂロッと睨められた時に誰が睨まれたか分らないから皆溫和しくする。

▲時の力

時間の力は何者をも變すると云ふが左程の事もないものだ、僕は偽造の五圓紙幣を大分前から藏つて置くが容易に使へる樣にはならぬ。

▲結婚

結婚と云ふものは鰻筒(鰻を捕るに用ふる竹筒)見たようなものだ初めは入れようとして骨を折り、入つたらすぐ出す事の心配だ。

飢饉窮民救濟婦人會

こたび鳩山春子、濱尾作子、山脇房子、髙木鎌子、古市幸子、羽田三緒子等の諸婦人發起となり飢渇に苦しむ同胞の危急を救はんとて、凶作地窮民救濟婦人會なるものを設立さる、婦人の慈善事業としては最も時宜に適ひたるものと云ふべし。其の趣意及規定は如左。

宮城岩手福島三縣の人民が昨年の凶作によつて非常な慘狀に陷つて居りますことは、私共も新聞紙上で大凡承知して居りましたが、尙親しく其縣の人に樣子を聞き、又は視察して來られた人の談をきゝまして、悲慘の度が私共の想像以上であることを知り、一層同情の念に堪へません。確なる調査によりますと、三縣を通じて救濟を要する窮民が九十五萬人の多數に上り、中には百計盡きて旣に行方不明になつた者も、數千人を下らずといふ事であります。それで、先頃は　天皇皇后兩陛下より救恤金五萬圓を下賜せられ、各地の慈善家も續々義捐金品を贈つて居られますが、此際私共婦人も傍觀しては居られないと存じます。因つてこゝに此會を起して、救濟袋といふものを作り、同情ある方々に米麥粟の類を寄附していたゞいて、之を凶作地に贈る事と致しました。お互に臺所にて少し注意致しましたならば、一個の救濟袋は一週間か十日にて充たされます。そしてこれが窮民數日の命をつなぐのでありますから、慈善としては誠に容易い、且適切な方法であると信じます。是非御贊成下さるやうに御願ひ申上ます。

規定

一救濟袋と稱する布袋（一升入）を弘く配布し之に米麥粟等穀物の寄附を乞ひて凶作地に送ること

一米は質の良否を問はざれども必ず白米に限ること

一金錢を以て穀物に代用する時は一袋金二十錢の割とす

一救濟袋は口を糸にて結び會名のなき中面へ寄附者の住所姓名を記されたし（金錢の寄附者も同樣袋に記名のこと）

一各區に若干名の委員を置き袋の配布及び取集め方を依賴する事

一委員のうち一名の宅を以て事務所と定む

一集りたる救濟袋は之を三縣知事に依賴して窮民に配布すること

史傳

北米の閨秀小說家

百島冷泉

世界周遊を爲す者、亞米利加マサチユーセツト州のアントバーを過ぎ、詣でゝかなはぬは、彼の米國南北戰爭の近因を爲せりと稱せらるゝ「アンクル、トムス、カビン」の著者ストー夫人の墓なりけり。

週遊者市人に向ひて、唯閨秀小說家の墓は何處に存るぞと問はゞ、彼等は直に頷きてその在所を教へむ。即ち教へらるゝまゝにその墓場に到れば、三基の墓相並び立てり、その眞中なるぞストー夫人の墓にして、その右方なるは彼女が最愛の夫、その左方なるは彼女が最愛の兒の奥津城なり。彼女は今愛夫と愛兒に圍れ、家庭の歡樂を夢つゝ永遠に眠る。

そもストー夫人とは如何なる人ぞ。時の頁を繰播げ數十年の昔に立ち返らむ。

＊　＊　＊　＊

ストー夫人は紀元一千八百十一年の夏、リチフキルドの質素なる家庭、ビーチヤー家に生れぬ。ビーチヤー家は米國に多かるまじき人才輩出の家にて、夫人の父ライマン、ビーチヤ氏は名高き神學者、夫人の弟ヘンリーワアド、ビーチヤ氏は宗教家としても雄辯家なる愛國者としても、思想淸新なる文學者としても米國史に不朽なる人物にて、總勢十三人の兄弟姉妹何れも愚かなるはなかりしが、天は才を與へて金を與へざりければ、一家の困窮中々なりけり、されば母ロキザナ夫人の辛勞尋常ならず夫と計りて私立學校を開き、佛語、圖畫、刺繍等を教へ、漸くその窮乏を補へり。

ストー夫人はかゝる困窮の中に成育し、然も幼くして母を失ひぬ、されど家庭並に學校敎育はおろそかならず、殊に文章書くことは天禀と見へ、十二歲の時、「靈魂の不滅は自然の光にて證明し得べきか」と云ふ大人らしき文章を書き人を驚かせしことありき、中學を出

でゝ後は、姉カザリンの開けるハルトフトルド學校に學び、後その教師となり、父レーン神學校々長となりければ、姉カザリンと共にオハヨー州に學校を開きて教育に從事しぬ。後四年を經て、年齡二十五歳の折、父の神學校の教授にして、聖經批評と東洋文學とを擔任せるカルビン、イー、ストー氏に嫁ぎて、ストー夫人となりぬ。

當時奴隷解放の聲、國内到る處に反響し、ケンタッキー州と境ひせるオハヨー州のシンシンナチの如きも奴隷制度廢止の議論熾んとなり、保護を受ん爲めにオハヨー州に遁れ來る奴隷多かりければ、父ライマン氏の神學校の如きも、その渦中に捲きこまれ、全校激烈なる非奴隷運動に加擔するに至れり。

時にボストンにありし、ストー夫人の兄弟エドウアド、ビーチャー夫人、書を寄せて奴隷の慘狀を述べ、最後に、

「妾にして若し御身程の筆力あらんには、必ず奴隷主義の惡むべきを、全國民に感せしむる如きものを書き侍らんに」と書き添へたり。

ストウ夫人は小さき客間にありて、聲高に此書狀を讀みけるが、讀んで右の句に至り、

「書かむ、必ず書かむ、命あらば必ず書かむ」と誓ひける。

千八百五十一年、夫人四十歳の時、一日教會の聖晩餐式に列なり居たりしに、かの小說「アンクル、トムス、カビン」の趣向胸に浮び出しかば、急ぎて家に歸り、叔父トム臨終の一段を書き上げたり、而してその子の十歳と十二歳とになれるを、呼び寄せ、讀み聽せけるに、息子等は淚を浮べつゝ、

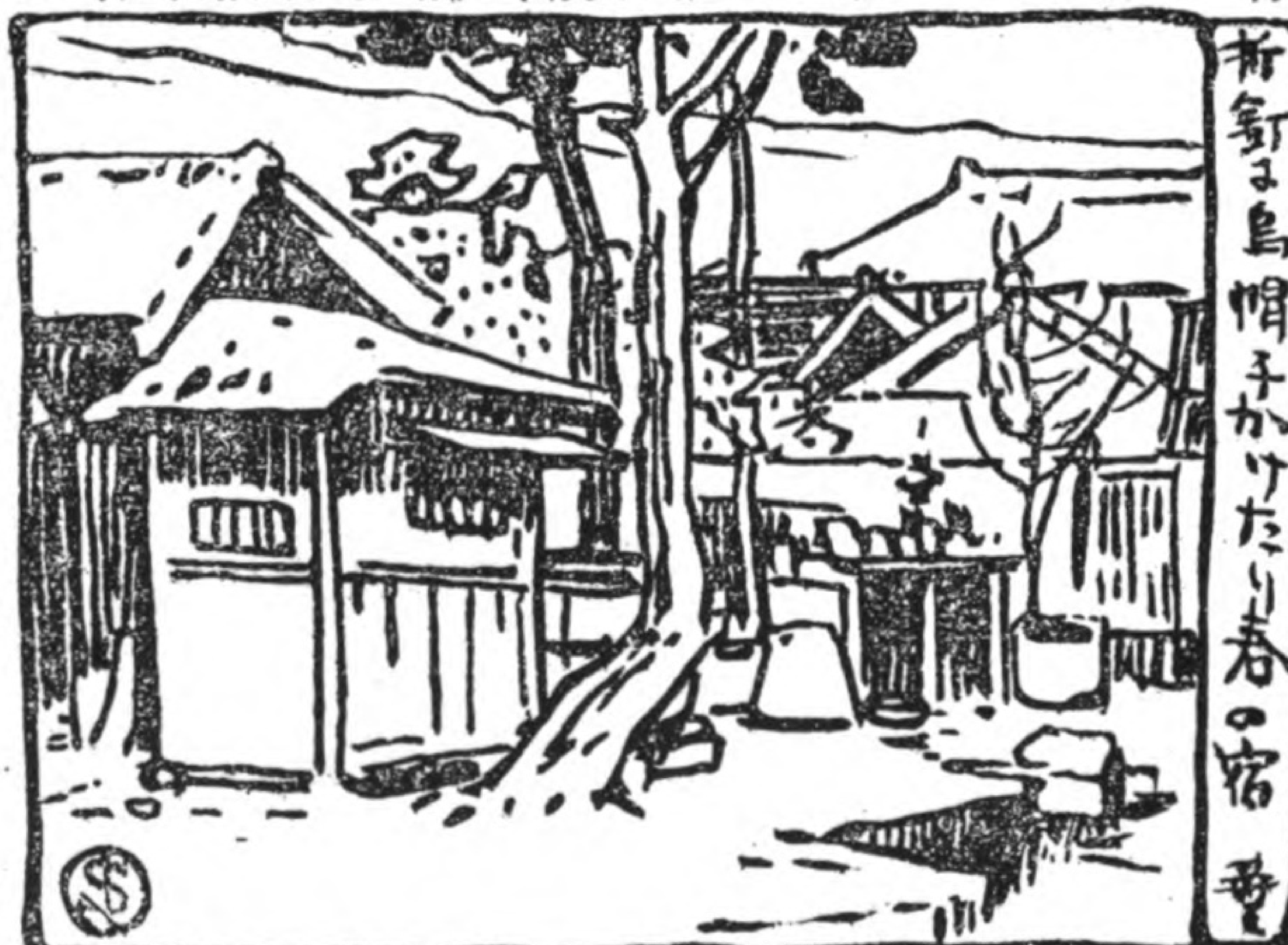
「母樣、あの世界中に、奴隷制度ほど惡いものはありませんね」と叫びけるとか。

やがて夫人は千八百五十一年の六月五日より「ナショナル、エラ」と云ふ新聞に三ケ月の豫約にて筆執り始めしが、書けば書く程に氣は立ち心は燃え筆は進み、終に十ケ月を經て漸く完結するにいたりぬ。

是ぞ「アンクル、トム」てふ黑人を主人公として奴

隷主義の惨狀を述べ、非奴隷主義の公明正大を證せしもの、世界の文學に、千載不朽の一產物と數へらるゝ「アンクル、トムスキヤビン」の小說なりける。

今この小說の梗概を述べん。米國ケンタツキー州の一小市にセルビーと稱する豪農あり、主人セルビー氏は情ある好紳士にして其妻セルビー夫人亦慈愛に富む基督教信者淑女の好標本なりき、されば養はれたる黒奴は當時に在りては過分の快樂と幸福とを享有し皆喜悅の中に其用を爲すを樂めり、トムは亦此等黒奴の一人にして性忠實聰明能く業を勵み技に熟す、而して夫人の教導の下に一度神を信じてより其才德更に一層



の光彩を發輝せり、彼はセルビー氏に代りて園圃を管理し又黒奴を監督す、彼はセルビー家の老臣にして兼てあらゆる家眷の慈父たり教導者たり。若主人なるマストルジョージ初め家眷一同は彼を呼ぶに爺トムを以てせり彼に老妻あり婆クローと呼ばる、亦熱心なる信者にして其厨房料理の事に至ては頗る得意とする所。

茲に又セルビー夫人の侍女にエリザと稱する黒人の少女あり、美にして且つ才、夙に夫人の爲に愛育せらる、長じて寵愛益々厚く遂に夫人の媒酌を以てジョルジと呼ぶ黒人の怜悧にして敢爲なる壯夫に嫁せり、ジョルジは隣村に住む殘酷粗暴なるハリスと稱する人の奴隷なり、此の若き夫婦の悲壯なる經歷はアンクルト

ムのそれと實に此著の一半をなすものなり。

好紳士なるセルビー氏は亦企圖心熾なる人にてありき、されど其企圖計畫は常に粗漏にして多くは失敗を重ぬるに過ぎざりき、やがて彼は多くの負債を作れり、而してハーレーと呼ぶ奴隷仲買人は其主なる債權者にてありき、已にして約束の期限は來たりハーレーは其返濟を迫れり、彼はセルビー氏の現金支拂をなす能はざるを見、代りにトムを引き受けんことを要求せり、セルビー氏は一言にして拒みぬ、されど外に詮術もなき身の悲さは苦慮呻吟の甲斐なくして其老臣なるトムを引き渡さゞるを得ざりき、憐れ忠僕なりけるトム、一家の重きを負る老ひたるトムは今や其主人に別れ、其妻子眷族に別れ、無情なる奴隷商人の手に牽かれて、悲慘なる流浪の生涯を始むるべく去りぬ、彼は曳かれて同州ワシントン市なる奴隷競賣所に至り、此にハーレーの手に購はれたる三人の黒人と共に更にハーレーに曳かれオハヨー河に浮んで南方諸州へと下りぬ、同船中セントクレアなるルイシアナ州の豪農あり、彼は北部諸州の漫遊を終へエバと呼べる一少女を携さへて方に歸國の途にあるなり、偶エバ誤つて河中に陷り既に溺れんとしたるにトムの救ふ所となれり、セントクレヤ之を德とし終にトムを購ひニユオーレアンなる家に歸れり、此處に温良にして而も磊々たる新主人と天使の如きエバとの下にトムは圖らずも好生涯を送れり已にしてセントクレヤはトムが忠誠篤實の性を持し而して獨り妻子に別れて異鄕に流寓するを憐み、其自由解放を約し將に放免せんとする前數日遽に變死を遂げたり、其遺妻固より無情曾てトムの約を履まんことの願を聽くなし、彼は乃ち他の奴隷と共に競賣に付せられ、遂にレーゲーなる殘刻なる主人の手に落ちたり、あはれ彼は九皐の天に擧げられんとして端なく八熱の地獄に墮されたり、彼は携へられレッド河を溯りて其綿畑に至りぬ、爰に彼は死の蔭にさまよひつゝ虐待酷使に半ばは墓中に在る如き同胞黒奴の間に處して同情の熱涙を灑ぎ、慰藉と奬勵とを頒てり、而して其仲間に酷薄なれと迫る主人レーゲーの命を奉せざりしとの

故を以て無怯の苛責を受け殆ど半死半生の態に傷けられぬ、瀕死數日偶舊の若主人なるマストルジョージが彼を購ひ戻さんとて來るに遇ひ滿腔の喜悅を以て其の殉教者的の勇氣と堅德とを維持し、樂しき天國に覺むべく眠りぬ。

他の一半エルサ、ジョルジの經歷は唯の客役に過ぎざるも能く一部奮鬪に於る敢爲血氣の青年黑奴の心情を寫し其眞摯楚々として人に迫るものあり。

これその梗概なり。

後一册の小說として出版せられしが十日を經ざる中に忽ち一萬部を賣り盡し、一年に百二十版を重ぬるに至りぬ。然も米國



のみならず、英國倫敦に於ても半年間に三十版を重ね、又同市の六大劇場にては同時にこの演劇を興行するに至れり、而して一年を經過せざるに無慮三十萬部を賣り盡せりと云ふ、尙其他二十ヶ國の語に譯されるに至れりとか。

ストー夫人は主人の死後コンチカットのハートフォードに閑居し、靜かに晩年を送り、千八百九十六年八十五歲にして逝きぬ。かくて不朽の夫人はアントバーにぞ永遠に眠りぬ。

◆入場料

片眼の男安く芝居を見やうと思ひ木戸番半分しか見えないから半額で好からうと云ふ、木戸番 半分どころか片眼の人は二人前だよ、何故と云つて二度宛 はきつと見るはづだから、

世態

適當なる内助者を得ざりし人の一生

井原西鶴

態飛脚をもつて一書令啓達候、其元いづれも御堅固に御座なされ候や、今になつて生國御なつかしく存候、私儀わかげにて京都の住居のぞみ、おの／＼の御異見きかず國元を立のき、十八年罷過申候へども昔しの事わすれ申さず候、さぞ／＼置去に仕候女房ども我に恨み申べく候、それゆゑ兩三度まで暇の狀くだし申候も、無用の心中を立、緣にはつかぬ事に候、惣じての女、をとこを持申事一生の身過づくに御座候、此方にはふつ／＼とおもひ切申候、是程つらく申候男に何とて執心殘し申候や、此段々よく／＼御申きかせなされ、いまだ若いうちにかたづき候が其身のためとぞんじ候、一たびかたらひなし候事なればあしかれとはぞんせず候、兎角我等あき申候はつね／＼悋氣いひつのり候に、ふつ／＼と覗見る事もうたてく、入緣(入婿)のまゝならぬは捨置き、爰元にのぼり獨りも暮しがたく、四條通かはら町のほとりに錢見世（兩替店）を出し、でつち食燒女三人口をこがまへに、もうけもしれぬ身過(生活)とぞんじ、年中の始末第一薪の高い所なれば、箸よりこまかに小刀割の黑木爪に火ともすとは此事に候、朝夕の鍋釜もそれ／＼に仕入置て、さりとては尻がるに御座候、關東の釣鍋に大束くべて二時ばかり燒ども、ものゝにえ不申候を、處々とをかしくぞんじ候、其もとの下女一人の喰物にては、京五人はゆるりと夜日をくり申候、人の世帶程さま／＼替るものは御座なく候、其地にて生鰯を一錢に十四五も賣れば、下司どもの口へも一度に十ばかりもかしらながら燒喰候、又都にてはちいさき干鰯を一錢に十六七にも當るを、一人に三ツあてがひに燒て、生醬油につけて下女さへ此かしらはくはず、何事もきやしやに

世をわたれば、女は上がたにて然も手業にゆだんなく、大かたのはしり夫婦は銘々過(共稼ぎ)いたせば、女房持も勝手づくに罷成候とぞんじ、寺町の白粉屋の娘かたちも十人なみなれば、是をよびむかへしに其元の女房どもとは格別違ひ、遊山夜あるきに關はず嘗てりんきいたさぬを、何とやら合點ゆかず見あはせ候うちに、我等を嫌ひ暇乞申事たび〳〵に候、是は男の口惜くぞんじ惡しと引付置申候へば、けがのよしにて椀皿箱を打ち割り、作病しての晝寢、錢讀すれば長百づゝつなぎてそんをかけ、香の物桶の鹽入時をかまはずあたら瓜なすびを捨てさせ、



ありあけ(行燈)に灯心六筋七筋入てかゞやかせ、傘はほさずに疊み、門淨瑠璃に鍰米をとらせ、毎日湯わかして水へ入るごとく、手にも足にもさはる所にて費え、是もつもりて身體のさはりなれば、一日も置がそんと分別して埒を明申候、其後思案して兎角年の行たるが世帯の藥とぞんじ、此望み人を頼み申候に、幸ひ六角堂の門前に順禮宿の娘、男に死別れて戻りなるが、彼の方から二十七と申せば、三ッ四ッ年かくしてから三十の内外の女と見定め、いかにしても風俗のよきにほだされ祝言いたし候へば、おもひの外ふるい所あらはれ、脇(他)にて仔細し

る人にたづね申候、今三十六になる娘あり、是は十七の時の子なれば今年五十二か三かといふ人御座候へば、扨も大きなるかつぎ物と次第にうるさくなつて尻目にかけてためし見るに、毎日の仕事に白髪をしのびしのびにぬく年元堪忍ならず、物入を無にしさつてのけ申候、それより後御所がたに勤めし女臈衆（御殿女中）あがりとて、形にいふ所なく心もやさしく我人の氣に入り、是はよきたのしみすゑ〴〵までもとおもひしに、さりとは世間の事にうとく秤目しらぬは斷りなるが、擂鉢のうつぶせたるを富士をうつせし燒物かと詠め、つるべ取を小舟のいかりかとふしぎさうに見ればましてや、五合ますなどはしらず候、是では小家の臺所あづけられず、わかるゝ事かなしく惜く候へども是も隙やり申候、その後又烏丸の屋賃七十目づゝ居宅の外にとれる、いへ屋敷の有後家の方へ取持人ありてゆきしに、外に隱居の叔父叔母これのみならず妹の姪のとてかゝりもの八九人も御座候、是さへむづかしく存候に、家に付たる借銀十二三貫目、一生濟ます事あるまじきと存じ、爰もすこしのそん仕りて出て歸り申候、此後竹屋町のふるかね屋の娘、うまれつきも人並にて敷金三貫目付て、夏冬の物もさむからぬ程御座候とて、十分一取仲人が肝入是は仕合と呼入申候へば、月に二三度で亂氣（發狂）に成て、丸裸にて門に飛出る事迷惑いたし、其まゝおくり歸し申候、爰元女の隨分たくさんなること御座なく候、我等も十七年の中に二十三人持替見申候に、皆おもわく御座候て歸し申候、我すこし御座候金銀は此祝言事につかひ込み、只今は手と身ばかりに罷成候、もはや女房持申候力も御座なく候へば、竹田通りの町はづれなる伏見に、ちかき裏屋住ひして菅笠の骨をこしらへて、其日ぐらしに扨も死れぬ浮世に御座候、是程かなしき身に罷成候へども、其元の女にみぢんも心殘らず候はよく〳〵の惡緣に候、いよ〳〵此むごき心底御物語あそばし、はやく緣付いたし候やうに賴み申候、京も田舍も住うき事すこしもかはらず、夫婦はよりあい過（寄合世帶）とぞんじ候、今の身にくらべてはむかしの仙臺の住所

ましと存候、都ながら櫻も見ず涼にゆかず、秋のさが(嵯峨)松茸も喰ず、雪の中の鰒汁もしらず、やう〳〵鳥羽に歸る車の音をきゝて都かと思ふばかりに候。はるばると京にのぼり女房さッて身體つぶし候、はづかしき事に候、かならず〳〵他人にはきかせぬ事に候、かさねては書中にても申上まじく候、我等死だ者分になされ御たづね御無用に候、若命ながらへ申候はゞ坊主に罷成り、執行にくだり可申候以上。

是は元祿の文豪西鶴翁の文反古中の一節なり、仙臺の人妻を置去にして京都へ上り京都にて種々なる女と縁組したれど一人も思はしきものなく、婚禮入費に身代を潰して貧窮となりたる懺悔を故鄕の知人に知らせやりたる文なり、文は二百年前の消息文體にてところ〳〵意味の明瞭ならざる所あるも、よく世態の有樣を描き出して詳細見るがごとし。世帶にくらき女を娶りし男の苦勢することは今も昔しも變りなき事なりと見ゆ。

少女より見たる其の父母

式亭三馬

△彼等は正月とお雛樣を唯一の樂となせり
△彼等は三味線と踊を唯一の學課となせり
△彼等の衣服に對する觀察は如何
△彼等は如何に其の父母の擧動を見るべきか
△如何に都會生活の少女の觀察眼の鋭敏なるかを見よ

としのころ十か十一ばかりの小娘こましやくれた形にて二人きものを着ながらはなすをきけば　お丸「お角さん。お角「アヽ。おまへ此あひだはお稽古がお休でよいねへもかへ。わたしもね。お稽古のお休が何よりも〳〵最う〳〵一イばんよいよ。それだからお正月の來るのがお娯しみだよ　丸「アヽ、ネヱ。お正月も松が取ると不景氣だねへ。もつと。いつウまでも松をとらずに置けばよいのに、何所の内でも直さまお取だねへ。否だつちやアないよ　角「アヽ、お前はね。お正月がよいかね。あのウ。お雛樣がよいかヱ　丸「どつちもよいよ

角「マアどつちか一ッお云ひよ　丸「マアお前お云ひよ　角「わたしも兩方よいよ　丸「それお見　角「そんならね、お丸さん〳〵毬と羽根ではどつちがよいエ　丸「毬と羽根でかへ　角「ア、　丸「どつちもよいがね。羽根はお天氣が惡いとつかれねへから毬の方がよからうか　角「イ、エお天氣が惡くてもね。私はお藏の前でつくからよいよ。お藏の前はね。高アく家根が拵てあるから　丸「わたしの所には藏はないものをトいひながらふところから手まりをとり出し「これ御覽。お屋敷のね。伯母さんの所からね。お年玉にお呉れだよ　角「よくかゞッたねへこれは板毬かエ

丸「いゝへ疊の上で。よヲくはづむよ　角「おまへの伯母さんは能伯母さんだね。そしてお前のおッかさんも氣がよいからよいがね。私のおッかさんは嚴いからむせうとお叱りだよ。まアお聽な。朝むつくり起ると手習のお師さんへ行てお座を出して來て、夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古にまゐつてね。内へ歸つて朝飯をたべて踊の稽古からお手習へ廻つて。お八ッに下ッてから湯へ行つて參ると。直にお琴のお師匠樣へ行つて。それから歸つて三味線や踊のおさらひさト品内いゝなきらずにスッ〳〵といひながらつゞけてはなすこれすなはち小娘の聞くせなりあすんでね。日が暮れると又琴のおさらひさ。夫だからさつぱり遊ぶ隙がないから。否で〳〵ならないはな　其内に。ちイッとばかりわたしのおとつさんは。いつそ可愛がつて氣がよいからね。おつかさんがさらへ〳〵とお云ひだど。何のそんなにやかましくいふ事はない。あれが氣儘にして置ても。どうやら斯やら覺えるから打遣て置くがいゝ。御奉公に出る爲の稽古だから。些と計覺れば能とお云ひだけれどヲ。おッかさんはきついからね。なに稽古する位なら身に染て覺ねへちや役に立ちません。女の子は私のうけ取だから。お前さんお構ひなさいますな。あれが大きくなつた時こうかい(後悔)とやらをいたします。お前さんがそんなことをおつしやるから。あれが。わたしを馬鹿にして。いふ事を聞きません。なんのかのとお云ひだよ。そしてね。おつかさん幼い時から無筆とやらでね。字はさつぱりお知でないはな。あの子。山だの。海だのとある所の。遠の方でお產だか

ら。お三絃や何かもお知りでないのさ。それだから。切てあれには。藝を仕込ねへぢアなりませんと。おつかさん一人でじや〳〵ばつてお出だよ。ア、。本統におとッさんの事をどら殿と計お云ひでね。いつそお憎がりだよ。わたしはそれだから稽古はなんでもする筈だが。お婆さんのお言ひには。お丸は病身だから手習と三絃計で外のことはさせねへが能。其代に女は縫物をよく覺させるが肝腎だと此間は子。縫物をいたすよ。おまへもお仕か　角「いいへ　丸「わたしは此間も子。人形の衣を二ッ縫ました。アイ。アレアレお角さん〳〵　トみゝへ口をよせて中にながしてゐる女を横目で見ながら小聲でさゝやく　アレ。あのおばさんを一寸お見。子が三人有ながら浅黄縮緬の裁をかけてさ　丸「オヤほんにねへ。若い作りだね。あのアレ。ぐるり落に結居るおかみさんの頭を御覧かへ　角「イヽヱ

丸「ほんにかへ。私のおッかさんは何でも知つてお出だから、些でも三絃の弾き様が違ふと直にお叱りだよ。私のおッかさんは七ッの歳に、踊でお屋敷へお上りだと。それだからね。地赤だの地白だの地黒だの紫縮緬の裾模様だの。惣模様だの大振袖だの。帯は黒天鵞絨だの。厚板のや。何角を。お長持に入て。たアんと持てお下りなけれど。私のおとッさんが道楽だからね。皆お亡しだとさ。ア、。お婆さんがわたしにお話だよ。夫でね。お婆さんがお



丸「黒油で禿つてうを隠してさ　角「アレ小さな聲をお仕。きこえては悪いよおまへ　丸「サア參らう。ヲヤ。お前の袂から何だか落ました　角「ホイ（ト拾って）ヲヤ〳〵髷結ひの裁だ　丸「一粒鹿の子かヱ　角「ア、　丸「麻の葉もよいねへ　角「あれは半四郎鹿の子と申すのよ　丸「私はね。おッかさんに強つてね。あのゥ路考茶をね。不斷着にそめてもらひました　角「よいねへ。わたしはネ。今着てゐる伊豫染を不斷着にいたすよ　丸「おまへのも太織かヱ　角「ア、是はネ。田舎から掛のかたに取つたから安いとさ。ア、おとつさんがいつか中お云ひだ（トくじりを明けながら）丸「お角さん後にお出な。歌がるたを取て遊びませう　角「ア、參らう（ト出てゆく）

老婆より見たる若き女

式亭三馬

△彼等の世帯説法が如何に其の下婢及び嫁に對する頂門の一針となりしよ

人がらのよきかみさま水舟のわきにて小桶に水をくみゐる。これはそらおがみにて願づかいもあそばせづくしなり

●お袋さんお早う入らしやいましたね　▲六十ちかきばあさま　ハイ是はしたりどなたかと存ました。まづ明ましては結構な春でございます　●ハイあなたにもお揃ひ遊しまして御機嫌ようお遊ばし　▲おまへさんにもお揃ひなすつて　●ハイ有難うございます。皆かはりますこともございません。ホンにお孫が疱瘡を遊ばしたさうでございますネ。それでも至極お輕い御様子で別してお愛たう　▲ハイサお前さんネ。暮におしつめて人手はございませずネ。大きに苦勞致ましたが。仕合で輕うございまして。ホンニホンニ御方便な物でございます。母親がお前御ぞんじの通りでネ。疱瘡が重うございましたから。どうかと存じましたら。案じるより産むが易いで顔にはざつと五粒ばかり。手足に漸々算るばかりございました。あれを思ひますれやア神佛のお力もございますのさ。馬橋の萬満寺の仁王様のお草鞋をお借り申て。丁度三年になりましたが其御利生でございますのさ　●それはホンニありがたい事でございますね私も當冬から一寸

お見舞ながら。お歳暮にもあがりますのでございましたが。御ぞんじでもございませうが。娘をお屋敷へ上ますので。何か世話々々しうございまして。存ながら御無沙汰いたしました▲ホンニさやうだッけね。お芽出たうございます。お宿へお置なさるとお心づかひだから夫がようございます。タシカお十六か子●ハイさやうでございます▲いへもう近所の若い衆が騒々しうございますから。何事もない内に御奉公のことさ子。お屋敷はどなた様でございますエ●ハイやはり私のお勤め申た旦那様へ上ました▲それはホンニ御重縁で別てお芽出たうございます●此まあお寒さはどう致たものでございませう



子▲さやうさ今年は餘寒が強うございまして。あのまあ雪を御覧じましよ●さやうでございます。雪のせいかして兎角病人が多うございますよ▲さやうさ。いつも寒明にはちッとづゝ病ひ勝でございます。シタガお前さんはいつも御丈夫でございます●イエモウ是でも病身でございますが子。本町二丁目の延壽丹と申すねり藥を持藥にたべます所爲か。只今では持病も發りませず至極達者になりました▲ハイそれはお仕合せでございます。あの延壽丹は私の曾祖父の時分から名高い藥でございますのさ。あれは一丁目でございましたッけ。私も暑寒にはたべますのさ●ハイ只今は二丁目の式亭で賣ます▲エヽ何か子。此頃はやる江戸の

水とやら白粉のよくのる藥を出す内でございませう●ハイ左樣でございます。私どもの娘なども江戸の水がよいと申して化粧のたびにつけますのさ。なる程ネ。顔のでき物などもなほりまして。白粉のうつりが奇麗でようございます▲私どものりんが田舍育だけに根から白粉がのりませんが。成ほどよくのります。嫁などもつけますがネ。翌の朝。顔を洗つた跡で。ちよいと紙で拭ますと。薄化粧でもいたしたやうに。きのふの白粉が出るさうでございます。種々な調法な事が出來ますよネエ●ホンにあなたの女中衆。我勢に能働きますネ。水ぎれの時にも擔桶で水をかつがれますが。さつさつと氣味のよい人でございますネ。私どもあたりの三などゝ申ては。意久地がなくて世話ばかりやけますがネ。夫れに此間は風だと申て臥つて居ます▲それは御不自由でございませう。女中衆と小僧の鹽梅の惡いのが一ばんわるうございます●ハイサ夫にあなた。兎角お藥が嫌でどうも成ません。隨分臥つて居るも病なら致方もございませんが。御膳をたべて。そして寢て居れと申つけますが。替たもので何の奉公人も兎角さう致さぬものでございます▲ハイさやうさ。奉公人根性とやらでお飯をたべては寢て居にくいか致して。どこのもさやうさ。達者な身でも一かけたお飯をたべねへと氣色が惡くなりますのに。ましてや病氣の時は。それだけに養生を致たが能うございます。つまる所は面々の損といふ所に氣が付ません●イエモウいかい事人も遣つて見ますが。遣ふではございません。遣はれるのでございます▲ホンニ去年まで居つたお三どのは至極柔和に見えましたツけ●ハイあれは久しく年季に置ましたが。相應な緣がございましたから。かたづけて遣しました▲それはよくなさいましたネ●今度のはがんさい者でこまり切ます。叱ればあたけちらして物をこはしますシ。だませばつき上りが致す。あのモウ顔付をするのと。ふて寢を致すのが。第一にわるうございます▲イヽエサ。私どものりんめが。やつぱり左樣さ。大の差出もので。口をきけば手もとがお留守になります。朝飯を仕舞つてそこらを掃まはすと。二階へ

上つて髪に半日かゝります。お晝の仕度を仕やよとい
はぬ内は。物干へ出でむだ口をたゝいて居ます。毎日
しれた事に世話をやかせて。嗁ても笑つてもせねばな
らぬ事を骨惜をした物さ子。サアおまへさん。水を汲
候と申て井戸端へ
出ると。ちよつ
と一手桶提て來
るのも漸一時
かゝります。
其筈てござい
ますはな。お
長屋中の男衆
を對手にとち
狂ふ隙には。同
じ女中達と寄湊て内の事を謗はしりさ。此間も何をい
ふかと存て雪隱の蔭で聴て居たら。先の主人をほめち
ぎつて子。ナンノ世界中が白壁造りだ。三月が來りや
おさらばさ。お願申ますと手をついてもこんな不吉な



内に居るもんか。他人宿に雑用を拂て。まごついて居
るには増だから居てやるのだ。なんぞと太平樂さおま
いさん。ホンニ〳〵面の憎さ〳〵としたことが。子エ
まアさう申ますはな立聴をすると三尺地の下の虫が死
ぬとまうす
が。いらざる
罪を作ります
のさ●ハイサ
きけば聴腹で
つい一言もこ
とを申ます
と。口三絃で
いけもしない
鼻唄さおまへ
さん。夫に又私共も直ではございませんが。鳶の羽
をひろげた様に鬢を出して。あの貌へべた〳〵となす
りますから。半襟は白粉に染ッて地がわかりまんはな。
賤しいお話でございますが。十六錢や廿四錢の紅粉よ。

二日か三日になめてしまひます。夫につけても元結油も麁末に遣ひますから。孔方の遣ひ方が荒うございます▲イエモウ何方も同じことさ。着替もないくせに能物好で。釜元を働くにもなけなし殿で。やつぱりおしやらくをしたがりますから。おのしは釜元を立まはる内は古い着物を着て。足袋も古いのと履替やれと。毎日毎日口の酢くなるほど申がきゝません。さうしては新しい足袋も前垂も濡臭つたので座敷をのさ〳〵踏で歩きます●其前垂も子。四尺裁ッて貰つて二布にいたせばつい通りでよいのに。七尺も買つて三布にいたすから。サア紐も裁端も集めて縫ふ氣はムません。前垂地も松坂はいやだとかまうして廣棧を買ますから。紐も茶鹿の子の縮緬を幅廣に仕立て大きな尻へ巻つけます。どこの國にかおまへさん。茶屋子屋の女中衆ではなし。商人家のお飯焚が。それでは濟ません▲さやうさ。ホンニ能く似たお話がございます。私どもの嫁が湯具を縮緬の中幅を二布にいたして。居るにも立にもびら〳〵と致すから。貴さまはあまり無躾な人だと。女のゆもじといふものは白木綿二布に規した物で。膝から下へ下る物ではない。上つ方の御奉公する女中衆を見さつしやい。羽二重だらうが絹だらうが。皆短くあそばす子。長ゆもじといふ物は下鄙だ人のする業でござるツサ（中略）萬事長しやかだから長ゆもじなどといふ事はないといふ事だ。早々止さつしやいと申て異見いたしましたが。それをも知りつゝ。りんの馬鹿めが。幾布にいたした事やら。木綿の長ゆもじを。ちやんとしめましたはな●いかな事でもヲホ……●▲ヲホ……▲あんまり呆れて叱るにも叱られませんアハ……●イエモウほんに慌た物でございますよ。着物なども手まめに洗濯でも致て夜なべに繼で置けば。さばさばとした布子も着られますのに。穢たらその儘に葛籠の隅へおし込で置ますし。兎角針さい持ば晝も居眠ます。ホンニ〳〵仕様仕方のない物でございます▲アハ……。ホンニ〳〵了簡のない物でございます。

これは文化文政の頃に其人ありと知られたる戯作者式亭三馬の浮世風呂の一説なり、世帶に未經驗なる若者のしぐさを頭に霜置く六十路の老婆の口より言はせたるものなり。記者は必らずしもこれを文化文政度の婦人觀察とはおもはず、二十世紀のハイカラ女流の中にも又この種の老婆に屬しらるべき大なる缺陷のあるべきを信ず。

観察

男女學生觀問答

元祿姉さん

オホヽヽヽ厭だわね、其麽に白ばつくれてさ、角帽さん大概にしてお止しよ、何も其樣に痩せ我慢御出しでなくつても、矢つ張り御前樣方は御前さん方で、什麽したつて、式部さんとは何する譯のものじやないんですとさ、なんぼ氣まぐれの式部さんだつて仕事爲の熊公や八公になんのかんのと仰つしやつて下さる筈がないんだからね、そら、ラブとか何とかの理想とかつて云ふものは、憚んながら、金扣鈕の、カスメチックの自稱詩人の涙脆い、同情深い、角帽さんに限りますつて、お向ふの八百屋の叔父樣も然御云ひだつたわ、妾等の目からは何の彼樣いけ好かんたらしい、おたんちん野郎と思つてゝも、其處が夫れ有り難いものじやないかね。

何と角帽さん、御前さんが御云ひでも、まあ、御前樣方の近頃の容子を御覽な、紺飛白の着物に、紺飛白の羽織か何か、足袋の紺まで未だいゝさ、肌着の襦袢の袖が當節廂さん仲間で大流行する、メリンスの括つたのか何かで、紐が草色のリボンとは能く出來てるね、豪氣じやないか、夫れでもつと、不景氣なお鬚を、チックで固めて惡く云へば、まあ、目尻の處迄捻り上げてさ、ホヽヽお澄ましなさる鹽梅しきつたら鼻持ちやなりやしない、其の女らしい、優しらしい、御意氣地のなさ相な、處が、生存競爭の然らしむる所だつて、だから夫は僕等を責めるより、社會を責める方が可いとか何とかつて、お云ひだね、私等には了解らないけれど、雌雄淘汰も聞いて呆れまさあな。

其れから未だ〳〵、御前さん方の中には、しどい人があるのよ。

此間ね、一寸、用があつたんで、小石川の方迄行つたとお思ひなさいよ、ぽか〳〵として美い御天氣では

あるし、日曜ではあつたし、するもんだから、隨分彼の邊の女學校の生徒さんたちが御通行だつたのさ、すると向ふの方から、三人の矢つ張り生徒さんたちが入らしたとお思ひよ、其れやもう〳〵一層ハイカラで、二百三高地とかピラミツト式だとか御前さん方が御云ひのあの、髪ね、髷の高さと前髮とを、直角にツン出して……あゝ、ちよいと、美い容色だつたよ、色も白かつたしね、さうすると又妾の後の方から二三人の書生さんが、やつてらしたんですよ、ほらね、堪つたもんじやない、おい、山口、君に眞中のが丁度可よ、僕は右の端のにするから、君宜しく賴むよか何かつて、ワイ〳〵云つてらつしやるんでせう、して、餘んまりじやないかね、加之に、擦れ違ひ樣、貴嬢方甚麽お可愛いお口でもつて、昨晩燒芋を幾つ召し食りましたつてなんて……憎い口の利き樣だらうさ、妾でさへもう〳〵、口惜しくつて〳〵仕樣が無かつたよ、私等の知つてる人が萬一其麽失禮な言を式部さん方に申たのなら、失れや甚麽にもして謝罪らして遣るんだけれど……あのまあ、體操をなすつたり、自轉車に乘つたりなさるお元氣でもつて、何故、遣り込めておやりなさらないんだらふと、熟々歯痒ゆかつたね、全くさ、あゝだもの、仕樣も模樣もなからうじや無いか、其れや、妾たちの知つてる、書生さんでない、男の中でも、隨分とお洒落の、お飾師家の、好男子は乃公で御座いてつた風に、七五三もんかなんかで、頻りと氣障がつてる人も無いでは無いけどもね、夫でも何處か勇俠な、男らしい、爽快してる所もあるはな、ホーお滿心もいゝ加減に、……御出でなさいましたね、まあ何でもいゝさ、交せつ返さないで聞いてらつしやいよ。

這麽亂暴な人は、お前さん方の皆が〳〵さうだとは、決して云やしないがね、何にしても先づ半分よりは多いと云ひたいはね、あら、ちよいと御前さん怒つちや、厭ですよ、其麽恐い顏をなすつから式部さんが惚れては遣らないとさ、だつて、御前さん式部さんに惚れられないのは、幾何辛いか知れないつて、唯々今さうお

云ひだつたじやないか。

其れから式部さんの崇拜してる理想の人物は、下田に奥村の叔母さんだつてお云ひだね、妾にはさう聞こえたのよ、大地を打つ槌は外れてもなんてつて、幾程お威張りでも御前さんの其槌の持ち樣ではね、當らずと云へどもホ、近からずであつてさ糠の飛つのさへ可笑しい妾等の年頃なんだもの、お臍でお茶が沸けたら夫れや大笑ひだらうけれど、差當り先づ九太夫笑ひもんだね、當節柄の女學生さんに、其麼野暮のがあつたら、未だ話せるんですよ。



今の式部さんの半分はね、小説も誰やら樣の作でなくつちやと仰つしやる、雑誌類も、あの何とか式の新體詩なんかのあるのが一番面白いよと御意遊ばす、妾等の父さんや御國許の學校の先生方の仰つしやる樣な、親には何しろの國には斯うしろの、何でも戰爭でもある時は天子樣の御爲に一命を差し出さなきやならんぞなんてな事を、云て御覧な、幾何笑はれるか知れやしないよ、其樣のが道學先生の云ふ事で、もう十九

世紀の寢言なんですつて、其れも其筈だよ、妾等には何の事だか知りやしないけれど、箇人主義とか、本能滿足主義とかつて、其麽面倒な事を、式部さんが御言ひだつたはね、何の事でせうつて、何日ぞや男の書生さんに伺つたら、勝手にラブして勝手にラブを取消す事だつて、愈々むづかしいね、妾には迚も〳〵了解りやしない、之じやバイロンも何もあつたもんじやない、梅暦の作者裸跣つて段なんでせうさ。

妾の知つてる文科の角帽さんで、過日妾に這麽事御云ひの人があつたつけ、僕の友人にラブの無い者は恐らくは一人もない、而も其多くは失戀の痛苦を味はされてる、尤も僕も其のブロークンした一人だが、……

……先日〇〇誌上に載つた僕のあの小説は全く僕の苦しい苦しい境遇を書いたんです、御讀みか、慥か御讀みだらう、不可ぬ駄作ですけれど………いや僕は復活する、三十九年、年と共に大に復活するさ、フフン、バイロンの戀人は三十幾人あつたつて云ふから、何あに天才は一人位の女の爲に、…………併しね君、以前の學生は隨分吉原、新宿なんて處で失敗したものだが、近頃は其方面の何は餘んまり聞かないだらう、其代り………其代りが可笑しいね、其代り何てんでせう、御前樣がお云ひ迄もなく蛇の道は蛇で、お知りだらう、妾、其處まで、聞きやしなかつたがね。

何しろ、其麽具合じや什麽も妾の考へでは、其ら何とか云つたつけね、女性でもつて短詩とかの奇才だつて、お前樣方もつひ此間まで、痛く有り難がつて涙をお翻しの、あの何とか云ふ女よ、あの人を式部さんの或る方は崇拜してまいかね、然でないと、將豈小野小町じやあるまいし、クレオパトラでは無からうし、然だ、然焉よ、だつて大阪では、あの亂れ髮の著者の崇拜者が餘程多いと云ふじやないかね。

夫れでも何だよ、先年或る女學校で倫理の先生が、生徒さんに、生徒さんの、崇拜してる人物を御聞きになつた事があつたらね、其半數はヂョアンダーク、尤も戰爭の前だつたから其所爲もあつたでせう、其外にも色々あつたつて事よ、其れにはお前さんの御云ひの下

田さんやなんか、大勢の中なんだもの、三人や五人あつたにはあつた相だけれど、中には佛陀の光明や耶蘇の愛を仰ぐなんてね、其樣事お云ひの人もあつたとさ、如何だね、頼母しいじやないか、而したら其時先生樣が、有仰しやるには、實は私は皆さんに崇拜する人物はないと云つて貰ひたかつたのだ、全體人間と名の附く者は、神にあらざる以上は、皆必ず多少の缺點があるものだ、崇拜するとなると其缺點まで模倣する樣になるから、甚だ感心せぬ、何も自分の理想の進んで行くのに、人物を崇拜しなきや向上して行れぬと云ふ譯はあるまい、況んや諸君の崇拜してる人物は果して崇拜する丈の價値ありや否やの疑問あるに於てをやとか、何とかつて、卓を打つての御説敎なんですつて、あら、妾、這麼に有り難いんだもの、お説敎つて云ふは、此の位有り難い事を生徒さんにおつしやるてなあ、あれ程の學校を御創立になつた先生丈あるじやないかね、だからさ、彼の學校の生徒さん、千數百名と云ふものは、必定崇拜してらつしやる方なんてありやしませんよ、無いに定まつてますは、して見りや、他の

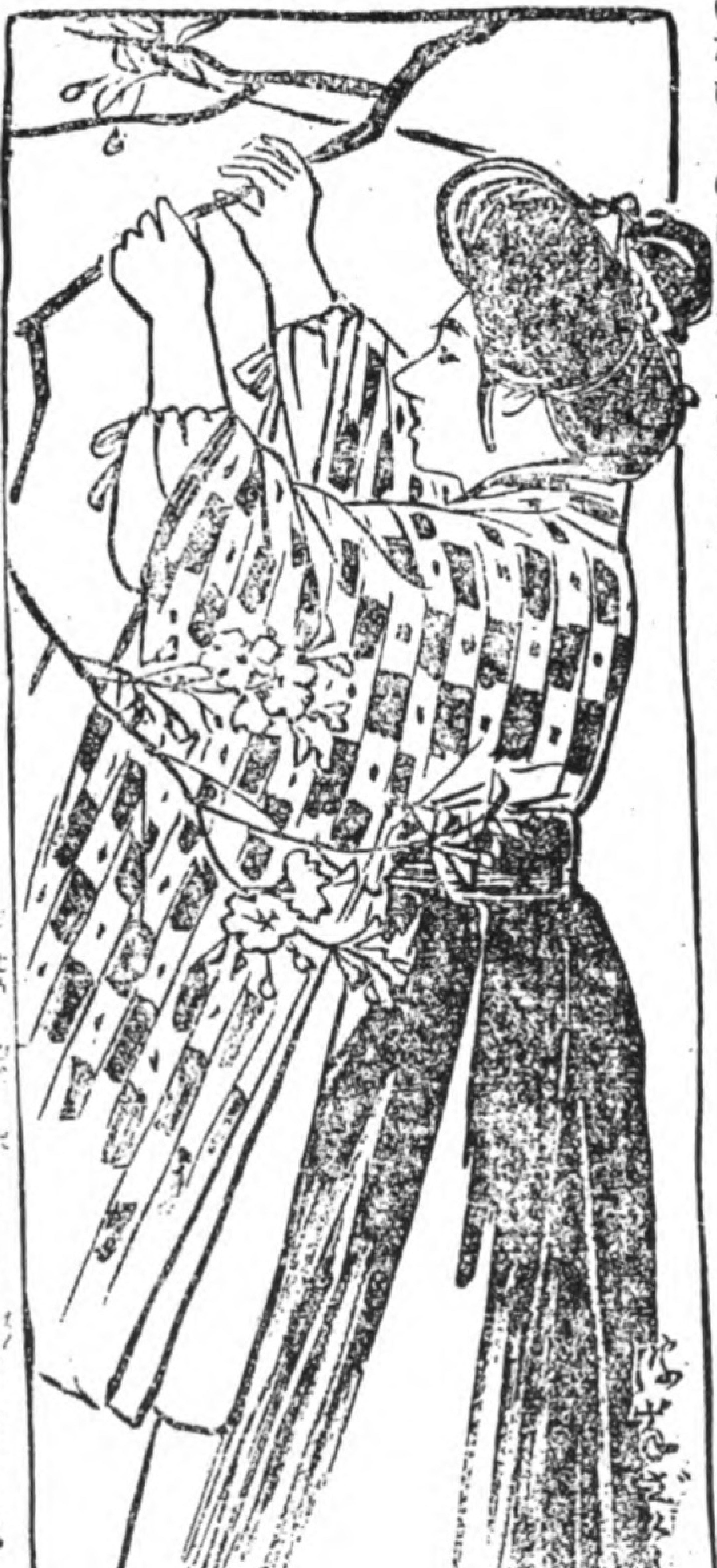


女學校なんて、……………おや前に云つたじやないか、まあ、了りのお惡い人だね、此人は、ホ、、、じやあ、男では角帽さんだつて、妾が而云つたら嬉しいの！

一體何だよ、學生の方は女でも男でも什麽して、ああ生意氣なんだらふね、實際妾等は癪に障つてならないよ、其れや人と云ふ者は大きいなり小さいなり、皆之で天狗の者だらふけれど、高が親のオホ、、、まあいゝのよ。

學問がある、夫れで妾等より豪いとお云ひのなら、何も博士や學士さんが高利貸の前にペコ〱頭を下げろ樣な仕末をしなつくつても、可かり相なもんじやないか、三井岩崎の旦那が大學者と云ふ譯でもなし、亞米利加のカーチギーが大發明者と云ふでもなし、憚んながら妾の父さんなんかは、職業と云つたら、大工、お前樣方の目から御覽なら、賤しい仕事だらふさ、けれどね、何やら樣の學問のある豪い方がなさる樣な、御上の目を掠めて、稅金の出し澁りをする程未だ貧乏はしないよ、未だね、妾を學問や金や身分の處へ御嫁にやる程毫磔はしないよ、所詮は五十年、學問なんて如何程の價値があるんですよ、學問をして豪くなつて、名を後世に遺す爲ですつて、ホ、、甘い事をお云ひだね、御前さんが如何程勉强したら、靑史幾ページに筆を染められる事が出來るんですの、遺す段になりや石川五右衞門だつて、今に名が傳はつてるじやないか、腐す日になりやソクラテスの哲學說だつて、間違つてるつて御前樣此間御云ひじやないか、學校を卒業したつて、直と二頭引の馬車に乘れると云ふ譯ではなからふし、なんぼ〇〇〇學校の卒業免狀があつたつて、そうそう高等官や外交官の妻さんにはなれないでせう、親御から澤山學資を注ぎ込んで貰つて、御自分の御手じや、何一つも出來す事も出來ず、夫でさう、餘り大きな口を御利きでない方がいゝよ、全くお前さんの御爲めだよ。之も文科の生徒さんでね、失戀家の一人なんでせう、其人の鼻息の荒さつつたら、什麽も〱御話にならんよ、てんで、頭から、私等の話なんか平凡だつて耳にも懸けては下さらぬ、其れでつて這麽無數

育者を捉まへては色んな面倒な事をおつしやる、感心して聞いて涙を翻さないつて、女の癖に同情がないと、駄々をお捏ねなさる、欠伸もしないで、温和しく聞いてゝも、適當な御返事が出來ないつて、之だから、明治の教育を受けないものは、から話せないとお怒りなさる、夫れやもう、餘つ程ね、オホヽヽ學問のある豪い方なんだよ、其方が妾に僕は什麼しても、今年の中には傑作を出して大家にならなきやならんつて初終お云ひなんだらう、其れは御前様去年の十一月頃だつたからね、妾が何にも知らなかつたけれど、だつて御前さんもう直御正月じやないかつて云つたのよ、なあに、今年駄目



なら來年の中には必定大家になるさつて、甚麼傑作を御出しなさらふつてのだか、妾たちには分明つこはないけれど、可笑しくなつて來たから、其麼吝臭い事を仰つしやらずと二三年の中に是非傑作を見せて下さいなつて、妾が云つて遣つたのよ。オホヽヽ、だから、妾お前さん方の大體の理想つてものを當てゝ見やうか、ほら、御前さんが何日も御歌ひの醉うては枕す美人の膝、醒めては何だつけね、そう〳〵握る天下の權、とかつて、あれが御前様方の理想つて云ふもんだらうね、所詮そうなんだらう、そら御覧、當つたもんだから、彼様顏をしてさ。

さ、もう、いゝから、其麼に、極り惡るがらなくたつて、何もね、電車の中や日比谷や上野で、御前樣方が式部さんの御尻を追ん廻してたのを、見たとも云はないし、御前さんのラブは誰さんだなんて、素破拔きもしないしね、するから、まあ悠然と御話しなさいな、あら御歸宅だつて、厭だねえ、其麼に逃げ出さなくたつて、ホヽヽ、什麼しても？何てまあ恐ろしい正直な人なんだらう、じやあね、又お前さんお遊びに入らつしやいよ。

何しろ身體を大事にして、然齷齪しない樣に、勉強して豪い人になつて下さいよ、豪くなつて御金でも澤山取つて、高等官にでもなつて御覽な、其時や式部さんでも何でも、……否ねお世話申ますつて云ふんですの、ホヽヽ、餘まりお火閤へばかり這入つて、今つから、逆上せない樣になさいましな、ハイ御免よ。

米國の七令孃（世界女新聞）

◎米國は平民主義の國なり。一平民にして一朝大統領の椅子に凭る事を得るに至る何の怪むべき所もなし。唯怪むべきは米國に於て富豪は益々富豪、貧窮は益々貧窮、其間漸次隔り行きて止まる所を知らず。ゆく／＼は國體を變化するに至るべきか。かくてルーズベルト氏は皇帝の位に陞るに至るべきか。

◎そはともあれ、紐育より受取たる通信によれば紐育に於ける富豪四百人は近頃一團體を形くり「四百」と云ふ名を付し此「四百」會員の家族中より嫁聟等を撰む事に取り決め、他の賤民の之に加はる事を許さぬ事にしたりと。

◎今其「四百」會員中の家族にて年頃の令孃あまたある中に最も才色の優秀なる者として持て囃さるゝは一、エブリーン、ムチルシユ孃性質の善良と容色の艷美とを兼たり。二、シンスイア　ラツチ孃、其母の美貌を受けつぎて艷名兩大陸に傳はる。三、カルフアード孃、最高の教育を受け數箇國語をあやつる。四、アンナ、ベスト孃近頃文學及び美術の社會に於て其名を知らるゝに至りぬ。五、ステフアニー、ド、ヌーフヴイユ孃、佛國系統の美を保てる令孃なり。六、ローレンス孃、遊技の名人なり。七、ヴエラ、ギルバート孃、ステフアニー孃の如きは佛國の名を遠近に響かせぬ。口繪の寫眞版は即ち是等令孃の小照なり

科學

吾人の衣服の目的

藤葉

吾人が今日着て居る衣服は何の目的の爲めで有るかと云ふたらば、誰しも夫れは身體を保護する爲め、寒さ暑さを防ぐ爲めと云はないものは無い、誠に其通りで何人も之れに向つて不同意を唱ふるものはあるまい。



私は今其の起源に就て順序正しく記す事は出來ないけれどもまづ大要をいへば其第一の目的は確かに身體を保護すると云ふ事から起つたのである。太古時代人間が、初めて此世界の各部に出來た時には、確に衣服と云ふものは無かつたに違ひない、他の獸類や鳥類の様に此世に生を受けた時は必ず其身體より外に何か附屬したものを持つて生れては來なかつたで有う、そして見れば太古の人民は裸體で有つた、云ふ迄もなく他の獸類と同じく野や山に起き伏して一定の住所もなく、雨露を凌ぐ家らしいものも無かつたのであらう。其の頃の人民は智識の發達が無いから其身體は他の

獸類の如くに（今の人類に比べると）壯健で、且つ遙に堅牢で有つたには違ひないが、併し又其身體の周圍から受ける浸害と云ふものも亦從つて遙かに今より多かつた、地球の比較的寒い處に住み初めた者は太陽の熱が次第に薄くなつて、地上に北風の日に一日と強くなる時、恐らく裸體の皮膚は何か覆ふて呉れるものが有ればいゝと思つたに違ひない、又は炎天燒くが如き太陽の直下にある者は何卒して此暑さを直接に遮ぎつて呉れるものがあればいゝと思つたに違ひない、其外雨のふる度びに、雪の積る度びに、又は烈しい風の吹く度びに何か身體を包むものが有つたらばと思つたに違ひない。

只々是等の氣候上の要求ばかりでなく、或は獸類の浸害を受けたり、毒虫の來襲に逢ふたりする度びに、其要求は益々切になつて來た。

此要求より先きに起つた要求は恐らく有るまい、如何に人間は感情的の動物、美を好む動物だとは云へ、此要求の起らない前に已に早く身體を飾る爲めに身體を包む物が欲しいと云ふ要求は起らなかつたで有う。

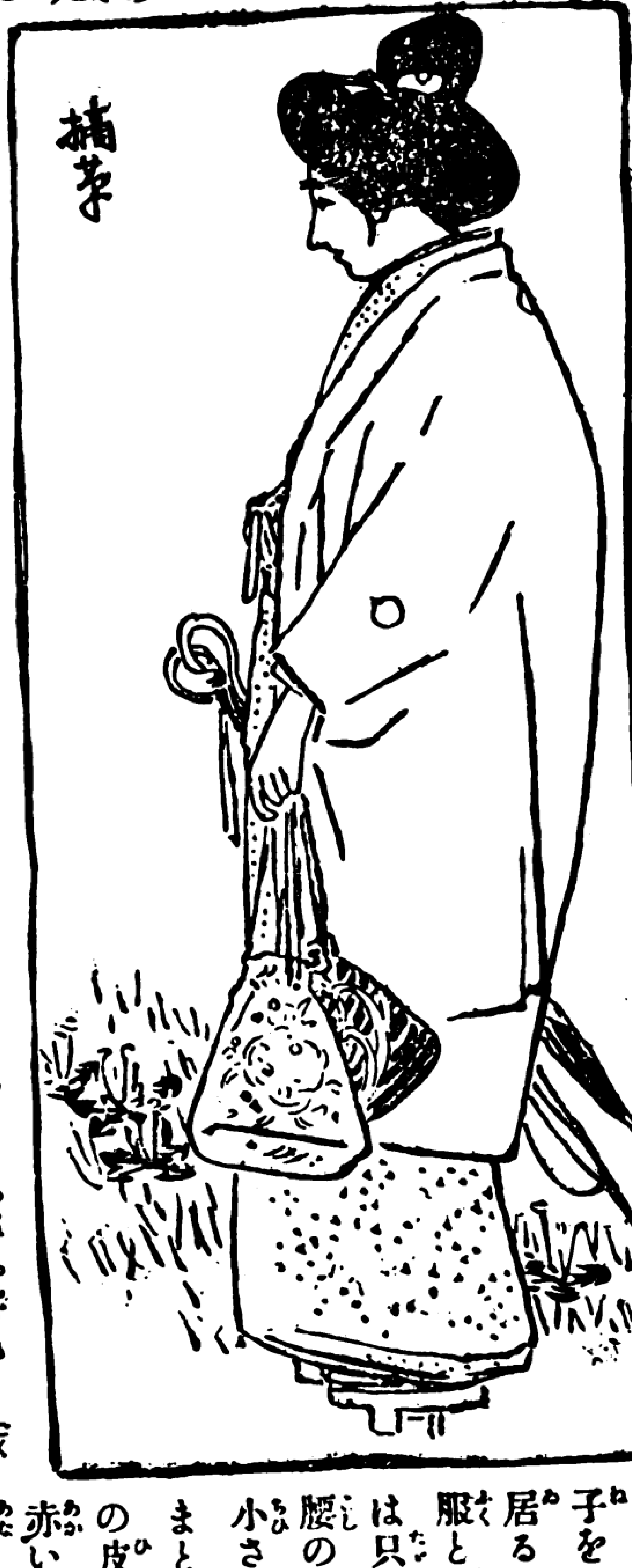
然り實に然うで有つた、而して此身體を保護するの目的を達せんとして、寒い處の者は嘗て食物にと捕へた獸類の皮の殘つたのを工風して脊にまとひ、又熱い處にある者は路傍に茂る木の葉の大きいのを取つては身に着けたと云ふ事も有う、東洋人の植物的衣服、西洋人の動物的衣服は確かに寒國と暖國との衣服の進化したるものなり。斯くて僅かに其要求の幾分かづゝを滿たして行つた。

然るに人間は元來知力の發達すべき特惠を自然から與へられて居る動物であるから、何時迄も此不自由に滿足して居る事はしない次第に其材料を撰び次第に其工風を凝らし色々に考へ、或は動物質より或は植物質より種々に其材料を集めて、先づ兎も角も身體を保護すべきだけの目的は猶不完全ながらも達する事が出來る樣になつたのである。

さて其次ぎに起る要求は何であるかと云ふと、つくづくと他人の樣子を見、自分の身に纏つて居るものを

眺めて見ると、なる程之れが有れば寒むくは無い、虫も前程は遠慮なくさゝなくなつたとした所で、之れでは如何とも格好が悪い、今少し此處を長くし様とか、此色は如何にも見悪い、もつと何か好い色が無いかしら、など云ふ様に今度は直接に身體に必要だと云ふ事の外に種々の要求が出て來たのである。即ち凡ての動物に多少持つて居ないものは無い、殊に人類に於て最發達して居る美の觀念が生存上に多少の餘裕の出來た時に初めて表はれて來るのである。

此美の觀念は如何なる人類にもある。今日猶人の肉を食ふ様な南洋のパプア人でも、又北方に穴居して居る様な動物のやうなエキスモーでも皆夫れ〲に美の觀念を持つて居る、其證據には全身黒色をした熱帶地方の蠻族が其醜いちゞれた頭髪に一輪の紅花をかざし一片の鳥の羽子をはさんで居る、又は衣服と云ふものは只名ばかり腰のまはりに小さな切れをまとひ其身體の皮膚を青や赤い色を以て種々に彩どつて居る、或は土蜘蛛の如く穴の中に蟄んで居る人類ですら猶其衣服の形を種々なる方法を以て彩り裝うて居るのである。



美の觀念が無くて如何して斯う云ふ事が出來ませう

只其觀念に幼稚と高尚との違ひが有るのみで、人の智識が發達し進歩するに從つて其觀念が高尚になつて行くのである、即ち衣服が太古から今日迄に種々に變遷して來た間には只決して身體を保護するの必要ばかりでなく、之に伴つて美に對する思想上の要求が次第に變化し發達して終に今日の樣な物となつたのである。

其處で吾人の衣服の目的と云へば先づ第一が身體の保護で、第二には美を裝ふ爲め、云ひ代へれば身體の容儀を構ふ爲めと云ふ事になる。

然るに世には往々着物は只着て居れば好い、寒くさへなければどんなものでも構はないと云ふ無頓着な人もある、然うかと思うと朝から晩迄着物の事にばかり氣を取られてやれ今の流行はこうであるとか、元祿模樣がどうであるとか。之れは古い柄とか廢つた色とか云つて居る人もある。兩方とも決して感服されない、前者は男に多く、後者は女子に多いから、前に就ての心配は殆ど女子には不必要では有るが、猶時には女子の内にも後者を擯斥するの餘り、終に無頓着に陥つて居る者もある。

併し考へて見れば人には夫れ〲の身分地位、年齢と云ふものがある、又場合といふものがあり、場所といふものがあるそれに相應した工風を用ひなければならぬ。

如何なる人もまづ身分と相應にしなければならない九尺二間の裏長屋の娘がぴか〲光るものを着て居たり、大家の令孃とも云はれる人が洗ひ洒しの布の子を引きかけて居たりしたならばどうであらう風は引かないか知らぬが共に感服する事は出來ない、貧者の子は貧者の子らしく洗ひ洒しの布の子をまとひ、富者、貴人は又夫れらしく相當した衣服を着てこそ其人が如何にも奥床しく感服が出來るのでは無いか、即ち學校によつては一切絹物を禁じてある處もあれば又は紬太織類迄は許してある處もある、これは即ち其學校に通う人の身分によつて定めたものである。

次ぎには年齢と云ふ事も亦考へて見なければならない、誰にも盲縞の衣服よりは派手な矢絣が美しく好ま

しい樣に思はれる、無地の物より美しい模樣のものか花やかで宜い美服を着たいのが人の情である、併しこれには己れの年齡を考へて見なければならない、廿才を越した人が大柄の模樣を着たならば不釣合であらう尤も西洋諸國の衣服や裝飾の標準は少し日本とは違つて居る、日本では年を取れば取る程次第に飾りを少なくして目立たない樣にと心掛けるが西洋では其反對で若い内は身體の働きが盛であるから自然皮膚の色や其他の樣子があでやかで特別に裝飾をしなくとも美しく見へるが、次第に年を取つて來ると皮膚の色艶もなくなり髮も昔日の面影なく衰へて、何處となく薄ぎたなくなる、其處で初めて外部の人工的の裝飾を要するのであると云ふ所から、年を取つて來ると白粉を塗る人もある、衣服の色なども前よりは派手なのを撰んで着る樣になる、年取つた人が赤い上着など着て居るが、之れは其國々の風習で左程をかしくも感じないが風俗の異なる日本ではそうは行かない矢張り年相應に社會一般の人々が着る所のものを着なければならない、特更らに若かく見せ樣と思つて派手なものを着、又は特更らに大人しやかに見せ樣として妙齡の乙女が千筋の縞物を着たりするのは何れも奇を好むと云はなければならない謹み深い女性の身に於て奇を好むのは宜しくない事である、

春の花園

咲耶姫

◎梅――春寒料峭として手水鉢の氷解けやらず、冬枯の後園の景色慘として生色なく、籔鶯のさゝ啼も未だ遠慮勝なる頃、軒端に薫る梅花一輪、やれ春が來たかと人々急に元氣が附きぬ。嵐雪の句に、

梅一輪、一輪づゝの温かさ。

△梅の異名は、花魁、香雪、君子香、癯仙、木母、白玉條、玉骨、淸友、淸客、世外佳人など、澤山あり。我が國で唯だ『花』と申せば、直に櫻花を指せど、それ

は餘程後世のこと、古へは梅の花を指したるなり。支那にては直に牡丹を指す、牡丹は支那の花の王なり。

△梅は日本固有の植物にて、庭木には梅を第一の位に置けり。梅の中にも紅白、八重、單重など隨分種類が多し、白梅は香ひ高く、紅梅は香のなきもの。白梅の單重は色も淸く香も高く、昔より梅の中の梅といはれぬ。

△菅原の道眞公罪なくして、太宰府に流され給ひし時、豫てより愛で給ひし都の梅花を思ひいでられ、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花
　あるじなしとて春な忘れそ

と詠じ給ひければ、都の梅はるかに飛びきたりて、配所の庭に生えしと。これを飛梅といへり。

△天暦の時、淸涼殿の御前の梅の木枯れぬ。其代りにもとて好き木を探させたるに、恰度西の京に色香も淸く咲きたる好き木見當りしかば、其れを取寄せられしが、其家の娘、その梅の枝に、

勅なればいともかしこし鶯の
　宿はと問はゞいかゞ答へん

と記して天皇に献せり。帝叡覧ありて、何者の家かと怪しまれしが、其れは紀貫之の娘が棲みし家と知れ、遂に再び其の梅の木を返されしと。鶯宿梅とは是なり。

梅見月――二月のこと。

梅　曆――山家などにて、梅の花の咲くを見て春が來たのを知る故、梅ごよみと申すなりと。

梅若塚――むかし吉田少將惟房卿の一子梅若、武藏國隅田川のほとりにて病に罹りてみまかりしを、後に柳を植ゑ塚を建てたり今、木母寺の境內にあり。

人はいざ心もしらず故郷は
　花ぞむかしの香に匂ひける　紀貫之

君ならで誰にか見せむ梅の花
　色をも香をも知る人ぞ知る　紀友則

梅が香にのつと日の出る山路かな　芭蕉

梅咲いて十日にたらぬ月夜かな　曉臺

◎櫻――春風駘蕩、山笑ひ鳥うたひ、春いよ／＼酣となれば、何時しか萋々たる綠の小草萌えたち、地は宛然大毛氈を布きつめし如く。此の自然の毛氈の上に横はりて、遙かに望めば霞か雲かとまがふ計り、誠に我が國は櫻の花の都なり。業平朝臣が、

世の中にたえて櫻のなかりせば
春のこゝろはのどけからまし

△櫻は日本特有の名花にして支那西洋にもあれど品劣れり。其の花は美しけれど、實は一向に見るに足らぬものなり。

△櫻の種類は其の數甚だ多し、彼岸櫻、糸櫻、山櫻、五所櫻、照君櫻、犬櫻、兒櫻、不斷櫻、千本櫻など其の主なるものにて、殆んど枚擧に遑あらず。

△櫻花の名所又多し、大和の吉野山、



嵯峨の嵐山は最も名高し。東都に上野、飛鳥山、隅田堤あり。殊に東京の地は櫻木に適せる故にや、花咲く時高臺に登りて見渡せば、是れは／＼と愕くばかりの花の雲。

△上野の櫻は、三代將軍家光の頃、東叡山草創の際、天海僧正が將軍に願ひて、天台宗の三諦、假、空、中、道になぞらへて、果敢く散る櫻を吉野より移し、紅葉を植ゑ、變らぬ色の松を植ゑたり。なほ明治になりてよりも年々櫻樹を植ゑ、遂に今に至れり。次に飛鳥山の櫻樹は、九代將軍家重の頃、滿山の荊棘を除いて櫻樹千本を植ゑしに始り。隅田堤の櫻は、元と將軍の鷹場なりしを風致に乏しとて、四代將軍家綱の時、常陸より櫻樹を取寄せて、木母寺の邊まで植ゑしがそも／＼なり。

櫻月――三月のこと。
櫻貝――櫻色せる美しき小貝。
櫻戸――櫻樹の傍にある宿など、櫻戸といふ。

見わたせば柳さくらをこきまぜて
　都ぞ春の錦なりける　素性法師

梅が香を櫻の花に匂はせて
　柳の枝に咲かせてしがな　中原致時

吹く風になこその關とおもへども
　みちもせに散る山櫻かな　源　義家

櫻咲いて花十分の日本かな　大江丸

◎牡丹――櫻散りて、目に靑葉山ほとゝぎす初鰹の頃、深山の奧の險しき岩蔭に、ゆかりの色の懷しき藤の花。それに引換へて、花の中なる富貴草、貴家顯門の奧庭深く、主君の御前で天香煙るが如く、燃え立つやうに咲きくづるゝ天下唯一の大輪の花は牡丹なるべし。

△牡丹は由來日本の植物にあらず、今より千年以前、延喜天曆の御代、渤海國より渡りしものなり。即ちこれをふかみ草（渤海草）といふ。慈鎭和尙が歌に、

夏木立庭の野すぢの石の上に
　みちて色こきふかみ草かな

△牡丹の事を又二十日草といふ。白樂天の詩に花開花落二十日とあり、又藤原の道忠の歌に、

咲きしより散りはつるまで見し程に
　花のもとにてはつかへにけり

△支那に於て牡丹を花の王となせしは、唐の世からなり。それ以前はあまり珍重されざりし、從つて『牡丹』と云ふ名すらなかりし、芍藥に似て居るところより木芍藥と稱し居たり。さるを唐の玄宗皇帝、沈香亭の前に植ゑられしより急に名花となりて、楊貴妃の麗と此の花の艷と、恰も双美の觀をなして、玄宗帝の寵を專らにせしが、貴妃は馬嵬の露と消え果てしも、此の花ばかりは首尾よく花の王となり濟せしなり。

△牡丹も又其の種類多く、其の品種を數へて三百種に上る。其の名所は甚だ多く、向島花屋敷、谷中天王寺、善明院、龜井戸東安樂寺、深川八幡永代寺など最も名あり。

△扨て、牡丹を眺むるにはなか／＼に時刻六ヶ敷きものなり、一般に午前を以て宜しとあり、午後はつぼみて見榮なし。午前中にても巳の刻（今の午前十時頃）をよしとす、時過ぐれば花の精神衰へて麗しからず。又牡丹を眺むるには一定の見方あり、即ち九品に分けて、一に位、二に形、三に色、四に重ね、五に實、六に蕊、七に葩、八に葉、九に木とす。

△此花の名所は、遠州の京丸なり。京丸と云ふ名は、昔京都の貴人風早某の一族、戰亂を避けて遠州秋葉



山の麓、犬居川の上流の京丸の里に隱れ居りしが、牡丹の大木多く繁茂して、其花の大さ菅笠ほどに見ゆ。毎年初夏の頃は一瓣一尺にあまる牡丹の落英、犬居川の流れに漂ふて川尻に下るされどこの牡丹の生ひ茂れる山は、峨々たる嶮山にて、未だ誰人も探見せし者はなしと。

色にこそもの思
　はすれおふけなく
　　國傾けに咲
　　　けるはなかな
　　　　上田秋成

みせばやなのどけき
春の日の本に

うつりて後の色ふかみ草　香川景樹
此家にこれはと思ふ牡丹かな　嵐雪
傘立てゝ雨横しぶく牡丹かな　子規

動物の子

自然兒

私達が初めて母親の體内から產れた時は、所謂赤兒であッて、之を大人と比較して見る時は、大さう小さいばかりでなく、其體の構造を見れば、非常に違つて居る點が多いが、併し世人は決して之を犬の子や猿の子だとは思ひません、勿論兩親は今產れたばかりの赤兒が、大層よく自分達に似て居ると云ふので、忽ち絕大の愛情を是に注いで、以て今日に至らしめたので、犬の子でも猿の子でも、雞の子でも、親が子に對するの愛情は少しも相異しません、殊に彼の蜘蛛の如きは、雌雄の仲が甚だ不和で、彼等は生殖時期に於ても、同棲して居た例がない程ですが、それでも自分の產んだ子供は可愛いものと見えて、大切にこれを保護し、晝夜共親は子の附近を警戒して居ります。

又トゲウヲと云ふ淡水產の小魚は、川の中に穴を掘りて、其中に卵を產み、自分は始終卵の上に靜止して居り、萬一附近に敵が來れば、鋭利なる鰭の刺を立てて、之を擊退して居り、子負蟲と云ふ昆蟲は、自分の妻の產んだ多くの卵を負んで、水の中をさも苦しさうに泳いで居るが、やがて此の卵が孵化して蟲になれば、自分は悲しいことには、其生先も見ない内に、忽ち死んで仕舞ひます。

親は自分の產んだ子供が成人するのを、樂しむこと、人も犬も雞も皆同じですが、漸く下等動物の境涯に至れば、前にも記した樣に、親が卵に對する愛情こそあれ、子が親に對しての情と云ふものは全くなくなります。

又親と子供との形狀が甚だしく相違して、全く別物であるかの樣に思はるゝものが澤山ある、一體人間や其他鳥獸類は、生長の有樣が極めて徐々であるが、多

くの下等動物は、其生長に際して、突如として急激な變化をなし、種々の形狀に變じて後、漸く親と同一な形を呈するものが、澤山ある、で今其一二の事をお話し致しませう。

即ち蠶の如きものは、親の蛾が産んで置いた卵からは、親と全く其形狀の異つた蟲が出て、先づ桑の葉を食べて成長し更に激變して一種の繭を造り、其中に於て蛹とて不食不動の蟲となりて蟄した上に、漸く親と同じい體形を存することが出來る。

故に能く汚穢物の中に生ずる蛆や、汚れ水の中に生く孑孑を見て、それが蠅や蚊の産んだ子供であると云ふことに、氣の付かない人もある位です、多くの蟲類は大抵此樣な變化をして、産れた儘の子は少しも親に似て居ないから、何になるのやら一寸分らない位です。



世の中の諺に蛙の子は蛙と云ふことがあるが、其蛙の子の蝌斗と云ふものは、餘程變化に富むものでありまして、蝌斗發生の初期は、全く魚類と同樣で、尾もあれば鰓も御座いますが、漸次生育すると共に、其尾は消へて仕舞つて、代りに足が出來、更に又手も出來、鰓の代りには立派な肺臟も又出來て、陸へ出て棲むことの出來る眞の蛙となるものですから、蛙の子が蝌斗だと云ふことは、經驗のない人には不思議に

思はれます、昔し太閤の少年時代に、蝌斗を籠に入れて、大阪の町を泥鰌だ泥鰌だと云つて賣つて歩きましたが、誰も蛙の子だと云ふことを知りませんから、不思議な泥鰌を買て食べたと云ふお話さへあります。

次に蝦や蟹の類も、其子供の時代には餘程面白い形を呈して居るもので、圖中の第一はクルマエビの卵から孵化して出たばかりの赤兒で、名をノープリヤスと申し、三對の足を具へて水面に浮游して居ります、即ち第一の足は甚だ細いもので、前の方に突き出て居り、第二第三の足には毛が有ツて、游泳するのに都合よく出來て居ります。

次の第二圖は既に稍々成長して、舊皮を脱したもので、餘程其格好が變つて來ました、楕圓形の頭胸部の後には、恰も尾の樣な腹部があり、其足の如きも初めは三對に過ぎなかつたのが、今では大に增加して來ました、蝦の此の時代の名を、ゾイヤと申します。

ゾイヤが猶二三回脱皮すると、第三圖の樣な形になる、之は餘程よく蝦に似て居るが、能く注意して見ると、足の二股に分岐する點に於て足らぬ所がありまして、蝦と云ふよりも却つてアミに類する點が多くあるから、之の名をばアミの樣と申して居ります。

アミの樣は更に脱皮した上で、眞の蝦となるのですが、試みに此の眞の蝦と、ノープリヤスとを比較する時は、誰でも之が親子だと思ふことは出來ますまい。

又蟹も蝦と同じく、親子の形狀が甚だしく相違して居る即ち卵から孵化したばかりのものは、蝦の幼蟲と少しも違はず、更に夫れが一進展をすれば、極めてよく蝦に似たものとなり、而して後に完全なる蟹の形態を現すのです。

然るに玆に又、金魚の餌に使ふミジンコと云ふ矢張蝦や蟹の親類に當る小蟲があるが、これが卵から出たばかりの時は、ノープリヤスと少しも違はない形をして居るから、矢張り同じ名が付いて居ります。

以上記した通り、蟹や蝦の子には、其生長に面白い階級があつて、蟹の子は蝦に似て居り、蝦の子はアミに似、アミの子はミジンコに似、而してミジンコの子

は實にノープリャスであります。

どうして此樣な面白い關係があるかと申しますと、蝦や蟹の祖先は蝦で、蝦は又アミの進化した物、其アミはミジンコから別れたもので、ミジンコの初めは例のノープリャスであります。

此事は啻に蟹や蝦ばかりでなく、全生物界を通じて皆同じ事で御座います、人間でも母の體内に在る間には、魚の樣な機關を具へて居る時もありますし、又獸の樣な長い尾のある時も實際あります、夫れが一度母の體を出れば、誰が見ても確かに人間の子に相違ないと見られる迄に急速に遷り變るので、私達は僅に十ヶ月未滿の間に、



極めて下等動物の境域から、極めて高等の人類として、生れることが出來るのです。

然るに蟹や蝦は、母體を出でてから、其祖先が何萬年をも費して進化した所の階級を逐ふるのでありますから、一寸見れば甚だ不思議な樣でありますが、動物界に必ず認めらるゝ遺傳の法則に依り、祖先の形態を現はすことは、全生物界を通じて、爭ふことの出來ない事實で御座います、即ち地球上の生物が、一の祖先から出來た以上は、かかる當初の階級を順次經て、以て進化發達することは、火を見るよりも炳らかなる譯であります。

國賓コンノート殿下

大英國の現皇帝エドワード陛下が我が皇室に對して敬意を表彰せらるゝ爲め英國最高の勳章を我が天皇陛下に御贈進あらせらるゝに付き皇甥コンノート親王殿下を御差遣あらせられたるは申すも畏こき優渥なる御友情にて我々臣民の齊しく感佩し奉る所なるが今や殿下を歡迎するに當り吾が同盟國の祖神たる皇室の美しき御家庭の有様を記し奉らん。

元來英國一般の家庭は總じて嚴重にて佛蘭西、獨逸の如く自由放任主義ならず恰も我國の武士道に類し居れり蓋し嚴肅純潔を尙ぶはアングロサクソンの特色にて是れあればこそ英國の今日を見るに到りたるなれ而して此の大英國の家庭を代表する者は實に英國皇室なり故ヴヰクトリア女皇もアルバート公も皇子、皇女等に對しては極めて嚴格なる教育を施し給ひしなもて遊戲用の玩弄物などは甚だ鮮く現皇帝尙は皇子にあらせらるゝ當時皇太子と云へる無上の地位に在らせられながら平生玩ばるゝ遊戲品は實に僅少にて是れが大英國皇太子の御室かと思はるゝばかりなりしとされはコンノート公を首め何れの皇子も御祖父母君の遺鉢を承けさせ給ふは素よりなり人として依賴心を起すべからず飽までも獨立獨行の生活をせればならぬと云へるが大英國皇室の主義なり是れが爲にオスボルンには帝室附の農舍が設けられ並に從兄弟に在らせらるゝ現皇太子エールス公を首ルイズヴヰクトリアの兩內親王、マーガレツトヴヰクトリヤの御皇子さては今回我國に御來航相成たるコンノート殿下抔從兄弟、御姉妹打揃ひて毎日鋤鍬を手にされ自身にて庭園を耕され農夫のなすなる賤しき業を營み玉ひ且つ大工仕事をも遊ばすが平生の日課なり、此處には御父君職工長とならせ玉ひて監督怠りなく時には御足や御手に傷はしき痛をさへ出し給ふ事も稀れならずと承はるされば何れの皇子、皇女諸殿下も能く下樣の事情に通じ又た園藝なるものゝ趣味を深く有させ給ふとなり。

上に記せる如き御教育振りなれば現皇帝の弟君に當らせらるゝコンノート公も能く父君の英邁なる御氣性を承けさせ給ひて今は陸軍總監の役にましまし其の御子なる今回御來航のアーサーオブコンノート親王殿下も夙に士官學校を卒業し南阿戰爭の際には陸軍中尉として御遠征ありし程にて戰勝國たる我日本への御訪問は殿下の始めより望み給ひ日頃陸軍に就いては熱心なる研鑽をなし給ふ由に承る。

前記のオスボルンは假離宮の在る處にて先女皇の御命により此宮に皇子皇女の諸殿下打ち集ひて割烹、裁縫、家政、看護法、さては音樂など學ばせ給ふを常としコンノート殿下も之が爲に音樂の道に御堪能なるにぞ英國樂界のヴアオリストはアーサーオブコンノート殿下の御名を覺えざるはなく今の國立音樂學校の如きは皇帝がセームス宮殿に於て「音樂學校設立の急務」なる題下に大演說を試み給ひし結果として創立されたるものなりと。

如何にして手紙を書くべきか

翠香女史

（一）手跡を習ふに就て

文とは古今雅俗又洋の東西を問はず字に書き顯す書の總稱也、高尙なる文章は暫く置ていはず、世上の交際に書きかはす書狀手紙なる物は逢て話する替りにかきて送るなれば、

（第一）に文意のよくわかるを要とす、いかに能筆なりとも餘り草體に走り書して讀にくゝ、文字を知る學者ならでは解らぬ如きも宜からず、况や惡筆の洒落て點長に引散し、字を誤り、或は脫し、殆讀むべからざる如きは書狀としての要領なき物也、字形紛らはしからず、誰が見ても克く讀まれて其意の確に知らるゝを以て最上とす。

（第二）は手跡也、手のうつくしきは一見して誰も稱美し、其人柄さへゆかしく思ひやられて、身の德となるなれば幼きより手習して勵むべき事也、然るに今の學校は只字書を敎授するのみ、筆法は更におしゆる事なければ、手のかけやう筈もなし、書をよくかゝむと思ふ者は、別に書家先生につきて、始より正敷、筆の持方、及び筆當りを授り、懸腕直筆に勉勵すべき也、懸腕直筆とは腕を机上につけずして横へ張りて筆を眞直に持、腕と共に動かしてかくをいふ、斯せざれば眞は字の書ける物に非ざる也、懸腕直筆に習ひたる人は字をかくに机なしにても困る事なし、書狀は殊に宙溜に書習ふを可とす、繁忙折ふし、机なき場合にもかゝざるを得ざる事多ければ也、今の女生徒輩が物かくをみるに、皆前屈に俯て、腕は手首近く迄机上につけて、只筆の先斗を動かす、斯ては筆に無理出來て筆法も何も論にも掛からず、斯習ひては筆なしにては何もかゝれず、僅の口上書、請取書迄も中溜にてはかき能はず、扨々不自由千萬ならずや、大家の奥樣ならば居間に机場を構へても在らめ、寢間も食堂も一室に勝手働らき兒を抱へつゝ家事を執る世話女房と成ては机に向ひて

居られぬ勝也、机なしには端書一つかゝれずして何とする、他の事は角もかくも手紙斗は幼年より中だめにて書習ふべし、物は何でも癖習慣による、始より習慣を付くれば何でもなき事なり、つとめて机離れのする様に勉强したまへ。

(第三)は熟練也、字は相應にかける人にても書狀になれぬ人は僅の用事も冗言多く、其癖肝要の個所に行屆かず、字を誤ち、或は脱して何事とも判斷し難く讀人の意に任せて考へれば存もよらぬ大間違を生ずる事あり、又何を書くにも書損のみ多くして貴重の時間を空費しつゝ辛く出來上りても其文言とゝのはず、字行詰り又は空過などして、文面見苦しく、過不及の文書となる是修行のたらぬ故にして、俄に得らるゝ物に非ず、商人などの多忙なる人、殊に手習とてろくに爲ず、手跡はよからぬも實業上の必用に迫りて常に書慣れば自然と熟して咄嗟に要用を誤らず、辨ずるに足るは即熟練の功也、以上の三拍子揃得て文の上手といはるべし、いくら手跡能くても書に隙を入、書損斗して走書の出來ぬは机離のせぬ人也未上手とは許しがたし。

今の女兒は學校にて男子同様先づ楷書を習ひ作文とても版本の教課書を手本として楷書のみを見馴よみ習ひて草體の字を知らず、勿論高等に進めば假名文もなきには非ねど總じて字のかき法、筆當り等を教へざればかけぬも無理はなき事ながら、女同士かきかはす文にも四角張たる楷書をかき、假名字は殊に拙く、いろはまだしも讀まるれど變體假名と來てはかゞりとみえ、たゞくとよりよまれぬ等毎度の事にて、見るも笑止也其上に洒落て點長く引ちらす、惡筆多く殆讀むべからず、彼川柳に下女のふみよむにはあらで判じ物といへど、下女ならば小學校よりゆかざりし者とみて免されむ、女學校卒業の奥様にして猶且然るを、往々見受るを如何はせむ、男兒は生質强なればにや小學生徒にても其書は自然と確にて惡きは惡しきなりに筆力あり女兒は生質柔なる故に成人になりても其字しどけなく亂れ易きを、まして惡く洒落ては見られた物に非ざる也、慣で眞面目に洒落氣なく書けば自然とよめぬ字な

くなるべし。
西洋流に泥む人は此繁忙の世に手習の如きまどろ敷事は爲る暇なし等いひて、女兒を敎育するに習字に重きを置かぬ傾あり、一應尤なる樣なれど卓絕の天才ならばいざ知らず普通手筋よき生質なりとも學校の習字のみにて手のかける者は稀なるべし、況や不器用者は申迄もなし、殊に女兒は男兒より學期短かき者にて、敎員を望む者の外は、大かた大學迄行者なく、普通の女學校よりも卒業を俟たずして中途に退學して、嫁入する者多し、課業多ければ何も角も生嚙りの儘にて一も得る所なく、既に一家の妻と成ては姑舅夫にも氣をかねて、たとへ暇は有とても又女兒にて在し時の如く稽古事の出來る物に非ず、彼是爲るうち兒持と成ては絕對的に諸藝共斷念せざるを得ず、然れば字は生涯、楷は折釘流、かなは蚯蚓ののたくり、荒布の行列にて終らざるべからず、豈不便の事ならずや、書は姓名を記するに足るといふ諺もあれど、夫は普通の事の出來上りたる人にして、猶其上にも能書の譽れを得むとて他事を抛ちて字にのみ心を入るゝには及ばぬといふ意味にこそあれ、今日俗通の書狀すらろくにはかけぬ女兒輩にいふべき事かは、一家の主婦となる迄にたとへ兎かくとはいはれぬ迄も、せめて日用の通俗文、日記、控帳位は誤りなくかき得て後日に至りて我すら讀まれず、二人三人打寄て其判斷に苦しむ如き字のなき程には有たき物なり、扨書狀を走書して誤つ事なく書得るは、假名と草書のくづし法を知りて筆達者にならざるべからず、假名草書のかき方を知らむとならば、書家先生に附きて手本を求め、其敎を乞ひ習字を勉强するに非ずは何に依てか得る所あるべき、學校のみにては決して得べからず、然れば女兒には習字特に必用也、課業多くて暇なしといふ勿れ、三絃踊りの如きは藝妓と成者の外無益有害也、良家の女兒には無用の伎也、其他にもまこと暇なくば音樂、唱歌の時間を省きてもよし、一家の主婦として爲ずとも差支へなき事なれば也、習字はちいさくとも一寸四方位小ならざれば夜間洋燈の影に爲とも然のみ、眼力を要せず、めの障りと

もならねば夜食後寢につく迄の課業としてもよし、とにかくに學校外に良師を撰みて手習ひを爲さしむべき也決して三絃や踊の如き無益の暇費に非ずと知るべし一字を正統に學ぶには始先づ楷よりして筆づかひの法を一心不亂に勉强し、筆法を克く記臆したらば、行草と次第に移るべし。假名は草の內也、斯く順道を踏て學び進めばしは之の草んは仁の崩なる事も知られかな字の出所、根本を確めぬれば、自然かなづかひも覺えられ、走書しても誤つ事なく、讀めず解らぬやうなる字はかゝぬ樣になるべき也。又女兒の手本には成べく字性の正敷して洒落に過ざるを撰ぶべし、御家流の眞によき物は最上なれども、今はかく人世に稀也、唐樣又は上代樣と稱する內にも癖多く洒落たる書風は其かきたる先生こそ垢拔たれ習ふ者は其惡癖のみを疑似して移るなれば、俗樣にても癖の尠き眞面目なる手を習ふにしかず、熟練してのち自然と洒落に成たるはよけれど、女兒は天性しどけなく筆意の定まり難き物なれば癖ある書を習ひては字體崩れ果て、ねぢり歪みて何ともわからぬ字多き惡筆と成もの也、恐るべし、決して師を撰ぶを忽にすべからず、先入主となるの諺にもれず始めに惡き癖つけば生涯ぬけ難し。

又手跡は其人の氣質を現す物にて字の善惡は別問題として男子の書は幼兒にても慥につよく、女子は筆力なくてしどけなし若も女にして筆勢强く男子のかける如き手ならば其人必ず心膽丈夫なる氣性者なるべし、又男にても特別に氣の弱き人、及び病人の手跡は自然と筆勢弱くみゆる物なり、世上に墨色とて其字を見て吉凶を判斷爲も此理に外ならず、されば字性の正然として形の稟直なるは其心も正直にして、勤嚴なる人なり、洒落なる手は磊落なる人と見え、雅筆なるは風流心を現はし、達筆なるは物に拘はらぬ大度量の人ならん、茶人、歌仙等の風流を表に爲ながら其の內心銅臭紛々たる人は手跡も俗氣を帶び、又折釘流の惡筆は心術も拙劣ならむと一見に侮られ、字の縮て筆延びざるは小量にして氣の狹き人と見へ、點長に引ちらすは嘘喝的の賣粧者ならむと推量らる、稀には字と心術とつり合はぬ人もなしと斷言は爲難けれど、大概は之に違はぬが多し、耻かしき物なり、手はよく書きたきもの也、殊に女の文は女らしく字も、楷を用ゐず、あながちに詞づかひ優に、手跡延らかに美くしく飛花落葉の風情こそあらまほしけれ。猶次號には文かくに必要なる事を詳しく記すべし。

北米の女學生觀察

附り日本よりの女學生

スタンフォルド大學　勝又郯次郎

北米の女學生に就て觀察した所を左に御話し申さう「女子と生れるならば米國に、男子と生れるならば日本に。」と或人が云ふたが、吾々もかく思ふことが折々ある、米國に於ける女子の權利の大なるは、聞いても居り、想像しても居つたが實地を見て驚いた、仲々何して豫想した位のものではないのだ、汽車汽船電車鋼車に乘るに男子に先だつは云ふ迄もない、重い荷物を男子に運ばするは人道の側から云ふても當然としてある、又た教室に於ては、女子は教師に尤も近き位置を占め、教室の出入は男子に先ち、其甚しきに至つては若し女學生が鋼筆、鉛筆、書籍等を机上より墜せる場合には、傍の男學生は此を拾ひ上げて、渡すに非れば其男子は女子に對する義務を缺きたりと非難さるゝのである、又出入口の戸は若し男女學生が同行する時ならば男子は之を開き女子をして先づ入らしめて、最後に自が入りて且戸を閉づるのが女子に對する通常の作法なのである。其他、廊下に於て同級生中學年（米國大學は同級生が必しも同學年に非ず）の上の女子に對しては男子は先づ必す脱帽挨拶せねばならぬ、加之教官といへども、女學生に對しては之と殆と同一である、女子は椅子に依りて物云ふに教官は立ちて其側に行き聞取るが如きことが其一例である、之を要するに米國の女子に對するは或人の喩へたるが如く、全く腫物に觸るの感がある、動もすれば婦人侮辱罪であるとか云ふて警察署に引かるゝことも少くない、現に一ケ月前のことであるが某大學生は其大學教授の家に「スクールボーイ」を働きつゝあつたが、其妻君に對し一二言口論せしとかにて女子に對する禮義を缺げりとの口實より遂に退校を命せられたのである、其他日本人が、働きつゝある家の婦人に對し賃銀の請求上、言語の不通其他の點より多少の口論に亘り爲に巡査に拘引せらるゝことは決して少くないのである、必竟米國

の女子の云ふことには無理はなし、よし非理の點あるにしても爭論してはならぬとは渡米者の上陸するや否や故參者より受くる第一の注意である。

「カリフォルニヤ」大學と「スタンフォルド」大學とは女子の數何れも全學生の約三分一以上に達して居る、前者には學生の數三千、後者は千七百と注せらる、然して皆な十六才以上にして四十才に達する女子も少くはい、中には既婚の人もあるが年長のミッスも多い、老年の婦人は高等女學校の教師が一年間暇を貰つて聴講に來るのが多く學科は人文科に傾き佛、獨、希、羅等の國語を修め、教育、心理、歴史等に出席するものが少くない。

女學生の服装は嘗て日本の女學校に行はれたるが如く全く服装の競進會であるかの如く感せらるゝ、必竟は富の度の高きものが入學するからであるかも知れぬが、美しき風姿を爭つて爲すのである、教室内にても帽子を被り顏の網も其儘である、手套も取らぬ、然して吾々日本人の眼に其初め異様に感じたるは多くの女子大學生が赤き色の帽子を用ゐ或は紅色の衣裳を着することである、蝦茶の裳も少くない遠くから見れば日本の女學生と見違へらるゝ位である。履は必しも日本の女學生の如く踵の少きもののみでない随分廣いのを穿いて居る、眼鏡をかけ、金色の腕環、頸飾を附け、或は胸部に金時計を下げて居る、然し日本の女學生のやうに亂暴に香水や麝香を撒布しては居らないやうである。

學校にて胸を張り、大手を振つて歩るくのは女學生である、男子は之に比して寧ろ悄々乎として女子の意を迎ふるに日も亦足らざるが如き觀がある、道を避けるのは男子にして道を拂はするは女子である、若し此に奇語を用ふるを許すならば女學生の通路は絶對的に直線的であり、男子の通路は常に曲線的である、此點は全く日本の男女學生と正反對である。

女學生の行儀は日本の作法より云ふならば感服の出來ぬ點が甚多い。例へば教師の講義を聽くに頬づえを突いたり、實驗臺の上に腰を掛けたり、或は教場、

書籍室到る所にて物を喰ひ、其甚しきに至つては式場にてもポツ〱「キャンディー」を嚙るのである、晝食を樹陰にて不作法なる風態にて食するが如きは日本人の想像も及ばぬ所である、尤も此の如きことは米人一般の現象であつて決して女子のみでない男子も全く同一であるが若しこれが日本流儀ならば女子は先づ〱控へねばならぬ所である。

女子は自轉車に乘るといふよりも寧ろ米人はよく自轉車に乘るといつた方がよろしい、四五才の小供はトライシクルに乘り七八才以上年寄の婦人迄はバイシクルに乘る、或は女子が馬に乘りて運動することも決して珍らしくはない、「カリフォルニヤ」大學は敷地が餘り廣くないから學生は大抵徒歩にて通學するけれ共「スタンフォルド」大學は正門より校舍迄一哩といふ距離であるから殆んど凡ての學生は馬車を備ふか、自轉車に乘かするのである女子の遊戲としてはテニスが非常に盛である、米國の何れに行つてもテニスコートはアスファルトにて固め其四周に鐵網を張り、運動用履も備へてあるから便利で斷へず出來るのである、體操には徒手、呼吸運動、美容術、行進、驅足、啞鈴、棍棒あり梯登りもするので此等の費用として一學年間に八弗乃至十弗を學校に收めねばならぬことになつて居る。

靑年男女學生の同行も普通の現象である、通學の往還に男女學生が相伴うて、放課後の散歩に一對の男女學生を認めること、此等は到底日本の學校に求められない必竟戀は米人には公然であつて秘密ではない、彼等は戀を船中に語り、圖書室に語り、敎會に語り、自分の家庭に語るのである、公然なるが故に其戀も淸潔であり隨つて些少の醜聞も其間に生ずるを聞かないのである、彼等靑年の女子は到底日本女學生の爲す能はざる處をなし、語る能はざる處のものを語るのである、彼等は兩親の前に於て公然來客と其未來の妻に關する談話をなして憚らず、又彼等は其獨りの場合に於ても靑年の學生を迎へて應對し、遊戲して差支ないものと聞いて居る、吾々日本人は寧ろ此方より其を見まじと

差控ふるに彼等は寧ろ是れ見よがしに相伴ふて居るのである、果して此等の諸現象が是なるか非なるか、社會の制裁、人々の知識、道德の高下にも關係すべければ此を其儘日本に移植することは到底爲し能はざるべけれども、識者の既に大に考慮しつゝある問題なれば其の對象たるべき日本女學生諸子自身にも先づ三考して可なりと思はるゝのである。

終りに日本より來り、又來らんとする女學生諸君に關する一節を加へて置きませう、先づ大山捨松夫人津田梅子女史瓜生夫人の留學せる昔は別として此の西部大學に於ては當時東京の女子高等師範學校と女子大學との卒業生丈には單に英語の試驗のみにて本科に入學を許すことに定まつて居る、けれど此等二校の出身者は一人も居らぬ、といふことである、然し乍ら青山學院、女子學院、フエリス女學校及津田女史英學塾の卒業生の渡米して、家庭を營めるもの、又學業を修めつゝあるものは少くない、米國の小學校より進んで高等女學校に入學して居るものも昨今其數を加へつゝあるといふことで某女學生はパークレイの盲啞學院にて熱心に其教育法を研究しつゝあり、某女學生は同地の神學校にて一意其學の蘊奧を究めつゝあり二三年の後には學位の授與に預るべき運命を有し居るのである、又某女學生は其夫と共に「スタンフォルド」市中に在りて共に勉學に從事しつゝある、女子高等師範學校の出身なりといふ婦人は其數少なからざれども何れも家庭に從事しつゝ內助の効を奏しつゝあり又東京の某學校に敎官たる人の女子にして當地の高等學校に長く勉强して成績非常によく當地高等學校の日本女子として評判高かりしものが病氣の爲め、氣の毒にも去夏中途にして歸國したといふことである、最後に一言を加へねばならぬことは、唯今着の桑港新聞に依れば東京女子高等師範學校卒業生某が突然渡米の目的にて來りアメリカ丸より上陸せんとせしが知己も朋友もなく目的もなかりし爲め移民局より拒まれしが日本人協議會の盡力に依り辛うじて上陸し婦人「ホーム」といふ救濟所へ收容せられたりといふ驚くべき報知である、吾々は婦

人の渡米を希望する、或は學業の爲め或は内助の効を擧ぐる爲めに、若し熱心にして、忍耐強く、身體強健ならんか能くスクールガールとして大學を卒業するごとく甚難からざらんと信ずれども、漫然たる獨歩主義、飄然たる浮草主義は米國に於て其危險千萬なれば輕卒に渡米せんなどの考を決して起してはならないとおもひます。

世界女新聞

△日本女學生の家事科

◎日本の高等女學校で家事科の設けあるは勿論その必要に應じての事なり。女子たるものゝ最大要務は、忠孝貞操等の倫理上の務めを除きては、家事科を最もよく心得、最もよく注意して家庭の幸福と平和と快樂とを保たざるべからず。併し高等女學校に通學する女學生に家事科の稽古の必要なるにはあらず。各階級、上等社會、中等社會、裏店社會に通じて、女子たるものに必要なり否否中以上の社會にては、下女も雇はるべし。裁縫師も雇はるべし。裏店の下等社會の婦女子にこそ、最も料理裁縫等の稽古は必要なりけれ。然るに現時の高等女學校には家事科の設けあるに反して貧民のむすめどもの行く學校には、かゝる用意をしてなきぞ是非なき。

◎余は今巴理の貧民窟にて東京にて云へば萬年町、新網町ぐらゐの所に宿所をかまへ居れり。室料だけにて一ヶ月(日本金にて)八圓四十錢を拂ひ居れるは東京にすれば中以下にはあるまじけれど、ここにては下等の部なり。さてこの區内にある、プレザンス學校と云ふは、天主教僧侶某氏の管理する所のものにて、有名なる貧民學校なり。佛國にてはすべて小學校の初めより、男女學校を異にしてあり、この貧民學校も其通りなり。而して其女子部に於ては最も完全に女子に必要なる諸科諸藝を教授する設備をなせり。裁縫、洗濯、料理より室内掃除方まで、もらす所なし。最も教育の主旨にかなへるわざと云ひつべくやあらん。

△二十三人の子を社會に與へたる婦人

◎佛國は年々人口の減少し行く國なりと聞つるに、茲に珍き二十三人の子を生みたる婦人こそ見出されたれ。佛人は之を名譽ある母としてもてはやす。

◎ロッシユ、フオルと云ふは佛國海軍造兵廠のある所にて、西海岸ボルドーの附近にあり。其造兵廠に一日四フランと二錢を得て勤め居る技師にフルーリ氏と呼ばるゝ人ありけり。千八百八十二年八月十五日に現在の細君を迎へてより二十四年を經し間に二十三人の子女を生み、細君は今や身體衰弱して毎に床上に臥しつゝあり。細君の壯健なりしをりは魚を賣り歩きて生計の助けとなしたりしかど今はそれも叶はず夫の給料のみにては誠に不自由勝にてうき月日を過しぬ。

◎然れどもフルーリ氏はさすがに男兒なりけり。天命を樂んで求めず。諂はず。一日も勤務を怠る事なく唯子女の役に立つを待ちつゝあり。昨年末に海軍大臣は其勉強を感じて五十フランの賞與をなしたり。

△巴里の新年

◎萬里同風と古人の云ひけんも理。昨日は新年の日とて巴里市中も東京と同じく上下業を休みて名刺配りの年賀に忙しかりき。但し當地の習はせとして、一日の午前中は單に時誼一通りの所をかけ廻り、午後には特別に懇意の間にて屠蘇の代りにシヤンパニウ一盃を傾くる位の所へ立ち寄るなり。二日以後には年始廻りなし。さて、

◎日本公使館に於ては午前十一時に遙拜式を擧げたり。夜九時よりは再び在留臣民の茶話會を館内に於て開きたり。會したる者凡そ四十人足らず。公使、公使夫人、一條公爵令孃、田村書記官、同書記官夫人、學生、美術家、旅行者等。茶話會とは云へど、茶の代りに正宗とおすもじ。いろ〳〵の日本料理に腹を拵へて餘興にとかゝりぬ。第一に福引。「今夜の來會者」を引あてゝ、「ハイカラ揃ひ」と云ふ詞の下に陶製の灰殼皿を貰ひしなど、時に取りて可笑しかりき。次には日本の歌なにくれとなく謡ひ興じ、又ポルカを踊りマヅルカを踊り、昔床しき盆踊などもありき。退散は一時近くなりしならん。

◎樂器にはピヤノ、ヴアイオリン等はなくて、一切の歌に伴へるに蓄音器を以てしたりしは何の故たるやを知らず。公爵令孃、書記官令孃など斯道の名手と聞き居たりし我等はいさゝか失望せざりしにはあらず。

◎近頃アフリカ、カイロ府より佛國に歸來せる人の話に依つて同地土人の婚姻法を知り得たり。其一例として一寡婦の事實を記すべし。此寡婦が以前に自ら好む所の良人を撰んで結婚したる後に、「宗教上の都合によつて其父は無理に夫婦を離別せしめたり。

◎其父と云ふはマホメツトの血統を受け繼ぎたりと稱す。今は同地方有名のマホメツト教の聖人なり。埃及政府は其復歸を命じたれども聖人は其命を奉ぜずして密かに我が邸内に我が娘を幽閉しつゝありと。

△日本文學書の佛譯

◎所は巴里の眞中、人はハイカラの集りと聞きて誰かは其會の外交的に派手に規則正しく行はれしかを想像せざらん。然るに其實際は寧ろ質樸に田舍びたる所ありて却つて吾人の意を得たる者ありしは、之即ち此會の特色なりけり。在留同胞のうち最も多きは美術家なり。然れども由來音樂家美術家など云ふ者却つて何處の百姓爺かと疑はるべき風采を持ちしが多かりき。巴里に居る日本美術家さても俗耳には妖艶なる稱號。さは去り乍ら、日本に居れば飾屋の小僧か、或は塗師屋のせがれ。其黑き顏と荒れたる手の指とに眞價を現はせるのみなるぞ中々に目出度き。貴婦人の數多ものし給へる中にかゝる者どもの交れるも可笑しきコントラスト(對象)なりけり。但し其中にシヤンパニウ酒の瓶を獨占して、グイ飲みを續けて居たる者を見たりしぞ、少々興さめて、恐れ入らざるを得ざりき。

雜錄

三ッの兒の魂

過つて改むるに憚る勿れとは遠き昔孔子樣の仰せられし所なれど、己が犯せる罪咎を悔改めて、之を他人の前に明ら樣に言ひ出づる事は、仲々に至難の業なり、之を行ふには大なる決斷と勇氣を要するをもて、大人君子と言はるゝ人にして始めて出來ること、迚も意氣地なき凡庸の徒にありては、よしそこに氣は付いても、過去の非行を打明けて深く謝する如き立派の擧に出づること能はず、故に此の行を敢てする人こそ眞の勇者と謂ふべきなれ、米國の大統領故グランド將軍は人も知る如く大勇の人なるが、將軍の勇氣に關しては、其の幼時に面白き逸話あり、或日將軍が學校の友達と街上に庭球を鬪はせ居りしに、遊びに身が入れる餘り、過つて隣家の硝子障子に衝き當り、之を破壞したり、其と見て他の子供達は一目散に逃去りたるが、獨り將軍ばかりは踵を大地に着けたまゝ棒立に成つて、一歩も其塲を動かず、只管當惑の體なりしが、軈て決する所やありけん、踵を廻して其の家を訪ひ、主人に會ふて懇ろに己が疎忽を詫び、而も其の態度の大人らしく、大膽に眞率に事實を陳じて少しも隱せざりしには、主人もほと／＼感嘆したりといふ、將軍の此の擧や小事に似て甚だ小事ならず、常人の出事難き所を敢てする大人の器量を幼時より既に備へたるものと云ふべし、

又た彼の華盛頓が父の秘藏せる櫻の木を切りて叱られし時、正直に其の過を訴へて父の膝下に罪を謝したる事は、之と好一對の美談と謂ふべし、過失あれば悔改むるに優る上策なし、過つて改むるを憚らぬ人は、眞の勇者と謂ふ可きなり。

下女のいろは訓言

貧しき家に生れ普通教育をも受け得で人の家に水仕しつゝわるあはれ不幸なる女子あり、目に文字なきをなげきて妾にいろは假名かきてよと乞ふまゝに、たゞいろは文字のみ書きしるして與ふるもいと無趣味なるを慮ひ、極めて通俗的に四十七文字を頭字にとりて訓誨の語を綴り、いろは訓と題してものしぬ、其の後彼女只管に學びけん近頃大いに進み單語なども書き得身のおこなひもつゝしむに至れり、若卅間に同感の方もおはして御參考の一はしともなりなんにはと拙き筆もて書きしるし侍る。（とよ子）

い。ふことは、あとにして、することを、さきにせよ。（言を後にしてまづ實行せよ）

ろ。うじんの、いふことに、むだはすくなし。（老人の言無駄なし）

は。らをたてるは、そんのもとゐ。（怒るは損）

に。はかできは、はやく、いたむ。（急造は早く損す）

ほ。められたら、なほつゝしめ。（讃辭を聞かば却て謹愼せよ）

へ。たでも、かずをつめば、じよーずになる。（拙手も修練を積めば巧手となる）

と。ほいしんるいより、ちかいたにん。（遠姻より近知）

ち。ひさいことから、おほきくなる。（小事より大事に）

り。こうなひとは、ちゑをかくす。（能ある鷹は爪をかくす）

ぬ。いものは、をんなのつとめ。（裁縫は女の務め）

る。りも、はりも、もとはいゝし。（琢けば光る）

を。しへられた、ことをわするな。

わ。がつらきことは、ひともつらし。（我身をつねりて人の痛さを知れ）

か。んにんは、みをまもるよろひ。

よ。きともだちは、みのたから。（良友は寶也）

た。んきは、みをきるはもの。（短慮身を亡す）

れ。いぎあつければ、ひとにうやまはる。（禮あれば恭あり）

そ。しらるれば、わがみをかへりみよ。（他山の石以て我玉を琢け）

つ°とめは、まめやかにせよ。

ね°んのうへにも、ねんをいれよ。（丹精は鉛を化して銀にす）

な°にごとも、あとさきを、かんがへてせよ。（熟慮十二分）

ら°くをねがはば、くろうを、さきにせよ。

む°りをなせば、ものはやぶれる。（角を矯て牛を殺す）

う°しろぐらければ、さきへゆけず。

ゐ°どばたで、たちばなしをすな。（人の噂禁物）

の°これるものを、だいじにとりおけ。（他日の用を考へよ）

お°やのおんは、やまよりたかい。

く°ぼいところへ、ものは、たまる。（低きにつく水）

や°まひは、くちよりいる。

ま°ごころは、てんをもつらぬく。（至誠貫天）

け°ふの、しごとを、あすにのばすな。（明日を當にすべからず）

ふ°じゆうをしのべば、ふじゆうなし。

こ°らへるちからに、かつ、てき、なし。（忍耐に敵する者なし）

え°がたいものは、よきともだち。

て°いねいにして、あやまちなし。

あ°さいかはでも、ふかくわたれ。（要愼專一）

さ°いはひは、しようじきより、うまる。（幸福は正直より）

き°んぎんのとりひきは、たいせつにせよ。（金は他人）

ゆ°だんの、きづはなをりがたし。

め°さきの、えきにかたむくな。（目前の利に眩むな）

み°のようじよーに、ゆだんすな。（攘牛刻々）

し°んぼうに、かねがあつまる。（忍耐身を寶にす）

ゑ°がほのよいのは、ひとのはな。（愛嬌は天福）

ひ°とはみめより、こゝろをみがけ。

も°のいひにて、ひとのきはしれる。

せ°いをだせば、みはあたゝまる（出精富身）

す°じかいのみちを、ゆけば、あやまちあり。

金の使ひみち

金錢の使ひ途を少女に尋ねて、愛らしき理想を知り得たる面白き話あり、神田今川小路三丁目に住まへる

廣瀬武子女史の娘芳子と云ふは、今年漸く十二歳の少女にして、目下西小川小學校尋常科第四學年生なるが、性質怜悧にして學業の成績も宜しきに、母刀自の滿足は言ふも愚かや、一層我子の教育に力を入れ居れる由、扨て此の頃愛女の芳子が翫弄紙幣六萬三千八百七十五圓(一葉五厘の物を切ると六萬三千餘圓となる勘定也)を買ひ來れるを見て母刀自は芳子に向ひ、和女は其の金を何に使用せんと思ふぞと尋ねたるに、芳子は稍久し打案じつゝ、やがて鉛筆を執りて、左の如く書き認めしとなん、

一金六萬三千八百七十五圓也

一、金五萬圓　銀行あづけ、一、一萬圓生命ほけん
一、二千九百圓　雜品食物　一、一百圓じぜん金
一、八百圓　他へやる品物　一、七十五圓學つき

右の内よそへやる品物は進物及び交際費を意味し、學つきとあるは樂器の意にてピヤノを買ふつもり、又た百圓の慈善金は悉く東北の饑饉地に寄附する筈なりといふ其の心根や如何にも優しく、又た以て當代少女の理想を伺ふに足らんか、茲に特に樂器を擧げしは、芳子の目的が將來音樂家たらんと望み居るによれり、われらは未來の音樂家の幸に健全ならんことを祈る。

五十錢の蝙蝠傘が語る人物

如何なる方面に於ても苟くも世の中に立身出世をするほどの人は必らず何處か常人に異つた所がある。そして其の異つた所が時として世間並の人から見て馬鹿らしく思はる、ほどである。東京で數ある銀行の中でも尾張屋銀行といへば實業社會で音に響いたものであるが、其の持主、峯島喜代子といふは當年七十三歳の老婦人である、女一代の間に五百萬圓の資産を作つた丈でも既に人の肝玉を奪ふほどの仕業であるが、その老婦人の平常を聞くと更らに驚かるゝ質素儉約、恐らくは何人にも出來難いと思はるゝのであらう。老婦人は件の年齡で夢にも老樂を思はず平素綿服の外は身に着けず、手廻物さへ五十錢の蝙蝠傘を七年間使用し

たといふ他は推して知るべし。猶驚かるゝは、店の手代や、丁稚が習字をした反古を貰ひ受けて更に自分が手習をするといふ、されば不斷糸屑一條たりとも無駄にはしないで丁寧に仕舞置きて他日使ひ道の出來た時取出して用を便ずるといふほど尋常の人の目に見へない所に眼がつくといふことである、峰島氏は性格に於て既に一種の女傑であるが、女傑たるこの人にして此の緻密の心掛あり、未だ女傑ならざる婦人にしてこの心掛を缺くは到底家を修むるの人ではなからう。世人はこの心掛を見て馬鹿な眞似と一笑するやも知れねどこの馬鹿な眞似が、積り積つて五百萬圓の資産になつたかも知れないのである。

富豪の儉約ばなし

峯島老婦人の奇特なる節儉と好一對の話は伊勢の富豪諸戸清六といふ人の身の上である、此の人商用で汽車に乘る事あるも曾て三等以上に乘つた事はない、又汽車中食事する際茶を買へば、土瓶の空殼は決して之を棄てずして持ち歸へる、如何なる物と雖も棄てるといふ事は翁にあつては嚴禁であるそうな。そういふ譯であるから一枚の反古紙も輕々しく紙屑籠に抛り込むなどいふ事はない、まづもう一度何かに利用が出來ないか、どうかと確かめ、よく〳〵使ひ道のないものと見定めた上で始めて棄るといふ、されば無論朝夕の食は一汁一菜、只魚を料理する時には必ず奴豆腐のやうに眞四角に切つて膳に上せるこれは若し家人が嫌ひである時には一切を食ふて他に箸を及ぼさいなから自然他に利用する事が出來ると其の用意の深きところは凡人の上を一級拔いて居る。

日本人は三十圓の月給を取る人が絹の羽織を着て卷煙草を吸ふ、まだひどいのは西洋料理を食ッてビールを飲む、甚だしきは借金をして芝居を見に行く、前世紀ならば知らぬこと、どうか二十世紀には斯な馬鹿氣た習慣を持ち越さぬ樣にしたいものである。

支那人の女子讀本

支那の子供は十三四歳まで男女とも殆んど一樣の服裝にして、たゞ目立つて異なれる點と云はゞ女子の靴には青、紅などの縫を施せるのと、辮髮の端に紅緒を辮み雜せたるとにて、その髮をあげて元服するまでは男女の辨別は一寸附け難し、さればその敎育の如きも同一程度のものなるかと云ふに決して然らず、その女子の初等敎育とも云ふべきは女兒經一卷の讀修を以て十分なりとするものゝ如し、若し烈女傳までも讀了せば實に稀有のことゝせり、さて烈女傳は大抵知らざるものなけれど、此の女兒經に至つては未だ世に知らざる人多きやうなれば一寸その內容を紹介すべし、

女兒經一册すべて九枚、四十七首の詩を載せたり、詩は皆な四句づゝなれども六七七七、七七七七、七七六七、七六七七の詩體を爲すがごとし、而して衣食住、起居動作、應對接伴のことを始めとし、古人貞烈の事蹟まで擧げ、終りに古人若依此經行便是閨女無價寶」と、謡へり、

○勿恃長舌。勿爲爭競。勿私財貨。勿貪報應。房做針線。描鸞繡鳳刺鴛鴦。等閑眞與人窺見。

○張家長。李家短。人若說時我不管。親戚鄰舍女人來。須當迎接帶笑臉。

○到晚來。月未明。囑付女兒休夜行。夜行不可獨自走。須喚了鬟執着燈。

挿畫は極めて幼稚なるものにして茲に掲げたるは其一なり、その左右の文句が實に面白し、何國の婦女子も同じ事と見えて頗る急所に衝れり、『勿恃長舌』は多辯の禁制にして、『勿爲爭競』は、『誰某さんが紅寶石の指環を穿めて居らッしやるから、妾には金剛石入のを』などゝの競り氣を尤めたる者、『勿私財貨』は臍繰金を蓄ふる勿れ、猫糞す可らずとのこと、『勿貪報應』は、『まさか此んな物が献げられますか』と主人の懷中に頓着なく附け屆けに虚勢を張ることを誡しめたる

にあらずや、

抑も「張家の長、李家の短、人若し説ふ時は我は管せず」これが實踐さるれば、井戸端會議は正に寂寥を告ぐべく、「夜行は獨自にて走く可からず、須ず丁鬟を呼で提燈を執すべし」が勵行せらるれば、新聞三面の艶種は一半の光彩を失ふに至らん、言近くして旨遠し、小册子とて決して馬鹿に出來ず、

贅澤なる小鳥

盆栽や園藝などと同じく家庭の娛樂として小鳥の飼養も一寸おもしろかるべし、就中鶯、目白の如きは、商賣人、素人を通じて持て囃され、良禽なれば數百金を投ずるも尚ほ得難き程のものさへあり、



彌生半にもなれば深川八幡社内に眼白會開かるべく、又四月となれば根岸初音の里に鶯の大會もあるべし今その飼方の一斑を記さんに

△鶯　八十八夜過ぎにまだ巣立せざる雛を巣より取り來り、八分位の摺餌を細き竹篦の先に少しづゝ附けて其口に當てがひて養育するこれを差餌といふ、斯くて漸く育ちて大きくなり自ら餌を喰ふやうにもなれば、少しく餌を弱くして六七分位のものを與へ、徐々親鳥に附けて法々華經を練習せしむるなり、その內に塒を越して形も出來なば五分位の餌を與ふやうにすべし、かくして冬至の日より夜餌とて其籠を小桶に入るゝか、或は紙もて貼りたる同樣の箱の内に入れて夜中燈火の前に置

き、法々華經の練習をなさしむるものとす、かくてその餌は此時より摺餌の外に袋蟲を一日二三疋つゝ與ふるなりと、次で隔日位に日當よき所にて掘井戸の汲み立て水、若しくは微溫るき水にて全身に霧を吹き、水浴せしむれば、新春早々法々華經の初音を擧ぐるに至るべし、その聲の如何、その節廻しの如何は、概ね親鳥に似るものなれど、又その內に巧拙ありて假名のハウホケキヤウを謡ふもあれば、漢字の法々華經を謡ふもあり、節長きもあれば短きも出來て、さて鶯の價値も定るものなりとぞ、斯くて一二月頃より啼き始めて三月上旬より四月にかゝらば根岸初音の里の會も始まり、其道の數奇者が約一年間の丹精の功の顯はれ、良き鳥ならば乘附に番り、好地位を占むるとゝなりて、名弘めの披露をなすなど中々に費用を要すれど、又斯の如き鳥を出さば直に買ひ人も附きて豫想外の高價に賣るゝもの尠からずとなり。

眼白　鶯の如く差餌より育つるもあれど、多くは飛ッ兒と稱し巢立して間もなきものを捕へ育つるなり、餌は三分四分が普通にて、冬至頃より徐々に袋蟲などを與へ、一日一回の水を缺かさず浴せたらんには、一月中旬頃より高音を張り出すやうになるなり、されば亦鶯同樣眼白會にて好位地を得ば頗る高價に賣るゝなりとぞ、最も鶯も眼白も野にて成長したるものは荒鳥とて役立たず、大抵小兒の玩弄となりて十中八九は三文の價もなきものとす。

金絲雀　これは撒き餌の鳥なれば餌方に就きては、別に面倒はなけれど、その代り又羽根の工合と、體格と、子育ての善き鳥を選ばざるべからず、近來流行せるものは頭部の羽根の捲きたるものにして、その捲き方によりて種々の名稱あり、且つ價も各々差等ありと知るべし、

小鳥相場　昨今は撒餌類にて▲金絲雀(一番)並にて壹圓五十錢乃至貳圓、ほそ五圓より八圓まきげ上物にて百五十圓より貳百圓とは途方もなき値段なり、中物にても猶五十圓乃至八十圓を唱へ、下等なら十圓より廿圓までなり▲並文鳥は壹圓、白文鳥二圓▲錦花鳥一圓

廿五錢▲十姉妹　八十錢より一圓▲金腹雀八十錢より一圓▲蛇腹一圓五十錢內外▲大錦花鳥五圓より七圓なり、又摺餌類にては▲鸞上物にて貳百圓乃至七百圓とは王公貴人の賞翫ならでは及びもつかぬ品物なり中物にて五十圓乃至百圓、下等五圓より十五圓まであり▲日本駒鳥が二圓位▲朝鮮駒鳥が二圓▲のじこが貳圓▲大三十三歲が二圓位▲相思鳥が貳圓▲大るりが一圓五十錢、小るりが五圓より七圓まで▲眼白が上等にて百圓、中物廿圓乃至五十圓、下等二圓內外▲大白いんこが五十圓乃至八十圓、小白いんこ三十圓より五十圓迄、桃色いんこ十圓乃至廿圓、おかめいんこ五圓、達磨いんこ五圓、小靑いんこ亦五圓位なりと云ふ。

良人の愛を保つ法

これは佛國の某伯爵夫人の起草に係るものなるが、婦人が人の妻となりて良人の愛を永く保べき方法は、左の十四ヶ條にあるべしといふ。

（一）怜悧なる愛、
（二）女らしき従順、
（三）高尚なる趣味、
（四）優麗なる態度、
（五）意志と感情の表示、
（六）愉快なる態度、
（七）道理に合はざる無邪氣の行爲、
（八）外交、
（九）良人をじらして高く止る動作、
（一〇）禮儀に習ふこと、
（一一）苛酷殘忍のそぶりある可からず、
（一二）化粧身だしたみ、
（一三）言語の上手、
（一四）巫山戲方の上手なる事、

さてかくならべし所にて我國婦人の取捨すべき點は孰れぞや。

結婚と壽命

或る醫者の說に人間一生の間獨身生活に於て最も

著しき害を其の身體に及ぼすは男女を通じて二十五六歲の間に在りと云ふ、これに就て佛國統計家デーウエ氏（[illegible]）計算する所によれば、三十歲にして結婚するものは生涯の獨身者に比して十一年の壽を延ばし、三十五歲にして結婚するものは八年の壽を延ばし、四十歲にして結婚するものは六年の壽を延ばし、結婚期の遲くなるに從て壽命を減ずと云へり又印度に在ては幼少時代婚嫁するを以て少しも怪しむ所なく、就中ハンガ溪谷邊に住する人民の如きは、少年の結婚は佛陀の加護を受くるものと妄信し、結婚契約前先づ卜筮に就て占ひ、若し少女が長命を保つとの占を得れば、これを更に他の長命を保つと預言せられたる少年に嫁し、寡婦たることなかるべしと喜ぶなり、印度にては斯く早婚行はるゝ故少女にして兒を產むときは、其子を遇すること恰も人形を弄ぶが如き觀ありと云ふ、因に記す、印度に於ける最近の統計調査によると、二億餘萬の人口中九歲未滿の既婚婦人は三百萬人、十歲以上十四歲の既婚婦人は六百萬人あり、外に十五歲未滿の寡婦十七萬五千人ありとは驚くべし、

米國婦人の贅澤

富裕なる米國婦人が普通に每年衣服費として支出しつゝある金額は莫大なるものなるとは屢々聞き及ぶ所なるが、近頃某新聞記者の取調る所によれば如何に低く見積るも七萬圓を下らずと云ふ、即ち▲毛皮類―一萬圓▲自宅服―六千圓▲宴會服―一萬圓▲車上服―四千圓▲夜會服―一萬六千圓▲略服―一千六百圓▲外套―五千圓▲散歩服―三千圓▲外出服―六千圓▲帽子等―二千四百圓▲乘馬服―一千五百圓▲裝飾品―五千圓▲靴其他―二千六百圓手袋等―四千一百圓、合計七萬七千二百圓を要すと、而して每年斯くの如き巨金を衣服身の廻に投ずる婦人は、紐育府だけにて少くとも六千人を下らずして、米國全體を通計すれば一萬人以上はあるべしといふ、なほ一層豪奢なるものに至つては一着の價六萬六千圓乃至八萬八千圓の黑貂皮の冬上衣を着するもの尠しとせず、且つ之と同じ皮のマッフ等を加ふれば一揃の婦人防寒具の價約十萬圓に上るべく、又夜會服に用ふるレースは普通三千圓にして服地及び仕立代を合算すれば一着二萬圓の夜會服は毫も珍しからずと云ふ。

凶作地に對する同情

萬朝報はいへり理想團の同情米は、寄贈者の多きと意外に出づ、僅かに一升入の白米袋も積聚すれば其の大なると驚ろくに足る寄贈すべきもの必らずしも白米に限る、大小豆、麥、粟、稗黍、も亦可也、各人各戸唯だ其の便とする所のものを贈れば可なるべし、斯くして三縣下を除く全國各人一袋(即ち一升)宛贈るとするも、其の總額は實に四十三萬八千六百六十二石七斗餘となるべく、凶作地の人々は一人約二斗の分配を受くるを得、

茲に於て吾人は更に汎く全國の心ある人々に告ぐ、貧者の一燈も之れを集むれば能く天をも焦すべし、希くは其の微なるを厭はずして之を寄贈せんことを、出來得る人は又一袋に限らず、數十袋數百袋を寄贈して以て分に應ずるの仁を爲さんことを、

更らに注意を要するは、三縣當局者が此の寄贈米を分配するに、些の手落なからんこと是なり、轍鮒水を求むるを急ぶ、一句と雖も早きを要す、今や三縣皆白雪に埋もれ、草根木皮を得んと欲するも得べからず、寒に次ぐに飢を以てする其の慘苦果して如何ぞや、假令小量なりと雖も其の最も苦むものを擇びて速かに之を分配する急務中の急務ならずや、

然るに三縣當局者若し平生官吏風の悠長を以て、或は區々の手續に拘泥して、其分配を急速にせざるが如きことあらば、轍鮒或は苦み斃れん、飢寒に泣くの同胞其之を奈何せんとするぞ、吾人は切に三縣當局者の注意を促がさゞるを得ず(中略)然れども吾人は冀む、寄贈米の分配は假令早きに失するも斷じて遲きに失するが如きことなからんことを、思へ、草根木皮を食ふて辛うじて飢を免かれしものが早く分配を受けて良米の美味を味ふは、憫むべくして而して慰さむるに足るも、終に飢に耐へずして病み又は死したる後、米を得ても何の効なく、寄贈者の仁慈竟に其の仁を成さゞるが如きは、忍ばんと欲するも忍ぶ能はざるに非ずや

お雛さま

すみれ

八疊の間の燃え立つばかりの緋の毛氈かけた段の上にならべた雛様。其雛祭の主役なる露チヤンは、もう遊び草臥たと見えて、そろそろ這ひながら妾の膝へ上つて來る。やう〳〵初誕生に成つたばかりの可愛ざかり。マンマ、マンマ、と花の様な唇を動かして、紅葉の様な手を、ソツと妾の懐へさし入れて、ニツと笑ふ可愛らしさに、抱き上げて頰ずりすれば、キヤツ、キヤツと小をどりする。

日が暮れかゝつて來て、あたりが薄暗くなつて來た、上野の鐘が微かに聞ゆる。

露チヤンは何時の間にか、妾の乳房をふくむで、うつらうつらして居るので、輕くたゝきつゝ、小間使のさよを呼むで、御雛様の雪洞へ灯をつけた。露チヤンは、灯の光で一寸目をさましたが、又チユツ、チユツと音立てゝ乳を吸ひながら、目を瞑る。

灯がついたので雛棚は俄に華やかに成つた、上段には内裏雛きらやかに、紫玉を散らせる金の冠、龍頭を彫りたる御太刀をはかせ給ふ美くしき殿は、花なる御衣と透いて見ゆる、氷肌玉骨、優なる御姿にならむで、雲上の春の快樂の淡い影を金屛風になげて居る、下つては右大臣、左大臣、緋の袴の官女、白張の仕丁、又は今様の人形の姿あでやかなるが、燈に光り合ふ美しさ、糸柳の若芽をきざめる、桃のほころび初めしは、白酒の香に醉ふたのであらう、簞笥、長持、鏡臺、針箱など、みな小さき物ばかり、其下の段には裸人形がある、人形……オヽ懐しの人形よ。其人形は、紫縮緬の振の袂縁にうらたげなる、それでもない。改良服の小さい、それでもない、身には水兵服着たる目元涼しき大きな人形、それである。十年前の人形、それである。

雛人形

單に雛人形といつても、今時は各地方によつて夫々製作が異つて居ました、今日都人士の愛玩する親王雛も、昔は内裏雛と稱した位で、一つの名稱にすら時代により變遷を來すのですから、況て形の上の變遷には幾變化があつたでせう。古代雛の穿鑿は跡廻しとして、目下行はれて居る親王雛の由來を調べて見ると、元祿年間に雛屋次郎左衛門なるものが作り創めたのが抑の起原で、其の後享和年間に原舟月が古今雛を作り始め、降つて文化文政度になつては高司家の有職の手に成つた、狩衣雛と云ふのが一時流行つたものですが之も何時となく廢つて了ひ、雛と云へば一般に次郎左衛門雛を愛するやうな傾向と成つて、是が非常に行はれたものです。故に今日なほ此の餘風を存じて居ります。

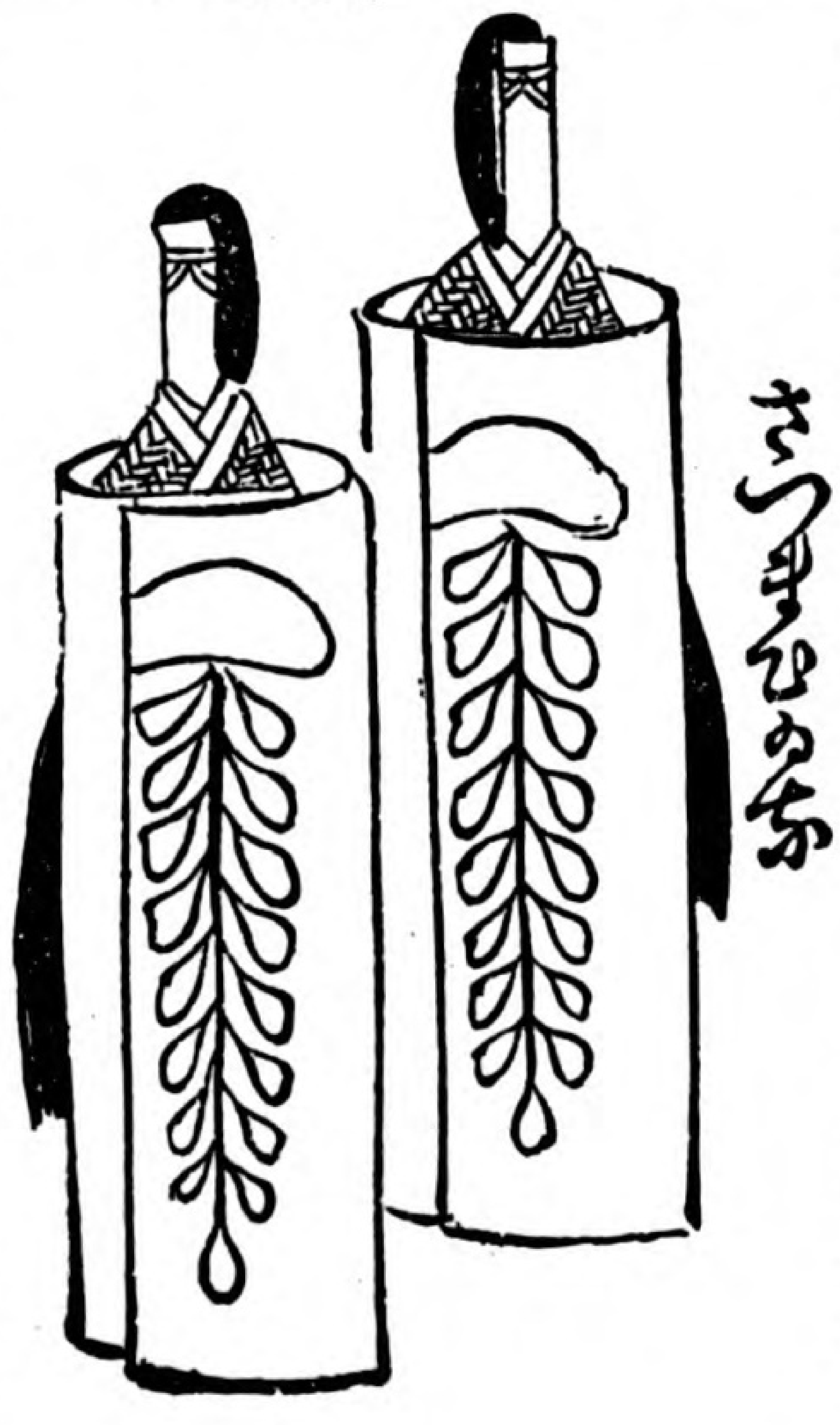
△雛様の種類　親王＝官女＝五人囃子＝隨身＝衛士、とが

あつて、此の六種を取り揃へたものを一組としてあり、それ以外のを浮世物とも又浮世人形とも云つて居ます、さて親王雛と申すのは俗に云ふ内裏様の事、官女は長柄銚子盃などの九献調度を持つた人形、五人囃子は讀んで文字の如く我邦古代の音樂體であるが、此人形には芥子坊主と束帶の二種があります、束帶の方は孰も伶人で例の狩衣雛の餘風であるさうな、隨神は御承知の通り右大臣と左大臣衛士は詩的趣味の林間に紅葉を焚くの故事から出來たもの、併し衛士の人形は元と浮世物で、其が何時か、雛の組へ潜り込んだとの説もあります、偖て浮世物とは高砂＝浦島＝小町等でしたが、今日では能樂物が數番加はるやうになりました。



△雛人形は寸法に出る

以上は身分によつて分類したものだが、人形屋仲間では寸法によつて單に番物、芥子、柳物の三種に分てあります、先づ番物とは最大の雛で、番數は一番より十番であり、普通出來合は八番以下ださうで、八番は九寸、それから順に一寸宛迫つて、十番は七寸と云ふ事になつて居ますが、之は雛の舊式の寸法で、一番は殆んど、小兒が坐つて居る位の丈があつたものだ相です、現今流行の芥子雛は舊時の番外だから、乃で番號以外に芥子と稱したわけです、其の寸法は六寸から四寸迄で、それ以下は柳物と唱へて三寸より二寸、之が雛としては一番寸法の短い、小なものであります。



△東京向きは芥子雛

番物では大き過ぎて巾を取り、爾うかと云つて柳物では餘り小さ過ぎる所から、一般の嗜好が芥子雛へ傾いたわけで、舊時は番外と蔑視せられた芥子雛全盛の時代となりま

した。故に徳川時代に大名道具と稱された番物は、現今では顔色なく僅かに地方で愛翫するに過ぎませんから、雛屋では現今番物に重きを措きません、それから柳物ですが、此雛は最下等で、芥子雛とは到底較べ物になりません。



△地方向きの雛　は先づ番物＝柳物の類は東北地方から、近縣では千葉縣と神奈川縣ですが、千葉縣下は一般に番物や柳物を好みますが、神奈川縣となると芥子雛の方が多い相です。

△西京と鴻の巣雛

本場と稱された西京雛の聲價が地に落ちたのは其の製造が不深切に流れた爲だとの事だが、有繫に織物地だけに裝束の立派なのには東京の雛屋も一歩を讓るとのことです、所で鴻の巣雛と云ふのは、下總の鴻の巣を初め、中山道熊谷附近で熾んに製造するもので、主に番物や柳物を製り出し、之を雛屋仲間では旅物と稱して居ます。

△流行は浮世人形　初の節句には、愛兒の身祝ひとして親王雛や五人囃子も購求しますから、知己間の進物には之と衝突しないやうに、浮世人形を選びますので、勢ひ浮世人形の賣行きがよく年々歳々浮世人形の新型を選むやうになり、從來の高砂や小町所では納りません、又た近頃は能樂の流行に伴つて鶴龜＝猩々を始め、狂言の末廣などを製作するやうになつて來ました。



古代模造雛

古代雛の考證は「骨董集」などに詳しく見へて中々優美なものです、それに文士間に雅劇などゝ云ふ火の手を揚る今日だから、市松障子に親王雛では俗極まると云ふ、捻り屋連中で頻りと古代雛に敷金を投じ、其の古代雛を愛翫する向きが多くなつたので、例の雛通と稱されて居る淸風翁を顧問に賴み、淺草雛＝伏見雛＝元祿雛＝東山雛＝吉野雛＝薩摩雛等を模造に從事して居ります。尤も古代雛を愛賞するのは婦人よりは殿方で、謂ば儀式よりは道樂と云ふ側となつて居るらしいです、從つて其の

△裝飾品も古代風　御廚子黑棚＝偖は簞笥長持と、總てが古代の大内式に則つて鋲打の金屛風の所を蝶鳥模樣の几帳、かけ盤の膳椀も折敷と云つた工合で、何所までも古風で行くのですから、菱餅臺も古式に通じた大槻如電翁が古書を漁りて調査をした結果、東山式を模し、胡粉で喰摘み模樣を盛上で描いた非常に高尙なものです、それに貝桶も菱餅

臺に劣らぬ優美な製作で、周圍へは松竹梅を描き眞紅の厚綿と云ふ趣向です。

雛の調度

雛の諸道具は一年毎に漸々小形になる傾向があるさうです、乃で重なる調度と云つたら

△菱餅臺と膳椀 ですが、菱餅臺も他の調度に連なつて、五寸乃至六寸と、寸法が一定して來たやうな傾きで、昔の樣な大形は一向好まれません、それから膳には、かけ盤＝蝶足の二種がありますが、上等は唐草蒔繪で、塗物は黑塗です、之には必ず兩注ぎと稱し、湯桶と飯櫃が附屬して居りますが、之とても唐草蒔繪と黑塗の兩樣があります。

△雛の裝飾道具 雛棚を裝飾するに必要なる道具には、先づ三棚揃ひ、三つ揃ひ、三面、三曲と云ふ調度、乃で三棚揃ひとは御厨子＝黑棚＝書棚、三つ揃ひとは箪笥＝長持＝挾箱、三面三曲とは申す迄もなく、碁盤＝將棋盤＝双六盤に、琴＝胡弓＝三味線であります、其他化粧道具十三揃ひと云つて、衣桁＝半挿＝櫛笥道具と云つたやうな物があります、之に次いでが行貝＝貝桶の一對揃ひ、以上は雛道具の大體ですが、孰れも唐草蒔繪で、五寸以下の物一般に流行して居ります。

女子事務員

三越呉服店理事　日比翁助

▲女子と給金 近來は大分各會社や商店で女子を採用する樣になりましたが、是は誠に喜ぶべきことであります。私共の三越呉服店でも、四年前から之を採用して居りますが、他はいざ知らず、三越では、給金が男子より安いからと云ふので採用した譯ではないので、女子に新職業を與へたいといふ私共の希望から起つたのです。

▲從來の女子職業 是まで世間で有りふれた女子の職業と云つては、家庭に於ける仕事の外は、甚だ稀少で有つた。今之を二種に別けると云ふと、第一は紡績女工の如き、マッチ、元結等の製造の如き、人をして何と無く側隱の心を起させる類のものである。是は總て手の方の仕事であつて、そして低い方の部分であつて、そして又甚だ多數である。第二は、學校の教員の如き、腦力を使用する側である、是は前者と違つて、收入も多い代りには、相當の智識の有る者で無くては出來ない仕事で、誰にでもと云ふ譯に行かぬから、其數は至つて少い、是が即ち高い方の部分で有る。

▲女子職業の新方面 そこで前二者の間が餘りに懸離れて居るから、此中間に位する程なもので、女子相當の新職業を、婦人に與へたいと思ひ付いたのが抑々の始めです。

▲**女子の自活**　ソレニ、從來の日本婦人は衣食を男子に依賴して居ましたから、其權利は蹂躪され、其自由は束縛されて居た、然し女子とても仕事をすれば、相當に能く働いて、獨立自活の出來るものであると云ふ一つの標本を、今の社會に示して見たいとの趣意旁々半ば道樂的に試驗採用を致した譯なのです。ですから當方では仕事が仕事故、口先の巧妙のも善い、氣轉の利いたのも惡くは無いけれども、其れよりも人格と品性に最も重きを置いて、相當の者を求めました、從つて容貌の美醜や應接の巧拙以外に、的當の敎育が無ければならぬから、採用すべき婦人は、多くは中等社會から見出さればなりません。彼れて奇怪な婦人を雇ひ入れた爲め、不結果を來し且つは世間からも笑はれた、或商店の事なども聞いて居たものですから、一寸其人選に苦しみました樣な譯です。

▲**最初の女子店員**　そこで初めて女子の店員を採用して、男子の間に伍し事務を執らせたのは、明治三十四年の四月で、一ッ橋の女子職業學校長心得宮川保全氏に、保證人として萬事の責任を持つて貰つた上、三名だけ周旋して貰ひました。

▲**其後の經過**　それで最初の結果が略頁好で有るとの認めが付きましたから、次いで二三十名の者を一時に採用し、其後僅少の出入があつて、現今では三十八名居ります。

▲**女子店員の仕事**　さて三越呉服店では女子に如何なる仕事をさせて居るかと云ふに、其第一は電話係りです、第二が販賣員、第三には計算事務員、第四には仕入商品取扱係、第五仕立説物の檢査、第六衣裳標本の整理、第七接待方、第八給仕等に分けて、使用して居ます。

▲**女子の長所**　若し女子事務員の長所を尋ねて見たならば、其仕事の仕振りが、男子に勝つて敏活で有るとは云はれません、けれども常に眞面目です、間斷無く仕事を仕て、所謂油を賣る樣な事は少しも有りません、出勤時刻も中々正確に行きます。元來婦人は種々な病氣も男子より多く有る可き答ですから、缺勤日數も從つて男子よりは多いかの樣に思はれますが、事實は決してさうで無いので、其邊は大底男子と同樣に行つて居ます。

▲**女子の缺點**　さて客に對する時は如何な狀態で有るかと云ふに、女子の店員は、客をキヨロ〳〵と頭の上から足の爪先まで見て、其客の服裝や容貌や態度などを、批評的の目で觀察するからいけない、且つ男子と比較して口數少くお世辭が足らぬ、などの批難は折り折り聞きましたが、それは皮相の觀察で、未だ女子の眞相と手腕を知らぬからの言であります。

▲**姉と姉妹**　私が或日店内を見廻つて居ますと、二人の婦人が體と體とを、クツつけ合つて、左も睦まじ相に話して居るので、姉妹の客であらうと思つて居ましたが、近寄つて見ると其一人は店員ですから、後で其店員に貴女は先刻の客を知つて居るのかと聞いたら、知らない客だと答へました、で私は其時、これは大きな成功である、

漸々馴れて來れば、斯う成る事と考へると同時に「異性相寄る時は虛假的輕薄的に多く効を奏すれども、同性相對する時は誠實眞情遂に時を制す」と云ふ、西哲の言葉も思ひ出されました。

▲電話と女子　電話係の如きは特に女子が適當です、最初は小僧共に取扱はせて居ましたが、時々言葉が簡單過ぎたり、粗暴があつたりするので、女子を用ゆることにしましたが、夫れからは袖口は如何されますとか、綿は如何とか、自然に痒い所へ手の届く樣に成りますから、或客先からは、是までは態々聞きに行つたものだが此頃は、電話で用が濟む樣に成つたと云はれました。

▲女子店員の心得　偖、當店では是等女子事務員に對して、心得として斯う言ふ事を言ひ聞かして置くのです。汝等は一旦來た以上は永く居て吳ればならぬ、お嫁に行くまで位で無く、お嫁に行つた後も、相變らず勤めて貰ひたい、從來日本の風習として、中流以上の妻君は、殆んど徒食して居るのが多かつたが、是からは其ではゆかぬから、如何に高給の人の妻でも、官吏の奧樣と濟まして徒食して居るのは、甚だ惡い習慣で有る、女子と雖も天より授かつた所の職分であるから、之に對して、其義務を盡さればならぬ。故に汝等の良人が働けば、汝等も當然働かればなりません、生涯を通じて働かればなりません。若し小供が出來たら、或期節だけ必要に應じて休めば善い、そして休むだけ休んだら、再び眞面目に働かればならぬ。當店で汝等を傭ふたのは、女は給金が安いからと云ふのでは無い、どこまでも汝等を導いて行かうといふ趣意なのである、だからお嫁に行くまでの腰掛にする、又は嫁入りの衣服を造くる爲めに這入るなどは、寧ろ始めから御免を蒙りたい、少くとも女子の味方に成つて盡力したいと云ふ意志が、此方に有るのですから、汝等にも其邊を察して貰らはればならぬと言ひ聞かしてあります。

▲女子店員と結婚　先頃も一人結婚式を擧げたのがありまして、折り惡しく非常に急しい時期で有つたが、種々の用意や親類廻りなどもあらうから、滿足出來るだけ幾日でも遠慮無くお休みなさいと言つたら、其女子は約一ケ月餘り休業したが、再び出勤すると同時に、今日も汲々として相變らず働いて居ます。是には私も滿足して居ます。現今既に良人のあるものは數名有りますが、皆毎日他と異る所無く出勤して居ます。尤も或者は技師に嫁し、技師の轉任と共に、岡山に行き、或者は船員に嫁して神戸に移住したのもありますけれども。是等の事情止むを得ざるものを除くの外。在京者は相變らず通勤し居るのです。

▲妊娠者　妊娠した者は未だありません、有れば之れも必要なだけ充分休ませて、其後は元の如く通勤して貰ふ心算ですが、斯の如く或は結婚、或は妊娠と休業が度々あつても、男子の店員が小僧の時から養育して、三年間徵兵に取られるのと比ぶれば、女子が一回の妊娠に半年宛休んでも、六回に匹敵します、けれども六人からの子を持つ婦人は澤山ありません。勿論從來の女子には無い所の正

しいその仕事を與へて、徒附ならざる生涯を送らせたいと云ふのが私共の希望です。

▲取締の用意　取締りの上に於て一番危險なのは、若い男女を同席させる事ですから、之に對する用意としては。男女の間柄は職業上では區別をせず、交際の方では店外に於ても相往來する事を禁じてあります。

▲退出時間　特に退出の時間を矢釜しく仕てあります、若い男女がぞろ〱と一つ口から出て行く事は、他所から見ても餘り見善い物では無く、又甚だ危險の懼れがあるから。先づ第一の鈴（客が一人でもあれば、失禮に當る故に決して店員の歸るを許しませんから、日にも依つて異るけれども、此頃ならば大底四時から五時までの間です、で營業が濟んで、婦人の取締り二名が、宿直長として居る其所を通過して、女子の店員一同が退出します、之が了つて後十五分間を過ぎますと、此旨を届けて來ますから、第二鈴を命じます、そこで今度は男子の店員が退出することにしてあります。

▲男子店員は讐敵　店用の外は男女間に唯だ一口の戲談も嚴禁して有ります、客に對しては十二分の愛嬌を持たねばならぬ、けれども男子店員には、半片の笑顔も見せてはならぬと云ふ事に定つてあります。それで初めて雇ひ入れる時に、

●男子の店員は己の讐敵と思ふ可し

（第何號）　營業部長 ㊞

と厚紙に書いた申付書を與へ、之に對して「男子の店員は己の讐敵と思ひ可申候」と云ふ受書を取つて居ります。

▲未婚者を預るもの　斯様にするのは間違の無い内から、豫め不測の變を防ぐ為めです、中には三十歳四十歳のも、一兩人はあるけれども、多くは二十歳前後の未婚者であるから、之れを預つて居るには預つて居るだけの事を爲ればなりません。不圖不品行があつた時、自業自得であると云つて、關はない樣では、其こそ實に不親切な話ですから。

▲女工店員の身上　品性と云ふ事に重きを置いた結果が、女子店員の多くは士族です、官吏の恩給を受くる者の子もあれば、曾て官吏で有つた所の父は死亡して、母は手内職を爲し、自らは弟の學資を造る爲めに働いて居るのもあります。又或者は父は亡く母は老衰して、自身は嫁入り時なれど、老母をはごくむ者が無いから、雨の日風の日の厭ひ無く毎日出勤して居るのもあります、更に或婦人は數年勤めた後、事情あつて布哇に行きましたが、屢々通信してよこして遠からず歸朝の上は、再び使つて貰ひたいと云つて居ます、此女は男子も及ばぬ敏腕家で、非常な才物でした。

▲客に對しては　一旦此店へ這入つて來た者は、總て客で有るから、如何なる人にも充分の敬意と愛嬌とを拂はねばならぬ、例令汝等の裏長屋に住む女房でも、出入りの車夫の娵でも、此店へ來た以上は客であるから、決して粗畧があつてはならぬ。其代り各自が歸宅した後は、如何なる挨拶を爲すとも、それは勿論勝手であると、訓戒してあります。

▲理想と實行　女子店員に對しての希望と注意とは、大方は以上に說明し盡しました、けれども其れが理想通りに實行が出來るか出來ぬかは、勿論今後の經驗を待たねばなりませんが、併し目下の所でも、十分豫想丈の成績は收めて居るので、喜ばしく思ふて居ります。

すき愚誌

小波

▲愛人は猶名所の如きものである。會ひ度き時に會うてこそ、愛人と語るも樂しけれ。行き度いと思ふ時行きてこそ、名所に遊ぶも樂しけれ。……住みては名所の眺望も面白からぬ如く、我妻と定まつては、愛人も時には疎ましく思はれる。此點からして、僕は古代の夫婦別居主義を、強ち斥け得ぬのである。

▲天氣に晴、曇、雨、風のある如く、人氣にも厚、薄、冷、熱のあるものだ、雨の日に偶々甲山に登つて、彼所は常に雨降ると嫌ひ、曇る日に恰も乙町に遊んで、此所は實に陰氣だと呟くのは、未だ至らぬ觀察である人を觀るのも亦其通りだ。

▲細君の自ら持つて出る澁茶一碗は、下女の幾度か運ぶ佳肴より、客に取つてどれほど嬉しいか知れまい。而もその細君の、少しは客の傍に在つて、主人を助けて應接をするのは、如何にも床しいものである。

▲尤もそれは程度問題で、急ぎの用談で來た客の前に便々と御神輿を据ゑられては、却つて沽券を下げる基だ、否、さう云ふ目先の見えぬ細君なら、主人たる者よろしく警戒して、寧ろ客前へ出さぬがよろしい。――況んや所謂出シヤ張りなるをや。

▲出シヤ張は無論閉口だが、さうかと云つて、あまり引込過ぎるものも却つて客に失敬であらう、玄關側や廊下などで、正にその姿を見せておきながら、挨拶も無く逃げ込んで急いで障紙を締め切るなんぞは、聊か癖に障るものだ。

▲オリーブが流行れば、直ぐにオリーブ、紫紺が流行れば直ぐに紫紺、ヤレ此頃は絹ちやみだ、ソレ今は小

紋の裾模樣だと其流行を追うと云ふ事は、必しも惡いとは云へまいが、その追ふと云ふだけに、實は不見識の次第である。

▲

流行を追ふとは、畢竟流行のお供する事だ、お供では不見識ぢやないか。それよりは自ら先に立つて、流行をお供にする法を講ずるがよい。即ち自ら新しい意匠を凝らして、これを世間に普及させるべしだ。

▲

時世後れの扮裝は、隨分氣の利かぬものであるが、餘り流行を追ひ過ぎるのは、何うやら輕薄らしい感がする。

▲

時世も流行もよい程に鑑み、而も其間に一ト見識を持つて、其人獨特の嗜好を示し、そしてこれを見る人の、何となく心地よく、いつか自分も釣り込まれて、さう云ふ風がしたい樣に成る……と、かう云ふのが眞の着巧者、着道樂と云ふのではあるまいか。

▲

尤も着道樂はある點まで天性である。學んでも及ぶべきもので無い、またその人自身から云つても、必しもこれを他に見せて誇り、乃至見られて喜ぶと云ふのでは無く、自身に氣に入つた服裝をする事が、已に自身を樂ましめるのである。

▲

但しなまじいの着道樂は、却つて忌味に見えるものそれほどならば、むしろ時世も流行も顧みず、只平凡に着て居る方が、どれ程床しいか知れはせぬ。

▲

多數の姉妹を縁付けやうなら、成るべく別の方面に婿を求めるのが、親の慈悲ではあるまいか。例へば同じ學士に選るにしても、長女が工學士なら、次女が醫學士、末女はまた法學士とするか、或は總領を官吏に縁付ければ、他は商人にとか、學者にとか、或は軍人文學者と、毛色の變つたのに連れ添はせるがよい。なまじ同方面の婿殿を選ぶと、自然婿等の比較評が出て

又姉同士の競爭が起り、衍いては娶達、即ち姉妹の不和を醸す事、必しも無きを保せずだ。

▲『同胞は他人の始』と云ふ、一寸水臭い樣に聞えるが、實は一面の眞理を説いたものだ殊に女同胞に於てますます其語の誤らぬのを認める。――否、なまじ何時までも姉妹からうとして、却つて姉妹喧嘩を招く例は、ちよいちよい見掛ける、聞込みもする。



▲婢僕のよく働き、よく間に合ふのは、その主人の使役法が想はれ、子等のよく育ち、よく成人するのは、その親の養育法が忍ばれ、生徒のよく學び、よく教を聽くのは、その教師の教育法が察せられ、共に〳〵床しいものである。

▲然るに、主として婢僕の横着を吐き、親として子等の惡あがきを訴へ、教師としてその生徒の不成績を罵るのは、一面彼等自身の、不德、無能、不行屆を自ら白狀するものと聞いて可からう。

▲名譽ある夫を持つの婦は、やがて婦の鼻を高からしめる、然るに名譽ある婦を持つ夫は時として意氣地の有無を問はれる事がある何う云ふ譯か知らん？

▲丁度それと反比例に、婦のより美なるは偶々夫の容貌を上げるものだが、夫のより美なるは、却つて婦をより醜ならしめる、それも何う云ふ譯か知らん？

▲電車も全速力を出すと、却つて通行人を過ち、車體を損じる虞がある。人の世に處するも、常に其邊の呼吸を考へねばなるまい。即ち十分の力あるものも、三分は平生蓄へて、臨機に全力を注ぐの用意を要する。

殊に婦人の側に於て！

▲速に走れる足で、しとやかに歩を運び、大いに辨じ得る舌で、徐かに口を利き、萬事呑込んで居て、それで滅多にはそれを吐かず、イザ鎌倉と云ふ時は、長刀も自在に打ち振れる腕に、常は針を運ばせて居ると、かう云ふのが所謂東洋の婦人として、最も理想とすべきであらうとは、曾て或る人に答へた所。今も尚さう思つて居る。



美文

（天）春雨

伊豆南崎村大瀨　長谷川弓子

かきならす琴の緒に、しめりおほゆるを、あやしと障子おしかけて眺むれば、絲の如き春雨いつしか降り出でつるなりけり。佐保姫の髮結びせしさまとも見ゆる柳の綠色鮮かに、垣ほの梅、新粧の色をあらはせり。若菜つみにと行きし少女等の足早に歸りゆきたる後に、口かしましく罵りあひて門の小道を過行くは、紙鳶飛ばさんとて野にゆきし男の子等なめり。麥生の雲雀をひそめて、み空に夕の歌も聞こえずなりしかど、黄鳥は花笠さして尙梅が枝に宿るゝを惜めり、柳の糸より落る雫、花の脣より離るゝ露は泣れる涙の解けしにやと怪まれてなむ。

（評）美はしきスケッチよ、恰も韻文を誦むが如し。

（地）思ひ出

下野國小山町田村方　江川てい子

平和の女神天降りましましてより、世はなべて御軍人の歸り迎ふるに忙しく、萬代呼ばふ聲々は野にも山にも、どよみ渡りて勇しくも又賑しきを見聞きするにつけ、御悼はしきは我姉君、百年の苦樂を共にと契られし兄君は、終に名譽の戰死をとげ給ひしより、あたら花の姿も凋れはて涙の露の乾く間もなく、御ぐしは短う切り捨て、只亡き君の御後弔ふの外、餘念なき御有樣こそながなかにあはれなるきはみなれ。

今しも姉君は經机に頰杖つきて、さながら夢見る人の如く想ひに沈みつゝおはしましぬ。驚かさんも心なき業と、そと、御うしろに控へんとする、折柄、片邊に立かけありし小琴の糸の、いかにしけんぽつりと高き音をたてゝ一筋切れぬ、其響きよ、かつて兄君世におはせし頃、花の晨月の夕、睦びの曲をのせし響きとは似もやらぬ淋しさなれど、思ひ出多き此琴の音をし聞けば、忘れんとせし舊事も、又新らしう胸に浮び出でゝ、悲しさやる方なく、思はずも想ひは同じ姉君の、御手とりつゝかたみの言葉はなつて共に共に涙にくづをれはてぬ。

（評）なだらかなる筆のはこびよ。姉思ふ妹のうるはしきこゝろよくうつされたり、想やゝ古き感なき能はざれども。

（地）暗　夜

盛岡日本鐵道社宅　山口ます子

月あれば物思ふとか又かなしきは暗夜にこそあれ、あたりをてらす光も無くたゞ淡き星影のまばらにかゞやくのみ、常には親しき庭の木立の物影さへそれと語らず、池のさゝ波かすかにてそよぐ梢も黑きが中に物立ちてかなしき聲をもらすに似たり、かゝる夜をたゞひとり今は筆取るわざもうみはてたる窓のともし火の影さへよわり行くを友とはしつ、さても思ふともなくいつしかたどらるゝはこし方の夢のなごりよ。

世にもなつかしき兄君を、ひとりならずもふたりまでもちてうれしく生れ出でしは露の間、一人淋しく取りのこされしも何わきまへぬ身の事だになくて日を送りつゝ。

ふり分がみの頃過ぎて少しは物の心も知りそむる頃をひ、野邊の遊びの歸るさなど轂打かはしつるはらからのさま見れば、心無き身もうら淋しくて、右は乳母に引かるれど左の手は又無くさびしく覺へぬるも、はや今はしのぶにあまる夢の昔と消えはてし、思ひもさま／＼増さり行く此年頃せめて一人にても、いなそもかなふまじ、さらでも少しは世を知りそむる頃までも共に在りたらんにはしのぶ思ひにまだきのふしもありつらんをなど、かくは淋しき身とはなりにき。たゞ／＼明暮に命と語らふは名殘の影そも何ぞや、いつも涙の霧のうちさへぎりてながめもわかず、はてはおのが袖に村雨のふり來らんとは。

いでや今宵、たとひ影は見えわかずとも、おのが思ひのたけを語らむ、うつしゑの兄君たちよ、しばしみたまやこゝにかへりませ、あはれ黑きかなたの空をはるかに見上ぐる、淡き一點の星かげ流るゝよと見えて消えはてぬ。

（評）外の暗、心の暗、對照し得てうれし。

（秀）春の朝

伊勢國河藝郡白子町　三栗家てる子

かたむく月なゝめに、園の小窓を照すなり、折りしもそよ吹く風に、戸のすきもれて、ゆかしき梅が香を送りくるに、起き出て見れば、あな嬉し、昨日にまさる眞き日和、此美しき朝ぼらけ。

そゞろありきの心止みかれて、程近き野邊に來りつ、ふと見れば月影淡く山の端に殘れり。見かへれば、赤根さす空を、飛び交ふ鳥の北へ南へ。足元を流るゝ小川の水は、さながら春の女神のしらぶる琴のごと、一輪の椿花を浮べてたどり行く。やがてさしのぼる朝日の影、あなうららかの春の日よ、あな長閑なる今朝よと、心もそらにさまよへる折柄、田の面に出づる賤の男のひな歌に驚きて、歸る家路の森影に、百千鳥の囀づる聲高く低く、學び舍に通ふ子等、伍々參々來歌の聲も勇しく。

（評）想多くして文字足らぬ感あれども、田園の春のさま僅に見ゆ。

愛らしき犬

京都　さつき女

こぞのひと日ふとちん様の犬わが家へまよひ入りぬいとさゝやかなるにはあれど様々の藝をしれるよりかひぬしのなつかしう覺えて暫々うちよりあれよこれよといろ／＼ものあたへなどしてるよりいつしかなれてわが家のごとくなせりかへしやらんもぬし知れずさりとて此まま飼かんも心くるしなどいひあへる折からにいづこともなく行きたればまづと心やすめぬ其後折々來りてはあだかも主の如くよろこびてま

た踊るなりけに〳〵愛らしき犬にこそ

(評) ありそうなることを、ありのまゝに記されたる處中々にうれし。

酒匂の海岸

相模　奈良八重子

電車國府津をはなるれば、このあたり老松道につゞき、颯々たる松風は、靜かなるあしたの波の音と和して自然の琴の音を聞くが如し。やがて酒匂川の長橋を渡れば、海水と川水とは互の夢をくり返へして、幾世の契を結ぶあたり、ふし面白き舟歌をうたひながら藻をほす海女、一人イみ、鴎は波の飛沫をあびて、羽ばたきする磯のあなた、伊豆半島は霞の間に見ゆ。浦づたひ漕ぎ行く船の帆手打引きて、波の上に走るさまなど、繪にせばやと思ふ折しも、心なき電車は、この佳境をのこして並木松の間へと入りぬ。

(評) 寫生の様おもしろし、結文の電車いと力あり。

双蝶

名古屋　杉谷稜子

われなほ幼き頃なりけり。程遠からぬみ寺に、何がしと云へる琴曲の師匠の溫習會ありければ、母に伴はれて、其席に列りぬ。



書院より廣間に襖あけ放たれて廣びろと、そこには數多の燈火花やかに耀やきて、着飾りたる少女子を照らしつ奥まりたる小高き臺には今しも十五六にもやなりまさむ、美しの君の妙なるしらべに尺八の音ぞ合されたれ。唄聲は鈴の音より清う、げに入神の手よと聞く人毎に賞めたたえつ。曲は終りぬ、胸にゆらぐよと見しは紫の房なりし。

次の君は臺に出て彈き始め給ひぬ、されど琴知らざるわれは椽先にて幼きどちとたはれ居りしに、いつのまに來ましけむ、後ろにかの紫房の君ぞ微笑みつゝ立ち玉へる。君はわれを見て「可愛ゆき稚子よ、われもかゝる妹一人ほし」など云ひて美しき御菓子を賜ひければ、われは頰紅めつゝ俯向きぬ。

彼の君や何處の人なりけむ、今いかになし玉ひつらむ、知らず。その胸高く結び給ひし帶、双蝶の繡ひ模樣、今もなほ眼にぞうつる、幻の影のごとくに。

(評) 水莖の跡、香はしき心地す。

わかれ

津市　松尾はな子

妹の病重いとの報を得、匆々に歸宅つてから今日で丁度十日目。試驗

前の忙しい身體と歸つてからも閑を惜むでは勉强して居たが、今日は愈病の床の哀れな妹を措いて歸校られればならぬので。あゝ明日よりの試驗が恨めしい。

旅裝調へて朝まだき、私は妹の病室へ入ると先づ咽せ返る樣な藥の香が陰氣な氣と交つて鼻を衝く。父上も母上も已に其枕邊に着いて居られたが、私が入ると共に妹はふと濕むだ目を細く明いて、

「姉さんもう行くの！」

息も切れそう。私は思はず其細い手を握つた。

「あゝ姉さんもう行きますから御前も何卒……」

聲が喉につまつて後句は消えたので。

「姉さん私別れるのいやよ……」

あゝ濕むだ眼からはら〳〵と涙が落ちた。私も泣いた、父上も母上も……。名殘りの見納めにと一瞥を後に漸くにして次の間に下ると、そこにも幼ない末の子を抱いた儘、乳母の滿が泣いて居た。

私は只胸に手を措いた儘、竊かに神に祈つたのである。

（評）筆のはこび輕く、敍事またよし。

親き友

備中　かほる

徒然のあまり、庭になりたちて歌の栞もがなとあたりの景色をながむる折から、表の方に友かれの訪ふ聲、小走に出でゝ迎ふれば懷しや松子の君なりけり。隔なき友の間とて「玉の臺に住はせ給ふ姫君の御身も厭はせられず、賤が伏屋に御出張、一家の光榮此上なく侍る、むさくるしく候へど、先々これへ」と書齋にいざなへば、松子の君もさる者「いつやらん御機嫌伺ひ奉りてより思ひの外の御無音、姫君樣にはさぞ〳〵御怒らせの事と憚る〳〵伺ひ奉りしに、何もとがめさせ給はで、いつもながらの御やさしき言の葉たまはり身に取りて大慶に存じ侍る」とわざとしきる際に手をつかへぬ。よりて妾は姫君になり澄して杉箸を白紙に包み「是は妾がつかひ料の箸古びたれどもそなたのまめやかなる心にめでゝ、取らせん」に差出せば、松子の君はわざと押し戴き「かたじけなき御たまもの有難く」と云て笑を洩しゝかば、妾も今迄こらへ〳〵しをかしさ一時に洩れて、暫し互に起きも得ざりき。

（評）おもしろきまゝ取よ。

花うり

和歌山　三田龜子

そぼふる春雨の興ある眺めにふけりし折柄、聲高に呼びつゝ花賣りの來るを見やれば年の頃十三四と覺ゆる少女子にて、窶れし顔、汚れし衣服、いと哀れ氣なりき、少女は花讀む人のなきを悲しと感じけむ、聲はうみ涙は頻に傳ひつ。あまりのいぢらしさに呼び止むれば、いと耻らいたる有樣にて小聲に何れの花なりとも召してよと請いぬ。よりて白百合の花求めて、料金をとらすれば幾たびか禮を述べ、春雨の間を縫ひつゝ步み行きぬ。花めせと呼ぶ淋しき聲を破れし傘の中より洩らしつゝ。

（評）好題目こそ撰ばれたれ、されど文章は今少し、

悲し味

かほる

好な美代子さんがお嫁に入らしやつた時は何だか淋しくて〳〵一人で泣てゐましたが中歲たつか經ぬに旦那樣に死別れたとて歸つて來られました、今思ふとあの時の淋しかッか方が美代子さんの爲にも妾の爲にも餘ッ程幸福でしたのれえ

消息文

(天)　亡せにし兄の友へ

福井市湊下町四尾方　義江初枝

この花の様にと申し居り候ひしも今更思ひ出の種に御座候。淋しき春をおなじ色に咲き出でし兄が遺愛の櫻一鉢。永き年月同胞にまされる御誼みを賜ひし紀念にもとさし上申候。花の露の一雫、あはれ御硯の水をも増し候はゞ。亡き兄も如何ばかりか本懐の事と被存候。今年初めての老の眼鏡に物よろづ大きう見ゆるなど打ち興じ居り候ひし父さへ。主なき今年は、花のいと少さしと申し候も涙に御座候。返らぬくり言御笑ひ被下まじく、名は「春」兄が命名の由に御座候。かしこ。

(評)　文は引締りて一の贅辭なく、意はあまりて餘韻深し、これやこれ消息文の好模範。

(地)　草花を請はれたる文の返し

紺町　むらさき

よくぞ仰せつかはされ候、花もさこそ嬉しと思ひ候はめ。さゝやかなる庭に培いし花、匂ひ後れたるが耻しくは候へども、仰せにまかせ一もと参らせ候、なほこれをしろべに園に殘りたるをも訪はせたまはゞ、花は更なりあるじのよろこびいかばかりかとなん。かしこ

(評)　花もあり實もある文よ。

(人)　從弟の終焉を報ずる文

津市西新町三九　松尾はな子

兄様、一夫は豫て電報で御知らせしました様に遂に今朝八時逝きました。

今朝は朝から曇つた陰氣な日でしたが、丁度七時過、うと〳〵と昏睡狀に陷つた一夫は、不意に濕むだ目を細目に開けましたので口を濕してやりますと「御祖父さん、とうちやんは」と云ひますので「今見えるよ」と慰めて居ますと間もなく「とうちやーアン」と云つた切り又すや〳〵と眠入りましたが、兄様、此あとは云はして下さいますな。

あとや先なる此文、何卒御判讀下さいまし。

(評)　今はの際の様よく寫されたり、かくも短き文のうちに。

(秀)　摘草に友を誘ふ文

相模國愛甲郡厚木町　奈良八重子

明日の天氣もうらゝかなるべしと存じ候へば、若草もゆる春の野に、草つみながら、一日をおかしう暮さんもまた一興と、そが仕度に今日の中日は過して候、館山の櫻も今が盛りと聞き候を、一目も見で、夜半の嵐に散らされんもいと口惜しう候へば、是非々々明朝八時までに妾宅まで御越し下され度候。明日のお辨當にとてまるめし草餅の加減もおほめにあづかり度と妹も樂み待ち上候、御差支が候ふとも、そは春風にまかせてまげて御聞きすみ下されたく、かしこ。

(評)　かゝる文を得て如何で快ならんやは。

（秀）東都に物學べる妹に

大阪空堀町　江口千夏子

千鶴さん先日は御自筆の繪葉書有がたう、大層よく出來てましたね、母上も千鶴子が此畫の婦人の樣に立派になつて歸つてくれたらなどゝ毎日取出しては被仰るのですよ。

そら此夏お約束して置た吉野山行の花見小積れ、今しがた仕立上ましたよ、この下着の出來る時分はあなたは試驗の眞最中でせう、今度こそ五年の間苦勞した蹟のあらるゝ時ですから、どうぞしつかり勉强して春の花のそれの如く、故鄕へ立派な花をかざしてお歸りを祈ります。けれど決して無理な勉强などなさらぬやう、又たくれ〴〵も身體を大切にして下さいよ、萬は次の便に左樣なら。

（評）文は一通りなれど結構中々におもしろく、母子姉妹の温情、哭ましとも哭まし。

從姉のもとへ

名古屋　杉谷稜子

藤ちやんのお寫眞まだ送り給はらずや、日に〳〵待ちこがれ居り候にいつも〳〵お約束のことばかりは輙に候ことよ。藤ちやんもまう六月めなればさぞ大きく愛らしくなられしならん。ある日「藤ちやんはきつと靜さまに似て居らツしやる」と申候處、母は否「父さんに」と云はれ候、孰れに候や、然しよく肥えて愛らしいお見とは二人の想像の合ふところに候、東京地方の節句は新曆のよしに候へば、はや束の間に相成申候。藤ちやんの初節句、何かお祝ひ申上げむと、ひとり意匠をこらし居り申候、今度は是非にぜひにとお寫眞の御催促まで、かしこ。

（評）從妹のあど氣なき心事よく現はれてうれし。

梅の消息友の許に

長野　澤田富美子

鬨邊のあわ雪いつしかとけ初めて見渡す野山の景色いとうらゝかとなりはべり候折柄、一筆しめしまゐらせ候、私事今朝早く庭にいづれば嬉しや庭の梅二三輪ほゝ笑みて、めでたき、平和の春を祝うが如く、いとゆかしく鶯の美しき聲の遠近に聞くなど憂き心も自づから浮きたつがごと覺へ申候、折しも春風に二三輪机のほとりにかゝりを文の奥へまき込め候、御慰みにもと、かしこ。

（評）文また匂ふ心地す。

母より小包送り越したる返し

芝　简井たか子

母上の慈愛こもれる小包慥に頂き申候、そを打開く手の如何に嬉しるに震へ候しか。舊正月のお祝とて覺へある丸形の餅それにお砂糖豆粉までも、其上母上の手づから織らせ給ひしとの縞物、さては情も厚き綿入襦袢たゞ〳〵み心に泣き申候、また添へ給へる美しき手箱、何やらんと打開けば白紙の幾重卷込みし羽黑の御守護札、袋にせよとか青地錦の小切、嫁てよりの御情は心に銘じ居候も、今日は殊更に嬉しく、覺へず袂をぬらし申候。懷しき母上樣、何卒御身御大切に遊ばしこん三月樂卒えての嬉しき歸省の折、美はしき御目もじ申上、四とせ此方の御物語を申し上んとを樂しみ暮し居候、先は取敢へず受取の御しらせのみ、寒さ烈しき折柄御用心遊ばされ候樣願上候、かしこ。

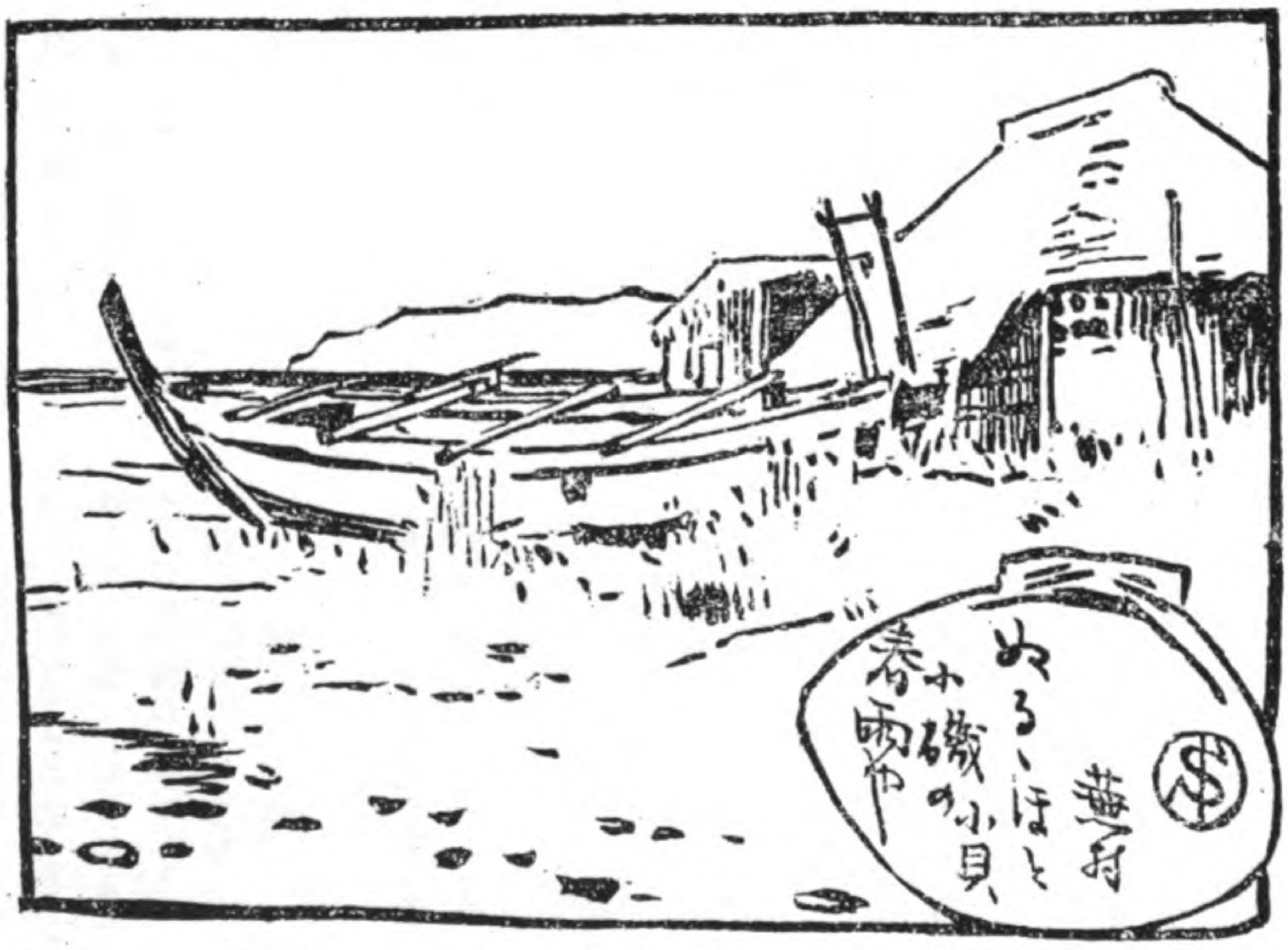
（評）心づくしの小包、つゝまれし慈母の情、對照し得ておもしろし。

雪の日の實況を姉の許に報ずる文

すみれ

兩三日來の暖氣にて南枝綻び始し御地の便りに引かへ、當地未だ春とは名のみにて、殊に昨日晝頃より降り出せし六ツの花小止なく、夜に入りて一入烈しく、大路も途絶ゆる有樣に候ひしが、今朝しも雨戸くりあくれば、空は名殘なく晴れ渡り、梢の雪にうつる朝日の光まばゆく、荒たる庭も咲く花の盛かと怪まれ、或は吳竹の重げに撓みたるに、雀の鳴きつゝ飛かふなど餘りの心地よさに寒も忘れて眺め居り候處、太郎の何日となく勇みて床をはなれ、顏洗ふ間もあらばこそ、はや走り出ては、表にてはいくその小童人集りて、雪合戰をはじめ、互にひしめく聲しばし鳴りも止まず、いとゞ興を覺へ申候。今日は折よく日曜に候へば、父上母上と共に世々暖かき雪見の宴を催し、樂しく一日を過し申候。先は御しらせまで草々。

（評）雪の日の有樣遺憾なくものせられたり　終の一節羨しふこそ。



良人に逝かれし友の許に

蹊春女

花には嵐月にくも、げに味氣なき浮世とは知れど、君の薄運を承りて涯なき悲しみを覺え申候。

人生の有爲轉變、人間の運命、これたしかに神のひめごとに屬し候て、人力人智の左右致しがたきものに御座候間、過去は唯過去として葬らんより、外に路もなき御事と存じ候。とはいへ、いかにしても薄き運命の星の下に生れいでられし事よ。私事五月雨ふりしきる頃より二ヶ月許の短き間に、みめぐみ深き恩師を失ひ、從弟に別れ、叔父に逝かれ、又たち子樣には御父上を病床に擁し、ふみ子樣には自ら重き枕につき、かほるの君は去り、又君には人生此上なき悲運を荷はれしとは、天はひとり私の身邊にのみ淚の雨をそゝぐにはあらざるなきかをうたがひ申候。

申までも御座なく候へども平かなる御判斷と、つよけき御こゝろざしとは此際合君の爲に必要なる事と存ぜられ候、勿論慈親を御初め皆々樣には十二分の同情をそゝがれ候はんなれども君

の御覺悟の如何は今後運命に限りなきかゝはりを及ぼし申べくと存じ候、すでに亡き方の御情にむくゆるは自ら道ある事に候へども、唯のぞみにたへざるは君一身一家の爲に節をのこさゞらん事に御座候。戀情のはげしきは偶々人の健康を害ひ申候聞くれぐ〳〵も御自愛あらん事をいのり上候。

（評）多少説法過ぎたる感なきにあらざれども、節の狀としてはよく書されたり。

夢を見て兄へ

府下　川井穎子

兄さん、御變りはありませんか、實は私、昨夜變な夢を見ましたの。何處ともなしに、音樂が聽へますので、友達とつれ立ちて、音する方へたどり行きました。處が、不意に誰かゞ「貴嬢、御存知ないの、あの小石川のお兄さまが御病氣なんですよ」と、さゝやいたので、私、ハッと思つて歸ろーとすると、眼が醒めましたの。兄さん、たゞ夢ですね。御丈夫でせう、「馬鹿な、夢なぞがあてになるものか」と仰やるかも知れませんが、私何だか氣にかゝつてなりませんから、一寸御伺ひ申し上げます。

（評）逆夢ですよ、兄さんは大丈夫です御安心なさいまし。併し優しい御心掛けですね。

子を失へる人の許に

京都　四辻濟子

御愛娘花子様御事あへなくも亡き人の數に入らせられしとや、承り候てもなほ夢かとばかり思ひ惑はれ幾度となく御文繰返し申候、御良人様御始め皆々様の御歎き如何ばかりにか、只一本のにほひ弁苔ながらに散らし給ひし御心の中推し參らすだに涙に候、去ながら末の露、本の雫、何事も前の世よりの定め事と思召諦らめさせ給ひ、御心強う持給ふやう只管念じ上參らせ候。亡き君の好ませ給ひし八重紅梅一枝御靈前へ供へ度、何れ後程罷り出でゝと、かしこ。

（評）一とわたりとゝのへる節の文なり。

都の友へ

久留米　田中かほる

淋しき田舍に東都を偲ぶ我れあるを忘れ玉ひぞ、都の春はさるとながら鄙の春景色も亦可笑しく候。櫻や桃、さては菫、蒲公英迄自然からなる美妙を添へ、天つ御空に遊ぶ心地して此の身までも神の御國に遊べる思ひ致し候。去年の今頃は共に睦みし身の今は里の子等に先生と呼ばるる樣を可笑しとは見玉はずや。小さき駄藉者を相手の田舍生活もなかなかに興あるものに候。

（評）またこれ一の消息文。

都の兄へ

鹿兒島　新納なみ

御文賜はる毎に母上様に御聞かせ申上居候が、母上様には至極の御よろこびにて折々お涙をよせられ申候、「お前の苦勞も暫くの間ぞ兄様が學校を卒つてくると内はゆつくりなるしお前も背がのびるから……」「心配なさいますな私が村一番の偉い人にして上げますからなど」と夜なべの時々物語り、時には御寫眞を取り出しては語りつゞけ語りつゞけては母上様に泣かれ申候、母上様には涙脆く入らせられ候、これも御年のせいかと思へば心細き感に打たれ候事も有之候、機織りは乳母が忠實に手傳ひ候故月に二反も織り上げ申候、平和克復の今日相場は下落致す

ものかと案じ居候處益々の景氣付うれしさ此上も無之候、扨御勉强の妨げとなるまでに御節約をなされては心苦しく候まゝ何も外のとは御考へ遊されず學の道に御いそしみ下され度候、健全なる體は何よりの事に候へば元氣任せの無理な御勉强はなされぬ様願上候、近き内に乳母が縫ひ上げの靴下腹卷など郵送致べく候、寒冒が萬病の元と醫師は申居候へば向寒の折から薄着などなし給はぬ様願上候、かしこ。

(許)　兄妹の情中々よく描かれたり、結末の注意殊にうれし、斯るよき妹をもちし人ぞげに幸なる。



月夜友の許に

筑後　大島　菊子

「歎けとて月やはものを思はする」と昔しの人の詠じけむ言の葉も思ひ出でられて、たゞ何となう君懷かしう候。

別れには、又來む春は逢はむと、惜しき袂を古城の月に分ちし身は、今は限りなき、世の憂ひに悶えつゝ、遠情君を月に泣く。まことに人は世は果敢きものに候はずや。

あれ見ませ、月はかくも麗はしう澄み渡り候。

「遠く別れて逢ひたい時は月が鏡になればよい」

あなうたてや、山川遠く隔つる君とわれ、月よ鏡となれかしと、思へば又も叢雲の月を蔽ひて候、遠情君を泣く熱き涙を知るや知らずや。

惱みの時悶えの時、懷かしの君に思ひをうち明けたらむに。

まだかきたき事の數あれど、涙にくもりて筆の運びの見えずなりて候、されば、これにて惜しき筆とむ可く、さらばよ。君よさきくあれ。

(許)　さなもたへたまひそ、詳しくおとづれして、親しき友の慰藉をまたれよかし。

壽美ちやん

大阪　後間八重子

姉さんもうお嫁入して。東京へ行くの。妾も早うお嫁入して東京へ行きたいわ。そして姉さん、お嫁入りすると赤ん坊が生まれるから、今年だけ生まれないやうにおしれ。今年は丙午よ。

壽美ちやんの姉さんは困つて居られます。

評「御同様今年は困りますよ」

新體詩

(天) 雛御殿

三河國西加茂郡石下瀬村大字小峰　澤田つま子

銀燭ゆるゝ小屏風や　金泥流す繪襖の
花鳥まじろく繪の宵を　雛の御殿の夜は更けて
靄をかすむる玉階の　華やかなりや緋毛氈

金紺染め抜く紋所　絞りあげたる帳幕に
み輿そゞろの殿辭ひて　恥らひ若き御后の
緋の房炎ゆる檜扇や　要の珠玉の戀の君

黄金の小太刀白眞弓　一の大臣は東に
眼涼しき上臈の　裳裾にながき緋の袴
局々に仇言の　嫡の冠者が狂態や

雪眞白なる衛士人の　夜を守るとしほらしう
事なき桃に灯はうけて　さても靜けき手枕や
そは金時の頬をなぜて　雛の殿の春の夜の風

(地) 祝のうた

名古屋市長島町二十番戸横井方　杉谷稜子

新居光りゆらめきて　雲むらさきの暁や
瑞鳥の聲野に高う　かくて生れしみ兒なれば
天の眞名井の雫より　流れて清き春の水
野川の岸に汲みとりて　玉の肌へは洗ひけむ
その子女親の靈なれば　産湯捨てたる垣根には
すみれや咲かむ花白き　草芳しき庭の春日に

(人) 琴の音

相模國愛甲郡厚村町　奈良八重子

朧月夜に夕まぐれ　桃の花ちる山里に
誰がすさびにか玉の琴　月に調ぶる床しさよ。
せゝらぐ波か、玉の音か　餘韻かすかに又遠く
夕の霧かきわけて　霞のあなたに消えて行く。
月影うつすさゝ川の　流れの水は淺けれど
思ひやふかし琴の音　胸の思をさゝやくか。
聲をたづねてわけ入れば　いよゝさやかに聞ゆなり。
流の上にたゞ一つ　柴居は立てり桃のかげ。

(秀) あやなき

徳島　紫葉

かすみに煙る青柳の　招く手ぶりにさそはれて
あゆむともなくいつしかに　君が門邊に來たりけり
あひ見しなりのかたみとて　むすびたりけむ糸やなぎ

昔のまゝのはるかぜに
むすびし人はまた爰に
ひとりたゝずむ鬟づらを
みどりのかみを梳れども
あひ見むよしはあらずして
むなしく吹くか――春の風

古しへの春を忍びて

秋田　浦井松子

頃しも彌生花の時
古りし都の奈良の御所
御前に侍べる公達の
眉墨ふかき中納言
鼓かゝへて舞姫が
讃さしそう西殿に
紅欄近く舞姫が
そゞろ昔しを忍びつゝ
忍ぶもおかしさりながら
其の華やかの花の宴
綾のみぞしもとりぐに
詠歌に名ある四位の君
舞殿に立ちまふ華ぶりや
夕日の影のうつる時
かざす扇のその姿
ひとりたゝずむ花の影

炉中寒夜

芝　菊千代

寒月白う霜冴えて
抱ける火桶火は消えて
外には嵐聲たけて
枕冷たき一人寐の
千々に砕くる胸のなみ
行人稀れに夜は更けぬ
読書進まず膝寒し
按摩師の笛凍るとき
旅のやかたの哀れはや
亂れやつれし思ひ草

破鏡

岩代　武藤新子

紅血破れて瓣をれて
なみだの露ぬぐふさへ
由縁の綾のむらさきは
あけぼの色のあかれ染
松にもかぜの友あるを
われたゞ獨りかなでつゝ
想ふ初めて酌みし夜は
重れも果てす春麗めて
きのふ優しの假名筆の
今日恥づかしの薄墨の
男蝶の迷ひ逐はゞやな
覺めては花の露を吸ふ
嗚呼人問はゞ詐はまし
かた破れ月の燈のごと
やつれにけりな我姿
瘦せし胸のちから無き。
年ふり袖のむかしとや
それさへ殘る色もなし。
ともなき窓のつま琴や
ひとり歌ひて獨り泣く。
三つの酒盃かされしを
戀歌の薄情き今の身や。
まつの調は誰がこゝろ
千歳の文字は誰か誓ひ。
寐ては小袖の香に咽び
女蝶の夢の果敢なやな。
そでにかゞみの片し影
截ひて影に消えてまし。

雛祭り

紀伊　森井ひばり

今しも三日の雛まつり
玻璃に紅さす窓ちかく
我が家の門に音やみて
美代ちやんいでと訪づるゝ
朝餉のけぶりやゝ失せて
音もせはしや下駄の聲。
やがて凉しき聲のいろ
これやこの日のはつの客。

昨夜ひと夜な小枕に　ゆるされ笛をそと撫づる
小さき手をばかいよつて　桃な見ませと揺けば。
五人ばやしに武者人形　まて美しき内裏雛
桐にまりや桃つばき　美代子も今日は主人ぶり。
御さゝひとつと猪口持て　小さき客をもてなする
彼方のひなも美しく　此方の稚兒も愛らしき。

東北飢饉

（現今東北の模樣をありのまゝにかきしるす。）

磐城　鈴木玉子

稲は稔らず田は荒れて　日毎の糧食にくるしみて
昨日は木の實を奥山に　今日は草木の根をほりて
辛くもつなぐ玉の緒の　人かげやせて飢に泣く
涙は「悲哀」の血と流れ　苦患離行はいやましぬ
痛しいかな東北の　同じ運命と泣く人の
霊様の衣を吹きなぶる　冬から風の寒きかな。
無限に沈む人々を　救ひ給へや天津神。

短文

（天）　梅の花

伯耆　大原實子

「健ちやんお庭の梅の花が笑つてるよ早くお起き」と母の聲。ツヽと障子を開けて見れば眞實に二三輪、しかも具合よく霰を被つて……アヽ奇麗と眺めて居る中心に浮ぶは兄さんの事！　出征されて三年今尚ほ満洲の野に冬籠り、同じ此の花が散つて可愛い實の成る頃には凱旋されるのだ日が射して鶯坊も起て來た。

評、輕妙の文及び雛き所あり然る眞情をもつ兄上の幸福さよ

（地）　お孃さん

姉ちやん!!!あのれ赤ちやんが生れたの！　いつもながら、おこたの中で、だゞをいッてる、靜雄さん、今朝にかぎつて、大元氣それも其のはづ、赤サンが、生れたとの事で、第一に、私への御注進、よその、事だけれど、私も、何となく、嬉しくかけ出して「あらッそー、そして赤ちやんは、男？女？」ときけば、靜雄さん、あの可愛い目を、クルクルしながら、鼻の穴まで、廣げて、「あのれ姉ちやん男でも、女でもないお孃さんての……

評、金太郎にあらずしてかくや姫！

（人）　病みては

原　秋子

病みては重き衾に埋れてあらぬ想をたどれば、うたて、淺霓が時の物恐れ幻にうつる姿影を覓女が姿と夢み、幽につく息の寂しきをそが歩みよる音とも聴き、汗ばみたる頬に冷き一零降たるに身震して目覺、手もて取れば、あな艶なるよ、枕邊に生けたる紅梅の一片！、風もあらぬ美しうまた一片こぼれぬ。

評、落花心なくてやは

（秀逸）　あゝ墓

信濃　竹内ゆき子

あゝ美しき名よ墓！人の靈の汚れを拭ふものは墓なり、鋭き斧もて罪の蔽へるを剝ぎとり淸きパプテスマもて、汚れたるむくろを聖むるものは墓なり、貴きパラダイスの扉を開くべき鍵のある所は墓なり。あゝ永劫に平和なる所、生命の活泉の湧く所、愛と自由の滿てる所、光明の華美

と希望の光榮の輝く所そは墓ならずや、さはれそは亦黑金の鎖也人を縛し永刦に默せる暗黑裏に投ず、されど我はその親むべきを見てその憎む可きを見ず、あゝ愛すべき哉

評　文章は妙なれど危險極ろ思想あり
お見せ申したし

福井　義江初枝

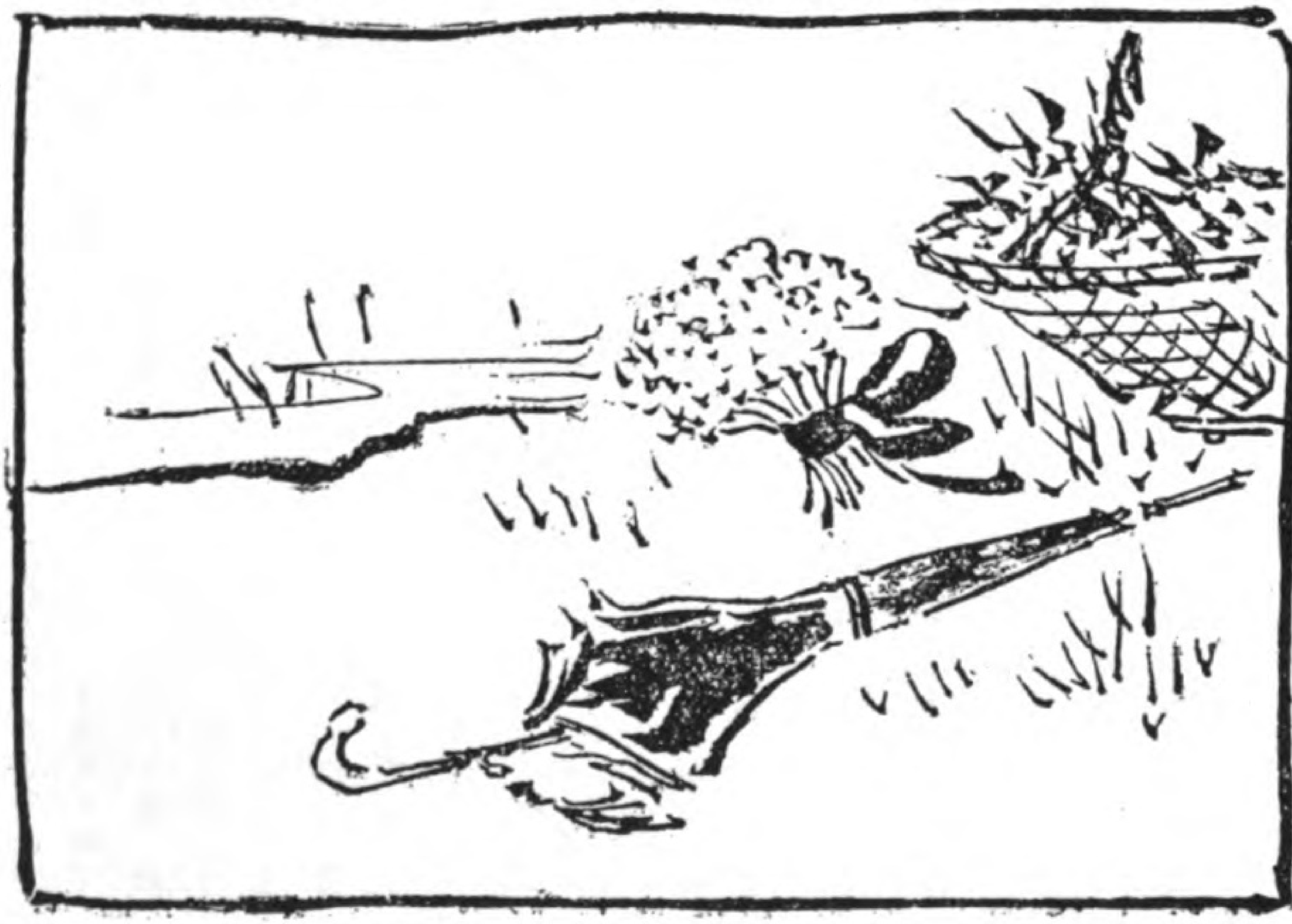
素足の草鞋に褥も短じかう、山阪一里霜柱を踏んで、朝な／＼妾が村の分校へ通ひ來ろ十歳ばかりの娵を、………何とやら申す襟卷に頰を埋めて、皮の手袋毛の靴下而かもお車などではとおむつがり遊ばす孃樣方へたつた一日お見せ申したし。

評、世はさま／＼や饑饉で死ぬる人さへありと云ふに

芝　松村光江

去年の一月吉野靜子さんより戴いた紅梅が一年間丹誠をしたが爲めか今年は美事にも蕾が澤山つき早や二三輪咲きそめた今五六日中には滿開になるだらうと庭の敷石の上にあげて眺めて居ろ折しも何處から駈けて來たのか一疋の黑猫が惜氣もなく梅鉢をば轉覆すと蕾はばら／＼散る思はず畜生と怒鳴頃は猫め屋上に逃れてケロリとした者

菊ちやん　　岡山　笹原貞子



今年三ツになつた菊ちやんはゲンコツペ、が大變お氣に入りで、このべべさへ毎日着て居たら、御機嫌の惡い事なしですの、……おばあさんが此頃はやりの元祿模樣の美しい被布を仕立てたのをおぼえてまはらない口でゲンコツ／＼と云ふのです
おばあさんは菊さんを見てにこ／＼

評、着想一寸妙なり

糸ちやん　　名古屋　森井せき子

昨夜おとなりの奧樣が死なれたので、今朝早くおくやみに行くと、門内から乳母の背におはれて出て來た今年四つの糸ちやんが見つけてニツコリ「姉ちやん妾の母樣死んでよ」乳母樣は橫向いて眼を拭ひ、私は思はずホロリとしました。

評、よくあるとなれど眞景ならん

春の日　　越前　島　萬壽子

お垂髮に紅のリボン掛けたみいちやん、日當りのよい自分の部屋で、しきりに御手玉をして居たが、ふと聞える鶯の聲あらツと振り向いてにこりしながら椽側の障子をそつと開けて覗くと、お相憎樣と云ひそうに鶯の聲は、ハタとやんだ、大方あちらへ飛んで行つたのだろう、お池に椿の影が、ゆら／＼映つて居ろ。

まあとみいちやんは恨めしそう……、せめて、之でもと思つたのが、こ

ぼれた梅の花を大切そうに拾つて居る。

評　結句の巧なるを採る

ポチの死　　和歌山　林　貞子

今日は懷かしき父上の凱旋まします日大好きの清坊をつれて停車塲え行つた大勢の迎人に圍まれて出て來られたのは父上お……や！貞かや清坊もかと
清坊は廻らぬ舌に　父ちやん……坊のポチは戰死したよ……

幼なき妹　　京都　高橋資那子

今年二ツになつた妹の貞子妾の顏を見ると甘へた樣にうま〳〵とおねだりするのでカステーラを少しづゝ小さい苺の樣な口へ入れてやるとさも嬉しそうに頭を振り生々したる目を見張つて喜ぶ其時の顏つたらないほんとに窘めてやりたい程可愛のよ今はこんなでも、直きに丸髷に結ふた奥樣になるのかと思ふと可笑いわといふとお母さんが誰れむでも其通りよと妾の顏を見てお笑いになるの妾今迄の姉樣顏が極りが惡くてうつむくと春や汔が笑ふのよ

評　ありさうなとなり

遺族　　尾張　井口とよ子

「母樣〳〵早くお父樣のお迎ひに行きましよう」今年五つになる倹夫は今外から走つて來てそこに針仕事して居る母の手をとつた、母は行きなり倹夫をいだきしめた、そして「オヽ坊や其父樣は」と云ふてはら〳〵と涙をながした、折しも外には盛んなる凱旋の聲。

評　生た小說！

君ちやん　　下野　大谷富子

かれこれ九時になると遙かに火の番の柏子木が聞ゆるに氣が附き急に「なやマー誠に長話をしてお邪魔をしましたね」と時計を仰ぎ乍ら「マー宜しいでしょう」と主人が留むるを聞きながして座布團はなれて傍に置いた筈であつたショールを取らうとするとそれがないはてな不思議ときよろ〳〵見廻すと傍でくす〳〵笑ひ出したのは君ちやん例の通りいつの間にかそれを長い䄂の袂に隱してしまつて「いやゝゝ歸るならやらないわ」と妾は歸ろうとするとつい愛らしい聲の音に

評　止めたいは君ちやん一人ではあるまじ

楽　深　者　　船泊刈藻女

岩の上が眞黑、オヽ取くかゝつたこと、貝殼で搔いて笊に摘んだのはアノ、憎惡な黑菜！
けれど、火に燒けば。若菜の色の可愛い淺みどり！煮ては床しい澁菜！
して香りは……オヽ摘んだ此の手にまで――

評　巧みなれど文に厭味あるを惜む

胡蝶塚　　櫛原町　田中かほる

霜寒き朝一羽の白蝶は寒椿の紅さめし花を假の宿として羽をたゝみぬ。風寒き朝、雨冷かき夕かよはき身にいかで堪へられん。あはれ短き一年を夢にして永へに眠りぬ、樂しかりし春の花物語を秘めつゝ。花に生れて花に死したる小さき魂を吊ひつゝ椿の下に墓を立てゝ胡蝶塚とぞ呼しける。

評　蝶の生涯寧ろ羨むべし

遠方の兄へ　　下野　月笑女史

當地方で例年よりか、すくないものは姉樣が大嫌いな半鐘の音、祖母樣が、こぼす米醤汁の節の數、荊ちやん(弟)が大好な雪、それから家の中では一同が氣遣ふ父樣のお酒、母樣のお世話燒、妾の無代、兄樣とお仲好の露さんからの繪はがき、これは兄樣の方へ直接に、いつてるでせう

評　時々出るは兄さんの噂！

しらうめ

颯と吹き來る海風は、亦も緑陰深い海際の松林を昇り、雲間にかゝる靈輪は、匂ひ溢るゝばかりに、眞砂を蹈み別け行く、孤犬を照し始めたので、金波銀波も、われ劣らじと、眞帆片帆と戯むれて居る。

評　孤犬を對象したるところ佳し

辻占賣

松風女史

貧富は浮世の風車風なみ變ればつゞれの袖も花の袂となりもせん日々の業はげみにはげみ露ばかりもさもしき心起すなよとは父君のいましめされど好衣着て花のちまたへ通ひ給ふ君見ればあゝ君が今宵つひやし給ふ費のなかばだにあらば老たる父に好める酒をもすゝむべきにと……せめて辻占にても召して給はれいざ召しませ運氣緣談戀の辻占…

評　想は陳腐なれど修辭聊か巧みなり

在外女教師

清韓兩國に在りて教育事業に從事しつゝある我國の女流は左の如し、

武井はつ　丹霧枝　丹とわ（以上清國湖北省武昌幼稚園）▲安井哲、河野清　中島かつ（以上盤谷クヰンスクール）▲木村よし（北京肅親王家庭教師）▲川崎福　内田正服部繁（以上北京女學堂）▲近藤淑（元山源興學校）▲田中ともも（京城女學堂）▲服部ます（北京豫教女學堂）▲加藤みれ（清國四川省成都女學堂）

以上の中川島、内田、服部（繁）、近藤の四女史は夫と共に彼地に在るも他は總て獨身なりと。

處女文壇懸賞募集

▲**和**歌　一人一首端書ニ限ル

▲**新**體詩　半紙一枚十句マデ

▲**美**文　廿四字詰廿行以内

▲**短**文　端書ニ限ル七行マデ

▲**消**息文　半紙一枚十行限リ

▲**小**説　半紙十五枚以内

以上題ハ隨意ノ事

賞金規定

和歌新體詩、短文、の優等者へは左の賞金（圖書切符）を呈す

▲天壹圓　▲地五拾錢　▲人參拾錢

又美文、消息文の優等者へは

▲天貳圓　▲地壹圓　▲人五拾錢

▲秀逸三拾錢

小説の當選者へは

▲甲拾圓　▲乙五圓　現金にて呈す

投稿はすべて女學世界處女文壇係宛にて字體明瞭に記すべし（〆切二月十五日）

短歌

(天) 禁庭雪　埼玉　東角井高子

主殿もけさは内外をいましめてたましく庭の雪や守るらむ

評。雪を守るとは、面白き着想也。宸殿の筆を以て、趣多き詩味を發揮す。禁庭の雪を詠じて、殆ど至るもの歟。

(地) 逸題　大阪　江口千夏子

また一つ垣根の椿こぼれけり古里しのぶ夕ぐれの窓

評。夕暮の窓の物淋しきに、これは況してや古里を偲ぶの時、見るとはなしにまた垣根の椿のこぼるゝを見るもの。凄惋の意、餘りあるを見る。

(人) 逸題　下野　新井琴子

微笑みて聞かず語らず人は行きぬ京の五條の春の夜の月

評。何等の艶筆ぞ。

秀逸

○○○春風　岡山　林常子

若菜つむ少女一むれ行き過ぎて野邊の細道春風の吹く

庇髮の少女五人三人過ぎて、春風草木の移り香を吹くものに非ざる歟。情景如畫。

○○○水邊春望　伊豆　長谷川今子

吹くとしも見えぬ春風帆にうけてかすみを下る淀の川舟

○○○川霞　芝　松村陸子

しばらくは上りくだりもわかぬまで霞にこもる刀利の川舟

以上二首、共に霞の河の舟を詠じて、其妙を極む。

○○○春の歌の中に　麹町　神谷好子

春風はちごがうぶ毛にほの見えてかなりやうたふ椽暖かき

上句殊に面白し。

○○春川　駿河臺　登美子

花の影うつる小川の底ひにもそとにしられぬ春やあるらむ

花の影を見て、水中の春を想ふ所、面白く見受け申候。

○○電話　大阪　橋本三千代

さしむかふ人は誰ともしらぬ火のつくしの事もとひつとはれつ

眞に然り。

○○春雨　神田　原田眞子

去年の日記繰りかへしても見つめ櫻花さく頃の春雨の音

面白し。

○○雅柳臨水　　下野　金戸貞子

池水を常の鏡の青柳はほつれぬ髮もくしけづるらむ

下句殊によし。

○○雪　　京都　寺内うめ子

ふみわけて入りにし人のそのかみを雪にぞしのぶみよし野の山

雪中の芳山懐古。

○○春夕　　愛知　梶田愛子

ひゝな手に佇ずむ稚子の黒髮に桃の花散る春の夕暮

可憐の光景。

○○雪　　武藏　常子

すかしつゝ學びに妹出しやりて見送る袖に雪降りかゝる

友愛の情掬すべし。

○○折にふれて　　下野　松本薫子

生ひ立たば笛ともなして若竹の直なるふしを世にきかせばや

抱負を見る。

○○逸題　　美濃　山田愛子

蘇見に春姫來ます野中道歩々に花さく蒲公英の花

歩々蓮を生ずるの故事を活用し來りたるもの。

○○月　　名古屋　森井せき子

ところ〴〵御堂破れて古羅馬の壁畫にもるゝ十六宵の月

巧に荒涼の景を歌ふ。

○○春月　　美濃　菅井志賀

いひしらず唯ゆかしさにむかひけりおぼろに更くる春の夜の月

○○落花　　伊賀　服部歌子

定めなきうき世の中の人心移らはぬ間と花や散るらむ

世を憤るの語なるに似たり。

○○餘寒　　津市　金子伊登子

かすみつる春の川づらさへかへりふたゝびむすぶうす氷かな

餘寒の意歌ひ得て遺憾なし。

○○逸題　　兵庫　柳田白ゆり

たゝずみて何をか索す手弱女のおくれ毛寒う梅の花散る

愁を含で花下に立つの態躍如たり。

○○雨中花葉　　大館　坂本秀子

去年の秋つゆときえにしはゝ子草この春雨を如何に筋ゆらむ

はゝ子草と云へるが此歌の働きなり。

○○春野　　麹町　佐藤みわ子

いにしへの歌人さへも偲ばれて一夜をわれも春のすみれ野

○○桃　　越前　島芮壽子

朧月夜笛のしらべの遠くなりて誰か垣根に桃の花ちる

○○逸題　　奈良　藤岡慶子

流れ來し花に笑まひて川添の旅路を急ぐ人もありけり

○○春雨　　河内　田中三須子

あゆ釣りし人は歸りて川岸のつなぐ小舟に春雨のふる

○○春雨　　美作　池田竹代

たきものゝ烟こもりて姿見のかゞみもくもる春雨の窓

○○逸題　　神戸　岸崎壽子

花さかばかならず來むといひし君のやまひはいえず梅ちりそめぬ

○○逸題　　丸龜　吉田金子

春の野にすみれつみつゝ立ち暮らす乙女の袖に三日月の影

○○戀　　奈良　森西克子

ぬばたまの夜中のあらしに夢さめてきけば鐘の音もまじれり

○春寒　兵庫縣　藤浪やな子

霞かすみたなびきそむるそらながらまだ袖寒き春の朝風

○春駒　下野　森　テルノ

春の野にもゆる若草ふみしだき聲もかすめる雲雀毛の駒

○春野　越後　荻野てる子

ゆくてゝゝ花又花にむかへられあく事しらぬ春の野の路

以上諸詠、詠ずる所は同じからされども、其好作たることは同じ。

○尋梅　大阪　星合婦美子

花はまた見へねど匂ふ梅は香にいづれの枝の雪はらはまし

いづれの枝の雪はらはましとは面白し。唯上句はなほ推敲を要するものあるに似たり。

俚調

折にふれて　安藝　松阪梅子

志なかばもならで古郷にかへる心にいつなりにけん

晩凉　京都　高宮さつき子

水底にあまれる花のすみ田川かきみたしつゝきほふ舟かな

鴈　熊本　安田文子

見えもせず音もたてれと驚くは啼ゆく鴈のあかきなりけり

鶯　大和　北山幸子

山里にすむかひありてうぐひすのたにの戸いづる初音をぞ聞く

花　大分　みさを子

大君のおぼえ目出度き藤原の大臣の庭の花さきほこる

春雪　赤坂　木部まつ子

鶯の宿とし知らば咲く花をちらさぬほどに積れ淡雪

竹爲師　越中　ゆき子

此君を庭にうつして今よりはおのが操の友となさなん

春月　和歌山　山縣くに子

もしほやく煙の末やかすむらんとまやにもるゝ朧夜の月

朝霜　伊豫　渡邊梅子

たきさししかゝりの消えてあしろ木に置霜白う夜は明にけり

田家春雨　下野　田村家恭子

糸車おとのみもれて小田山のいほりしつけき春の雨かな

春野遊　淺草　多田春湖

霞む野を菫摘みつゝけふもまたこてふと共にあかしくらしつ

名所梅　水戸　梯はる子

こゝかしこ啼く鶯の聲もして梅に明けゆく月の瀬の里

春野　旭川　藤本とば子

すみれつむ少女の影もかすみけり袋なく野の春の夕ぐれ

糸遊　京都　秋野雅子

糸遊も繭つく袖にもつれては織るが如し梅蔭にして

春の月　姫路　船戸ゆき子

咲き競ふ花の色香に醉ひつらむおぼろにゝほふ春の夜の月

野梅　かほる子

鶯のこゑのかすかに聞ゆるは野邊にも梅の花やさくらむ

披衣知昔　下野　森　テルノ

かみや川かきなかしたるあとみれば昔のふちは瀬ならざりけり

若草　京都　濱部愛子

のどけさに蝶を追ひつゝ來て見ればふむところなく若草のもゆ

春曙　本所　秀子

うちみれば春なほさむくむらきえの雪に月さゆありあけの庭

折にふれて　千葉　鎌田喜賀子

乙女子が結びし髮にかざしたる花慕ひてか蝶の追ひ來る

折にふれて　和歌山　岡中峯子

わろしともよしともえこそいひはてれをり〳〵かはる人の心を

送別　備中　中島文子

糸たれし行手の柳こゝろあらばいざ引とめよきみが袂を

春月　淺草　恩田綾子

咲き匂ふ花の木かげはしつかにておぼろに霞む春の夜の月

春雨　名古屋　清水操

降そはゝしほれやはてん糸櫻はなそつれなき春雨の空

折にふれて　伊勢　しげる

いたづらに何なげかまし何事も思ふにまかせぬ世にこそあるを

折にふれて　盛岡　山口ます子

中々におほふ村雲あればこそ世はおもしろきながめなりけれ

紀元節　横濱　てらにし

動きなき國のいしづえ立まして過し神代を祝ふ今日かな

雪　前橋　宮内りき子

夜もすがら思ひつゝけてひとり寐のふすま冷たき雪のあけほの

行春　大阪　淺尾靜子

賤の女が機織る窓に梅ちりてうたふもあはれ行く春のうた

海邊曉　長門　杉山きくの子

海士小舟こぎゆく影の一つみえ二つみえつゝよはあけにけり

きゞす　和歌山　金澤たれ

春風に燒野のくさのそよぎては香にもあらでたつきゞすかな

春野　目白臺　ひで子

つみためし秋の花のこぼるゝもしらで胡蝶を追ふ少女かな

海邊月　伊勢　濱田かれ子

潮干よりかへるあとには波見えて磯邊靜かに月そかすめる

春月　名古屋　志村す美子

うす絹につゝめる玉とまがふまで霞の奥ににほふ月かな

雨中梅　鈴木　手島琴子

下露にいざたちぬらん春雨のそよぎし梅を花傘にして

久々にて親しき友にあひて　仙臺　田中元子

うれしさのむれに迫りてしばしわが思ふ心をいはせさりけり

菜の花　神田　すみれ

春の神天下りますきざはしと見ゆるや山の菜の花の畑

鈴菜　群馬　木暮八重子

思ふ事たのみし事のならぬ世に蒔かぬ鈴菜の花咲にけり

折にふれて　水戸　榊八重子

こゝにしてわかれし君を思ふかな梅の花ちる夕ぐれの道

雪　西ノ宮　岡野田鶴

さま〳〵のけがれにそみし人の世をたゝひといろにつゝむしら雪

松竹梅　保土ヶ谷　かほる

松風の通ふ調べのつま琴に笛竹あはす梅香る庵

梅　岡山　平塚春野

せゝらぎの音もかすかに梅が香のほの〳〵明くる山間の里

折にふれて　上總　鈴木よね子

乳母の宿に乳母といれたる十年ぶり昔し語りに春の夜更けぬ

梅柳交枝　美濃　田中文子

東籬越しに立つ乙女子と見ゆるかな柳かくれのくれなゐの梅

述懐　木田よしえ

おさな子の聲やいつちをたとるらむ花の唇ゑみ美しき

磯春風　埼玉　宮倉仙子

こゆるぎの磯貝拾ふ少女らか袖吹かへす春の浦風

月の窓　三河　白すみれ

美くしき髪のみだれ毛頬なでゝ月の小窓の人うら若き

春風　岩代　池上さわ

花の野に戯る胡蝶追ひゆけろ友が袂に孕む春風

春の旅にて　札幌　杉山巴子

菅笠に春の山見ろ渡し船京に似し山霞のうすき

春雨　美濃　大野木とみ

荒小田をかへす少女の脊の上に櫻みだれて春雨ぞ降る

浦雁　遠州　大手よし子

もしほやく烟の末にほの見えてまつほの浦に雁なき渡る

春曙　千駄ヶ谷　關津みち子

見わたせば四方の山邊も雪消て霞たなひく春の明ほの

述懐　横濱　寺田光子

若菜籠堤におきて小さきあるじめだかおふとて澤邊にあさる

折にふれて　廣島　池野女史

思ふどち相つれ立て旅衣よしのゝ花を見るよしも哉

松上雪　直子

雲千とせ齢へぬらん老松のいたゝき白く雪ぞつもれる

朝鶯　名古屋　鷲尾米尹

手枕の夢は夜ふかき朝窓に日とくいてぬと鶯のなく

雪中梅　和歌山　木本花子

降るみ雪しづかに更けておぼろ夜の月にかをれる梅の花その

梅雨　讃岐　安藤光代

いと深き君がめぐみにふるさともおもはさるらんとらはれの人

禁庭雪　伊勢　たか子

九重の玉しく庭にふる雪は君がみいつのつもるなりけり

埋火　豐後　後月浩

歸りゆく人をもとめてまた更に炭さしそふるやとの埋火

さゝ蟹　神田　岡田久子

眞直なる道行くものをさゝ蟹の親にまれして横走りする

新年待鶯　伊勢　梅田優子

年たちぬ梅をさかせてまつものをことつちもなき谷のうぐひす

鶯　廣島　藤川勇子

春霞たちて何處とわかれども聲ほがらかに鶯のなく

春夜　河内　櫻井貞子

笛の音は遠くかすみて咲き匂ふ梅の花かけ月出でんとす

ある時に　長野　かれくさ

病する温泉のまどに日けくれて木からしすこく雪ふり出ぬ

友の許に　越前　武田かをる子

さらば君まさきくいませやよひには蝶の舞はむ四つの袂を

寒梅　堺　松谷入雲

枝ぶりのしな定めせし兎く梅は花ほころびぬ友去りしけふ

雪降り　佐賀　松本鶴子

雪降りに深山おろしをながむれば花の夕の嵐とも見ゆ

殘発鶯　遠江　小西宮美子

見しゆめのまこと丶なりて鶯の聲を朝日の床にきくかな

春風　北海道　藤本島羽子

少女子が若菜つみにと行く野邊の柳の枝に春風の吹く

社頭早春　遠州　倉西しげる

春のたつしるしも見えて三輪の山杉のむらたち霞そめけり

春雪　本所　平本ふさ子

春風に吹きさそはれて草の上にはなかとまがふ今朝のあはゆき

神苑の月　伊勢　樹本靜子

神苑のまかきの枝にかゝる月これぞ神代の鏡なるらむ

和歌　備後　立神峰子

酒に酔ひてまろれましょす兄君にそと着せまつる紫の袷布

偶詠　山梨　春雨

詩にうみてそとまど押し丶春のよひ人なつかしのうす月の影

春雪　靜岡　末松方房江

春の野に積れば消えて若草の綠りかくさぬけさのあは雪

蝶　麹町　紫

もえいでし小草の花に宿かりしのどかにねむる春のてふ哉

晩霞　美濃　田中久代

夕がすみ富士をつゝみて春の色もはてなかりけり武蔵野の原

春野遊　山梨　小林まつ子

あかなくに春野ははやく暮れそめぬあすもまたこむさらば胡蝶よ

湖邊曙　滋賀　ひさ子

舟歌の聲もかすみて聞ゆなり消しづかなる滋賀のあけぼの

春　岩代　武藤新子

春といへば十歩に足らぬ庭ながら菫花さき胡蝶むれとぶ

尋梅　伊勢　水谷壽子

風の香に梅をたづねてあせづたひ右にやゆかん左にやせん

月前の花　伊賀　章子

夕さくら匂ふこずへに佐保姫のまゆにも似たる三日月の影

櫻　美濃　田中守躬

老ぬれば野山はうとし我庭の櫻ひと木に春をまかせん

歸省　滋賀　田中とみ子

父君の肩を打ちつゝ都路の話にふけぬ歸省のゆふべ

逸題　四谷　朝倉よしえ

窓の外は月に花散りまどの内は三位の殿の小鼓のおと

修學旅行途中病氣にかゝりて　磐城　鈴木紫子

友は去り我たゞ一人旅に病む淋しき春を雨にくれ行く

隣家花　大阪　小山ふく子

中垣のへたてはあれどさきにほふ花にこゝろのこえぬ日ぞなき

春の雪　京都　赤尾多賀子

春もなほ冬の日數や殘るらむ霞める空にあわ雪ぞふる

梅　越後　まさみ

下り立ちてにほひ知るべに手折てん月おぼろなる庭の梅が枝

雲雀　横濱　星戸益子

花の香の匂ふ春野は去りかての雲井の上に雲雀なくなり

友をまちわびて　名古屋　阪元靜子

今日もまた身を知る雨に袖ぬれぬ君を松岡のかたわれの月

逸題　大阪　金子廷

咲け花よなけ鶯よ空を飯び天に飛びきてかくて春来む

折にふれて　播磨　富原　艶

ちゝはゝにすゝめんとてか小女子のもすそぬらして根芹摘むなり

春駒　大阪　田中　常子

花かけに駒をつなぎて武夫のかたげおもしろ三吉野の山

梅　美濃　加藤　蝶子

梅折れど添へて送らむ歌なくて思案に暮るゝ夕月の窓

山茶花　安藝　堂面　幸子

姉逝きて悲しき宵を文机の小瓶の山茶花そとくづれけり

すみれ　尾張　汗口　登代子

昔たがすみあらしたる宿ならんひとりすみれの花ぞ匂へる

昔の野　三河　紅梅　女史

若菜つむ少女の袖にひら〱と香りたゞれて小蝶まひくる

折にふれて　久留米　落葉

かきならす糸の調べもしめやかに小雨そぼふる春の静夜

冬の歌の中にて深夜猿をよめる　牛込　伊地知　菊千代

嵐ふく巣のなりどの寒ければいをねぬ夜半になくましら哉

鶯　神戸　輝　月女

窓りの朝寐のまとをおどろかし梅のこずゑにうぐひすのこゑ

晴花　名古屋　種田　やゑ

かれの音のひゞくやいつこほの〱と花よりしらむみよしの〻里

春風　信州　高山　潤子

おだやかに咲きたる春の夕風に梅の花咲く古寺の庭

●　河内　竹内　秋子

なつかしき野路のすみれよたんぽゝよ笑みてつみにし頃もありしを

梅花に添へて　奈良　森西　しげ子

鶯の来啼の間にと一枝を手折ておくる君がながめに

朧夜の雲　長崎　大山　さだ子

風そよぐ蘆間に鷺の立つ見えて湖上幽かに月朧なり

病衰せしについて　但馬　米田　せい子

海はうみ山も昔に變られど變りはてしは我が身なりけり

夫の凱旋しました時　伊豫　石川　きみ

御聲きゝてみ面あふぎそぞろにもうれしとなきぬつゝがまさぬに

母の死を悼みて　丹波　佐藤　けい子

玉は今楽しき國に笑むものをなと嘆かるゝわが身なるらむ

隣の鶯　伊豫　珠川　鵬子

春きぬとつげ渡りゆく鶯のけさは隣のやぶかけになく

花盗人　羽後　鈴木　しゆん子

咲き匂ふ花ぬすむ人の枝もちてかざすにそれと知られけるかな

春月　秋田　小笹　千代子

高どのの諸の聲もしづまりて花にふけゆく春の夜の月

立春　大和　青園　女史

海とほく山も霞みて長閑けきはかみ代ながらに春の立つらん

想夫戀　群馬　石濱　栄子

見てはなほ涙の種と思へどもまたくりかへすなき夫の文

友の死を悼みて　大和　千代子

あはれ世の花さく春をまたずしてつぼみながらに散りし君かも

春雪　大崎　汾陽　百合子

消やすしとひと皆はいへ日一日つもれば消ゆる春のあは雪

柳體詩（郵花坊撰）

題「歌の會」「紙鳶」「郵便」

天

尾張國西春日町庄内村新福寺五　梶田愛子

歌の會竹柏園に花が咲き

評云、これがどこが佳いかとの質問があるかも知れぬ、新風俗詩ではないかとの質問があるかも知れぬ、アテコミではないかとの質問があるかも知れぬ、甚しきに至りては天保調ぢやアないかとの質問も出ないとは限らぬ、成る程新風俗詩に似ても居るだらう、アテコミに似ても居るだらう、一種の方面から觀察すれば天保とも思へるだらうが、決してそんなのではない、またそれで有つて差閊は無い、新風俗詩とてもみんな捨てるには及ばぬ、天保調だつてそうだ、アテコミは惡いが時代の新しい問題を捕へて柳化するのは好い、竹柏園は佐々木信綱氏主幹の和歌の會で、會員には夫人令嬢綺羅星の如く列んで居る、所謂紅粧花の如く春堂に滿つる者で、眞に竹柏園に花が咲きてある。此句の面白いのはソレを材料として人事を詠じ、社會を詠じ、滑稽と趣味を詠ずる川柳に持つて來たのは手際である、先づ「歌の會」といふ高尚な言葉で起し、竹柏園と名實共にゆかしき命詞を以て之を承け、「花が咲き」と活人で全編が活動し、自然に春を生ずる槪がある、風雅の中に滑稽のある、これ等が眞の高尙な可笑味といふものである、阪井久良岐氏に「午後三時永田町から花が降り」といふ句があるが、この句はそれに劣つては居らぬ、僕は寧ろ此句が佳いやうに思ふ、

地

神戸市元町四丁目八一太田方　青瓢女史

箸の柄で火種をせゝる歌の會

評云、面白い句、うまいところを見附たものだ、寫生も斯うなると何とも云はれぬウマミが有つて嬉しい、殘んの寒サ去りやらぬ今日此頃、むつむ同士集つて歌の會が開いて居る、覺えず興に乘つて夜が更ける、火桶に火のつきたのも知らずに一心不亂に推敲して居るうち、ふと寒いのに氣が付いて、火桶引き寄せて手をかざすと寒い、「オヤ火がなくなつた」と手に持て居た箸で、シキリに埋火を掘り出すといふ刹那の情景、自然に詩趣があつて、人をして微笑を感ぜざらしめる、うまいものだ、天の句が二つとれぬのと、想が竹柏園ほどに新しくないので、地位に下したが、實際は竹柏園の天位に左程劣つて居ないのである、

人

奈良縣添上郡田原村　大谷久子

不足税拂ふて切れば無心狀

評云、滑稽にして罵倒、新題をうまくよみこなして居るところが命だ、郵便の不足税といふことを無心狀に歸めたところか腕でこれが爲非常に句の力が強くなつて來る、或は女らしくないといふ非難もあるかも知れぬが、今の世の女はさう弱々しいばかりが能で無い、慨然として男學生の墮落して痫な女學生に及ぼすを諷する等の氣は有つてもよい、こんな句が出來る手があれば、隨分思ひ切つて罵倒も出來るだらう、男子叢油斷すべからずだ、此句決して女らしくないことは無い、

秀逸之部

百計がつきて郵税先拂ひ　　能登　大森一子

評「日計がつきて」にいふ可からざる面白味がある、川柳は斯うなければ嘘だ、

歌の會さし出がましき廂も悶　伯耆　伊丹サキ子

評「さし出がましき」が命であらう、

郵便の聲は待つ身の時鳥　越後　坪井わか

評 いゝで句で三才の價値はあるが、すこしく俳句になり過ぎて居る傾がある、今一と息川柳にして貰ひたい、

紙鳶買へば坊はやう／＼歩き出し　近江　林敏子

枕元紙鳶を飾つて寐て了ひ　東京　露營子

羽子板をかゝへて凧を見つめて居　本郷　大里紫子

郵便の聲に小僧は立たせられ　神戸　田中浪子

昏留が届いて急によみかへり　下關　俵すみれ

子の會よりもお召の會のやう　本郷　しま子

子の會盲者や啞者がたんと出來　大阪　椿垣つぼみ

郵便を讀み乍ら行く長廊下　草加　紫浪女

俳句之部

春風にのつて奴は得意なり　草加　紫浪女

未亡人古い郵便出しては見　本郷　しま子

飯時になると紙鳶をばたぐつて居　青山　露宮子

軍夫郵便屆いて一家輪を作り　伯耆　伊丹サキ子

子の會一家總出で下女が勝ち　丹後　闇茂

追羽子の中を縫がす奴紙鳶　大阪　ゆかり女

季附も詠む仲間なり歌の會　八王寺　大野勝子

郵便の聲で諸共姿失せ　駿河　長谷眞子

雲上に昇る女も凧次第　羽前　谷山谷子

歌の會けりらんが女の入亂れ　山城　古川かつ子

雨がふり紙鳶は破れる坊は泣く　稲井　山岸宅子

廂髮島田に替へて歌の會　品川　すゞ女

紙鳶に乘つて天へ行くよと坊意張り　尾張　野咲すみれ

郵便は戀の暗路の手引をし　靜田　工藤はる子

電線に達摩はかなき最後なり　深川　安岡もと子

郵便で送る學費も親の汗　麹町　井上梅子

繪葉書の式部四錢で洋行し　東京　大谷はな子

それ／＼と泣く子に見せる空の凧　麹町　愁園女史

式部あり角觝もあり歌の會　丹波　小林つる子

歌の會張子の虎が並んで居る　京都　高橋しな子

昔の豪傑大空に勢揃へ　宇都宮　牛田つや子

出所のない郵便に皿が飛び　山城　尾崎いち子

匿名の端書届いてからかはれ　姫路　町田英子

符箋をつれて郵便遊覽し　下野　大谷富子

歌の會實は衣服の品評會　駿河　喜久代

郵便がやつと茶柱合點をす　本郷　春江子

姉に紙鳶持たして坊はあげる役　下總　小泉つや子

郵便の聲に嬢様ヒヨイと立ち　横濱　杉本芳子

江戸の風浪華の凧と睨めくら　大阪　磯野かほる

アノ宿は歌の宿へと眞地目なり　同　同

奴でも紙鳶になつたで天上し　伯耆　入津久瑞子

消印で女房は昔を二度ひれり　大阪　かほる

無沙汰せし友の手紙に濟ぬ親　横濱　阿部清子
別れても便りしてよと汽車の窓　伊勢　佐野みよし
大風は父親までも引出し　信州　細野薫子
郵便が來たよと小供平氣なり　大阪　梅垣苔子
大空に風の會議が持上り　同　同
待兼し郵便そつと通りぬけ　備中　逸見砂子
電線にかゝつて奴最後なり　大阪　落合花子
三島で東郷凧をあげて居る　松本　赤羽まつ子
郵便を女房横目でヂロ／＼見　大阪　太田〆子
枝の凧家内總出で骨を折り　奈良　中西まさ
坊ちやんの理想は月へ凧旅行　奈良　中西まさ子
郵便とあらそひ出れば物貰ひ　品川　もとせ
此の苦境に候と貫先拂ひ　能登　宮崎清子
郵便の聲をたよりに走り出で　秋田　りき子
誰より長い尾を引くとんび凧　東京　ゆき子
匿名の郵便座でそつと讀み　下關　今田きよ子
三助の紙凧大空で水を汲み　栃木　松本泉子
郵便に戸を叩かれぬ雪の朝　本所　あきしと
あらちよいと兄さんからの御手紙よ　群馬　石濱榮子
歌の會苦惡が出れば缺席し　新潟　逢阪きその
歌の會また讀み直し／＼　兵庫　窪田つれ子
燒き直し附燒もあり歌の會　明石　すみれ

選者吟

紫紺式部濁少納言歌の合

書留が來ると鑿んだ眉がのび
紙鳶の繪にちさい妹がねだり出し

次號課題

『櫻狩』『下女』『アルバム』
〆切三月十五日

謎々

『試驗前』『リボン』『稻荷鮨』とかけて

一等

●試　奈良縣添上郡田原村　中西まさ

子澤山の母親』と解く。心は『忙しい中にもサキが樂み

評云、好解答々々、近頃少女に見るところにて、無雜々々と申す可し、趣味の高上せる女文士の弄ぶ可き謎々は此くありたく候

二等

●り　越後三島郡日吉村　坪井わか

旅順占領の日本國旗』と解く、心は『二百三高地に翻へる

評去、滑稽々々、われまだかくの如き面白き謎にてしかも歐西語とクスダリならざる者を見ず候

三等

●試　伊豆國濱名湖北　宮江　丸山菜

赤穗の義士」と解く、心は『復讎（復習）に餘念ない、

評云、この謎々の解答は同案なのが非常に多い、がこの解が最も圓滑に面白く出來て居る、

●試…縁談の立聞」と解く、心は「樂い樣で苦しい　能登　大森一子

●試…千代女が時鳥」と解く、心は「徹夜で一生懸命　滋賀　きく子

●試…初産の臨月」と解く、心は「心配乍ら樂しい　廣島　稲田鈴香

●り…旅順陷落前」と解く、心は「二〇三高地にトヾメを刺す　大阪　中谷福榮子

●試…實出の商人」と解く、心は「特別に勉强する　芝　渡邊政子

●稲…小供の衣服」と解く、心は「揚をつけて拵へる　伊豆　長谷川弓子

●試…俠客の喧嘩」と解く、心は、復讐（復習）が盛ん　芝　新野藤枝

●稲…女の惚」と解く、心は「油鍋（油氣）で持つ　横濱　金田たか子

●試…中夜の出火」と解く、心は「俄に騷ぎ出す　下野　月笑女史

●試…赤穗義士」と解く、心は「徹夜の復讐（復習）　下野　大谷常江

●り…耶蘇教式の結婚」と解く、心は「神（髮）にかけて結ぶ　赤阪　ゆかり女

●試…步哨」と解く、心は「一寸も油斷は出來ぬ　大和　中上昌子

●り…王冠」と解く、心は「頭を飾る　千駄谷　光江子

●試…商人の競爭」と解く、心は「大勉强　越前　山岸宅子

●試…吉原の客引」と解く、心は「二輪加（俄）に繰出す　下野　大谷富子

●試…婚禮の夜」と解く、心は「胸どき〳〵　大阪　檜垣萏子

●試…我子の大病」と解く、心は「夜の目も寐られぬ　石見　篠田徽子

次號
課題

『落　第』とかけて（〆切

『西園寺內閣』とかけて　三　月

『花　見』とかけて　十五日）

淚

市民の待に待たる凱旋隊の出征兵士は今こそ威風堂々凱歌あげつゝ懷しき故鄕の地をふむのであるあゝ其喜やそもいかに勇ましきラッパの音に加へ四方より起る歡呼の聲は實に天地もゆるぐばかりあゝこの華かなる光景喜悅に溢るゝ兵士の顏を見るにつけ實に口惜しきは兄上の戰死いかに一門の榮譽とはいへ我に優しかりし一人の兄上は最早永遠に歸り來まさぬのであるあゝ人の喜びと今我には徒に湧出の淚を增すのみである。

評　一將功成りて萬骨枯るとは斯る塲合を云ふならんか



魔女文壇 懸賞小説

胸のもだへ

きみ子

（上）

「お嬢様一寸お待ち遊ばせよ、此方へ入らつしやいましな」

呼掛けで自分は其儘、離座敷の椽側へ腰を下した、四十四五の、生際に大きな黒子がある、人の好さ相な婦人、之はお春と云つて夏子が乳母、四つの暮まで乳を上げて、宿へ下つて其後も時折、機嫌伺に舊主家を訪れる。今日も尋ねて來たので有た。二三歩先の夏子は振返つて微笑んだが、歩み寄て並んで腰をかけた。

庭内は今梅が眞盛り、隨分と古木もあり、數も外の木より多いので、絹を張結めた樣に晴渡つた蒼空の中へ溶け行く香の清さ、人家を超へて其所はすぐ日本鐵道の線路、谷中の森の木立は、緑深く聳へて目前に迫つて居る。折しも初春の暖かい氣は四方に瀰蔓つて、今を盛りと咲誇つてる梅花を掠めて、そよ〳〵と吹く風も温い。離座敷の前に植ゑられてる梅は、もう一片二片づゝ、白い花瓣を零して居る。

「此頃は、お祖母樣矢張、お辛う御座いますか」

夏子の羽織の衿がよく折れないのを見附けて、直し乍ら乳母は云ふ。

『えゝ、でもね以前より見ると、餘程お優しく成たのよ何より妾嬉しいは』

『どうしても段々お年を召しますからね』

熟と夏子が美しい横顏を瞶り、

『ほんとにお美しくお成り遊ばしたこと。自分がお乳を上げた方が、此樣にお美しく、お立派にお成りになつたかと思ひますと、乳母は嬉しくつて堪まりません自分の年を取るのは氣が附かないで、ほゝゝゝ』

心から出る歡喜は、其面に笑と成つて現はれる。

『恁お美しくお成りになつたのを、お父樣や、お母樣が御覽遊ばしたら嘸ねえ……』

流石に情ない感想がして、乳母は悄然とする。

同じ心に夏子も、庭下駄はいた足元へ面を落した。

『お二方共、お顏はお覺へございますまいね？』

黒目勝の清しい瞳に、乳母の顏を一寸見たが、

『えゝ知りやしないの、まだ幼さかつたんです物』

『左樣で御座いましたね、まだお幼さくつて、友染のお召に淡紅色の縮緬のお兵古帶が、よくおうつりに成つて、お色が白くて、其お可愛らしかつた事、丸でお人形さんの樣でございました……お母樣もお若くお美しかつたし、お父樣もちやんとして居らつしやいましたし、お母樣は矢張、濃いお髮でしてね……丸髷がよくお似合遊ばしました……』

ありしその昔の俤を、目の前に浮べて、乳母は深い感慨に沈んだが、

『妾は其時が一番幸福だつたんだわね……』

染々夏子は云つて、はや眼には露を宿して居る。

『實はね、今迄態と申上げませんでしたが、毎もお母樣は、妾が伺ふ度にお孃樣のお噂をあそばして、何樣に成つたかと、お逢ひ遊ばしたがつていらつしやいますし、妾も此樣にお美しくお成りになつたのを、是非御覽に入れたうございます……』

云ひさして俯目に成つたが、

『ね、お孃樣、お母樣にお逢ひ遊ばしませんか』

『え有難う、妾もお目に掛りたいわ……』

溜まつてた涙が露と落ちるので、慌てゝ手巾を出し

て顏へ當てた。輕い風がそうつと吹いて來て、襟の後毛がはらり頰を撫でる。乳母はいとゞ哀れになつて、目を襦袢の袖で拭つたが、大きくふつくり出した前髮を結んだ、オリブ色のリボンが、風で裏返つたので夫れを直してやる。

『妾だつて、實のお母樣だから、お目に掛りたくつて、お目に掛りたくつて……お母樣と申上て見たら何樣に嬉しいかと、今迄平常思つてた位なんです者、ね、乳母やだけれども……』

手巾を顏から離したが、まだ霑みを帶びてる眼を頻りと拭いて、

『だけれどもね……』同じ事を云つて口籠つた。そして昵と首を俛れたが、幽にほつと溜息を吐く。思ひ悩んで萎れる顏を乳母は昵と打守つて居たが、

『お祖母樣に知れると惡いと仰やいますんですか？』

『………』默つて居る。

『さうで御座いませう、ね……お孃樣』

お目に掛つたらお母樣は、何樣にお喜び遊ばすか不知乾度優しいお聲で、よくまあ此樣に大きくなつてとお泣きなさるだらう。あゝ逢ひたいは、お目にかゝろうかしら、乳母もあゝ云つて呉れるのだから、だけれど何だか濟まない樣な氣持がする、あゝお目にはかゝりたいが……低向て沈と考へ込んで了つた。

折しも人家を超へて、軌道を滑らす上り列車の轟々たる響き、耳に入るとつと、眼を擧げたが、木立の隙から見へる、列車が殘して行く白煙を見送つて、

『お目には掛りたいけれど……』

獨語の如に云つたが、ほろりと涙が頰を傳はつた。

『夏、夏、……』と祖母の呼聲。

はッとして、

『お祖母樣が呼んでいらッしやるから……』と、乳母を見返つて、慌てゝ紅く成つた眼端を拭き乍ら、小走りに行く夏子が後姿、乳母は目を拭ふので有たが、自分も椽側を離れて、後から行くを、母屋の椽側に出て怒りの色を表はして　夏子が祖母。

『呼んだのに返事しないで來ると云ふ法が有ますかい

お祖母様は其様な不作法、敎へなかつた筈じや、もう今年は十七、云はれないでも氣を付けなさい」

冷やかな祖母の言葉に、只夏子は低向て居る。

あんなに强く仰しやらず共、も少し優しく成さつたなら……眞肉のお孫を何故恁だらうと、乳母は云はれぬ感想に心で泣いた。

（中）

夏子の父と云ふのは實業家で、可成名聲の有た人だが、母と云ふのは村子と云つて、內氣の温順しい情に脆い激し易い性質で、中々美人であつたが、二十の時婚嫁して、夏子が父と同棲したのは丸八年、姑が非常に皮肉な、夫に死別れ早くから寡婦暮をした丈あつて、中々歪んで居て、何かにつけ辛く當る。村子は每も人知れず泣いたが、さりとて夫は優しく慰めてくれるので、自分から去らうと云ふ事などは夢にも思はず只夫一人を頼りにして居たが、丁度夏子が三つの夏、實家の母が重病で危ふいと云ふので、泊りがけで行つてた時、突然離緣を申込まれたので、實家方の驚きと云つたら……今にも危ふく病人を控へて居る所へ、何と云ふ情を知らぬ仕方かと、父や何か大變に怒る、村子の驚きも一通りじやなかつた。が思返して涙を飲むで母を看護していた內、逐々母も沒した。生別と死別を身に集めた、村子が悲しみ、そも這麼であつたろう、其當座は食事も咽喉へ支へた。起き様と思つても、床が身體を引く。元來此離婚を申込んだのも、皆姑の心なので、夫は飽迄反對したのであるが、どうしても聞かなかつたので、夫も當座は怒つて、母には口も聞ぬと云ふ迄にして居たとやら。だから其後も度々村子には面會もしたり、村子へ對して何所迄も無妻主義を執り、夏子は自分の方へ引受けて、乳母を附けて育てゝ居たが、村子の方でも夫へ對し、もう獨身で通すと決心し、父に泣いて懇願したので、僅弟と二人限の姉弟の事でもあるし、資產家でもある物だから、父の隱居所の方へ移り住んで、父が死去後、隱居所の方は悉皆、自分の所有に成り、亡き親が紀念の住居に只

安樂に今日迄、過して來たのである。そして夏子は父の方で育てられる事と成つたが、父は惜哉、其翌年の年末、腦充血で死去したので、祖母の許に成長する事と成つた。無心の愛子さへある母を、去つた位の其祖母に　何で世の常の祖母が孫を視る如き、温かい愛があろうぞ。祖母が夏子に對する愛情は冷かである、世間に見る樣な、云ふに云はれぬ温かい情と云ふ物は此祖母には少しも見へない、そふ云ふ譯で有故、夏子は幼さい内から、もう涙の味を覺へ、辛い悲しい思を知つて、乙女としては少し情が冷やか過ぎは仕まいかと思ふ程、落付た姿態、若い思に何かにつけ血を湧し、胸を躍らすのが乙女の常であるのに、あはれや、誠の親の暖かい愛を知らぬ夏子、思想も行爲も萬事、年よりは老けて華かなるべき靑春を、只無味に譯なく過そうとする。小學卒業後は女學校へ進ましてと、夏子がひたすらの願ひも、祖母は許さない。女が餘り學問すれば生意氣になる、小學卒業すれば澤山と、舊弊思想のお定り文句、あはれ、秀でゝ居る其才學を知り乍ら……夏子は泣いた、乳母も聞いて泣いた、學資が出來ない御身分じやなし、あんなにお出來なさるのをと……

然し夏子は怜悧であるから、もつと〱、小學すら得卒らぬ者も世間には澤山ある、夫れに比較べれば、幾程幸福だか……と、其後は敢て何共云はぬ。多い同窓の友の、逢へば必、貴女は何校へも入學つしやらないのと、輕蔑の色を表はして云ふのを聞く度の胸の辛さ悲しさ、妾は何故恁ふ不運かと、獨胸を抱いて、思淋しい黄昏の庭に、空を仰いで涙ぐむ事も度々。

威ある秀眉、隆く通つた鼻筋、締まつた口元、黒目勝の清しい眼、房々とした黒髪など、すべて美を集めて何所やら淋しい顔立ではあるが、女神像の樣な、中肉のすらりとした風姿、乳母はいつもお母様や、お亡り遊ばしたお父様に、御覽に入れたいと云ふのである。

（下）

夏子は晝餐を濟ませてから、縫掛の裁縫に取かゝるべく、自分の室に入つて疊包を擴げたが、何しても裁縫する氣になれない。疊包は擴げた其儘、右手は拮と懷中へ、瞳は庭面に美しく流れ乍ら、何所見るともなく恍然と、深い想思に沈んで了つたのである。此所は庭を前にした、南向きの日當りのよい八疊、夏子が室と定めて有つて、祖母が居間とは、三間を隔てゝ居る。折しも眞晝の日光は、明放した座敷へ麗かにさして、室内は逆上る程の温かさ、四方靜かなこと日暮の里、絶へず聞へる、藥師の太皷の音も長閑に、至る處に顯はれて居る平和の色、世は流石に春である。

乳母は祖母の居室の方へ行つてるのか、祖母の高い大きな話聲が時々洩れてくる。夏子は只もう考込んで了つたが、其顏には云ふべからざる淋しげな、憂愁の影が顯然浮んだ。

お別れ申してからもう十有餘年になる、過ぎた昔は皆夢だわ。幼かつた折とて御兩親共にお顏も覺へず、物心附いてから、お父樣、お母樣と呼ぶ方は居らつしやらないんだもの、何と云ふ情ない身かと、毎も思つて居たが、今日乳母がお母樣にお逢ひなさらないかと云ふ、妾は實に嬉しい。懷かしい〳〵お母樣なんですもの、すぐにもお目に掛りたい……お母樣と呼んで見たいわ……だけれども……ア、だけれども……今お目に掛つたら、お祖母樣に濟むまい……自分は……嬉しい思をしても、ア、夫れでは、義理を知らぬ人と成りはしまいか不知。お祖母樣のお氣に召さないので、お母樣は御離緣に成つたのだから、其お母樣に内所でお逢ひ申すとなると、たとへ知れずに居るとしても、夫れでは濟まない樣な氣持がする。可愛がつて下さらず共、お祖母樣はお祖母樣、矢張お手許で育つて此樣に大きく成つたのだから、……夫でなくともお氣に入る樣、逆らはぬ樣として居てさへ、お氣に召さないのに……もし知れたらどんなだらうか……只でさへ僻むお心に、嘸憎いとお腹立ちだろう。ア、夫れより、いくら強い事仰しやつてもお年寄だから、心細くお成りに違ひない、夫れじやあ、どうも濟まないわ……矢張

りお目に掛らない方が好いか……

眼が霑んで、ぐつたりと首を俛れた。

祖母がとんとんと、吹売を叩く音が響く。

百人一首にも、相見ての後と心とある通り、妾は……ア、お目にかゝるまい……まだ之から永い月日、一生お逢ひ申されない事はないわ……そう云つちや悪いけれど、お祖母様がいらつしやらない後は、いくらでもお目に掛られる……だがお母様は、御對面しないと妾が云つたとお聞き遊ばしたら、何と思召そう。冷たい心とお恨み遊ばすか不知。ア、それも辛い。だけれど妾は、お母様を決して〳〵、思はないのじやないのだから……乳母によくそふ云つて……一時薄情と思召さうとも、義理の重荷にや勝たれない。だが恁云ふ機會を逃して、何時親子親しい言葉を交されようか……アアせめてお父様が居らしつたら、お母様にもお目にかかられように……

胸の悶へに堪へ兼て、夏子は手を額に當て突伏した。

何所からか飛んで來た鶯一羽、頻りと朗かな聲で唱つて居たが、啼止んだと思ふと、廊下を此方へ來る足音

夏子は撥と面を擧げたが、來たのは乳母である。

「おや、お孃様？」吃驚した様に坐ると、

「乳母や……」

つと乳母の手を取つて、夏子は其膝に泣き伏したので在た。絶へず送つて來る清しい梅花が香、今の鶯は又唱ひ出した。人の憂ひも悲しみも、溶かして仕舞ふような玲瓏たる聲で。

（乙賞金五圓）

下谷區上根岸百二十五太田方

きみ子

思草

滞子

上

「子三子さん、此間日比谷で妙な人と立話してたね、一體彼人は君の何だい？」

客は飲み乾した洋盃を下にシガーに火を附け乍ら側に侍る粋な妓を顧みた、二十八九の若紳士で未だ角帽の名殘消えやらぬ坊様風、極シンミリと品よく遊んで然も野暮らしくも無し、時々の警句秀句も惡落せず、ハイカラ藝者の仇名取つた中村屋の三子少なからず参つた體で、初の御見にと言ひさうであつたが、此間ひに一寸首を傾けて序に春川の顔を熟視しながら、

「何時でしたッけ？」

「そら紀元節の日さ、彼の公園の淋しい所で何だかしんみり話込んでたじやないか」

思ひ付いて、

「ヲ、あの女學生でしたろ、紫紺の袴穿いた」

「さうだ其婦人だが少し何だな、此様言つちや有名の氣取り屋さん怒るかも知れないが君の風俗とあの風俗とで話して居たのは、一寸人目を引いたね」

「全くね、此様な浮氣稼業の者と、女學校の先生じやね」

と、詰らなささうに氣の引けた様に低く答へた。

「じや彼りや敎師なんだね、そして君とは？」

「小學校で高等二年まで同窓でしたの、斯様申しちや可笑しいけれど之れでも優等生でしたよ、ホヽヽヽ、まさか撥持つて產れもしませんものね、濱子さんは、エ、笠村濱子さんて言ふのです、金貸の娘なんで、アヲ高利貸じやありませんよ、温なしい方ですけれど金貸なんていふもんですから皆して嫌ひましてね、相手にもしなかつたんですの、所が母の許へ長唄の稽古に來ていらつしやつたし又夫れでなくとも俠ですからね、碌でなしの癖に達引張つた事が好で、私は始終あの方と仲よくしてましたの、尤も母の稼業も其様ですから私だつて皆から嫌はれてたんですけど、ですから今でも手紙のやりとりしてますよ、私が此様な身分ですから互に往來はしませんがね、丁度此間ヒヨックリ逢つたもんですから最早御互に人目も何も忘れて話してましたの、嘸大勢が目を附けたでしやうね、私は構はないけれど濱子さんが迷惑だつたでしやうよ、

心付てビールを取り上げ乍ら、

『如何? 飛んだ賀楽な話で浮きませんね』

『何僕は騒ぐのは嫌だ、だから飲仲間等と遊ばうとは思はないよ、然しまさか獨でもね』

一口飲んで復シガーを探る。

『實は普通の藝妓肌じや無いと聞いてるから、いつそ打明けて頼むがね、今日忙しいのにわざ〳〵來て貰つて、面白くもない相手をして貰つたのは少しイヤ大に野心が有たからさ』

句切て相手を見ると、安からぬ面地に見かわした三子の眼とハタと行逢つた、互に初心らしく眼を外したが、流石は稼業、

『ホヽ大變改つてね、私の樣な者に勿體ないわ、御命令下さいな何でもしますよ』

語尾を明瞭と口早に言ひ終つて、次の詞を待つ。

『又然樣言はれると妙に極りが惡いが……實は其君の親友といふ濱子さんとかを欲しい人が有るんで、聞合せといふ爺役なのだ』

三子の眼はキラリとした。

『だから打明けて何も彼も知つてる限り、長所短所を言つて呉れないか』

『其欲しい人つて、貴郎でしやう!、マア可愛いわね赤くなんかお成んなすつて』

嘲笑でもなし揶揄でもなし、言放つて片頬に浮ばせた笑、美しかつたが淋しかつた。

『どうせ君の慧眼にや適はない、僕よ』

左褄取つて茲に三年、顏は好し藝は充分、しみつたれた當節藝妓の中では雞群の一鶴、生粋の江戸兒肌胸の透く樣で、而も文學趣味――と言ふと大層だが――も有つて、惣見の棧敷でも役者の惚氣に相好崩した事はなけれど、彼の房江が着流しに靴の着付は、如何に急いで出たからつてモグリ代言の出來損ねの樣な、もつと工夫も有りさうねと、准文學士に氣焔吐きかける等は珍らしからぬこと、何時か氣取り屋のハイカラ子と、ベタ付主義の名古屋種からは除け者にせられて居るが見るなと言へば見たいが人情、靡かぬと聞けば一入挑みたい 猥連に、幾度背負投げ喰はしたか、男知らず

の野暮天で名を賣り出した此三子が、初めて播いた戀の種未だ二葉からもぎとられた此場合、對手は目的あつて我身を近付けたまでの事、見え透いた不成功のこと乍ら、さて未練にも思ひ切られぬ。

「何樣したね、ひどく考へ込むじやないか、君だからだよ、見込んで此樣な眞面目臭い相談もかけるんだから、面倒でも相談に來つて呉れたまへ、然し何だな何處の世界に藝者を招んで、嫁御寮の執持たのむ呑氣人が有らうなハ、、、、」

所在なさに獨言して笑つた。

「本望ですわ、人を誑すが見得の樣にしてる連中に、粹の赤心を見せて遣りましやう」

「じや請合つて呉れるね、有り難い感謝するよ」

「ホ、、、とんだ結ぶの神樣ね」

「實は毎日丸の內で例の人に出逢ふんだね、金緣か何かで光りたがる生意氣風でもなし、優しさうな風俗が氣に入つたんだが、何所の誰とも分らないし、內々氣を揉んでたといふ矢先、此間計らず彼の公園で君等を見かけた時、富田が――一所に行つたんだがね――君の噂をしたもんだからこりやあ甘い手蔓だと思つて、氣の毒な竹棒にした譯さ」

突然すりよつて、

「貴郞、富田さんて、もし速男さんと仰しやる理學士じやありませんか」

「よく知つてるね、油斷のならぬ、有名な美男子だから隨分式部連に騷がれる樣子だ、氣を付けないと」

「マア飛んでもない、其樣な所じやありませんよ、眞面目に、貴郞、御友人ですか御親しい？」

「何、格別親友じやない、まるで僕とは違ふんだもの、そりやあ粹肌だよ」

「違つてこそ！同じなら濱子さんを何樣して私が執持つもんですか」

「如何したつて言ふの？分らないね、何か富田に怨恨でもあるのかッ」

「怨み!?の……‥‥然樣ないでもないのよ、ア宜御座んすから貴郞、御願ひね、默つて此次富田さんを伴れて

來て頂戴な」

「ヲヤ〳〵、もう爲替を組むの、恐れ入るね三子は唇を嚙んで低首た、何をか固く決する所あるが如しだ。

「貴郎、濱子さんはね、そりや優しい音無しいんですからね、可愛がつて上げて下さいよ、此頃少し苦勞をなすつて沈んでますがね、そんなに泣蟲でもないのよ」

妙に濕ッぽく言ふ。

「大丈夫だよ、然し苦勞したつて、まさか浮いた事でもあるまいが、流石に心配だね」

三子はギクりとしたが早速打消す言葉を知らなかつた、けれども信じ切つてる春川は、元より串戲であつたのだから、其儘にすぎた。

下

春雨しめ〳〵しい夕、さらぬだに物悲しき空合を此二週間引籠り枕に就いてる濱子は、數日の絕食に眼も落ち込んで、もう起上る力も無い。

「母樣御心配かけますね、大丈夫で御座いますよ、もう三四日經ましたら少しは食慾もつきましやう、そしたらお藥も利きが早くッて直きよくなりましやう」

口でこそ言へ思ひある身の、ア、三四日所か一年二年百年千年よし幾億年經たつて、此苦しみが癒らうか此衰弱が回復しやうか、身から出た銹の苦しみを何にも御存じない母樣にまで心配かけて、勿體ない濟まぬ濟まぬ教育は何の爲に受けた、墮落女學生の眞似せよとて、學問はさせたまふまいに、まして零落果てた昨日今日、自身が愚圖々々して居てはさしづめの事にも困るを、ア、不孝者！

戀の焰、嫉妬の焰湧きたち燃えたち身を焦せど、母の優しい慈愛の涙に稍鎭まればきらめく良心、氣を取り直して一日も早うと健氣に決心した濱子は、淋しい笑顏に幾分の元氣を示さうとつとめた、けれどもそれは却て母の思ひの種、

「濱さんや其樣に母樣にまで氣を置いてお呉でない、ゆつくりとして充分ね、けど此有樣で充分な養生もさ

せられない、御醫師の仰しやるまでもなく轉地をと思つたつて夫れも出來ず、無理と知りつゝ學校へ出てもらつたもんだから、此樣になつてしまつて、本當に母樣は氣の毒やら可愛さうやら、之れを思ふと無情じやあつたが父樣の生きていらつしやつた頃が戀しいね、僅の俸給でも取つてお與れでないと忽ち困るんだから辛いだらうが濱子さんよくなつたらね、出て下さいよ」

之れも病人かと思はれる位なやつれ方、勿體ない不孝者を其樣にまで思召して、御痛しい此頃のおやつれ方、絹物の裾長う水の垂る樣な丸髷に、絹燈の影うつつた笠村の御新造樣時代を、スッカリ忘れた樣に水仕事から繼ぎ物ハギ物、慰み半分習つた音樂が役に立つ昨日今日、娘の自分にさへ氣兼していらつしやるのだ、其心細い今自分が此儘辭職と言つたら何樣に吃驚遊ばすだらう、之れを思ふとどんな辛い事があつても今止めるべき時では無い、一日も早く全癒ふ、と思ふと又口惜しい、ア、男といふはあゝしたものか、昨年の春から滿一年、世間知らずの身をよい事に、口前斗り甘い事を、もう今頃は新婚旅行に熱海箱根の草枕たのしい夢を結ぶつもりが、ツイ目の前の他し花に見替へられて、野分の後の萩桔梗もう散々な心の傷れ。勝ち誇つた戀の仇の前に何樣して毎日出られやう、

母の見る目も今は忘れて搔卷深く泣入つた濱子を、遣瀨無氣に摩でゝ居た母親は、

「郵便ッ」

の聲に驚かされて起つた。

「ヲ、濱さんやマア宜い所からだよ、御覽、新橋の三子さんから御前の好な御喜代さんから」

思はず首を擡げて夫れを受取つたが、何か或る希望の光りが見える樣にはら〳〵封を切つて讀み始めたので、少し安心した母は勝手へ起つ。

幼い時からの唯一人の親友、身分こそ卑しけれ、教育こそ不充分なれ、其張りのある競肌の言語擧動は、正反對の温順なる濱子に心底氣に入つて離れ難い仲善殊に一月以來胸のウヤムヤ此人斗り明かすに足べく、

此人斗り頼むに足る粹で同情深い友が、此間公園で邂逅した時一寸洩したゴタクサを自分の事の樣に腹立てて。

『生意氣な出しやばりね、、、男子照りじやあるまいし人の戀路の邪魔するひまに、亂れ髮でも搔上げて淺草邊でもぶら付いてたら、箕で斗る程情人は出來さうなもの、嘘にも女學校の敎員さんが、日每顏見合ふ友達の男を寢取るとは何事、水稼業のわれ〳〵風情でも意地のある者はしない事よ、マア御任しなさい濱子さん、今に其信子とやう芦邊とやらの高慢面張り倒して、見事傑を取つて上げますから』

と、ハラ〳〵するほど聲高に氣焔を吐いた頼もしさ、何にも言はず拜んだ手を取つて、マア勿體ないよして頂戴よ、けど美しいわ實の所、私達はもうすれつちまつて……』

としみ〳〵言つたあの美しい顏、面白さうに暮して居ても苦は色替へぬ松風のすさぶは我身斗りでないのか、と常にかはらぬ親切な言葉の數々に、其人の面影見る如く一句〳〵一句を涙に讀んだが、突然、

『まあ!!』

急がしく二三行後戻りしてスラ〳〵と讀み終り又くり返し讀み流したが、手紙諸共又深く夜具を被つて身悶えした。

本當にいつそお喜代さんの言ふ通り、其春川文學士とやらへ嫁かうかしら、だつて富田さんはあんまりな、たつた半月缺勤した間にそれほど話が進行したのか、何故休んだらう何故寢たらう、例へ何でも此身が每日逢つて居たら、まさかそれほど深うもならなかつたらうに、盜人に鍵渡したと同じ油斷で有つた、抜かりであつた、けど又怨みは怨み情は情、よしや富田さんがさうであらうと、そんならといふ面當がましいとが出來やうものか、それ互の罪は五分五分、怨む理由も責める權利もなくなるといふもの、薄情なと腹は立つても矢張り戀しいなつかしい、ア、何樣しやう。

『濱さんや牛乳を食つて御覽』

と大切さうに下へ置いて母親は、

『何かいお喜代さんも相變らず流行兒だらうね、まあ結構は結構だが何時まで花でもあるまいに、早く身の落付をなすつたらね、御師匠さんも安心だらうのに隨分宜い方の御世話も斷るんだつてね』

濱子はホロリとした。

『ほんに人の上じやないよ私だつて、何時迄笠村の濱子で置きたくないけれど、今の身分で仕樣もなし……』

沈んだ顏を振り上げた濱子は、淚つたふ頰に紅潮しながら、

『母樣』と彼の手紙中程から裂いて母の膝に投げ付ける如くつきつけた。

＊　＊　＊　＊　＊

病床で春川夫人となつた濱子が、晴の儀式の紋服に堪へるだけの健康となつて逗子から歸京した時、飛んで來て呉れる積りの三子が影も見せなかつた。聞けば意外の事斗り、もう丸髷と思つた信子は芦邊の儘で枕も上らぬ重病、それは失戀の爲だらうと、一つは男嫌ひの中村屋三子が某理學士に打込んでドロンを極めたとの三面記事。

濱子には欺されたと怨まれ、信子の爲には惡魔となり、夫れで賣り出した男嫌ひの看板を破り、かくしてお喜代の三子は滿足なのだ、胸に萠えて胸に枯らした思草の、移ろい易しとは誰が言葉紫深き其眞情を、三年の後に知つた春川が、泣いたよ』との一句を得て。

（甲賞金拾圓）

甲府市相生町五宮澤方　小川美遠子

●●●●●●●●

▲アリス孃の新婚仕度　此度ロングウオース氏と婚儀を擧げられたる米國大統領令孃アリス、ルーズヴエルト孃の新婚に用ひられし晴れ着は殆ど善を盡し美を極めたるものにてスタイルは總て各國の皇后又は皇妃の着用する型を取られたるものにて是等は何れも孃が過般漫遊の途に上られし際各國帝王其他より贈興されしものにより紐育有數の裁縫師が入念に調製せしものにて中にも日本皇室より送られし帶の如きは一ヤード百弗に價する高價のものにて晴れ衣の數は總て十種何れも東洋の織物を地とし是れに諸種の刺繡を加へたるものなるが其一世一代の盛裝は流石に富豪を以て誇る米國貴婦人界を壓倒するの觀なりしとなん。

彙報

▲●●●●●●女子美術學校　本鄕弓町の同校にては日本畫科、西洋畫科、彫塑科、蒔繪科、編物科、造花科、刺繡科、裁縫科の八分科に分たれ居れるが各科とも四月に入學を許す由其程度は、

一、本科普通科へは高等小學全科卒業以上
一、撰科普通科へは尋常小學卒業以上
一、本科高等科へは高等女學校卒業以上の學力を有して本校普通科卒業以上の實技力を有する者
一、撰科高等科へは本校普通科卒業以上の實技力を有する者

又高等女學校卒業生にて本科高等科へ入學するには槪して實技力乏しきを以て特に右樣志願者の爲めに高等豫備科の設けありて實技力を補修せしむといふ。但し裁縫科に限りて女學校卒業生は無試驗にて本科高等科に入學を許すと。

▲●●●●●女子職業學校　神田一橋なる共立女子職業學校に於ては是迄特に入學試驗を要せざりしが、來學期より、高等小學校第二學年程度にて讀書算術作文の試驗を行ふ由尙ほ高等女學校卒業及び同學校と同等の學力ありと認むる學校を卒業したる者に限り無試驗にて入學せしむるといふ。

▲●●●●●●●●横濱フェリス女學校　の出身者にして東京に在住するもの丶催しにかゝる同校東京部同窓會は一月三十日上野不忍池畔無極亭にて開かれしが校長ブース氏の演說、講師星野光多氏の演說、會員諸氏の隨意談話ありて、歡興の後午後五時散會同校は創立者たる故神學博士フェリス父子の名譽を紀念せんが爲めに命名せしものにして、米國ダッチ、リフオームド教會日本傳道局の管理に屬し、明治八年の創立に係り、日本にある女學校中最も古きもの丶一にて、卒業生の數も多く、女秀才を出せることも少からずと云ふ、故若松賤子の如き、女子大學校教授平野ハマ子の如き、東京女學館講師林貞子、池テツ子の如き、戸板裁縫女學校々長戸板關子の如きは、就中有名なるもの也。

▲●●●●●●日米婦人俱樂部　竹川澄子と云へる米國通の婦人主幹の下に、「順良なる婦人の渡航を奬勵し海外事業家の好伴侶たる賢良貞烈なる新婦人の養成に盡瘁せん云々」との主旨にて是れより米國に渡航せんとする婦人には極力便利を與へ既に歸朝せしものとは密接の脈絡を通じ内外共に婦人の爲に竭さんとて日米婦人俱樂部なるもの創立せられ本部を東京に置き支部を米國紐育市東十九街四十一番館齋藤直次郎氏方に置く筈にて取敢へず神田錦輝館にて發表講演會を開き竹川女史及び櫻井女史の演說ありたり。

四月分記事豫告（四月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數 十二册 增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅 一册 二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引 四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引 三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引 二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引 二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

一本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
一御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
一郵劵代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
一總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅九年三月五日發行 第六卷第四號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 山田英二
印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地 博文館印刷所
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話 三百三番 千十八番
本局 二千六百二十番 三千二百二十九番

世界歷史譚

▲全部參拾六册菊判洋裝並綴密畫拾餘個挿入各約百四拾頁

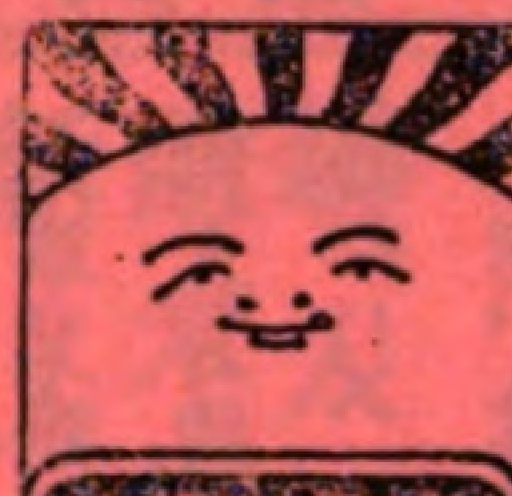
正價（壹册拾參錢●六册七拾錢●拾貳册壹圓參拾五錢●全部卅六册參圓八拾錢▲郵稅壹册四錢宛

世界歷史譚は、世界歷史の各時代と各國民を代表するに足るべき**偉人豪傑の傳記也著者**は何れも**知名能文の學士**なれば、其事實の正確にして評論の妥當なる云ふまでもなく文章又簡明雅馴にして何人も興味を以て解し得べし、全部總て參拾六卷、其各編下記の如し。

壹編	釋迦	高山文學博士
貳編	孔子	吉國文學士
三編	耶蘇	上田文學士
四編	ビスマーク	笹川法學士
五編	ハンニバル	大町文學士
六編	マホメット	阪本文學士
七編	漢高祖	三浦文學士
八編	ネルソン	島田法學士
九編	岳飛	笹川法學士
十編	コロンブス	桐生法學士
十一編	ガリバルヂー	岩崎法學士
十二編	彼得大帝	佐藤法學士
十三編	華聖頓	福山文學士
十四編	孔明	安藤法學士
十五編	ソクラテス	久保文學士
十六編	グラッドストン	近松法學士
十七編	歷山大王	幸田文學士
十八編	王陽明	白河文學士
十九編	ガーフ井ルド	淺井文學士
廿編	セキスピーヤ	十時文學士
廿一編	デモスセ子ス	中村法學士
廿二編	那破翁	土井文學士
廿三編	孟子	永井文學士
廿四編	成吉思汗	太田法學士
廿五編	クロンウエル	松岡法學士
廿六編	ゴルドン將軍	赤松法學士
廿七編	虞蘭土將軍	布施法學士
廿八編	ウエーリントン	高木文學士
廿九編	クリスピー	名尾法學士
三十編	メッテルニッヒ	森山法學士
卅一編	甲比丹屈克	谷野法學士
卅二編	惹安達克	中内文學士
卅三編	シーザー	柿山文學士
卅四編	查列斯大王	中大路法學士
卅五編	富蘭倶林	熊谷文學士
卅六編	牛董	三好文學士

（發付の一）

巖谷小波君編　著名畫伯挿畫



世界お伽噺

全部壹百冊每月一回發行
洋裝大判紙數一冊約七拾餘頁
正價一冊金八錢　郵稅一冊貳錢

正價　◎壹冊金八錢◎六冊金四拾五錢◎十二冊金八拾五錢◎二拾五冊金壹圓六拾五錢◎五拾冊金參圓貳拾錢◎全部百冊六圓參拾錢◎郵稅壹冊貳錢

●第一編　世界の始　太古
●第二編　五色の石　支那
●第三編　珊瑚島　南洋
●第四編　魔法博士　獨逸
●第五編　無人島大王　英國
●第六編　鬼婆と少女　露國
●第七編　法螺先生　獨逸
●第八編　二人王子　露國
●第九編　小人島　英國
●第十編　孫悟空　支那
●第十一編　驢馬姫　佛國
●第十二編　大人國　英國
●第十三編　豫言書　印度
●第十四編　王城乘取　土國
●第十五編　續法螺先生　獨逸
●第十六編　猿智惠小僧　アフリカ
●第十七編　酋長征伐　濠洲

●第四十三編　黄金の船　フィンランド
●第四十四編　幸福の花　トランスバール
●第四十五編　大洪水　シベリヤ
●第四十六編　刀三本　デンマーク
●第四十七編　石の行方　朝鮮
●第四十八編　手無し姫　トランスバール
●第四十九編　唖の女王　デンマーク
●第五十編　骸骨島　北亞米利加
●第五十一編　三筋の金髪　南亞米利加
●第五十二編　鬼大名　獨逸
●第五十三編　魔法學校　デンマーク
●第五十四編　鷲王子　シヽリヤ
●第五十五編　朝星夕星　ルーマニヤ
●第五十六編　法螺くらべ　佛國
●第五十七編　指輪の魔力　露國
●第五十八編　双子草紙　ルーマニヤ
●第五十九編　鬼だまし　愛蘭

小波君編　金僊君畫
◉地獄廻り
之れは西洋のチベラにもある有名の希臘のお伽噺を面白く改作したもので、オルフォイスと云ふ名高い歌の名人が、最愛の妻を失ふて悲哀の餘り地獄迄尋ね行き、美音にて琴を弾き總ての悪魔を感服させ、とう〳〵無事に妻を連れ歸ると云ふ喜劇です附錄には飛行器と云ふ面白い話があります

小波君編　洗鱗君畫
◉九番人形
勇氣と辛抱とまた義理堅く慈悲深いアラスナ

（後付の二）

學校賞品適切書——博文館

ムと云ふ若王子は 寃王の夢のお告げを信に 父の片身の 九番人形を得んと遠い／＼道を 永い／＼間かゝつて艱難 苦勞を重ねし末竟に 人形ならぬ物言ふ美しき 女王を迎え樂しき 月日を送ると云ふ 亞比利亞の お噺なり

小波君編　國峯君畫

●金髮王女

さる國の 王樣のお姫樣にて金髮王女と 云われた美い方を 隣國の若い王樣が貰ひたいと 望まれたけれど わりなく斷わられたので アベナンドと云ふ智勇の士が 使にたち 六ケ數難題を解いてやつと 若い王樣の望みを 達したが功ある アベナンドは酷く 王樣に憎まれて 長い間の牢屋住居と なりましたが 終に 王樣にかわりて善い政治をしたと云ふ 極々目出度お噺し

●第十八編	夢の三郎	洪牙利
●第十九編	鷲の踊	濠洲
●第二十編	光明姫	印度
●第廿一編	鶏の使	アフリカ
●第廿二編	火の車	暹羅
●第廿三編	三人片輪	小亞細亞
●第廿四編	白い鳥	アイノ
●第廿五編	消炭太郎	露國
●第廿六編	十二王妃	暹羅
●第廿七八編	狐の裁判(上下)	獨逸
●第廿九編	奇體の洋燈	亞拉比亞
●第三十編	獵師大臣	希臘
●第卅一編	九重塔	西亞細亞
●第卅二編	虹の橋	南アメリカ
●第卅三編	魔法の卵	露國
●第卅四編	岩の船	アイスランド
●第卅五編	鐵の王子	ハンガリー
●第卅六編	鐵の猿	露國
●第卅七編	浮かれ胡弓	諾威
●第卅八編	豆の王	瑞典
●第卅九編	三つの難題	氷洲
●第四十編	德利長者	愛蘭土
●第四十一編	梨の殿様	シヽリヤ島
●第四十二編	黑足小僧	希臘

●第六十編	二人半助	瑞典
●第六十一編	病魔降伏	露國
●第六十二編	金馬將軍	希臘
●第六十三編	熊娘	シベリヤ
●第六十四編	龍宮の使者	琉球
●第六十五編	森の女	印度
●第六十六編	日の罰	北アメリカ
●第六十七編	うかれ笛	愛蘭土
●第六十八編	活水死水	デンマルク
●第六十九編	光の劍	愛蘭土
●第七十編	木兎太郎	獨逸
●第七十一編	少年國	瑞典
●亦七十二編	少人鼻助	獨逸
●第七十三編	龜の智惠	亞弗利加
●第七十四編	世は情	瑞典
●第七十五編	變身術	洪牙利
●第七十六編	豆の手蔓	英吉利
●第七十七編	薔薇姫	獨逸
●第七十八編	地獄廻り	希臘
●第七十九編	九番人形	亞ラビヤ
●第八十編	金髮王女	フランス

續刊

- ●第八十一編　新塞翁
- ●第八十二編　木馬物語
- ●第八十三編　三ツの王冠

（後付の三）

巖谷小波君編

少年日露戰史

附軍國讀本

既刊目次

- ●第一編　開戰の卷
- ●第二編　決死隊の卷
- ●第三編　九連城の卷
- ●第四編　南山の卷
- ●第五編　得利寺の卷
- ●第六編　摩天嶺の卷
- ●第七編　大石橋の卷
- ●第八編　黃海の卷
- ●第九編　遼陽の卷
- ●第十編　沙河の卷
- ●第十一編　旅順の卷
- ●第十二編　奉天の卷(上)
- ●第十三編　奉天の卷(下)
- ●第十四編　日本海の卷
- ●第十五編　樺太の卷
- ●第十六編　媾和の卷

續刊

少年日露戰史は、今の少年の爲めばかりで無く、今から後の少年の爲めにも、帝國空前の大事業を永く記憶させる爲めに、日露の戰爭を書いた本であります。附錄軍國讀本は、忠君愛國の好模範を、日露戰爭に關係した、美談や逸事を讀本體に書いて、永く少年に示す爲めの本であります。

▲全部十六冊　洋裝大判
紙數一冊百餘頁

正價｛一冊金八錢●八冊金八拾八錢●十六冊金壹圓六十錢▲郵税一冊四錢宛

大和田建樹君著

日本歷史譚

- ▲第壹編　日本開闢　敬中君畫
- ▲第貳編　畝傍山　丹陵君畫
- ▲第參編　三韓征伐　廣業君畫
- ▲第四編　聖德太子　年方君畫
- ▲第五編　菅公　牛古君畫
- ▲第六編　九郎判官　年峯君畫
- ▲第七編　曾我兄弟　月耕君畫
- ▲第八編　惡七兵衞　年方君畫
- ▲第九編　相摸太郎　古洞君畫
- ▲第拾編　楠公　永興君畫
- ▲第拾壹編　日蓮　桂舟君畫
- ▲第拾貳編　大塔宮　國松君畫

國文學者として有名なる大和田建樹先生が我邦古來より現今に至るまでの歷史中最も著名なる事蹟にして少年諸君の忠君愛國の思想を養成せしむるものを選び平易流暢の筆を以て記述したるものにして全編二十四冊皆此れ金玉の文幼少年諸君座右の友として立志の端を開き兼て歷史を知らしむ實に破天荒の珍書なり。

全部貳拾四冊　洋裝美本
紙數一冊百頁

正價　一冊八錢●六冊四拾五錢●十二冊八拾五錢●廿四冊壹圓六拾錢▲外郵税一冊二錢宛

- ▲第拾參編　豐太閤　穎音君畫
- ▲第拾四編　七本鎗　年峯君畫
- ▲第拾五編　關ケ原　松亭君畫
- ▲第拾六編　水戶黃門　年方君畫
- ▲第拾七編　四十七士　華舟君畫
- ▲第拾八編　平田鶴胤　耕溪君畫
- ▲第拾九編　櫻田門外　大羽君畫
- ▲第貳拾編　七卿落　輝方君畫
- ▲第廿壹編　彰義隊　光方君畫
- ▲第廿貳編　城山　春汀君畫
- ▲第廿參編　平壤　寸昂君畫
- ▲第廿四編　威海衞　光方君畫

(後付の四)

（後付の五）

巖谷小波君著

幼年讀本

▲全部六冊洋裝大判並綴
毎編有名畫伯密畫十數個挿入紙數一冊百四十頁以上

幼年讀本は、未だ學校に入らざるの、兒童に嬉娯歡笑の間、よく普通智識を與へん爲め、頗る平易簡明なる、お伽的文字を以て、毎篇例の漣山人の筆に成る。而かも此書は單に家庭の讀本たるのみならず、更に進んで所謂國民敎育の敎科書として、亦一旗幟を立つるものなり。

第一編●日本歷史
第二編●日本地理
第三編●世界歷史
第四編●世界地理（減價）
第五編●日本立志談
第六編●世界立志談（減價）

正價 一冊拾五錢▲減價分一冊拾錢●全部六冊壹割引▲郵稅一冊四錢宛

巖谷小波君著

日本昔噺

漣山人が得意の筆法を以て日本在來の傳說昔話に因み今樣日新の智慧を開發せしめんが爲に著はされたる者なり毎冊珍奇至妙たる附錄あり錦上花を加ふ。

一編●桃太郎　二編●玉の井　三編●猿蟹合戰　四編●松山鏡　五編●花咲爺　六編●大江山　七編●舌切雀　八編●俵藤太

九編●かち〱山　十編●瘤取　十一編●物臭太郎　十二編●文福茶釜　十三編●八頭の大蛇　十四編●兎と鰐　十五編●羅生門　十六編●猿と海月

十七編●安達ヶ原　十八編●浦島太郎　十九編●一寸法師　二十編●金太郎　廿一編●雲雀山　廿二編●猫の草紙　廿三編●牛若丸　廿四編●鼠の嫁入

（毎編有名畫伯密畫十數個挿入）
●全部廿四冊大判洋裝並綴
正價一冊五錢●全部壹圓
▲郵稅壹冊貳錢宛

巖谷小波君著

日本お伽噺

日本固有の史談故事を漣山人特得の妙筆を以て今樣の平易なる文體に綴りたるもの小兒の家庭讀本として娛樂の間に我邦歷史の梗概を知らしむべき好著なり。

一編●八咫烏　二編●田村將軍　三編●玉取　四編●源三位　五編●八幡太郎　六編●武藏坊　七編●一休和尙　八編●東照宮

九編●姨捨山　十編●川中島　十一編●玄武門　十二編●白虎隊　十三編●鎭西八郎　十四編●最明寺　十五編●朝比奈　十六編●櫻井驛

十七編●草薙劍　十八編●日吉丸　十九編●文覺上人　二十編●和唐內　廿一編●高千穗　廿二編●鬼童丸　廿三編●熊本城　廿四編●宇治川

（毎編有名畫伯密畫十數個挿入）
●全部廿四冊大判洋裝並綴
正價一冊六錢●全部壹圓貳拾錢
▲郵稅一冊貳錢宛

（後付の八）

大和田建樹君作歌　上眞行君作曲
日露開戰軍歌
正價　參錢五厘　郵稅三冊迄貳錢

文學士　久保天随君作歌　上眞行君作曲
征露新軍歌
正價　四　錢　郵稅二冊迄貳錢

文學士大町桂月君作歌　上眞行君作曲
露國征伐軍歌
正價　四　錢　郵稅二冊迄貳錢

佐々木信綱君作歌　上眞行君作曲
露西亞征討の歌
正價　參錢五厘　郵稅三冊迄貳錢

井上文學博士作歌　山田源一郎君作曲
征露の歌
正價　貳錢五厘　郵稅八冊迄貳錢

大和田、佐々木、中邨、東宮諸君作歌　上眞行、小山作之助君作曲
日露戰爭**國民唱歌**　全二冊
正價一冊八錢　郵稅二冊迄貳錢

野口寧齋君作
戰詩**征露宣戰歌**
正價　五　錢　郵稅二冊迄貳錢

佐藤六石君作
戰詩**征露大捷歌**
正價　五　錢　郵稅二冊迄貳錢

國府犀東君作
伐露樂府**大陸劍歌**
正價　五　錢　郵稅二冊迄貳錢

文學士　鹽井雨江君作歌　白井規矩郎君作曲
女子軍歌
正價　拾　錢　郵稅　貳　錢

巖谷小波君作歌　山田源一郎君作曲
征露軍歌**旅順の海戰**
正價　貳錢五厘　郵稅八冊迄貳錢

巖谷小波君作歌　山田源一郎君作曲
征露軍歌**決死隊**
正價　貳錢五厘　郵稅八冊迄貳錢

武田櫻桃君　木村小舟君編

教訓繪ばなし

少年諸君此繪ばなしは、諸君おなじみの櫻桃さんと小舟さんが、一編は櫻桃さん、二編は小舟さんの番と、かわるがわるに作られ、小波山人が又吟味されたものです、毎編讀んで爲めになる面白いお噺ばかりでなく、一頁毎に奇麗な木版彫刻の繪がはいつてゐますから、いくら見ても見あきると云ふ事がありません。

▲全部廿四册洋裝大判密畫數十個お入
正價（●一册金五錢●六册金貳拾七錢●廿四册金壹圓郵税一册貳錢宛）

第壹編●家庭の卷
第貳編●お噺の卷
第參編●海軍の卷
第四編●陸軍の卷
第五編●動物の卷
第六編●植物の卷
第七編●ポンチの卷
第八編●遊戲の卷

第九編●地理の卷
第十編●歷史の卷
第十一編●立志の卷
第十二編●冒險の卷
第十三編●修身の卷
第十四編●お伽の卷
第十五編●戰爭の卷
第十六編●逸話の卷

第十七編●奇談の卷
第十八編●娛樂の卷
第十九編●理科の卷
第二十編●博物の卷
第廿一編●發明の卷
第廿二編●衛生の卷
第廿三編●尚武の卷
第廿四編●談話の卷

巖谷小波君作　武内桂舟君畫

明治お伽噺

全部拾貳册大判洋裝並綴
一册平均數約百廿四頁
正價（●一册拾貳錢●拾貳册壹圓廿八錢●郵税一册四錢宛）

目次

第壹編●お伽十番
第貳編●お伽三幅對
第參編●新八犬傳（上）
第四編●新八犬傳（下）
第五編●お伽四天王（上）
第六編●お伽四天王（下）

第七編●新伊蘇普物語
第八編●お伽十二支（上）
第九編●お伽十二支（下）
第十編●お伽洋行船（上）
第十一編●お伽洋行船（下）
第十二編●お伽立志噺

御馴染の小波山人、明治お伽噺なる題目の下に、十數年の經營に成れる自作お伽噺を、美麗嶄新なる小册子として世に公にせるもの、啻に讀書界に於ける無二の良籍たるのみならず、又以て明治文壇に對する稀有の一大貢獻といふべし。

木村小舟君作歌　田村虎藏君作曲

家庭唱歌

全十二册洋裝並綴小判一册四十頁
正價一册貳錢五厘郵税三册迄貳錢

第一編●桃太郎
第二編●舌切雀
第三編●松山鏡
第四編●花咲爺
第五編●浦島太郎
第六編●文福茶釜
第七編●勝々山
第八編●羅生門
第九編●一寸法師
第十編●猿蟹合戰
第十一編●俵藤太
第十二編●瘤取り

石井研堂君著　（有名畫家密畫十數個挿入）

理科十二ヶ月

▲全部十二册大判洋裝紙數一册約八十頁

正價｛●一册拾錢●六册五拾五錢● 全部壹圓郵税一册貳錢宛

造化の寶庫を開き、天工の妙理を發し、殊に二十世紀の少年少女の理科思想を皷吹せんが爲めに、眼前の實例を骨子とし、平易の文章と精巧の繪畫とを筋肉とし、左の十二題の中に其月其日に關する動植物理科等の初歩を記述する者即ちこれなり。實に未曾有の珍書破天荒の新案といふべし。

第壹編●新風船　第五編●植物園　第九編●暴風雨

第貳編●雪達磨　第六編●蜻蛉祭　第十編●銃獵者

第參編●花の錦　第七編●游泳臺　第十一編●幻燈會

第四編●汐干狩　第八編●富士詣　第十二編●歸省録

幸田露伴君著 ●少年文學二一　宮尊德翁　（全一册洋裝）　正價拾貳錢　郵税四錢

村井弦齋君著 ●近江聖人　（全一册洋裝）　正價拾貳錢　郵税四錢

村井弦齋君著 ●少年文學 紀文大盡　（全一册洋裝）　正價拾貳錢　郵税四錢

原抱一君著 ●大石良雄　（全一册洋裝）　正價拾貳錢　郵税四錢

武円櫻桃、木村小舟兩君編 ●少年動物畫談　（全一册洋裝）　正價貳拾五錢　郵税六錢

池田米太郎君著 ●日曜の植物採集　（全一册洋裝）　正價拾五錢　郵税貳錢

木村小舟君著 ●春夏秋冬 理科手引草　（全一册並綴）　正價拾五錢　郵税四錢

木村小舟君著 ●理科春秋　（全一册洋並綴）　正價貳拾錢　郵税四錢

金澤巖君著 ●寫眞及幻燈　（全一册洋並綴）　正價廿五錢　郵税六錢

落合直文君、池邊義象君合著 ●家庭教育歷史讀本 花の白雲　（全一册大判）　正價拾八錢　郵税四錢

目次｛●日本武尊の事蹟●神功皇后の事蹟●和氣清麿の事蹟●曾我兄弟の復讐●護良親王の事蹟●菅原道眞の事蹟

落合直文君、池邊義象君合著 ●家庭教育歷史讀本 卯花月夜　（全一册大判）　正價拾八錢　郵税四錢

目次｛●源義家の事蹟●平重盛の事蹟●靜御前の事蹟●佐々木高綱の事蹟●俊寛僧都の事蹟●忠興夫人の事蹟●那須與一の事蹟●袈裟御前の事蹟

（各編有名畫伯數名密畫挿入）

▲各編洋裝菊判約二百頁以上

落合直文君、池邊義象君合著 ●家庭教育歷史讀本 紅葉の錦　（全一册大判）　正價拾八錢　郵税四錢

目次｛●平敦盛の事蹟●藤原師賢の事蹟●楠正成の事蹟●阿新丸の事蹟●兒島高德の事蹟●加藤清正の事蹟●森蘭丸の事蹟

落合直文君、池邊義象君合著 ●家庭教育歷史讀本 枯野の雪　（全一册大判）　正價拾八錢　郵税四錢

目次｛●北畠親房の事蹟●楠正行の事蹟●林子平の事蹟●新田義貞の事蹟●赤穗義士の事蹟●高山彥九郎事蹟

（後付の一〇）

女學世界

（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）　第六巻第四號　（明治卅九年三月五日發行 毎月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊷
明治39年2月（第6巻第3号）、3月（第6巻第4号）

2008年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3381-9　C3321